第三号の発刊に際して

アジア現代女性史研究会　藤目ゆき

本号は、アジア現代女性史研究会が創立当初から熱い関心を寄せているテーマ「ベトナム戦争と女性」の特集号です。

特集に向けたアジア現代女性史研究会の最初の一歩はブイ・ティ・ロアンさんのインタビューでした。ロアンさんは1950年北ベトナムのニンビン省に生まれ、1967年に故郷の高校を卒業後北朝鮮へ留学して日本語を習得し、通訳者・語学教師となり、現在は大阪外国語大学などでベトナム語を教えておられます。幼い頃の抗仏戦争、つかのまの平和、北爆が激化した高校時代、祖国への貢献を志して日本語学習に勤しんだ留学生活、と、彼女の歩んだ道のりは、文章化すればそのままベトナム現代女性史の貴重な記録になるでしょう。

実際私たちはその希望をまだ抱いているのですが、ロアンさんは、特集「ベトナム戦争と女性」のためにご自身の回想録よりもベトナムの文学者チャン・ダン・コアさんの二作品「四月の記憶」及び「母と子」を推薦し、その紹介を書いて下さいました。コアさんの作品が日本で紹介されるのは本誌が最初になりますが、ベトナムでは、市井に生きるふつうの人々にあたたかい眼差しをそそぎ続けるコアさんの作品は多くの人々から熱烈な支持を得ています。本誌への掲載を快諾して下さったコアさん、仲介の労をとって下さったグエン・タン・スオンさん、翻訳者の片山須美子さんとポール・キャロルさんにも御礼を申し上げます。

片山須美子さんは、カイ・フンとニャット・リンの文学作品『花を担いで』、南ベトナム解放軍副司令官グエン・ティ・ディンの伝記『椰子の森の女戦士』の翻訳を手がけた翻訳者であると共に、日本には数少ないベトナム女性史の研究者です。本号には翻訳に関する多大な協力とともに論文「戦争の女性化ーベトナム戦争再考」の寄稿をも頂きました。

本特集の実現には、韓国の女性たちの協力が不可欠でした。「ベトナム戦の被害女性に会って」を寄稿して下さったファン・ジョムスンさん、ファンさんを御紹介下さったユン・ジュンオクさんに感謝します。

ユンさんは、韓国挺身隊問題対策協議会の初代会長（後に共同代表となり、2001年まで在任）で、日本軍性奴隷制度問題解決のために長年尽力されてきました。そのユンさんがベトナム戦争当時の韓国軍による性暴力の被害女性とその子どもたちを支援する活動を開始されたと知り、私たちが日本からお話を伺いに訪韓したのが2006年5月のことでした。ユンさんは、2000年1月に東京で開催された日本軍性奴隷制度を裁く女性国際戦犯法廷の機会にベトナムのレ・ティ・ニャム・トゥエットさんと出会い、長い準備を経て2006年3月にベトナムを訪問し、被害女性とその子どもたちを支援する団体「韓国ベトナム市民連帯」を設立されたことを話して下さいました。そして「韓国ベトナム市民連帯」代表のファンさんを紹介して下さったのです。

私たちはユンさんとファンさんからの報告を通して、戦争終結から三〇余年を経て今なお続く、ベトナムの性暴力被害女性からその子や孫の世代へ受け継がれつつある苦難を初めて知ることができました。自国の軍隊が他国の民衆・女性に犯した犯罪を自ら究明し被害者への謝罪と補償を実現しようとする韓国の女性た

ちの努力に心から敬意を表します。

アーリーン・アイゼンさんは、アジア現代女性史研究会が 2006 年 10 月に行ったベトナム訪問に関して貴重な示唆を与え、また 1984 年に初版が出た著書『ベトナムにおける女性と革命』(Women and Revolution in Viet Nam) の抄訳と掲載を許可してくれました。

同書は、1974 年の彼女の著作『ベトナムの女性たち』(Women of Viet Nam) とともに、戦争と革命の時代を生きたベトナム女性に関して書かれた重要な文献です。第 4 章「女性に対するメガ・バイオレンス」は、戦争下で女性に加えられたとほうもない暴力の実態をとらえています。第 5 章「ベトナムの流血は続いている」は、米国のインドシナ政策、ベトナム・カンボジア紛争、中越戦争といった、ベトナム女性の受難と闘いが 1975 年の終戦で終わらなかった国際的根拠を呈示しています。

私たちは彼女の著作の各所から重大な歴史認識を与えられますが、なかでも、フェミニストの一部をふくめ、ベトナム戦争時代に米国の戦争を非難したアメリカ人たちの 1975 年以後の沈黙に関する叙述は、日本における相通じる現象の存在に気づかせ、米国の軍事同盟国である日本に暮らす私たち自身のベトナム認識を洗い直してみるための手がかりを与えています。

以上、アジア現代女性史研究会の特集の編集経緯とあわせて、著者と著作を紹介しました。紹介の順番は目次の順番とたまたま逆さになっていますが、それは、アジア現代女性史研究会の会員である私たち自身をふくめ、「ベトナム戦争と女性」に関する専門家でない読者にとって、全体的な状況を対象にした論文から読み始める方が読みやすいかもしれないと考えたためです。

日本では、第二次世界大戦で被害を与えたアジアの人々に対する戦後補償を履行しないまま、侵略戦争を美化する言動や日本軍性奴隷制度の被害女性を貶める言動さえ横行している有様で、第二次世界大戦後の日米軍事同盟体制のもとで日本が米国のベトナム侵略に加担した歴史はほとんど忘却されています。日本の女性史研究者の間でも、これまでベトナム戦争が女性史上の研究課題として重視されてきたとは言えないのが現実です。本特集を第一歩として、ベトナムの人々の証言や著述はもとより、自国のベトナムに対する侵略と戦争犯罪をみすえる米国や韓国をはじめとした海外の女性たちの取り組みにも学びながら、私たちも研究の歩を進めてゆきたいと念願しています。

なお本号には、特集以外にも、様々な論文やエッセイ、報告を収録しました。

韓国のアン・ジンさんは、2004 年に大阪で開催された「女性・戦争・人権」学会における報告を発展させ、韓国現代史のターニングポイントである光州事件に関する重要な論文を寄せてくれました。

今岡良子さんは、現代モンゴルにおける女性に対する暴力や国際結婚、少数民族の女性が抱える諸問題に関して、2006 年にウランバートルとソウルで開かれた二つのフォーラムについて報告しています。

本号には日本女性史の方法論をめぐるエッセイや鼎談の記録も含めました。大越愛子さんは、『ジェンダー視点からみる日韓近現代史』の出版という日韓の女性たちによる共同事業をふまえて、歴史学の非専門家である女性たちが歴史を書く意義を論じています。加納実紀代さん・平井和子さん・藤目ゆきの鼎談は、2005 年に奈良で開かれた全国女性史交流の集いをふまえて、日本現代女性史の成果と課題を語り合った記録です。

ジョイ・バリオスさんはアジア現代女性史研究会のフィリピン組織を主宰し、草の根の女性団体とともにフィリピン現代女性史の調査を進めています。その成果は「交換される身体、奪われる生　貧困と軍事化のなかのフィリピン女性たち」と題する一冊の本として、明石書店からシリーズで刊行する『アジア現代女性史』の第十巻にふくまれる予定です。本号には、その全体像を予告するイントロダクションを寄せて頂きました。シリーズ『アジア現代女性史』の趣旨と全体像に関しては、監修者の解説を参照して頂ければ幸いです。

フィリピンの女性を取り巻く社会・政治状況は依然として極度に過酷なものです。アジア現代女性史研究会は 2005 年 1 月にバリオスさんの案内で農民虐殺が引き起こされたルイシタ農園を訪問しましたが、以後の二年間想像を絶する激しい民衆弾圧・政治的殺害が相次いで発生しています。本号にはこの状況に関して河合大輔さんの報告を収録しました。

日本の内外で広く議論が喚起できることを願って、本号も日本語版と英語版を出版します。みなさんが忌憚のない意見、感想、助言、批判を寄せて下さることを楽しみにしています。

目次

第三号の発刊に際して　1
アジア現代女性史研究会　藤目ゆき

特集：ベトナム戦争と女性

ベトナムにおける女性と革命　8
アーリン・アイゼン（藤目ゆき 訳）

ベトナム戦の被害女性に会って　36
黄點順（ファン・ジョムスン）（永谷ゆき子 訳）

戦争の女性化ーベトナム戦争再考　46
片山須美子

母と子　62
チャン・ダン・コア（片山須美子 訳）

解説：「母と子」ーひとつの人生の話、ひとつの時代の資料　67
ブイ・ティ・ロアン（片山須美子 訳）

四月の記憶　69
チャン・ダン・コア（片山須美子 訳）

解説：「四月の記憶」ー抗米期の女性たちを象徴するひとつの例　77
ブイ・ティ・ロアン（片山須美子 訳）

資料：ドンロク三叉路の10人の娘の25年　79
クアンドイニャンザン［人民軍］紙1993年7月24日掲載（片山須美子 訳）

論文・研究ノート

光州民衆抗争と女性　84
安眞（アン・ジン）（牧野幸子 訳）

2006年、ウランバートルとソウルで開かれた2つのフォーラム　105
今岡良子

専門家でない者の立場から「歴史」を再考・再審する試み　112
大越愛子

日本現代女性史の課題と展望　120
加納実紀代・平井和子・藤目ゆき

交換される身体、奪われる生：貧困と軍事化のなかのフィリピン女性たち　131
ジョイ・バリオス（河合大輔 訳）

深刻化するフィリピンの政治的殺害　142
河合大輔

資料紹介：『岩国基地と米軍犯罪 1969～1998 新聞資料集成』　146

「アジア現代女性史」シリーズの刊行にあたって　148
アジア現代女性史研究会　藤目ゆき

編集後記　152
アジア現代女性史研究会　藤目ゆき

アジア現代女性史
Contemporary Women's History in Asia

アジア現代女性史研究会

特集

ベトナム戦争と女性

Vietnam War and Women

ベトナムにおける女性と革命

アーリン・アイゼン

本文章は Arlene Eisen, *Women and Revolution in Viet Nam* (London: Zed Books, 1984) から著者の承諾をえて、第4章と第5章を訳出したものである。

第4章　女性に対するメガ・バイオレンス

平和になりました。でも周り全部、まだ危険です。貴方も私と同じ歩幅で歩かねばなりません。

ファン・チ・ティエン - 19才の地雷除去従事者。1979年に外国人ジャーナリストをエスコートしたときの言葉。

戦闘の歳月が終った1975年春、米国が後援していた南ベトナム軍は崩壊した。革命の旗の海が、解放軍戦車のサイゴン進駐を歓迎した。しっかりと武装した若い女性が出迎え、歓呼して、最初の戦車を停めた。グエン・チュン・キエンは当時18歳で、サイゴンで戦うゲリラ戦士だった。彼女は大統領官邸に続く最短の道沿いに案内するため、戦車によじ登った。数分後、人民解放軍（PLAF）は官邸の上に南ベトナム臨時革命政府の旗を掲げた。チュー大統領はすでに逃げ出していた。かわりに就任したズオン・ヴァン・ミン大統領（「ビッグ・ミン」）は、最初のPLAF部隊が官邸に入ると、立ち上がり、こう挨拶した。「革命が起きて、あなた方がやってきました。今朝私は、貴方がたに権利を移譲するためお待ちしていたのです」。

PLAFの幹部は礼儀正しく、だがきっぱりと、「革命は完全に権力を掌握しました。前の政権は覆されたのです。既に失った権利を移譲できる者は誰もいません。貴方は即時降伏しなければなりません」と言った。[1]

PLAF副司令官であり南の女性連合会会長であるグエン・ティ・ディンは、いかに地元の女性民兵部隊や女性連合会がPLAF到着以前から南部の多くの都市でチュー政権から正式ポストを奪取したか説明し、かつて二人の米陸軍大佐と一人の海軍司令官が居住していた邸宅の接収に当たった女性グループについて語っている。4月29日に彼女たちがその邸宅に着くと、米の将校達は昼食の最中に逃げ出した。ディン司令官は思い出して微笑んだ。「彼らはものすごく怖がっていて、針一本持たずに出て行ったのですよ。」[2]

糸が切れた操り人形のように、全サイゴンの国家装置が数時間以内に崩壊した。

翌月の月曜日、公式なパレードは行われなかったが、人々による自然発生的な喜びと安堵のデモンストレーションが行われた。何千もの人々が通りへ出て行った。サイゴンは征服されたのではない。陥落したのでもなかった。サイゴンは、解放されたのである。

正式な国民的祝典は5月15日に始まった。サイゴンでは200万の人民が臨時革命政府とベトナム民主

1　*New York Times*, 3 May 1975 及び *South Viet Nam in Struggle*, No.300, 12 May 1975, Nos. 301-2, 19 May 1975 に見られる勝利の光景。

2　Associated Press Release, 23 May 1975

共和国の旗を振りながら、セントラルスクエアにつめかけた。祝典には女性たちの軍と民兵の部隊によるパレードも行われ、勝利のために女性が成し遂げた甚大な貢献を誇った。

勝利の到来は容易でなかった。この章は、帝国アメリカの軍事力を負かすためにベトナム人民が払った計り知れない犠牲を記録する。アメリカとの戦争によるベトナム女性の傷は深く、それが今もいっそう悪くなっていることもあり、今後も長く注意しその治療を続ける必要がある。癒しこそ、ベトナムにおける女性解放の前提条件である。

「私たち自由の戦士たちのお墓が、いたる所にあるのです」

ベトナム女性連合会の教育責任者　レ・トゥーは勝利の後、南部諸省の全域を旅行した。彼女はこう報告している。

> 「私たちの自由の戦士たちのお墓が、いたる所にあるのです。・・・訪問した場所の全部で、子供を亡くした母親たちが自分の子どもか、その子たちの日記を見せてくれました。…分かりますね。戦争は彼女たちの一番美しい夢、彼女たちの一番大事な愛を取り上げた。生存者のなかで女性たちが最も苦しんでいます。一番親愛な人たちを亡くしたら、もう二度と会うことはできません。それは癒すことのできない傷なのです。南部のある土地の女性連合会執行委員会会議では、15人の委員のうち2人を除くと全員が未亡人でした。」[3]

1965年から75年までの戦争の10年間で、紛争でどの立場にいた人々も、兵士も民間人もあわせて、200万人以上のベトナム人が殺された。100万人の女性が未亡人となり、80万人の子供が孤児になった。300万人以上が負傷し、多くは重傷だった。最悪の傷のなかには、対人兵器が引き起こしたものもある。それらは、人間という標的の痛苦を最大限にするが、人体以外の物は大して貫通できないよう米国で開発された武器である。南部にいた革命幹部カードルは90％が殺害されたと推定される。[4]1975年以後、さらに一万人の人々が田畑に残る米軍の遺留兵器によって命を奪われた。

チャーリー・カンパニー、つまり米陸軍第82師団第3空挺旅団は、1968年3月16日にソンミ村で504人を虐殺した。それはミライの虐殺として有名になった。たいていの犠牲者は女性と子供で、GIは何百人もの女性を殺す前にレイプした。[5]その残虐行為からほとんど10年を経て、生き残った一人であるグエン・ティ・ドックという73歳の女性は苦しい沈黙を破り、訪問者に語り出した。「家族11人が殺されました。息子たち、嫁、孫たち。誰が私の墓の世話をするのでしょう？　今私は齢老いて、一人ぼっちです。家族がいないのです」。ドック夫人の言葉は咽び泣きのために途絶えた。彼女を慰めようとした若い女性は、彼女自身の家族もソンミで虐殺されていた。彼女はそれから民族解放戦線（NLF）に参加した、ベテランのゲリラである。当時は14歳だった。1975年にソンミに戻り、現在は政治カードルとして活動し、村を運

3　著者によるレ・トゥーへのインタヴュー（1981年8月29日ハノイ）

4　以下の文献にある統計から。John Cavanaugh *et al.*,'A Time to Heal' (Whashington DC, Indochina Resource Center, 1976); Le Anh Tu, 'Viet Nam: Lagacy of War' (Philadelphia: American Friends Service Committee, 1975); John Sprangens Jr, 'Food and Will', *The Texas Observer*, 27 February 1981, p.8.

5　Committee to Denounce War Crimes of US Imperialism, *Crimes Perpetrated by US Imperialists and Henchmen Against Women and Children in South Viet Nam* (South Viet Nam: Giai Phong Publishing House, 1968), p.13. 米軍によるレイプについての分析に関しては以下を参照のこと。Arlene Eisen Bergman, chapter 4: 'The Politics of Rape in Viet Nam', *Women of Viet Nam* (San Francisco: Peoples Press, 1975)

営し、村の再建の組織化を助けている。[6]

未来の世代への攻撃

ホーチミン市の最大の産婦人科病院長をつとめる医師グエン・ティ・ゴク・フオンは、こう語った。

> 「かれらに何を言うべきか？私たちがどんな気持ちか想像して下さい。戦争の長い歳月の間、離ればなれになっていた夫婦がとうとう再会する。妊娠する人もいる。かれらは再会をとても長い間待ち望んでいた。それから、生まれてきた子どもが、両親の一人が枯葉剤を浴びた結果起きた深刻な遺伝子異常のために死んでしまう。そんなケースがたくさん、たくさんあるのです」。[7]

ベトナム農村への系統的な枯葉剤作戦と圧倒的集中爆撃は、民族解放運動からその支持者と最強の支持基盤ーベトナム人民の大多数である農民ーを奪う戦略の要石であった。アメリカ上院の難民小委員会は1965年から73年の間に一千万以上の人々が自分の村から逃れることを強制されたと見積もった。アメリカは「エージェント・オレンジ」として知られる科学的枯葉剤を、南ベトナムの領域の半分以上に散布した。エージェント・オレンジは、ダイオキシンという致死症の威力を持つ至上の化学物質を含む。水一万リットル中に一グラム混ぜた水を、一口飲ませるだけでモルモットを殺すに十分である。戦争が終るまでに、一人あたり6ポンドが南ベトナムの上に散布されていた。更に悪いことに、ダイオキシンは水だけでは溶解しない。ベトナムの科学者は、小川、河川、泉が今後何世代も汚染が続くと予想している。ダイオキシンの全般的な破壊力はまだ算定されていない。ベトナムの医師たちにはデータをまとめるために必要な医学的な設備、またコンピュータ計算のできる設備が欠けているため、人々の全体的な損害のデータをまとめることができなかった。だが彼らは、ほんのわずかな被曝によっても確実に肝臓組織を破壊し、死産、流産、出産、先天的欠損症、癌を引き起こすことを立証（経験）してきた。

トゥーズー病院で妊娠二ヶ月以後に流産した女性は1950年代半ばには1％をほとんど越えなかったが、1967年に15％になり、1976年には20％にまで跳ね上がった。まれに胎盤の変形によって胎児が死亡したり、子宮破裂が起きる場合もある奇胎妊娠について見ると、その発生率は1952年の0．8％から1976年の3％に上昇した。子宮頸癌は1952年から1976年で三倍になり、1980年までには五倍に増えた。南部で女性の癌の約65％は子宮頸癌で、その比率は北部に較べてはるかに高い。なぜなら南部のみがダイオキシンを散布されたからである。

母子保護研究所という産婦人科の研究医療機関は、ダイオキシンを浴びた妊婦はヒロシマのサバイバーよりも六倍染色体破壊にあっていることを発見している。

女性たちは手足の代わりにヒレがついた赤ちゃん、涙管のない赤ちゃん、二つ頭のある赤ちゃん、腎臓のない赤ちゃん、その他の恐ろしい変異を持つ子どもを生んだ。国家的な統計データは、未だまとめられていない。だがトゥーズー病院で致命的変異が認められた新生児の数は、1952年の0.01％から1978年の0.24％まで上がっている。[8]

6　Martha Winnacker, 'Recovering from Thirty Years of War', *South East Asia Chronicle*, Nos. 56-7, May-July 1977, pp.5-6

7　著者によるグエン・ティ・ゴク・フォンへのインタヴュー（1981年9月12日ホーチミン市）

8　ダイオキシンに関する情報はフォン医師へのインタビューと以下の文献による。Ton Duc Lang, 'US Chemical War in Viet Nam Has Not Ended', *Viet Nam* (pictorial) No. 267, March 1981, pp. 12-13. また以下の文献も参照のこと。*Report from International Symposium on Long Term Ecological and Human Consequenses of Chemical Warfare in Viet Nam* (Hanoi: Foreign

強制的都市移住の戦略は、ベトナム民衆の中に別の殺人者を残した。性病である。土地を離れることを強いられた一千万の農民は、たいていサイゴンやダナンや他の南ベトナムの都市へ群がっていった。女性は事実上支えになる手段がなかった。約50万人は売春女性になった。性病は売春女性にとっての問題だけではなかった。性病は兵士、役人、彼らの愛する人々にも感染した。正確な数は分からないが、その総数は1975年当時、300万人と見積もられていた[9]。感染者は数千人の事例を除いて1981年までに治療を受けることができたが、抗生物質の欠乏によって性病の全面的除去は妨げられた。

これら遺伝子異常をともなって生まれてくる子どもたちの親はダイオキシンに被曝している。Arlene Eisen

銃と誘拐のもとでの離婚

女性の健康に対するジェノサイド的攻撃が始まる前さえ、ベトナム女性の家族と母性に関する権利は攻撃を受けていた。1954年のジュネーブ協定には、南部諸省でベトミンと共に戦った者は国が二年後再統一されるまで17度線以北に再結集することを規定する条項があった。何千もの家族が、愛する者たちと二年以内に再会きることを期待して、離ればなれになった。だが再会のかわりに、ジエム軍は夫が北部へ行った女性たちを逮捕して拷問し、離婚書類へのサインを強制した。彼女たちは、忠誠証明のために規定の期間内に再婚せねばならなかった。武装したジエムの手先が再婚しなかった女性たちを見つけだし、レイプした[10]。そうすることでジエムは、南北ベトナムの分断を永続的に維持するというアメリカの戦略の一端を担ったのである。ジエムや彼の後継者の攻撃にかかわらず、家族の絆は強固に維持された。ベトナムがアメリカに分断を強制された歳月にあって、遠く離れた家族に対して誠実であるということは自分の心と政治的信条の戦闘的防衛を意味することになった。ある南部の女性は北に再結集した夫との決別通告を拒み、警官にこう言った。

「夫を糾弾するなんて、できない。彼は、私の心の中にいるの。あんたが私に夫を棄てさせたいなら、私を殺して心臓を取り出しなさい。」[11]

数年後の1975年4月、アメリカ政府は南ベトナムから約一万人の子供を空輸した。この子供たちは、不注意にも、人間の輸送には安全でない貨物輸送機に積み込まれた。アメリカの新聞は、「ベビーリフト作

Language Publishing House, 1983).

9 Cavanaugh *et al.*, op. cit., p. 11. 売春に関しては以下に詳しい。Arlene Eisen Bergman, op. cit., Chapter 5: 'Mass Production of Prostitutes'

10 Wilfred Burchett, *Viet Nam Will Win* (New York: Guardian, 1970), pp. 119-20.

11 'History of the Vietnamese Women's Movement', Viet Nam Report, No. 9, April 1975, p. 9.

戦」という大見出しを掲げてこれを取り上げ、世界の人々にアメリカの人道主義的意図を確信させようとした。共産主義者は孤児たちを殺すつもりだと主張された。ベトナム人の答えはこうだった。「私たちは自分の子供たちの世代が平和に暮らせるように30年間戦い、犠牲を払ってきた。この誘拐はベトナム人民に対する別の形のジェノサイドである。」[12]

1975年4月4日、150人以上の子供が飛行機の衝突によって死亡した。

ベビーリフト作戦は、ベトナムにおける政治的破産から政府を救い、支持を集めるための土壇場の努力だった。世論調査は、アメリカ人の75%がベトナムにこれ以上介入することに反対していることを示していた。議会はにわかに敗者への支持を尻込みするようになっていた。そんな状況のもとでフォード大統領とマーチン大使はベビーリフト作戦を計画し、チュー福祉大臣にこの計画を受け入れるよう説得した。彼はこう説明した。

> 「アメリカ大使によれば、この避難（ベビーリフト作戦－訳者注）は、共産主義者の支配地区を棄てた何百万もの難民と共に、アメリカを世論がベトナム共和国支持へとシフトさせるのに役立つだろう。特にこれらの子どもたちがアメリカに上陸するとき、ラジオや報道機関が取材して取り上げ、効果は絶大になるだろう。」[13]

この政治家は、多くの子どもたちが孤児でないことをわきまえていた。母親たちは我が子の身を心配し、戦争の惨害から守るために時として子どもを孤児院に入れていた。サイゴンの物価暴騰で我が子に食事を与えられなくなり、孤児院に一時的に子供を委ねる母親たちもいた。親と一緒に住んでいたのに、アメリカの養子縁組機関が街頭から恣意的に連れ去った子どもたちもいた。実際に孤児だった者たちもいたが、もしベトナムに留まっていれば共同体がその子供たちの世話をしたであろう。

アメリカ社会における人種差別主義の蔓延を思えば皮肉なことだが、ベビーリフト作戦の組織者たちは、彼らはベトナム人の人種差別主義的憎悪からGIを父に持つ子どもを救済しているのだ、と主張した。ベトナム解放以降、アメリカの新聞報道は、ベトナムに関して他のどの問題にもまして、いわゆるアメラジアンの子どもが直面する差別と思しきものに大きく紙面を割いた。それらのレポートは、しばしば、アメリカの富と快適さに惹かれる比較的少数のホーチミン市在住ベトナム女性が提供した。彼女たちは、我が子の父親であるアメリカ人の「ミルクと蜜の流れる国」への移住に夢を託していた。そして自分の受けた虐待の物語によって完全な抜け道が手に入いることを望んでいた。あるアメラジアンの少年は、ホーチミン市のヤングフラワー孤児院で外国人ジャーナリストに「僕の名前はチャン。9歳です」と言うと、こんな歌を歌った。

> 「戦争は過ぎ去った／飛行機はもう来ない／生まれたての者たちのために泣かないで
> ／エヴァーグリーン／人間はいつも新しく生まれてくる」[14]

私は、ベトナムを旅行中しばしば、GIを父に持つ子を生んだ母親はレイプされたか売春女性だったと思われていることに気づいた。彼女たちは人に羨まれはしない。が、その子どもたちは公式にベトナム人として同等の権利と特権を享受できることになっている。実社会では子どもたちは母親の低い地位を受け継いでいる。特に、もし母親が今日の革命過程の外部に留まることを選んだ売春女性だった場合はそうだ。この子

12　Internewsのリポーター Linda Garrettによる未発表の手紙。1975年4月28日、ハノイにいい滞在していた。

13　元サイゴン政府福祉大臣から当時の首相 Tran Thien Khiemにあてた手紙。*The New York Times*, 7 April 1975.

14　John Pilger, 'Back to Viet Nam', *Aftermath* (London: New Statesman, 1982) p. 18.

どもたちは時々、ベトナム社会主義共和国の政策を未だ学んでいない他の子どもたちにいじめられる。だがその社会的不名誉は、アメリカで有色人種の子ども全員が直面する系統的な人種差別主義的抑圧とは決して比較できない。

エコサイドと経済的嬰児殺

ソンミ(ミライ)での虐殺で多くの村人が村を逃れ、ジャングルで解放勢力に参加した人もおれば、町に住む親戚とともに逃げ場を見つけた人もいた。一年後にも村に残っていた人は、アメリカが支配する難民キャンプへ強制的に収容された。それから米軍は、ココナッツの森を破壊するために戻ってきた。これらの木が生えていた地面は、ブルドーザーで平らにされた。堤防は、ソンミ村の人々が米を育てる湿地帯への塩の侵入を防いでいたのだが、爆弾で破壊された。繁栄していた村は荒れ地になってしまった。他の何千もの南ベトナムの村もそうだった。

南ベトナムの43%以上の農園や果樹園が破壊された。すべての灌漑網が繰り返し爆撃を受けた。水牛は耕作に欠かせないが、その半分は殺された。枯葉剤が効かなかった地域では、米軍が植物をブルドーザーでおしつぶし、それからエレファント草(稲科の植物ー訳者注)を植えた。その草が乾くと、米軍はナパーム弾やガソリンで放火し、荒れ狂う草原の火で付近の万事を焼き尽くした。

人々はしばしば何千トンもの土を手で枝網籠に入れる手作業で、機械の恩恵を受けずに何千エーカーもの土地を再生させてきた。しかし1982年3月の時点で、元は耕地だった50万ヘクタールは休作状態であり、何百万ヘクタールもの森林の破壊はおそらく永続的であろう。ある地域では、U Minh森[15]が燃え尽くされた後の炭が2メートルの厚さで積もったままだ。17度線に近い中央ベトナムでは、森林の大規模破壊は慢性的浸水や土壌浸食を引き起こし、そればかりか地面の温度の上昇という結果をも招いた。山の下を吹く空気を冷やす木々が無くなり、焼き付けるような風が降りてきて、水田を過熱し、その上へ砂を吹き付ける[16]。5500万人、そして総計して耕地面積がわずか540万ヘクタールーつまり10人当たりに2.5エーカーーでは、正常な環境のもとにあったとしても、皆を食べさせる十分な食料を育てるのは難しいであろう[17]。そしてベトナムの環境は、正常とはほど遠いものである。

また、離郷を余儀なくされた一千万の農民たちは、自分の畑を休耕しておかねばならなかった。だからアメリカは、アメリカ支配下の人々を養うために、毎年30万トンの米を供給した[18]。アメリカには敗北が迫っているとみえたとき、援助を大幅に削減した。1975年4月30日までに、サイゴンの倉庫に備蓄された米は、サイゴン市人口が15日間食べるのに足りる分量しかなかった。また中部ベトナムにおける広範囲な洪水は、深刻な作物被害を引き起こした。これらの災禍が組み合わさり、解放直後の南部諸地域に飢饉の脅威を生み出した。南の諸都市で大規模な飢餓を防ぐことができたのは、北部から莫大な米が寄付されたからであった。[19]

きらびやかさの値段

解放前後、サイゴンのショウウインドウには日本製のラジオ、テープレコーダー、その他の機械類などが

15 Kathleen Gough, 'An Interview in Hanoi', *US/Viet Nam Friendship Association Newsletter*, Vol. 4, No. 3, May-June 1982, p. 4.

16 Ngo Vinh Long, 'View from the Village', *Indochina Issues*, No. 12, December 1980, p. 7.

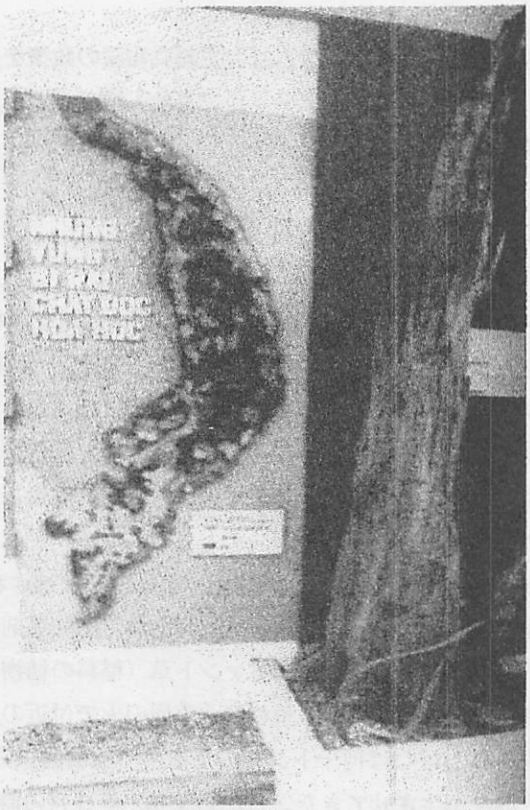
17 同上、p. 1.

18 John Spragens Jr. 'The Way It Was', *South East Asia Chronicle*, No. 76, December 1980, p. 5.

19 'Agriculture in South Viet Nam Before and After Liberation', *Viet Nam Courier*, No. 57, February 1977, p. 11.

つまっていた。その通りはきらびやかに輝き、空調施設付きの何百ものバーでアメリカの最新レコードが響いていた。

ジャーナリストのジョン・ピルジャーは、それを「何物も生産しない世界で唯一の消費都市」と呼んだ。1974年のレポートで世銀研究ミッション（WBSM）は、チュー政権が地歩を失わないようにするためだけに、1990年まで少なくとも1100億ドルの援助が必要だと結論した[20]。有名なベトナム評論家であるグエン・カク・ヴィエンがサイゴンのきらびやかさの値段をこう指摘した。



対米戦争博物館の展示。地図中の白い部分は生態環境の全面破壊が行われた地域を示す。Arlene Eisen

「解放区に爆弾が落ちれば落ちるほど、サイゴンには取るものがある。ビル、車、商品は模造品ではないのだから、私はそれを、偽りの繁栄、とは呼びたくはない。これらの物は押しつけがましく、精神に取り憑き、両義性を、つまり新しい社会秩序を創り出している。支払わねばならない代償があまりに高額でも、私はむしろそれを、高くつく繁栄、と呼ぼう。ある国がメルセデスやシボレーや冷蔵庫その他の機械などを買うために石油販売の売上金で支払いをするとしたら、南ベトナムは、そういった物を買うために肉体と血で支払ったのだ。」[21]

南ベトナム経済は、依存、腐敗、失業、インフレといった悪循環の不断の昂進にとらえられていた。もとは農民であった400万人以上の人々が失業状態にあった。約600～700万人は米ドルで支払われる賃金によって暮らしていた。そこにはチューの軍隊あるいは政府の費用は含まれていない。総計して人々の80%は経済的な延命をアメリカに依存していた。アメリカの援助は南ベトナムのGNPの半分にのぼった。この依存は地元の産業を破壊した。有効な資本は、アメリカ人や繁栄するピンプや売春女性やサイゴンの将軍たちに販売する贅沢品に投資された。米軍機やその他戦争で使われた物の屑鉄・金属は、南ベトナム共和国の輸出の90%を構成した。

1975年、アメリカが援助と輸出を削減すると、物価は急上昇した。莫大な人数に上った貿易業者たちは退蔵を開始した。物価の高騰に拍車がかかった。噂がある種の集団パニックを広めた。

アメリカからの施し物で生活することに慣れた人々は、パニックを起こした。粗糖を輸入して操業していたサトウキビ圧搾工場、粉ミルクを輸入していた瓶入り飲料品工場、パルプを輸入していた紙工場その他の多数の企業が機能しなくなった。原料やスペア部品や外国人技術者を失うと、南ベトナムのホンダに乗っていた世代は歩くことを学ばねばならなかった。多くの人がそうしない道を選び、難民になった。共産主義者による血の粛清から逃れるのではなく、貧困ときつい仕事から逃れた難民たちである。1978年ベトナムの

20　Sprangens, op. cit., p. 5.

21　Nguyen Khac Vien, 'South Viet Nam: 1976', *Veit Nam Courier*, No. 47, April 1976, pp. 6-7.

一人あたりのGNPは一年100ドルと見積もられていた。[22]

女性に対する犯罪　1．レイプ

レイプの話題を欠いては、ベトナム戦争物語の集成はあり得ない。例えば第一海兵師団のカミール軍曹はこう証言した。

「我々が村へ行き、一帯を捜索するとき、村の女たちに着物を全部脱がせ、女がどこにも何も隠していないことを確かめるためにペニスを使ったものさ。これはレイプじゃなく、捜索としてやられたのさ」

アメリカル師団のSp/4ジョー・ガルバリーは報告した。

「私たちはその村へ行った。8人でのパトロールだった。農民の家に入った。人々は米兵が自分たちに何をするか気づいていた。だから自然に若い娘たちを隠そうとした。私たちは自分の家の土台の所にある防空壕に隠れている女を見つけた。彼女は引っ張り出され、家族の前で、そして私たちと村人たちの前で、6人か7人にレイプされた。これが唯一の事件ではない。私が思い出せる最初の事件だというだけだ。私は少なくとも10や15はそんな事件を知っている。」[23]

10年後、ベトナム戦争の退役軍人たちは今もまだ自分たちの犯罪に取り憑かれている。

「私は力を得た感覚を持っていたんだ。破壊の感覚だ。見ろよ、今のアメリカじゃ、人は赤ん坊みたいに扱われている。何をしなきゃいけないか言われてるのさ。…だがベトナムじゃ、自分には命を奪う力があるってことを悟っていた。女をレイプする力があり、誰も何一つ口出しできない。その神のような感情があの現場にはあった。私は神のようだった。私は命を奪った。女をやることができた。…」

別の米兵は思い出した。

「男たちをあつめて女のいない場所に連れて行った。…そうすればもう女を自由にすることができた。自分たちとは違う文化、違う肌の色、違う社会の女だ。売春婦なんていらない。M-16があるんだから。なんで女に金を払わなくちゃならないんだ。村に行けば欲しいものは何でも奪ってきた。そこに行くまでは、そんな状況のなかでのセックスなんてしたことのない奴らだったと思うよ。二重の経験を踏むのさ。女をレイプして、殺す。それで二倍立派な兵士になれるってわけだ。」[24]

南ベトナムではどの村もみな、アメリカの爆弾、ナパーム弾を逃れることができなかったのと全く同様、

22　数字は1982年秋のJayne Wernerとの個人的なやり取りに基づくもの。Nayan Chandaが'South East Asia Isn't the Monolith the West Anticipated', *The New York Times*, 11 Septemeber 1977.で160ドルと述べている。

23　David Hunt, 'Organizing for Revolution in Viet Nam', *Radical America*, Vol. 8, No. 1-2, January-April 1974, pp. 39-40及び *Winter Soldier Investigation* (Boston: Beacon Press, 1972), p. 26.において David Huntが引用したもの。米軍によって壊滅させられた村の詳細については以下を参照のこと。Jonathan Scell's *The Village of Ben Suc* (New York: Vitage, 1967). またレイプについてはChapter 4 of Arlene Eisen Bergman, op. cit.

24　Mark Baker, *Nam: The Viet Nam War in the Words of the Men and Women Who Fought There* (New York: Morrow and Company, 1982), pp. 152 and 166.

レイプを逃れることもできなかった、と言ってよい。アメリカ社会で養われた人種差別主義と女性蔑視が結びつき、レイプは国防総省の手中にある便利な道具になった。レイプを兵士の士気高揚の方法として、奨励しないまでも大目に見るのが、文字に書かれない国防総省の政策であった。米兵はベトナムで正当な大義を失っていても、少なくともレイプという家父長的伝統において「男らしさを証明」することができた。

レイプはまた米軍の作戦立案者には別の戦略的目的にも役立った。テロリズムは、人民戦争に対抗する古典的なゲリラ鎮圧作戦である。そしてレイプは、女性を攻撃し破壊する古典的なテロリズムの行為であるはかりか、女性の家族とコミュニティーに屈辱を与え、怖じ気づかせるものでもある[25]。多くの社会でレイプされた女性は落伍者であり、第三世界と同様に多くの西欧諸国でも家父長制的解釈のために彼女がレイプの犯人を挑発したのだと思われてしまう。「彼女がそれを求めた」。彼女は不浄視される。解放後のベトナムにおける政策は、レイプされた女性をアメリカによる攻撃の犠牲者として扱うことだった。革命家のカードルたちはレイプ犠牲者に汚名をきせる伝統的な恥意識や偏見に対して積極的に闘争した。それでも傷は残っている。レイプの恐怖は忘れられない。手足の切断や病気は容易に癒えない。その子の出自がどうであろうとも、予期しなかった出産が母親にとって負担であったとしても、恐怖の中で身ごもられたその子供たちも愛をうけねばならない。

女性に対する犯罪　2．買売春

チュー政権は、買売春は非合法だと公式に主張した。が、サイゴンの役人は率直に説明した。「アメリカ人には女の子が必要なんだ。私たちはドルが必要だ。どうしてその交換を慎まねばならないのか？それは国が米ドルを稼ぐ、汲めども尽きぬ源泉なのだ。」[26] 米軍占領のピークでは、南ベトナムにほとんど50万人の売春女性がいた。ほとんど各GIに一人の女性がいた。この数は女性医師や専門職に就く女性の合計人数より20倍にものぼる数の売春女性がいたということである。売春女性のいる光景は、アメリカによる占領で女性が利益を得ているという印象をしばしば与えるアメリカのジャーナリストたちを魅了した。

> 「聾唖の娼婦グループがある。娼婦はたいてい14～15歳で、もっと若い子すらいる。娼婦たちを監督する一人の女がいた。娼婦たちは夜にコンチネンタルホテルに至近のTu Dor通りの角で、通常、夜間外出禁止令で禁じられる時間になる直前に群がっている。…この夜、私が見かけたその娼婦の中の何人かは過去10年の間に老けこんで、顔がやせていた。彼女たちは街中の通りの角に立っていて、夜遅くなってからうろついている客に拾われるのを願っている。この時間もまた、ピンプたちがバイクの背後に少女たちを乗せ、客に売り込んでいる。」[27]

ベトナムの水準からいえば裕福になった売春女性もいるかもしれない。だが全員が野蛮な搾取を受けている。プレイクに駐留していたある帰還兵は、「罪の都市」は、基地造営の30月以内に出現したが、そこでは売春宿の部屋ー実際にはテントーに15か20のベッドがあったものだ、と語った。彼は「彼女たちはセックス一回で300ピアストルを得ていた」と思い出した。300ピアストルは公式には3米ドルと同じだが、闇市場のディーラーを通すと約1米ドルになった。売春女性が相場を引き上げようとすれば、米軍のMPが彼女たちの施設に「オフリミッツ（立入禁止）」を宣言した。類似の歓楽街が米軍基地のある所はどこに

25　米軍がレイプをいかにして奴隷に対するゲリラ掃討作戦の武器として活用したかに関しては、以下を参照のこと。Angela Davis, 'Reflections on the Black Woman's Role in the Community of Slaves', *Black Scholar*, December 1971.

26　Thanh Nam, 'In the Shadow of the American Embassy', *South Viet Nam in Struggle*, No. 164, 11 September 1972, p. 2.

27　*New Yorker*, 15 April 1972, pp. 52-4.

でも現れた。フーロイの別の歓楽街では夜は民族解放戦線がその地域を支配していたので、日中の時間だけ稼動していた。[28]

50万人の売春女性の間には様々な形態があり、それぞれが顧客の要求を適えていた。田舎の前哨地点では、「戦車とスクリュー」という広告が示すように、複合的サービスを提供する人たちもいた。白人GIは黒人GIと同伴した女とはつきあわなかったことから、アメリカ人の持つ差別の習慣を知った売春女性たちもいた。GIは日ごと、週ごと、月ごとの「借妻」もできた。そんな結婚は、年季奴隷に似通っており、女性に性の提供者と召使いの兼任を余儀なくさせた。多くのGIは妻を借りる方が気に入っていた。忠実な妻のほうが、比較的、性病に感染したり感染させたりしないと考えてのことである。ベトナムではGIは高級植民地行政官用に予約された贅沢品の中で生活ができた。

「奇妙に聞こえるが、私にはハウスボーイと、最初はガールもいたのです。ハウスガールはやって来て私の靴を磨き、ベッドメークをし、私のために洗濯をし、私の家の世話をする。何でもやって、一ケ月全部で7ドルでした。」[29]

GIがベトナムを去ったとき、売春女性たちはヘロイン中毒、貧困、自己嫌悪のサイクルにはまったままであった。おそらく大部分が性病に感染していた。アメラジアンの子どもは母親に愛されはしても、彼女に惨めな過去を思い出させる存在になった。サイゴンが解放されるや否や、売買春禁止令が布告され、女性連合会は何千もの失業女性のために住居、食物、新しい技能を見つけるための大キャンペーンを開始した。売春女性の大部分は田舎へ帰った。だが何千もの女性が諸都市に残り、自分の尊厳を回復するために莫大な社会的資源の支出を得た。

女性に対する犯罪　3．麻薬中毒化

現在ホーチミン市郊外の新青年学校（SNY）は、針、フィジカル・セラピー、政治的職業教育を細心に組み合わせて、薬物依存の犠牲者が自分の人生に対するコントロールを回復できるよう援助を提供している。SNYの一室は、南ベトナムにヘロイン嗜好を蔓延させたアメリカの責任を示す展示にあてられている。展示されているある写真は、8歳位の小さな少女にマリファナ煙草を渡している巨大なGIの姿を写している。

フランスは1865年ベトナムに阿片貿易を押しつけたが、1964年までヘロインはわずかしか存在しなかった。が、ヘロイン使用量は1970年までに400%になっていた。インドシナは、CIAとCIAが経営するエア・アメリカに支えられて国際ヘロイン売買のハブとなった。CIAはブームになったヘロイン貿易からの収益で多数のベトナムの役人を買収し忠誠を得た[30]。チュー政権の文書によれば、1975年にサイゴンだけで15万人のヘロイン中毒者がいた。そのほぼ85%は35歳以下だった。

SNYの教育責任者ファン・グエン・ビンは薬物使用者の傷跡を描写した。

> 「かれらは麻薬中毒の他、性病や結核やマラリアにも感染しています。しかしかれらの最も危険な病気は、精神的なものです。かれらは社会的人格を破壊されたのです。自分自身や家族、あるいは社会への信頼を失っていた。仏教徒の人もいますし、カトリックの人もいます。でも

28　Jonathan Schell, op. cit., pp. 108-9.

29　Norma Juliet Wikler, *Viet Nam and the Veterans' Consciousness* (Berkeley: University of California, Department of Sociology: PhD Dissertation, June 1973), pp. 136, 170. 東南アジアの売春婦に対して、彼女たちを尊重するまなざしからのものとしては以下を参照。Stanley Goff, Robert Sanders with Clark Smith, *Brothers: Black Soldiers In the Nam* (London: Arms and Armour Press, 1982)

30　Alfred McCoy, *The Politics of Heroin in South East Asia* (New York: Harper, 1973)

宗教が何であれ、皆、ドラッグこそ神だと信じていました。もし麻薬嗜好をやめたら麻薬の神様が自分を殺すと、本気で信じていたのです。酷い抑鬱に苦しんでいました。1978年になっても我が校の学生の約50%は窃盗ギャング団に所属していました。どの依存症患者も麻薬を止めたいのですが一人ではそうできない。私たちはかれらの信頼を再建するこのセンターで懸命に活動しています。かれらにこう言っています。『貴方たちには罪はないわ。貴方たちは植民地主義文化の犠牲者だというだけよ。いまからでも貴方が祖国に貢献するのに遅すぎはしない。依存症と闘うことを通じて、貴方は祖国に偉大な貢献をすることになる。』」[31]

このような学校には、その学生たちに食べ物や衣料を与え住まわせ世話をするための資金の支出が必要である。一般に、十分に健康が回復するまでに一年間、学生は学校で過ごす。約20%の学生には一年以上の時間がかかり、15%はまた舞い戻ってくるが、何千人もの人が永続的に生産活動に加わった。1981年にビンは、ホーチミン市には最も重い依存症患者が五千人残っているだけだと見積もり、83年までにSNYはもう必要がなくなって工場に転換するだろう、と考えていた。だが私が1981年秋にベトナムを訪ねたとき、注射器は、ホーチミン市の元コンチネンタルホテルに近い通りでの小商売で公に販売されている、最もありふれた商品の一つだと思われた。

女性に対する犯罪　4．文化的な「中毒化」とポルノグラフィー

アメリカは、ベトナム人のマジョリティーの心理と思考をつかもうとする試みに失敗した。だがアメリカは、20年間にわたってサイゴンの支配地域において合法的な情報や教育の全機関・全施設を支配した。それは南ベトナム民衆の文化と意識に深刻なダメージを与えた。この20年間に、共産主義者による残虐行為や北ベトナムによる侵略や大量殺戮や復讐といった物語でアメリカによる侵略を正当化するために、アメリカの情報機関CIAとアメリカ政府の全機構が動員された。

国防総省秘密報告書は系統的に嘘や他の「汚いトリック」を利用する。彼らの心理戦キャンペーンを自慢する将軍や国防総省と国務省のトップ官僚たちによるメモは、詳細な記録として保存されている[32]。サイゴンの若者の教育に対するアメリカ支配の成果の例として、ベトミンへの参加者だったヴォー・ティ・テーは、「サイゴンにいる四年生になる私の甥」が、叔母の経歴にもかかわらず、「ホーチミンがジュネーブで南ベトナムをフランスに売りとばし、ジエムが祖国を救うために帰国した、と習ったのよ」[33]と慨嘆した。

サイゴンでアメリカ企業の秘書として働いていたある女性は、サイゴン解放後、アメリカに逃げた。独身女性は肢体を切断したベトコンとの結婚を強制されるというCIAが後援する流言を真に受けたからである。サイゴン解放後も、心理戦は続いた。子ども予防注射キャンペーンの活動をしていた女性連合会のあるカードルは、こう説明した。

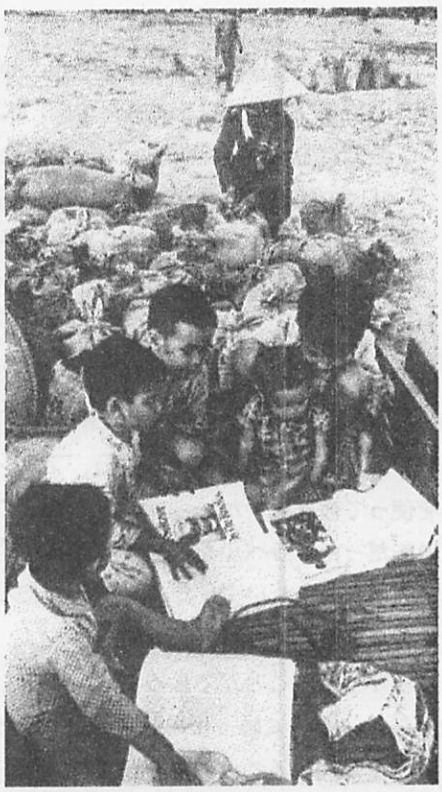
「私たちはコレラや破傷風、チフスやその他のあらゆる予防可能な病気に対して解放直後から子どもたちに予防注射をする活動を始めたのです。けれども親たちに子どもをヘルスセンターに連れてこさせるのにたいへんな時間がかかりました。町中で噂が猛威を振るっていたのです。子どもに予防注射をするのでなく、負傷した『ベトコン兵士』に輸血する血液をその子

31　著者によるファン・グエン・ビンへのインタヴュー（1981年9月9日ホーチミン市）

32　初期の心理戦技術に関しては*Pentagon Papers* (New York: Bantam, 1971), pp. 55-60. を参照。

33　Donna Futtermanによるヴォー・ティ・テーへのインタヴュー（1975年7月22日。未発表メモから）

たちから採取している、というわけ。私たちカードル全員が自分の子どもに先ず予防注射させるビッグ・ショウをしなければなりませんでした。そうやって初めて他の人々に信用してもらえたの。後から私たちは噂を流した何人かを捕まえることができました。その人たちは自分の罪を公に謝りましたよ。」[34]



米軍が作った「戦略村」の子どもたち
Viet Nam INC.

ベトナム民衆の政治志向をコントロールする試みは、米の侵略の正当化を企図しただけでなく、抵抗精神を失わせ、士気を喪失させることを企図していた。現在ホーチミン市の大学で文学を講じているチュオン・トゥエット・アンは、反共プロパガンダの歳月がいかに彼女に影響を与えたか説明した。

「私は外国支配下の生活を意識した人間の屈辱を知りました。祖国の偉大な歴史を理解しなかったからではないのですよ。私はただ、自分が絶えず抑圧と外国支配を受けている弱小で遅れた民族の一部だと考えて苦悩したし、祖国の奴隷化に直面して無力であることを恥ずかしく感じていました…私は、祖国の野蛮な戦争が『独裁的な共産主義者側』と『自由な民族主義者側』(『自由側』で、汚く卑劣なことが行われていることも同時によく気づいていたのですが)の間で起こっているのだ、と信じていました。だから私は祖国か自分自身のいずれかのために袋小路から脱出する道を見つけることができませんでした。結果的に私は、前体制下での政治状況にわずかしか注意を払わず、詩という象牙の塔に自分を閉じこめたのです…」[35]

解放後すぐに、米国の戦争犯罪に関する博物館がサイゴンで公開された。展示物にはベトナム人民に対して行われた文化的攻撃と同様、ジェノサイドに関する注意深く詳細な記録もあった。あるアメリカのジャーナリストは、「サイゴンの旧政府は敵対的または批判的な報告を全部検閲した」と述べた。[36]

アメリカはまた、「アメリカ流生活方法」に栄光を与えることによって、人民の抵抗精神を挫こうとした。自分のポータブルラジオをそれぞれこれ見よがしに見せびらかすGIたちは、アメリカ経済が提供できる恩恵を見せつける、歩く広告塔になった。彼らはまた美の西欧的基準を押しつけた。何千人ものベトナム女性が美容整形の試練を受け、アメリカ流の大きなシリコンで膨らませた胸、シリコンで膨らませたヒップは、彼女たちをいっそう客たちにとって魅力的にした。それら全てがGI「ジョン」からもっと高値の物を得ることにつながった。『ニューヨーク・タイムズ』の記事にはこうある。

「ドクター・バンは、彼が『自然なアジア人の欠陥』と呼ぶものを一時間以内で作り替える。(彼には五人の医師のチームがある)彼はこうも言った。『女性のコンプレックスを取り除くこ

34 著者によるチャン・タン・トゥエットへのインタヴュー(1981年9月9日ホーチミン市)

35 Truong Tuyet Anh, 'One Year with the Revolution", *Viet Nam Courier*, No. 57, February 1977, p. 27.

36 Frances Starner, 'The Streets of Ho Chi Minh City', *San Francisco Bay Gurdian*, 17 October 1975, p. 12.

とで私たちは女性に自信を与え、心のあり方を変える。それはすごく面白いことですよ』」

ファッションはそこ（目や胸）に留まらない。ヨーロッパ人を真似たいという熱意で、高い鼻、頬の骨、裂けた顎…太い指さえ望むベトナム女性たちもいる。手術のパイオニアは前副大統領の魅力的な妻グエン・カオ・キーである。…美容整形にはリスクもあると、医師タイ・ミン・バは語る。彼はしばしば整形手術を行ったことがあるが、他の手術での失敗を修復し継ぎ接ぎするために時間の半分を費やすのだという。」[37]

ウエイトレスとして働く、あるいは通りを歩いているベトナム女性の多くは、身体を欧米化する経済的余裕がない。彼女たちは自分の名を欧米化するところで落ち着く。スアンはベトナム語で春の意味だが、それはアンになる。フオン（花）なら、フランだ。あるGIたちは、ベトナム女性がヘアスプレーだと錯覚する缶を使って彼女をいかにベッドへと誘惑することができるか自慢していた。実際にはそれはスプレー式洗濯糊の缶だった。ラベルを読める女性はわずかしかいない。ごくわずかに英語を喋る一方、自分のベトナム語を読み書きできないままだ。高価な欧米スタイルのドレスを身に纏えるサイゴンの役人や為政者の妻たちでさえ、その多数が非識字者であった。

しっかり読むことができる者に向けて、CIAは米国内で印刷されるよりも多くの本や雑誌を南ベトナムに輸出した。そこには、こんな巻頭言が載った。「幸せとは何か？そんなものはありはしない。受容のみが、現実を受け入れることのみが全てだ」[38] アメリカの戦争犯罪博物館の一室は、南ベトナムに輸出されたポルノに関する図表や幾つかの例を特別展示にあてている。ガイドがポルノが持つ屈服的機能を注意深く説明し、展示を興味本位に覗くような見物が行われないようにつとめている。サイゴンが初めて解放されたとき、学生や他の若い人々は通りをきれいにし、女を侮辱するサインや広告掲示板を塗りつぶすイニシアティブをとった。かれらはまた、士気を阻喪させるポルノ的な文学を回収した。だが六年後、退廃的な音楽や文学その他が再び表れつつある。

「私たちは当初、文化的帝国主義の重要さと強力さを過小評価していたのです。今では、社会主義打倒を求める音楽を助成するネットワークが組織されていることが確認されています。かれらの文学はポルノ的で敗北主義的です。それは文化的な『中毒化』の陰謀です。私たちのHom Thomキャンペーンは、この新しい心理戦との闘争がねらいです。ポルノ的で敗北主義的なものを印刷・配布する人々は処罰されます。利用者は犠牲者と考えられます。が、禁止するだけでは十分ではありません。私たちはより健康的な文化を創出し、普及させなければなりません。」[39]

彼女が言及した読み物は、1981年ホーチミン市にも見つかった。ベトナム語で書かれているが、しばしばアメリカで出版され、無料撒布されている。これらにはベトナムの陰惨な絵が載っている。また裸の女性と前サイゴン体制の剥がされた旗が描かれた1981年のカレンダーが何百とあった。そのキャプションには「いつもベトナム人であることが誇り」とある。

そんな読み物よりも、音楽の方が人気があるようだ。作曲家の一人はファム・ズイで、彼は1954年にベトミンから離脱した人物である。戦争中サイゴンのプロパガンダ装置として働いた。彼の最近の歌はアメリ

37 *The New York Times*, 21 May 1973.

38 Ann Froines, 'The Cultural War: Smack, Pimps and Coca Cola', *University Review*, April 1972, p. 19.

39 著者によるブイ・ティ・ミへのインタヴュー（1981年9月8日ホーチミン市）

カでテープにされ、タイトルは「さよならサイゴン」や「残る人々へ」その他、ベトナムを離れるよう人々を奨励している。ヴォイス・オブ・アメリカは南中国とフィリピンとベトナムの沖合の送信機から放送されていて、この音楽を特集している。歓迎されざるアメリカの「贈り物」が、ベトナム再建の努力を掘り崩し続け、性的搾取や冷笑、ペシミズム、利己主義の心理を助成している。

民族和解問題

民族和解政策は、いまだに南ベトナム社会を苦しめている文化的「中毒化」に対する政治的解毒剤だ。民族和解は、ホーチミンの教えに由来する。「ベトナムは一つだ。ベトナム人民は一つだ」。その政策が仮定するのは、ベトナム人の間には犠牲者も被征服者もいないということだ。唯一敗北した敵は、アメリカ帝国主義である。実際戦争中は、どの家族の中にも相手の側に属する者がいた。それが和解の深さと精神を物語っている。

南ベトナムの臨時革命政府は1975年のサイゴン勝利以前さえ、民族和解の政策を実行し始めていた。1974年に私が解放区を訪問したとき、臨時革命政府の副厚生大臣ブイ・ティ・メーは、そこで穏やかに暮らす元サイゴン軍兵士を私に紹介した。臨時革命政府と女性連合会は、復讐よりも和解を励ますような方法で人々を教育するため特別なステップを踏んでいる。ブイ・ティ・メーの説明は、実質的なナショナリズムに基づくものだった。「もし私たちが復讐をしたら、ベトナム化の罠にはまってしまうでしょう…。それはアメリカ政府にベトナム人同士を敵対させることを許してしまうことでしょう。どのベトナム人も私たちの敵ではない。敵はアメリカ政府だけです。チューはベトナム人ではない。彼の血管にはアメリカ人の血が流れているのよ。」[40]

アメリカが後援したチュー政権には、百万以上の兵士や役人がいた。彼らはたいてい意志に反して徴兵されていた。だが、ベトナム人民に対して深刻な罪を犯した者もいる。1976年初めまでに再教育の様々な機会を経て、彼らの95%は完全な市民権を回復され、社会に再統合された。1976年4月に彼らは統一された第一回全国議会に投票した[41]。再教育（ホクタップ：共産主義的教育）が全ての学校のカリキュラムの一部となり、それがあったからこそ和解は可能となった。工場の労働者たちもまた、組織や経営や利益分配などの問題を討論する会議でホクタップに従事した。

居住の近隣で開かれる街頭集会では、フランス植民地主義・独立戦争・アメリカによる侵略と戦争犯罪・共産党と祖国の未来といったテーマのレクチャーも行われた。新聞やラジオ、テレビでも、類似のテーマで討議が行われた。近隣で催される展覧会は課題を明示した。旧体制の兵士・役人・政治家の全員に最下限3ヶ月間の義務的再教育があった。兵士・役人・政治家以外の人には再教育はもっと不定期であった。アメリカ政府主管の職場で働いていた元秘書が、自分の安堵感をこう描写している。

> 「解放は自分みたいな人間にはおしまいだ、と思っていたの。何日かして全員に登録するようにと要求が来たとき、『ついに来た』と思ったわよ。でも私は15分で全部済んでしまったし、その後は、私の仕事のことを誰からも二度と訊かれなかった。実際、兵士たちが私の家の周りに来たときも、私たちに十分米が足りているかどうかチェックするためだけだったわ」[42]

40　著者によるブイ・ティ・ミへのインタヴュー（1974年解放後のクワンチ省にて）

41　1980年ベトナム当局は再教育キャンプにまだ2万人が残っているとしていた。'Written Reply of the Vietnamese Government to Amnesty International Memorandum, September 1980', in *Report of an Amnesty International Mission to the Socialist Republic of Viet Nam* (London: Amnesty International Publication, 1981), p. 26.

42　Rami Chabra, 'Adjusting to New Life in Viet Nam', *San Francisco Chronicle*, 15 August 1975, p. 4.

チュー政権の役人に対しては、その人の犯罪がどのように極悪であっても、当局による処刑は一件もなかった。ドゴールは回想録で、ナチに協力した容疑で処刑された2,070人のフランス人について語っている。ドイツ人の恋人がいたフランス人女性たちは頭髪を剃られ、街頭で公に侮辱された。ベトナムの革命当局は、人々の復讐行為を防ぐために慎重なステップを踏んだ。

が、和解は順風満帆だったわけではない。人々、とくにサイゴンの人々は、しばしば再教育集会に非協力的だった。イギリスのジャーナリストが報告している。

> 「取り憑かれたように食物やその欠乏が議論された。ある近隣再教育セッションで、官僚が決めた乏しい分配記録について不満がくすぶっていた。『文句を言うべきじゃない』と面白見のないカードルが言った。『アメリカ人があんたの赤ん坊の肉を食べていた時代よりマシじゃないか！』このときある老女がぴょこんと立ち上がって、叫んだ。『くだらない！アメリカ人はいつも缶詰ばかり食べていたじゃないか！みんな知っているよ』聴衆は爆笑し、つかのまの反乱を喜び、楽しんだ。何百万もの同意見の異端者を再教育するのは容易なことでないだろう。」[43]

こんなふうに言う人々もいる。「あんたは私を許すの。でも、私は疑い続けたいわ。アメリカがすぐ戻ってくるのを願いながらね」。貯め込んできた黄金で生活するのはわずかな人々だけで、何千人もの人々が海外の親戚から送られてくる贈物で生活していた。かれらは自分の持物を荷造りし、ベトナムを去る最初のチャンスを待っている。ごく少数の人々が、積極的に政府の転覆を企んでいる。

1981年秋の時点で再教育キャンプに残っているのは、1975年以後に反革命活動を執拗に繰り返した人々だった。すなわちハイフォン港に対する放火犯たち、1979年にハノイ駅に爆弾をしかけた犯人たち、アメリカもしくは中国の奨励を受けて別の形のサボタージュを試みた人々であった。また帝国主義に対して神話的な理想を抱き、自分の理想を機会あらば危険な実行に移すであろうと政府が危惧する人々であった。これらの人々の再教育を意図して特別再教育プログラムが作られた。当局が、積極的に再び信頼される市民になろうとしている人々と、社会への危険であり続けている冷笑的反革命の人々とを識別するには、かれらの過去を全面的調査する時間が必要であった[44]。

ホーチミン市その他の南部都市にいる大勢の、おそらく何十万もの革命政府を冷笑する人々は、民族和解に対する最大の挑戦であった。そのなかにはごく貧しい人もいたが、たいていは専門職従事者や小ビジネスのオーナーであった。かれらは、経済的政治的動員を積極的にサボタージュするよりも、消極的に抵抗した。自分の経済状態の悪化をこぼし、自分が革命家のカードルよりもっと文明的で洗練されていると考え、革命が彼らに何か与えるのを冷笑的に待っている。集団労働を馬鹿にし、女性連合会のような諸団体には参加する気がない。かれらは革命家のカードルや制度に対する公衆の信頼を掘り崩し、噂を流し、政府の失敗や弱さを誇張して言い立て、政府が達成したことについては無視する。アメリカで活動するベトナム愛国者協会(AVA)は積極的にベトナム社会主義共和国を支持しているが、その会員たちはこれらの中傷者が作り出した諸問題を重要だと信じている。グエン・ルオンの『サイゴン陥落後』と呼ばれるベトナム「脱出」の記録は、中心になる事例である。彼はアメリカで政治学の博士号を取得し、1972年にサイゴンに戻った。彼は反動

43　Pilger, op. cit., pp. 15-16.

44　これに関しては膨大な宣伝や論争が存在している。ベトナム政府はこれらの人々を再教育キャンプに留め置く権利を主張しているが、アムネスティ・インターナショナルはこれを認めていない。ベトナムが人権侵害を行っている疑いがある、というアムネスティ・インターナショナルからの批判については前述の文献を参照してほしい。

的なやり方で学生を教育したと非難され、1975年11月に教職を失った。結局1979年、彼はボートピープルの中に入った。彼の説明では妻が「子どもたちがブルジョアの知識人の子孫として貧困の中で生きてゆく」ことを恐れたからだった。[45]

一方、革命の政策をほとんど尊敬していない何千もの人々が、ホーチミン市の数地区で自由に稼いでいる。この人々は公然と外国人を言いくるめ、非合法の通貨取引をしたり、売春女性の斡旋、盗品販売を行っている。例えばディストリクト・ワンはサイゴンの旧赤線地区だが、再教育とはほど遠いように見える。ベトナムの標準では無分別と思われるようなドレスを纏う女性たちは、ディストリクト・ワンの街路を歩く北部育ちの女性連合会のカードルからひんしゅくをかうかもしれない。だがその二つは共存している。時には互いに闘争することもある。かれらが和解するまでにはおそらく何世代もかかるだろう。私たちが戦死者やベトナムの生態系や経済の荒廃や女性に対する犯罪のリストを見ようと見まいと、アメリカとの戦争の傷は依然として女性解放を危うくする脅威であり続いているのである。

第5章　ベトナムの流血は続いている

> 私たちの子どもたちはまだ穏やかに眠ることができません。50万の中国軍がベトナムの北部国境におり、私たちは準戦時状態にいるのです。
>
> レ・トゥー　ベトナム女性連合会教育部長

（以下の叙述は脚注にとどめるにはあまりにも重要である。本書の他の章とは違い、本章は女性に特別な焦点を当ててはいない。本章は、米国のベトナムに対する「冷戦」、ボートピープルの集団的大移動、ベトナムとカンボジアのポルポト勢力との戦争、中国のベトナム侵略がつくりだした混乱を解明する試みである。私は本章が1975年以後の時代のベトナム女性を理解するために本質的な背景を提供すると信じている。継続されたベトナムへの敵対が本章の主題だが、これは女性の進歩に対するブレーキとして作用しているだけでなく、ベトナムにおける全ての女性の闘いが押し込められた限界とその闘いの優先課題を規定している。）

最後に残ったアメリカ人官吏たちは1975年4月29日、サイゴンの大統領官邸を解放勢力が接収するわずか数時間前にベトナムから逃げ出した。アメリカは南ベトナム支配を維持するために2,750億ドルを投資していた。最後の十年間、ベトナムに任務で派遣された300万人の米兵のうち、約5万8000人が死亡した。別の約15万7000人は負傷した。そしてベトナムに約1,430万トンの爆弾を投下した後、アメリカは屈辱的な敗北を喫した[46]。この敗北が国際的な権力関係を変容させた。アメリカの支配システムは暴露され、そのシステムを深刻に弱体化させた。

サイゴンのアメリカ大使館が閉鎖してからほとんど10年が経つという事実にもかかわらず、アメリカ政府はまだ深くベトナムに関与している。その政策を導いているのは、復讐である。戦略目標は、米軍を敗北させた報いを血と涙で支払い続けることをベトナムに強制することであり、ベトナムの事例に鼓舞されたかもしれない他の第三世界諸国にその勝利があまりにも高くつくという教訓を教えることであり、アメリカ人があの恥じるべき冒険を自慢し続けることができるように、そしてアメリカ政府が世界の他の部分でその帝国主義的冒険の継続を正当化することができるように、ベトナム戦争の歴史を書き換えることである。

企業による支配体制は絶え間なく拡張せねばならないから、仮にもシステムを存続させるには、そのシス

45　Nguyen Long with Harry Kendall, *After Saigon Fell* (Berkeley: University of California, Institute of East Asian Studies, 1981). ベトナム戦争中、国務省に助言してた政治学者 Robert Scalapino がこの本の前書を書いている。

46　Le Anh Tu, 'Viet Nam: The Legacy of War' (Philadelphia: American Friends Service Committee, 1975).

テムが支配する政府は敗北を受け入れることはできない。ベトナムであれアンゴラやニカラグアであれ、アメリカ政府はそれらの政権を露骨に転覆できないまでも、革命後の社会を不安定化し、分裂させようとする試みに固執している。その目的は、できるだけ社会主義的発展を弱め、それによってアメリカ自身が覇権をにぎる潜在力を強めることである。

復讐

1973年1月27日に調印されたパリ平和協定の第21条において、アメリカはベトナムが戦争の傷を癒す手伝いをすると合意した。リチャード・ニクソン大統領は1973年2月1日にファム・バンドン首相への約束状にそのような性質の援助を明記した。

1．米合衆国政府は、*一切の政治的条件無しに*、北ベトナムにおける戦後の再建に寄与する。（斜体はアイゼンによる）
2．…米国の支援は、5年間で無償援助32億5千万ドル程度で行われる。他の形態の援助は二者の間の合意に基づいて行われる…

ニクソンは、条約は無効だと主張した。ニクソンを引き継いだ三人の大統領はこれらの条約上の義務への違反を正当化するためにそれぞれ付加的な諸理由を見つけだした。

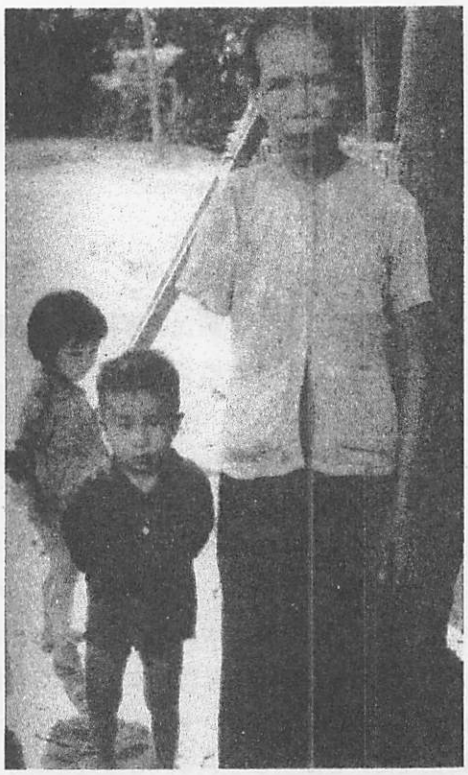
それで、アメリカには何百万ドルもの値段のブルドーザーやクレーンや他の建設装備が廃棄された建設プロジェクトのかたわらに放置してある一方、ベトナムの女性たちは新しいビルの建設のためにシャベルとつるはしで土台を掘っている。女性たちは手彫りの棒で地面の土を運びながら爆弾で壊された堤防を修繕し、手彫りの棒を使って爆薬が入ったまま田畑に残された兵器を捜索しているのである。彼女たちはまた、ダイオキシンで発癌した肝臓を継ぎ接ぎした再利用の外科手袋をはめて上手に手術している。アメリカ政府のベトナムに対する復讐への渇望は、他国諸政府にベトナム援助をさせない圧力を意味した。アメリカが強制した経済制裁は、ベトナムで原料やスペアの部品や経済発展のための技術支援の慢性的不足状態を引き起こした。莫大な戦費を費やして破壊したベトナム経済に、今度は通商禁止という攻撃をかけたのだ。1979年、アメリカ政府はEECに圧力をかけ、ベトナムへの粉ミルクの積み出しを停止させた。

この経済戦争は、既に支障を来していたベトナムの経済に弔いの鐘となった。1980年、ベトナム経済が米国の食糧という兵器の最悪の効果を感じていたとき、ホーチミン市の小児科病院は400人の重い栄養不良の子どもを扱っていた。医師たちにはその患者たちに必要なミルクの10%しかなかった。ズオン・クイン・ホア医師は臨時革命政府時代の厚生大臣で、現在では小児科調査局長だが、最近WHOの基準を用いて子どもの栄養調査を行った。彼女はホーチミン市郊外で就学前の子どもの28%が栄養不良だと気づいた。市内のサンプルから、5歳以下の子どもの38%が栄養不良に苦しんでいると分かった。これらの子どもの両親は、失業者や貧しい労働者、下級公務員であるとホア医師は説明した。[47]

ほぼ1500万トンにも達した爆弾で破壊しきれなかったベトナム医療を、経済的困難によって破壊できるとは思われない。ベトナムは、アメリカに降伏するよりむしろ耐乏生活をし、経済改革を制度化し、他の国々からの援助を求めた。「ボートピープル」として知られるベトナム経済難民の流出は、1981年までにしだいに減少していった。

47　Murry Hiebert, 'The Food Weapon: Can Viet Nam Be Broken?', *Indochina Issues* (Washington DC: Center for International Policy), No. 15, April 1981, pp. 1-2.

ヴォイス・オブ・アメリカ：「全ボートピープルへの呼びかけ」



ゲリラを支援するため、戦争中ずっと地下壕で生活していた女性。米軍の爆撃で片腕を失った。
Sara Rosner

元は秘匿されるつもりで行われた在タイ米国大使館の報告によれば、1981年に南タイにいる5,000人のベトナム難民のうち政治的理由の難民は27%だけで、経済的理由の難民が63%だった[48]。アレクサンダー・カセラ国連高等難民委員会アジア局長はこの報告を確証し、「人々は、自分が迫害を受けているからではなく、よりよい生活水準を追求してベトナムを離れている」と述べた。[49]

ベトナムに対するラジオ放送「ヴォイス・オブ・アメリカ」は、貧困に打ちのめされたベトナム人にアメリカへ移民して快適な生活を楽しむように宣伝を流した。あるアメリカ人官僚は、彼らのやったことは救助というよりも誘惑のプログラムであり、1981年に彼らは実際の難民の数よりも大きな収容スペースを用意していた、と語っている。保守的な『ファーイースタンレビュー』が思索的にこう述べている。「もし第七艦隊がインド洋に入り、そこに辿りつく人はカリフォルニアに定住できると知らせるとしたら、インド亜大陸からの集団移住はインドシナからの集団移住を小さく見せることになるであろう」[50]。ライオネル・ローゼンブラットは、以前サイゴンの米国大使館職員で、現在は在タイ大使館の難民調整官あるが、アメリカがベトナム難民に避難所を与えるのは人道主義とははるかに遠い動機からだと認めた。「我々のやっていることは、ベトナムにおける我々の戦争の適切な延長だと感じている。アメリカがこの地域における責任を思い出すことが重要だと思う」。[51]

多くの難民は、いったん欧米に到着すると、自分のホストたちが訊きたがっていることを告げた。ベトナムにおける残虐な人権侵害の物語である。真実を認める人々もいた。例えば私は1981年のベトナム訪問前、英語を学ぶベトナム人たちのクラスで、ベトナム訪問中に私に調べてみさせたいことは何か、もしあれば聞きたいと、質問した。かれらの答えが示すのは、生活水準に対する非常な関心であった。

> どうやって人は生活費を稼いでいるか？民間ビジネスはいま許されているのか？サイゴンではまだ電力が切れているか？医者に行ったら一日中待たないといけないのか？まだ闇市場はあるか？大学に行く許可がもらえるのはどんな人？米の配給はどうなのか？砂糖は？麺は？野菜は？政府には女性のための仕事があるのか？チャイルドケアはどうか？出国ビザを認める今の条件はどうなっているか？

---

48 *Far Eastern Economic Review*, 17 July 1981, p. 7.

49 *Far Eastern Economic Review*, 24 July 1981, p. 6.

50 *Far Eastern Economic Review*, 17 July 1981, p. 7.

51 John Pilger, 'Only the Allies Are New', in *Aftermath*, by John Pilger and Anthony Barnett (London: New Statesman, 1982), pp. 91-2.

質問者たちは1979年から80年にかけてサンフランシスコに到着していた。四分の三は、中国系の人、つまり華人であった。1978年以来のベトナムの三百万の華人のうちほとんど半分の集団大移動により、ベトナム批判の火に新たな油が注がれた。

なぜ華人は去ったのか

アメリカと中国は華人難民を専制的な人種差別的追放の犠牲者として描いた。その問題は、複雑である。一千年の中国による植民地支配の年月を経て、いくらかの反中国感情がベトナム人の意識のなかに深い根を下ろしている。ベトナム人の激しい民族的自尊心は、もともと中国の封建的占領に対する抵抗の中で形成された。もっと最近では、多くの中国人は親族の豊かな財産のせいで憤慨をかった。その財産は、ハノイ・ホーチミン両市の闇市場を中国人が支配してきたことから獲得されたものだった。が、ベトナム在住中国系住民に対するある程度の一般的偏見があるかもしれないとはいえ、ホア難民の最初の波は人種差別に対する反応として現れたのではなかった。最初の波は、ホーチミン市の中国系商人のコミュニティーが導いたのである。

第二次世界大戦中に中国とベトナムでアメリカの諜報活動に責任を負っていたアルキメデス・パッチは、蒋介石の連合軍が表向きには日本軍を武装解除するということで1945年ベトナムを占領したとき、蒋介石の商業的財政的エイジェントが専横にその後30年以上続く搾取的経済活動のための堅牢な基礎をインドシナに据えた、と説明している。この人々が今日の「ボートピープル」である[52]。

1978年3月ベトナム政府は、ベトナム経済が抱える問題、投機と退蔵の伝統的温床となっていた民間商業取引の廃止へと動いた。中国商人はそれまでホーチミン市の民間商業の80%を動かしており、この措置で最も手痛い打撃を受けた。かれらが中国人だったからではなく、かれらが社会主義的再建を妨げたからである。かれらは自分の地位喪失を受容するよりも、ベトナムを立ち去る道を選んだ。かれらのほとんどがタイ、マレーシア、その他の資本主義諸国へと移民した。同時に、中国から流れる噂が華人コミュニティーに氾濫した。それらはベトナムと中国の間の戦争が急迫していると予言していた。逃走をたきつける最も効果的な噂の一つは、「もし居続けて中越戦争が起こったら、ベトナム人が私たちを華人だといって殺すか、さもなくば中国軍が私たちを逆賊だと言って殺すかだ」というものだった。

ある華人女性は私に、どうして彼女がそれらの噂を信じたのかを語った。

> 「人々にはあまり情報がありませんでした。かれらは、ポルポトの軍隊がアンザンやタイニンで何百人も虐殺するのを見ていました。だから、どんなことだってありうると思ったのです。カンボジア国境からホーチミン市は短い距離です。華人たちは、中国はすごく大きいからベトナムとの戦争に勝つかもしれないと思いました。華人は1977年にポルポトがタイニンで多くの華人を殺したのを覚えていたのです。ポルポトは、華人とベトナム人を識別しませんでした。生き残った人たちがホーチミン市にやって来て、虐殺の話をしてくれました。かれらは命を落とすのを恐れていました。だから、ボートピープルに加わったのです」[53]

北部ベトナムにいた約30万人の華人の大半が工場労働者、炭坑労働者、港湾労働者、漁民、公務員であった。わずかにハノイとハイフォンで小さな取引をする人もいた。多くの華人難民にインタビューをしたチャールス・ベノイトによれば、北部を離れる華人の動機は三つあった。第一はしだいに増える中越戦争のような出

52　Archimedes Patti, Why Viet Nam? (Berkeley: University of California Press, 1980), pp. 381-2.

53　著者によるドゥ・フ・リェンとリ・キム・マイへのインタヴュー（1981年9月13日ホーチミン市）

来事がもたらす運命への恐怖、第二に中国の故郷へ帰るよう鼓舞する国籍への感情的執着、第三に1978年の闇市場活動に対する弾圧以後のベトナムにおける特権の侵害である[54]。1979年以前に10万人以上の華人労働者が突然逃走したことは、北部の経済を深刻に混乱させた。

中国が1979年2月にベトナムを侵略した後、華人のベトナム脱出がもう一度急増した。かれらにはかれら以前の難民と同じ動機が多くあった。それに加えて、ベトナム政府が北部にとどまる中国系の人々の多数に影響する新たな治安措置を制度化したということもある。国境近くに留まった華人たちは、しばしば第五列として中国の侵略者のためのスパイや道案内の活動をした。ベトナム政府はこれへの素早い対応を余儀なくされた。華人全員を調査する時間はなかった。そこでベトナム政府は、軍事的にセンシティブな地域に暮らすこれら華人たちに新経済地区に移動するか国を離れるかという選択を申し出た。政府はベトナムを離れるほうを選んだ人々には出発準備を援助した。防衛の要件がこの援助を動機づけ、多数の華人が先延ばしにしていた手続きを促進した。

脱出は、南部では北部ほど秩序だっていなかった。南部には経験を積んだカードルが比較的少なかった。欧米メディアが主張したような正式な「出国税」はなかったが、その一方、明らかに中下級官吏による収賄事件があった。

ベトナムに留まる百万人以上の華人は、ほとんどが労働者と農民だった。かれらは通学、労働、徴兵において全ベトナム市民と同様の権利と義務を正式に享受している。国に留まった人々は最初、恐れていた。だが日々の現実が、華人の学校追放や職場解雇といった噂が誤っていることを証明した。何百人もの華人が依然としてベトナム共産党に所属している。華人たちがいったん真実を知ると、留まった多くの人々がかれらに嘘をついた中国当局に憤慨するようになった。ホーチミン市のある華人女性のグループは、華人に対する人種差別的事件を起こすのはふつう前のチュー政権官僚の子弟たちだ、と語った。父親がまだ再教育キャンプにいる一部の子どもたちは華人のクラスメートを虐めたものだった。

現在のベトナムで、華人に対して現実の迫害は行われてないということはおそらく事実であろう。が、私は、華人の情報提供者たちが認めた以上に、微妙な反中国感情が一般的にあると感じた。例えば、少なくとも一度、ある女性連合会のベトナム人カードルが、標準的な人種主義的意味づけを用いて、「華人の親は市場でお金を稼ぐのに子どもを使うことに関心があるので、華人の子どもは学校のことを真剣に考えていないと思う」と私に語った。彼女が言及した子どものほとんどが貧しい労働者階級家族の出身だということは明らかだった。系統的な人種差別的抑圧の歴史は存在しないと考えてよいが、私にはそんな悪感情がどう実行に表れるのか知る方法はなかった。反対に、華人はベトナム社会では歴史的に特権集団であった。

同床異夢

「同床異夢」。ベトナム人は中国と米国の同盟を描写する便宜に、結婚に関するこの伝統的な慣用句を使う。たいていのそうした婚姻において、通常は新郎がより大きな権力をもっている。この場合、アメリカが新郎である。ベトナムの外相グエン・コ・タックは語る。

> 「1979年2月に中国が侵略して以降、わが国の直接の敵は中国です。が、アメリカが中国の背後にいます。アメリカは中国の最大の支援者です。もしアメリカが中国の侵攻に反対すれば、中国は侵攻できなかったでしょう。(1978年9月、タックはアメリカと関係正常化のた

54 Charles Benoit, 'Viet Nam's "Boatpeople"', in David W. P. Elliot (ed.), *The Third Indochina Conflict* (Boulder, Colorado: Westview Press, 1981), p. 151; also Murry Hiebert, 'Viet Nam's Ethnic Chinese', *South East Asia Chronicle*, No. 68, December 1979, pp. 21-5.

めに交渉した。全てが解決したが、アメリカは突然正常化プロセスをうち切った。）12月に、カーター大統領は鄧小平主席の訪米を歓迎し、鄧主席が『ベトナムに教訓を教えるために』威嚇することに賛成したのです。鄧主席が訪米及び訪日から中国に戻った二週間後、中国はベトナムを侵略しました。米国財務長官ミカエル・ブルメンタールは侵攻後に中国に到着し、その侵攻は決して中米関係の正常化を妨げないと宣言しました。…私たちの闘争はいま、アメリカ帝国主義に対する私たちの闘争の継続です。見せかけは変わりましたが、背後には同じ敵がいます。中国を後押しし我々に敵対するよう奨励しているアメリカがいるのです。」[55]

中国共産党の最高指導者がテキサスでカウボーイハットを被り、赤ちゃんたちにキスをしている光景は多くの人々に衝撃を与えたかもしれない。しかし、米中の同盟はそれ以前、少なくとも1972年のニクソン訪中のころからすでに醸成されていた[56]。中国の指導者たちはソ連こそ中国の主敵であると定義するようになったので、中国は米国との同盟を優先するようになった。中国は明らかにアメリカから経済援助を得ようとつとめていた。

数年の間、ベトナムはできるだけ静かに中国との相違を解決しようとする戦略をとってきた。問題が二国間に留まる限りはアメリカがそれを利用することはできないだろうと念願していた。この戦略は惨憺たる失敗であり、おかげで中越戦争が勃発したときにベトナム人民とその潜在的同盟者にベトナム防衛の覚悟をさせることはいっそう困難になった。だが、最近、アメリカは中国との同盟を秘密にしなくなった。1978年中国はベトナムを援助するコミットメントの全てを破棄した。アメリカ国家安全保障会議（NSC）のスタッフであるロジャー・サリバンは、率直にこう語った。

「中国弁証法の言葉で言えば、アメリカの政策はできるだけ激しくベトナムに脅しをかけて、ベトナムがソ連に頼らざるを得なくすることにある。その次に、ソ連にはベトナムの必要とするもの全部を叶えられない、ということをベトナムが理解すればどうなるか…もしベトナムが経済的困難を経験すればするだけ、それは素晴らしいことなのだ」[57]

1981年6月2日、米国東アジア太平洋援助事務局は以下のような声明を発表し、その姿勢を広く知らしめた。「我々は他国と協力してベトナムに対する政治的、経済的、そして軍事的な圧力を増大する道を模索し続ける。そして願わくばその圧力によってベトナム政府が現実に対する態度を変更することを期待している」[58]

米中は、ベトナムの敵である互いの立派な隊列に対して、ベトナムへの攻撃という聖域を与え、軍事的政治的支援を提供することで協力しあった。1970年代にラオスのUSAID役員だったジャック・ウイリアムソンは、現在タイでカンボジア難民キャンプの治安維持を任命されたタスクフォース80というタイ特別諜報部隊を調整している。実際このタスクフォースは、カンボジアでの活動をポルポト側に立って助言し、支

55　著者によるグエン・コ・タックへのインタヴュー（1981年9月1日ハノイ）

56　キャサリーン・ゴフ・エイバールはその著書のなかで、1976年ごろベトナムの政府関係者は私的な会話のなかで「ニクソンが中国を訪問したときにはみんな泣いていた」と漏らしていたと書いている。*Ten Times More Beautiful* (New York: Monthly Review Press, 1977), p. 244. 1954年にまで遡るベトナムに対する中国の背信については以下を参照のこと。Wilfred Burchett, *The China, Cambodia, Viet Nam Triangle* (London: Zed Press, 1981) および the Minister of Foreign Relations of the Socialist Republic of Viet Nam, *The Truth About Viet Nam-China Relations* Over the Last 30 Years (Hanoi: 1979).

57　以下の記事に引用された言葉。John Spragens Jr, 'The Way It Was', *South East Asia Chronicle*, No. 76, December 1980, p. 7.

58　*Far Eastern Economic Review*, 26 June 1981, p. 10.

援している[59]。1981年7月には以下の勢力が汎インドシナ・反ベトナム統一戦線を組織化するために北京で会合した。追放されたポルポト政権のイエン・サリ、元カンボジア右翼政治家のインタムとソンサン、CIAが後援したラオスのモン族の傭兵の指導者であるバンパオ、以前のラオス右翼首相プーミ・ノサバンその他である。

中国はカンボジア、ラオス、ベトナムから様々な反体制派の諸グループのための複数の軍事訓練センターを運営していた。米国はそれらを後援し、タイに在中する複数の反共グループに一年300～400万ドルを流した[60]。

アメリカは、カリフォルニア州サクラメントを地盤とするファム・ヴァン・リュウ大佐が行っているベトナムへの妨害を高く評価していた。アメリカ政府から奨励を受けたわけではないにせよ、明らかに同意を受けて、元サイゴン政権全国警察長官リュウは公然と難民たちを「共産主義者からのベトナム解放」のための小軍隊に組織化し、新兵を補充し、訓練を施している。何千もの人が、リュウらによる「ベトナム解放全国統一戦線」がベトナム内部でいかに拡大しているか報告を聞くため、豊かな財源を持つその集会に出席した[61]。

ベトナムという妖怪

ベトナム戦争中、アメリカ政府を擁護する観念論者たちと膨大な反戦論者たちとの間には巨大なギャップが開いていた。この数年間、様々な政権が国内の批判世論を最小にし、このギャップを閉じることによってアメリカの世界経営の探求を続けようと努力している。ベトナムという妖怪は、アメリカ世論がすべての悪しき教えを信じるようになるまで、アメリカの為政者に取り憑いていく。

そのために系統的なエセ教育が公立学校で始まっている。これはベトナム戦争に反対して行進し、請願し、デモ行進をした全ての人々にとって悲劇的な皮肉だ。この人々の子どもたちは学校で「私たちの国は民主的な南ベトナムの防衛のためにやってきた」と書かれた教科書を読ませられているのである[62]。アメリカのメディアはまれにしかベトナムに言及しないが、アメラジアンの子どもの運命やボートピープル、MIA（行方不明兵）、ベトナム内部の政治犯、いわゆるPO(戦争捕虜)になった間に拷問された人々を哀れむことだけは例外である。人道主義的な理由でベトナム戦争に反対した人々の一部は、ベトナム批判者の合唱に参加してきた。このキャンペーンはジョーン・バエズその他がベトナムにおけるいわゆる抑圧を非難する大きな新聞種になったときにピークに到達した。彼女たちの考えていた事実が間違っていて、彼女たちの情報源が汚染されていたと判明したときや、政治囚だと思われた人々が自由に活動していたり死者とされた人が生還していたときは、新聞の見出しを飾ることもなければ、取り消し声明も載らなかった[63]。

---

59 Pilger, op. cit., p. 95.

60 Nayan Chanda, 'Agree to Disagree', *Far Eastern Economic Review*, 24 July 1981, pp. 13-21; John Spragens Jr, 'Viet Nam's Fight to Rebuild', *Guardian*, 10 Feburary 1982, p. 24. 最近、ベトナム当局は拘束したスパイから、米国にいる反動派のベトナム人の帰還について、またベトナム国内で反体制派を組織し中国で訓練をうけさせるという計画についての情報を入手している。詳しくはThanh Tin, 'Vo Dai Ton and "Project Z"', *Viet Nam Courier*, Vol. 18, No. 8, August 1982, pp. 8-11. またその背景についてはHelen Chauncey and Lowell Finley, 'US Policy and the Crisis in Asia', *South East Asia Chronicle*, No. 68, December 1979, pp. 2-9.

61 Steve Talbot, 'Saigon USA' -Special report broadcast on Channel 9, KQED (San Francisco: KQED, 5 January 1983).

62 William Griffin, Robert Knowles and John Marciano, 'Viet Nam and the American Textbook', *Inochina Chronicle*, No. 48, April 1976, pp. 4-14. 学術的なレベルでの歴史の改ざんについては、Marilyn Young, 'Viet Nam Rewrite', *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, Vol. 10, No.4, 1978, pp. 78-80.

63 'Blaming Viet Nam', *Indochina Newsletter* (Indochina Aid and Friendship Project, Boston), No. 8, December 1980-January 1981, p. 1. ベトナムに対する初期の冷戦プロパガンダについては、Arlene Eisen, 'Cold War Against Viet Nam Builds', *Guardian*, 20 October 1976, p. 6.

ごく最近、例えば、リベラルな『ニューヨーク書評』が元臨時革命政府司法大臣チュオン・ニュー・タンの『解放の神話』と称される、辛辣で批判的な論文を出版した。紹介文で編集者はタンが「CIA 共犯者の嫌疑を超える人物」だと主張している。彼らは、タンが自分の反共活動に対する支援獲得を願い国務省と上院軍務委員会との会合のために訪米したことには言及しなかった[64]。また、わずかながら、ベトナムに関して「戦争中の女性解放と民族解放の結婚は、戦争の終結で突然終焉に到った」と当を得ない主張をし、ベトナムに対する冷戦キャンペーンにうっかりと貢献しているフェミニスト批評家たちもいる[65]。彼女たちの分析が豊富な実証あるいは正確な歴史認識をふくむことは稀である。

映画産業は、アメリカのイメージを再び尊敬されるものへ替える努力に大いに貢献している。『地獄の黙示録』や『帰郷』のような幾らか進歩的な映画さえ－これらはベトナムで米国が犯した蛮行についていくらか暴露しており、米国社会に戦争が与えた損害を指摘している－、ベトナムの人々を決して人間として描かないし、独立というベトナム人の大義を正当だと描かない。アメリカの虚構においては、一人として信じられるベトナム人の登場人物を見いだすことは不可能である。戦後のベトナムを描く映画のなかでは、ベトナム人民に対する最も邪悪な攻撃が最も素晴らしい出来事として描かれている。ある評論家はこう書いた。

> 「ハリウッドで大あたりした『ディアハンター』は、『新愛国主義』と呼ばれるむっつりしたアメリカ人の苦渋をやわらげ、同時に意味のない暴力の映画で興行収益を十分満足させ、またベトナム人を腐敗したダメな人間として、ベトナムに行ったアメリカ人を悲劇の英雄として描きだす、という目的のもとに作られた。それは、何百万ものアメリカ人に、彼らがベトナムでやったすべてを瀉下する力強い下剤として歓迎された。今日、『ディアハンター』はもはや単なる嘘ではない。それは米国の政策であり、その政策とは復讐である。…その口実はボートピープルの名による怒りであり，その獲物は中国カードである」[66]

このプロパガンダ・キャンペーンの結果、アメリカのベトナム侵略に 1975 年 4 月まで反対した人々の圧倒的大部分が今では混乱し、継続する攻撃に直面して沈黙している。

ポルポトと中国カード

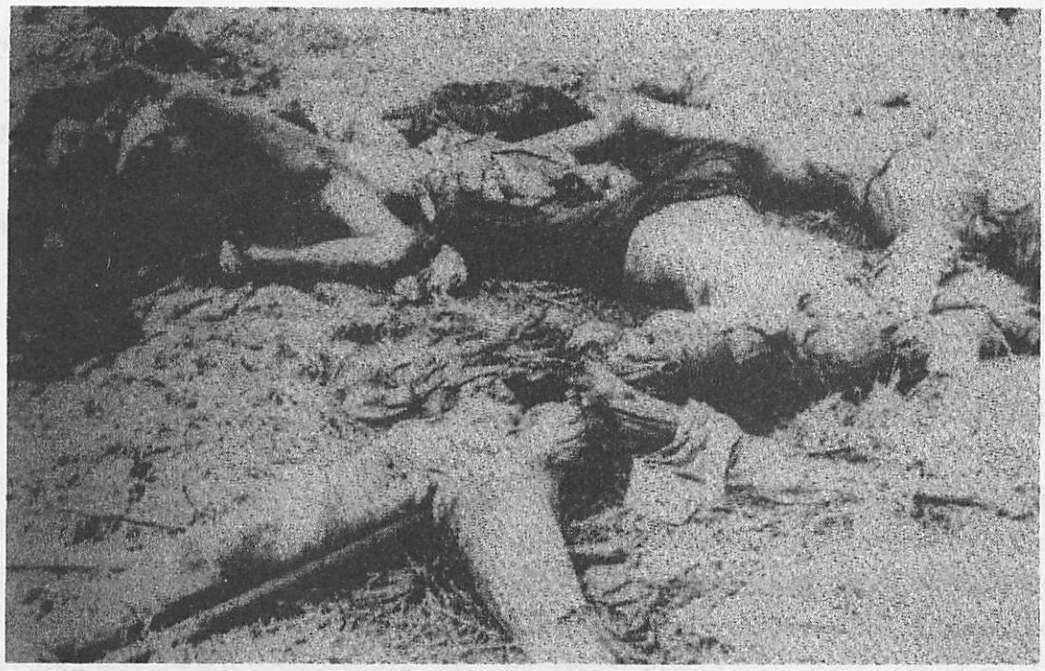
グエン・ティ・チャムは、カンボジア国境からわずか数キロのアンザン省 Thin Bien 地区のトイソン協同組合の女性連合会会長をつとめる。彼女は頑丈な農婦である。私が会ったとき、彼女は汚れのない、清潔できちんとアイロンをあてた白いシャツを着ていたが、そのつめは長年の土にまみれた労働の日々のため永遠に茶色になっていた。私は彼女に多くの質問をする必要はなかった。彼女は早口に、侵入したポルポト軍との 15 の戦闘で協同組合の女性たちが果たした役割の詳細を誇らしそうに語った。

> 人々は二回故郷を破壊されました。初めはアメリカ軍、二回目はポルポト軍によってです。アメリカからの解放後、平和は五日間しか続きませんでした。ポルポト軍が攻撃を始めたのです。私たちは反撃し、1978 年 1 月までは再びポルポト軍を見ませんでした。…私たちは反撃のために 400 人の女性を組織しました。私たちは敵 29 名を殺し、彼らの武器の多数を取得

64 Nayan Chanda, 'Ganging Up with the Exiles', *Far Eastern Economic Review*, 31 July 1981, pp. 11-12. もとになっている記事は、Truong Nhu Tang, 'The Myth of Liberation', *New York Review of Books*, 21 October 1982, pp. 31f.

65 Christine White, 'Viet Nam and the Politics of Gender' (Mimeo: University of Sussex 8, 8 November 1981), p. 2.

66 John Pilger, 'Revenge on Viet Nam', *Viet Nam Newsletter*, No. 4, July-August 1979, p. 4.



アンザン省バチュク村ではポル・ポト軍によって 2,000 人あまりが殺害された。棒を使うなどして多くの女性が強姦された。Viet Nam News Agency

したのです。彼らのライフルは中国で作られたものでした。

1978 年 4 月 18 日の戦闘の間、30 人の女性が一台の迫撃砲を山の上に引っ張り上げました。私たちはそこでポルポト軍を攻撃する配置につきました。戦闘は五日間続きました。私たちに対するポルポト軍の虐殺を許さなかったのです。他の 80 人の女性が塹壕を掘りました。私たちは、敵が全てを焼き、全てを破壊するのを知っていました。祖国を防衛するか殺されるかしか選択肢はなかったのです。だから私たち女性は戦闘でものすごく活躍しました。そのことは四日間でも話をすることができますよ。[67]

1975 年の最初の攻撃直後、ポルポトは、ベトナム政府の疑うことを知らない高官に対して、その事件はクメールルージュ軍が土地の地理について知らなかったために起きたのだと説明した。ベトナムは、山積みする国境の緊張を話し合いで解決しようと試みた。クメールルージュは突然 1976 年 5 月、話し合いを延期した。1977 年初めまでに、クメールルージュは頻繁な大規模攻撃を始めていた。1977 年 4 月、ベトナム人民解放軍はポルポト軍をベトナムから追い出す反撃を開始した。ベトナムはそれから話し合いの再開を提案した。クメールルージュは話し合いを拒否し、状況は悪化した。

1977 年末までに、何万ものポルポト軍がホーチミン市の真北にあるタイニン省を侵略していた。1978 年初めに、ポルポト軍はその西部に加えてアンザン省をも侵略した。1978 年 4 月 18 日彼らはアンザン省のバーチュックで、とりわけ女性と子どもに対して身の毛のよだつような蛮行をはたらき、2,000 人以上の人を虐殺した[68]。約 35 万人の人がカンボジアとの境界地域から避難せねばならなかった。これらの人々は故郷も収穫も失った。ベトナムがポルポト軍をアンザン省から放逐するまでに、4,000 人以上が殺された。

67　ポル・ポト派との戦争に従軍した複数の兵士たちと著者が交わした会話から。(1981 年 10 月 8 日アンザン省ロンスエン)

68　ベトナム政府外務省、*Viet Nam Courier* および Viet Nam Press Agency はベトナムにおけるポル・ポト派の虐殺行為を詳細に記録している。また第三者機関がその告発を裏付けてもいる。例として William Shawcross, *Sideshow* (New York: Simon and Schuster, 1979), p. 391. また *Far Eastern Economic Review* の書籍など。

なぜ二つの友好的と思われた隣国の間で話し合いによる解決が不可能であったのか？答えは複雑であり、カンボジア内外の展開を理解する必要がある。ポルポトのクメールルージュ軍はベトナム人民に対してと同様、自国の人々に対してもジェノサイド戦争を敢行した。これは1975年4月17日、全カンボジア諸都市の強制避難で始まった。そのとき出産したばかりで病院の手術台にいた女性たちさえ田舎への強制行進に参加せねばならなかった。何千人もが行進で死亡した。外国人、知識人その他の「寄生者」の腐敗した影響を除去することによってカンボジアを「浄化」しようとする過程で、ポルポト政権は200万から300万と見積もられる人々を死にいたらしめた。

「私たちには泣く権利さえなかった」

ポルポトはカンボジア社会を三つのカテゴリーに分けた。1）「旧民」は1975年4月に先立って解放区の住民だったため、クメールルージュに忠実だと思われた少数者であった。2)「新人」はカンボジアの諸都市、あるいはアメリカが後援したロンノル政権の支配地域に生活する人々であった。「新人」は奴隷労働キャンプでの労働によって浄化されるまで、外国の手先、腐敗した反共主義者として有罪だと疑われた。3) 第三のカテゴリーは「敵」である。ロンノルの軍や公務に奉仕した、あるいはアメリカ政府や外国企業のために働いた人は誰でもそうだった。彼らは、即決処刑された。ベトナムでのように民族和解というコンセプトはそこになかった。

万人にとってあまりにも過酷な状態だったので、あるカンボジア人は「私たちは（霊魂の再生を信じているので）死を恐れない。私たちが唯一恐れるのは、生まれかわってまたカンボジア人になることだ」と語った[69]。ほとんど全人口が奴隷労働キャンプに追いやられた。「旧人」は労働旅団のリーダーになることができ、いくらかの権利を保有した。だが「新人」には何もなかった。彼らは無償で一日に16時間労働し、生存ぎりぎりの配給を得ただけである。ポルポト当局に挑戦する可能性のある学校や宗教や文化は認められなかった。

死亡した数百万人は、たいてい飢餓、消耗、日射病で倒れた。即決処刑も、ほんの小さな違反に対してまで日常的だった。ポルポトの政策の前提は、「一人の敵の生存を許すより、十人の無実の者を殺害するほうがよい」というのであった。ポルポトは、新生カンボジアは元々の800万の人口のうち100万か200万が必要なだけだと主張した[70]。女性たちは生理がとまり、彼女たちの体は重労働と飢餓によってぼろぼろになった。夫を選ぶことも許されなかった。結婚はクメールルージュ政権によって手配された。

民族解放闘争の指導者が自民族の人々にそんな犯罪をはたらくということが、いかにして可能だったのだろう？そもそも彼はいかにして権力を得たのだろうか？カンボジアに関する著書で賞を受賞したウイリアム・ショウクロスは、アメリカの責任を指摘している。「今日のカンボジアの悲劇に責任があるのは二人の男だけだ。ニクソン氏とキッシンジャーだ。ロンノルは彼らがいなかったら無だった。クメールルージュはロンノルがいなかったら無だった」[71]。ポルポトは、CIAがロンノルを1970年に政権に就けるまで、いかなる民衆基盤を持つことも容易ではなかった。ロンノルは絶望的に腐敗し、無能力で、アメリカへの依存のために信用されていなかった。皮肉にも、1975年4月以前のポルポトは、ベトナム人民解放軍から決定的な軍事援助をも受けていた。

69　Jacques Danois, *The Will To Live* (UNICEF, 1979). また1981年9月、著者自身のカンボジア訪問の際に得た情報から。また Chantou Boua, 'Women in Today's Cambodia', *New Left Review*, No. 131, January-February 1982, pp. 45-61.

70　Francois Ponchaud, *Year Zero* (Middlesex: Penguin, 1978), pp. 86 and 92.

71　Shawcross, op. cit., p. 391.

カンボジア革命運動の内部には幾つかの諸傾向が存在していた[72]。民族排外主義的潮流を代表するポルポトは、むこうみずな戦術を使って他者に対する優位性を獲得した。彼の獰猛な民族主義は、自国の面積が縮まり消滅の危機に瀕していると見なすカンボジアの一部の知識人にアピールした。アメリカの絨毯爆撃で数万人もが殺され338万9,000人が難民になったが、その爆撃でとほうもなく苦しめられていた農民たちも、ポルポトの軍事主義に惹きつけられた。ポルポトはベトナムからメコンデルタを最征服することによってカンボジアの過去のアンコール時代の栄光を回復すると約束した。ついに、ポルポトの約束は特にカンボジアの10代の若者にをひきつけることになった。

ポルポトは政権をいったん掌握すると、様々な地方の民衆の間、農民と都市住民の間、そして知識人と無教育の人々の間にあった伝統的敵対意識をたくみに操ることによって支配を維持した。ポルポトは食糧と全ての武器の分配を独占し、職場の内外でのすべての運動を支配した。不満の増大に直面し、ポルポトは逮捕や処刑をエスカレートさせた。ポルポトは自分が数百万人にもたらした荒廃に対する民衆の反動を相殺するために、ベトナムに対する民族的憎悪を頼りにした。ラジオ・プノンペン放送で、ポルポトは「我々は狙った目的をこれまで達成してきた。倒れたカンボジア人一人について30人のベトナム人が殺された。…だから我々は5千万のベトナム人を絶滅するために200万人のカンボジア人を犠牲にできるであろう。それでも我々にはまだ600万がいる」と強く勧告した[73]。

中国のポルポトに対する支配の程度を見積もるのは難しい。ポルポトのイデオロギーが初期に毛沢東に強く影響されたことや、ポルポトが1975年以後中国から莫大な軍事的経済的政治的支援を受けていたことには十分な証拠がある。ショウクロスは、その依存ぶりについて特筆した。「プノンペンは放棄された。近代的政府の装置は何一つ存在しない。すべての事務所は放棄された。…郵便制度もなければ通貨も電話もない。カンボジア以外の世界との主なリンクは隔週の北京へのフライトだけだった」[74]。

ベトナム外相グエン・コ・タックは詳しく述べた。「1,000万以下の人口しかないカンボジアがいかにして5,000万以上の人口があるベトナムを敢えて交戦相手にできただろうか…クメールルージュは、自分の背後に8億人の中国人がいると確信しているのである」[75]

ポルポトはベトナム再征服を約束し、その一方、ベトナムがカンボジアを併合しカンボジア民族をベトナム化して抹消するつもりなのだとも主張した。ポルポトはベトナムを第一の敵と定義することによって、内部の反対者にベトナムの手先だというレッテルを貼って反対者の虐殺を正当化することもできた。ポルポトの究極的な目標が何であれ、ポルポトの脆弱性のおかげで中国はポルポトを利用し、ベトナムに対する戦争を敢行させることができた。ベトナム人民解放軍はポルポトに反対するカンボジア勢力と結びつき、1979年1月7日までにポルポトのカンボジアからの逃走を余儀なくさせた。数週間後、中国は「ベトナムに教訓を教える」ために60万の軍隊でベトナムに侵攻した。数年を経た現在もなお、カンボジアで権力に復帰しようと試みるポルポトを中国は支援している。

想像できなかったことが起きる

「だから、私たちが決して想像もできなかった事が起きたのです。中国という、ベトナムの親しい友人だった国が、ベトナム人民の主要な敵になったのです」。女性連合会教育部長レ・トゥーは、祖国を再建し女性

72 以下の記述は次の文献から。Ben Kiernan, 'Pol Pot and the Kampuchean Communist Movement', in Kiernan and Chantou Boua (eds), *Peasants and Politics in Kampuchea: 1942-1981* (London: Zed Press, 1982), pp. 227-317.

73 Broadcast, 10 May 1978, quoted by Kiernan, op. cit., p. 232.

74 Shawcross, op. cit., p. 369.

75 Burchett, op. cit., p. 149.

の権利を拡張するために努力する女性たちが現在直面している障害を説明しようとして、語り続けた。

> ベトナムのことわざに言います。「中国人とベトナム人はよく同じ所から水を飲み、同じ草原で水牛を放牧し、同じ森で薪を集める」と。だから戦争が始まったとき、人々、とくに中国に近隣の人々には、理解できませんでした…
>
> 中国軍はベトナムの人々を殺し、虐殺しました。中国軍の犯罪は、米軍よりいっそう野蛮でさえありました。私たちは自らを防衛し、中国軍はすぐに撤退を余儀なくされたものの、まだ敵対を続けています。中国はスパイを送ってきました。彼らはベトナム人の間に不平の種をまこうとしているのです。経済を破壊するために水牛を殺し、偽造貨幣を流通させたのですよ。彼らは定期的に、ベトナム領土の一部を奪い取ります。田畑に行く途中の農民たちを待ち伏せて攻撃し、道路に地雷を敷設するのです。…戦争はいつ何時でも起こり得ました。…それでも私たちはもう二つの戦線で包囲されてはいるわけではなくなったので、以前に比べれば、良くなっています。今では、カンボジアには友好的な政府があります。中国は一方からベトナムを攻撃できるだけです。[76]

中国は意図的に中国軍が占領した地域において経済基盤を麻痺させようとした。北部の六省で、中国軍は橋や全部の工場、発電所、国営農場、森林保護区、鉱山を破壊した。約150万人の人々が避難を余儀なくされ、85000ヘクタールの水田は消失するか廃棄された。避難民の家のほとんどは破壊されるか損壊させられた。女性と子どもの健康や福祉が被った損害は特に大きかった。学校の82%、病院やヘルスセンターの99.5%、全てのデイケアセンターが破壊された。水牛などの牛の約60%、豚の80%が殺されるか、略奪された[77]。私が1981年にランソンの国境の都市を訪問したのは、侵攻から約二年後であったが、その都市の経済的社会的生活をみると、一時しのぎの青空市場と学校で、人々は再生のために苦闘していた。

中国軍の侵入で苦しんだのは六省の人々だけではなかった。侵攻数ヶ月後にハノイを訪問したあるカナダ人女性は、その都市全体に塹壕が掘られているのを見て、こう書いた。

> 全測道に沿って新しい盛り土があることで、人々が中国の脅威を深刻なものと受け止めている様子と備えのために支払われているコストが分かる。…こんな旧防空壕を発掘する時間があるなら、人々は皆、家の建設やアメリカが残した爆弾のクレーターの除去、あるいは工場経営をすることだってできたはずなのに。…[78]

1981年にハノイの西にあるハ・ソン・ビンを訪問したとき、私は成人人口の75%が女性だと気づいた。男性たちは中国が「ベトナムに第二の教訓を教える」ために脅迫してきたら戦えるよう、動員されていた。私を客として迎えてくれた人々は、ハ・ソン・ビンは例外ではないと語った。ベトナムは依然として戦時の警戒下にあり、今後数年間、中国からの脅威に直面すると予想されている。その戦時警戒態勢の代償は莫大である。

76　著者によるレ・トゥーへのインタビュー（1981年8月29日ハノイ）

77　Murry Hiebert, 'Waiting in Ruins for the Next Installment', *Far Eastern Economic Review*, 15 June 1979, p. 28. 及び 'Remember these Crimes', *Viet Nam* (pictoral), No. 246, June 1979, p. 14. また 'Crimes of the Chinese Troops in Viet Nam', *Women of Viet Nam*, No. 3, 1979, p. 5.

78　Sara Rosner, 'Letter from a Friend in Viet Nam', *Viet Nam Newsletter*, No. 4, July-August 1979, p. 25.

彼らが支払う値段

何百年もの植民地支配の遺産、アメリカとの戦争の傷、それからポルポト及び中国との戦争は、厳しい洪水や経済管理の失敗と結びついて、ベトナムの人々に残酷な経済的困難をもたらした。しかし、これらの要素が全て同じ重さを持っていたわけではない。グエン・カク・ビエンは計算した。

1979年2月、中国軍の侵攻を受け国境地帯から避難する子どもや老人たち　Viet Nam News Agency

> 中国との戦争のためではありません。今まで、私たちは食糧は自給してきたのです。…メコンデルタの米は、メコンデルタの住民と、それほどには肥沃でない別の土地の住民が生きてゆくのに十分ありました。けれども私たちには輸送という問題があるのです。トラックは欠乏していますし、戦争の脅威によって、あらゆる輸送が防衛用に使われねばなりません。…戦闘機を一時間、空に飛ばすために用いる燃料の予算で、一家族を一年間養うことができたのです。[79]

だからベトナムの生活水準は依然として非常に低く、女性解放の強力なブレーキになっている。たいていの労働で、機械の助けがほとんど得られないため、背骨を痛めてしまう。ベトナム女性はあまりにも激しく働かねばならない。これが女性の潜在力を発展させるために必要な余暇を奪い、また女性の健康を危うくしている。例えば、法律は、私が訪ねた絹織物工場で働く女性たちに衛生施設を保証している。が、資源不足とは、当分女性が地面に穴を掘っただけの屋外便所を用いねばならないことを意味する。家庭の外で働いたり学んだりする女性には全員、無料で託児ができる権利が認められている。だが食糧不足のため、現存の託児センターにいる子ども全員が十分な栄養を得られるわけではない。保育労働者や子どもが自分で創ったものを除くと、おもちゃは希有の贅沢品である。かつて非識字だった女性たちが今では読むことができる。が、彼女たちの教育を続けるには、厳しい紙不足によって制限がある。女性連合会はすばらしい週刊紙を出版しているが、発行部数を縮小せねばならない。紙面に興味を抱く人が不足しているためではなく、紙の割り当てが厳しいからである。こうした事例は生活の隅々で増殖している。

これまでの四章で論じた諸問題、すなわち封建的家父長制やフランスの植民地主義やアメリカとの戦争・敵対の継続といったことは、女性の進歩を妨げているだけではなく、それらが作り出した女性の惨めさがベトナム女性運動の存在理由になった。それらはベトナムにおける女性の闘いの全ての面で諸条件を定義し、限界と優先順位を規定している。ベトナム女性が達成した進歩を評価したり比較したりしようとするとき、女性解放という理想のみならず、女性の抑圧（と抵抗）のこれらの根源を思い出すことが重要である。

【藤目ゆき　訳】

79　著者によるグエン・カク・ビエンへのインタヴュー（1981年9月1日ハノイ）

ベトナム戦の被害女性に会って

黄點順（ファン・ジョムスン）

1．はじめに

われわれ一行三名（前・挺対協代表の梨花女子大の尹貞玉教授とＹＴＶ放送局の次長さん一名）は去る３月15日から26日まで12日間ベトナムに行ってきた。

ベトナム踏査が可能だったのは尹貞玉先生が、2000年12月東京で日本軍性奴隷女性国際法廷が開かれた時、ベトナムのハノイから参加していたCGFED(Center for Gender, Family and Environment in Development)のレ・ティ・ニャム・トゥエット(Le Thi Nham Tuyet)教授とファム・キム・ゴック(Pham Kim Ngoc)総務に会い、ベトナム戦争中、韓国軍にレイプされた女性と韓国軍２世に会いたいという意志を話したとき、トゥエット教授がこれを受け入れてくれたからである。それで５年３ヶ月ぶりに今回の踏査が実現したのだ。

本格的な踏査に出る前に、私たち一行は３月16日～７日の２日間、ハノイで開かれた国際会議に公式招請を受けて参加した。その国際会議は、ベトナム戦で使用された枯葉剤（ダイオキシン）の犠牲者たちとその後遺症に関する科学的調査の報告会議であった。世界各国から155人の参加者が、発表者の多様な資料と凄惨な実態報告を受けて熱気を帯びた質問をした。自ら体を動かすこともできない被害当事者の女性の１人は、苦痛の中でも気丈で毅然とした姿を見せてくれたし、参加者の無事と幸福を祈りまでしてくれて粛然とした雰囲気を醸し出した。会議場には戦争兵器が人間を不幸のどん底に追いやった生々しい証拠が写真で展示されていた。それらは、顔の片方が伸びて目を塞ぎ頬が首に達していたり（写真：会議場に展示されていた中の一つ）、生まれつき目が一つしかなかったり、皮膚に動物のように毛が生えていたり、うつ伏せた状態から起き上がって座ることもできなかったりした。枯葉剤の後遺症は当事者だけでなく２世３世にまで転移しており、女性たちには二重三重の苦しみを抱えさせていた。

私たち一行が行ってきた地域は、韓国軍が駐屯していたベトナム中部地方の５つの省で、クアンナム省(Quang Nam Province)のタナンから出発してクアンガイ省(Quang Ngai Province)、ビンディン省(Binh Dinh Province), フーイエン省(Phu Yen Province)の村々を歩き、集団虐殺から生き残った男性３人と、レイプ被害女性12人と、韓国軍２世２人、そしてその子どもたちに会い、カインホア省(Khanh Hoa Province)のニャチャンから再びハノイへ戻ってきた。訪問期間中ずっとCGFEDのダウ女史(Ms. Dau)が同行して、日程を調整してくれ、省と県(District)の女性連盟から指導者の方と会員たちが直接いっしょに歩き、人民委員会(People's Committee)の委員長のところに案内してくれた。委員長と村の村長さんも私たちといっしょに直接、被害者たちに会いに行き、私たち一行は通訳と記者を除いても10人を超え、小型バス

でも足りずにオートバイに乗って一緒に走ったこともあった。

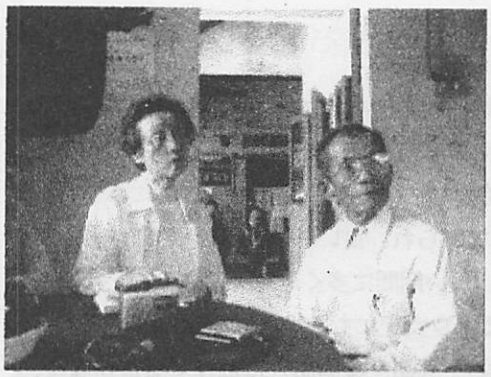
被害者の方々が都市から遠く離れた（遠くは80キロ以上）山あいの奥地に住む方々や、海を渡らねばならない村に住んでおられたりしたので、その地域の女性連盟の方々の案内なしには、到底、訪ねて行くことも会うことも出来なかっただろう。私たちが訪問した地域の委員会の皆さんと女性連盟の皆さんに本当にありがとうと申し上げる。さらに尹貞玉先生がずっと前から計画しておられ、長い間ハノイのCGFEDと連絡を取り合って彼らが日程を前もって準備してくださったおかげで、短い期間に多くの方々と会うことが出来た。ハノイCGFEDのトゥエット教授とキム・ノック総務、そしてダウ女史にもたいへん感謝している。そしてもう一つ、私たちの意思疎通が全面的に二重通訳（ベトナム語ー英語ー韓国語）に依存するほかなく、したがって正確さが多少落ちるかもしれないことを明らかにしておく。

2．民間人集団虐殺のあった村々

私たち一行が最初に訪問した場所は、クアンガイ省のビンホア村だった。まず人民委員会事務所を訪ね、私たちの訪問目的を知らせ一種の許可を得なくてはならないようだった。その人民委員長が最初は固い語調で民間人虐殺の状況を説明した。村長にあたる方も付け加えて説明をしてくださったし、慰霊塔を参拝するときには保安担当者も2人、オートバイに乗って現れた。個人的な訪問なのに何故、警察の方々まで同行するのかという質問に、通訳は私たちの安全のためだと答えてくれた。初めは監視されているような気もした。しばらくして私たちが昼食をしに入った食堂に1人の男性が入ってきて大きな声でひとしきり叫ぶように話をした。私たちのせいかという問いに皆ちがうと言ったけれども食堂には私たち以外にはいなかったのでどうやら私たちに向かってしている話らしかった。私たちを保護しようとして同行してくれていると思ったら有難い気持ちもした。

最初の訪問地として慰霊塔を訪問したのは道理に合ったことだった。韓国軍による村の民間人集団虐殺が行われた場所なので心が重かった。私たちは線香を上げて黙祷し犠牲者たちが合同埋葬されている円の周囲を回ってみた。（写真）円内に何百人がいっしょに埋葬されていると想像すると胸の中が苦しくなってきた。その中に自分の身内が入っていると考えて見よ。そこをどうして涙なしに通り過ぎることができようか？男たちは昼には山に隠れていたので、ほとんどが女性と老人・弱者である村人たちにキャンディーやお菓子を分けてやり、その次には集まれと言っておいて銃撃して殺し、刀で刺して殺し、妊産婦や幼児もみさかいなく殺したなんて、生き残った人々の恨（ハン）になって残っているのが当然だろう。その村に生存者が住んでいるので会うことにした。

ドアン・ギアさんは生存者5人のうちの1人で当時7ヶ月だったが、集団射殺のとき母親が両腕でかばって抱いていたので生き残ったという。祖母と母と姉が死に、兄は生存しているという。当時は大丈夫だったが、後に両目が失明して今はまったく前が見えなかった。どのようして生活しているのかという質問には、妻が農業をして自分は炊事と家事をしているといい、自分が働けず生活が苦しいといいながら、2人の子どもが学校に通っているが遠いのでオートバイがあればいいのにと言った。ドアン・ギアさんの妻は野良に働

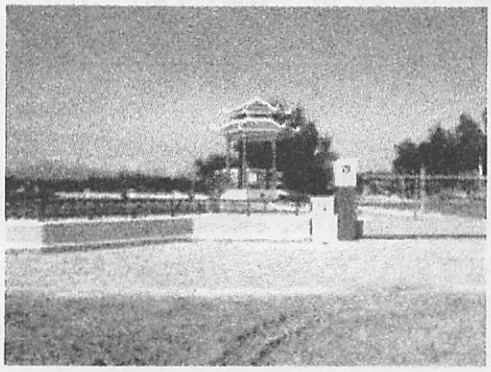


きに出ていて会えず、小学生の彼の息子と娘に会うことが出来た。広い野原を渡り、二番目の証言者の家を訪ねる道は車が入れず尹先生は女性連盟の方のオートバイの後ろに乗せてもらって走った。（写真）グエン・ニエムさんの家は花が美しく手入れされたきれいな家だった。最初の妻と息子と娘が死に、当時３ヶ月だった息子と自分だけが助かったという。当時35歳の教師であったといい、今も端正で知識人のような雰囲気が漂う。自分の気持ちを込めて直接作った詩を読んでくださった。再婚した妻と、こじんまりと平穏な生活をしておられるので、訪問した私たちの気持ちもドアンさんに会ったときよりは少しは軽かった。

２つ目の訪問先の村の人民委員長は、非常に官僚的な態度で私たちを迎えた。尹貞玉先生の謝罪の挨拶にも「韓国女性には過ちはないから謝罪する必要はない。過去は全部不問にしよう。今は仲良くしているのだからそういう話は持ち出さずに未来を開こう。韓国軍２世は外交的には (deplomatically) いない。」など官吏たちが一様に繰り返す固いお話だけをされた。しかし殺害されたという180人の名簿は下さった。（写真）

その委員長さんの案内で二番目の慰霊塔を訪ねた。その村の委員長は、もっと大きな慰霊塔が必要だとおっしゃったが、私たちが見たところでは慰霊塔の周囲の整理されていない虐殺現場の景観を整えること必要なようだった。そこで祖母といとこたちなど、親戚が犠牲になったという２人の女性の証言を聞いた。証言者たちは生活が苦しいと、経済的な困難を訴える反面、女性連盟の方々は健康センターや子どもセンター、女性センターのようなものが村に必要だとおっしゃった。

慰霊塔がある３番目の村として、タイヴィン村の委員会事務所を訪問した。1966年１月から３月にかけて合計15ヵ所で起こったもので、犠牲者は全部で1004人だという。ゴダンという村だけで380人が犠牲になったという。レイプを受けた人々のうち、２人の女性に会うことができるそうだ。まず慰霊塔を訪ねることにした。とてもきれいでよく整頓された慰霊塔だった。（写真）ところが慰霊塔に刻まれた彫刻の絵を見た瞬間、背筋が冷たくなってきた。どんな説明の言葉も必要なかった。勇敢な猛虎部隊の勇士たちがベトナム人を虐殺したという内容のモザイク画によって生々しく証言していた。貧しい経済事情にも関わらず、どれほど心に沁みたらこのように見事に作って置けただろうか？「過去は済んだことだから不問にして忘れてしまおう、未来を開こう。」という言葉は、機関長たちが一様にいうことだが、それは政策的にいう挨拶に過ぎないものだということを見逃してはならない。ベトナム人たちは不問に付して忘れてもいなかったし、また忘れようともしていなかった。ベトナム政府が「過去は不問にしよう」と主張しても、犠牲者たちは不問にできないのだ。彼らは毎年、追慕の日を決めて慰霊祭も行い、忘れないように努力していた。



慰霊塔の参拝のあと、証言者に会いに大きな川を渡った。

牛たちがのんびりと草を食んでおり、川辺の景色はうるわしかった。竹が生い茂り、木橋がかかった村は、眺めただけでも心が安らかになった。戦争が起これば、善良だった人々も急変し、悪辣に人々を殺すことができるが、これはもともとの人間の本性に悪魔性が内在しているからなのだろう。生きてきた中で、そんな状況に置かれなかっただけで、同じ状態に追い込まれれば私もそうするのではないだろうか？私の中の悪魔性は、どのように統制することができるのか？私が安穏に生きてこられたのは、私の自力ではなく、私の周囲の皆さんの恩恵という保護装置があったからのようだ。駐ベトナム韓国軍初代司令官（1965－69）を務めたチェミョンシン氏は「人間が不安定で感情的な動物だということを念頭に置いてこそ、戦争の本質を理解できる」とハンギョレ新聞とのインタビューで語った。さらにベトナム戦ではベトコンと民間人を区別できなかったという状況論理も展開する人たちも多い。そのような状況論理は、光州虐殺で「暴徒」と市民を区別できなかったという論理につながる。その人たちが、特に女性と子どもが仮にベトコンだったとしても、私たちが殺す理由のなかった戦争であった。そして不幸なことは、不安定で感情的な動物によって、弱者である女性と子どもたちの苦しみがベトナム戦においてのみならず、今もずっと繰り返されているということだ。なぜ人間は歴史から学ぶことができず過ちを繰り返すものなのか？

コン川を渡って到着した村では、脱穀の真っ最中であった。ベトナムは三毛作をするので、同じ平野でも一方は田植えをし、一方は脱穀をすることもある。グエン・タン・ラウさんは1966年民間人虐殺の当時、16歳であった。それで比較的はっきりとした記憶で証言してくれた。（写真）午前6－7時ごろから人々を集めておいて、銃殺したという。母親が亡くなり、銃で撃たれた姉は夜11時まで苦しんで死んだと泣きながら証言をした。彼は、「この話は長い間することができなかった。しかし今はする。韓国軍の1人1人と韓国のすべての人がこの話を知らねばならないと思うからだ」と語った。これ以上、辛くて話せないと泣きながらいう話は聞いている人も同様に苦しめた。20人を超える市場にいた女性たちを集めておいて服を脱がせ半分くらいかがんだ姿勢を取らせて周りを回りながら見物してから銃で撃ったという場面では言うべき言葉がなかった。

ビンディン省の女性同盟事務所に行って、レ・ティ・トゥエット・スオン会長の説明を聞いた。「経済的に貧しい。生活を改善できるように助けが必要だ」という趣旨の話をなさった。ふたたびニョンフォン地域人民委員会の事務所に行って、レ・ティ・タイン・フオン委員長の案内の言葉を聞いた。この地域では多くの子どもと女性たちが生き残ったが、すべて引越ししたりして現在は3人いるので会わせてあげようとおっしゃった。そしてみんな一緒に慰霊塔を訪ねた。（写真）1896年生まれから1963年生まれまでの23人が1966年1月6日に虐殺された事実を、名前まですべて彫り込んで、文字を知らない人々も皆が分かるように彫刻でその内容を刻んであった。彼らは忘れないようにしようと毎年陰暦で12月17日に法事を行っているという。私たちが訪問したすべての慰霊塔には南朝鮮軍人たちが殺したと刻まれてあった。この耐え難い事実をいかにすべきだろうか？慰霊塔の下で会った町内の子どもたち2人がどこかへ忙しく駆けていったと思ったら、カボチャの花

を二輪摘んできてくれた。花のプレゼントまでもらったので心の中はいっそう重苦しくなった。

日が暮れて四方が真っ暗になったが、私たちの日程はずっと続いている。（写真）私たちが行ったホアヒエップナム村には、何も書かれておらずビア・カム・トゥとだけ書かれた横4メートル、縦10メートルの非常に大きな慰霊塔が建てられていた。「苦痛な」(painful) という意味だという。韓国軍が村の住民をすべて埋めて殺し、家にも火をつけたので地べただけが残ったところで、「砂の村」(Sand Village) と呼ばれたという。その村で生き残った人がいないので死んだ人々を知ることもできないという。その韓国部隊は白馬部隊だったそうだ。追悼の日は陰暦の12月26日だという。ダオ・カック・ヴォン (Dao Khac Vong) 村長が付属の建物を開き私たちを案内して、手ずから伝統茶まで入れてくださり、説明をしてくださった。

村民集団虐殺があった村、2ヶ所に韓国が建てた学校があるというので、その学校を訪問した。（写真）私たちがビン・ホア学校を訪問した日は、ちょうどその日学校で何かのお祭りのような行事が開かれており、たくさんの学生たちにも会うことが出来た。2000年に建てられたという学校はずっと補修をしていないので、納屋のような姿だった。職員室に入って校長先生から学校の現況の説明を聞いた。学生数は585人だが、教室が7つだけなので1つは職員室として使い、残りの6つで3部制授業をするといい、教育器材や資材は教室ごとに見回ってみたがほとんどなかったし、机と椅子も古いものばかりだった。子どもたちの白く澄んだ顔とはまったく釣り合わない教育環境だった。

学校を見回ったあとには、校長先生をはじめとした一行１２人と共に昼食をとった。食事をしながら尹貞玉先生は次のようにおっしゃった。

私たちの踏査旅行の要旨なのでそのまま書き写す。「私はここにいる２人と共に皆さんに謝罪しに来ました。私たちは南の韓国から来ました。韓国軍がここに来て犯した惨たらしい仕業について心から謝罪します。特に罪のない女性と子どもたちに加えたレイプと殺傷について謝罪します。私たちはここに個人の資格で来ましたが、韓国にいる多くの人々が私たちといっしょに一心に謝罪申し上げるでしょう。私はこの地球のあちこちを見てきました。その中でもベトナムは本当に美しい国です。低めの山はその線が柔らかく、田んぼは収穫しているところがあるかと思えば、黄色く実りつつあり、青く育っているところもあります。川が流れ、湖が澄んで、果物が熟していく本当に美しい国です。しかし私にはこのすべてのものより、皆さんがいちばん美しく思えます。皆さんは韓国と同じで南と北に分かれていました。その分断を皆さんの力で統一しました。フランスを追い出し、米国との戦争にも勝ちました。真の美しさは自分を守る力から発すると思います。自分を守る力なしには自分の美しさをあらわし自分を発展させることができないでしょう。皆さんのこのような美しさに対して、私たちは本当に尊敬を表します。皆さんは本当に美しいです。」

私たちは、たとえ言葉は通じなかったとしても和気藹々とした雰囲気で食事をした。１２人がベトナムの伝統料理とお酒まで存分に飲み食いしても、７６８０００ドン（約６０ドル）しかかからないところを見ると、ここの物価が安いことを知ることができた。私たちの若干の援助でもここの学校の器材・資材や教室増築など多くの役に立てるだろうという気がした。善良な隣家のおじさんのような顔をしたチャン・クアン・ビン (Tran Quang Binh) 校長先生から、運動場の広さと教室の大きさなども参考までに書きとってきた。二番目に訪問したニョンフォン小学校が比較的きれいに運営されていたのに比べて、ビン・ホア学校が一層みすぼらしかったのは、この村がよりいっそう貧しい村だからでもあるようだ。

３．レイプ被害女性たち

被害女性として初めに会った証人は、７４歳のグエン・ティ・ビックおばあさんだった。すっかり擦り切れた服を着た、とても貧しげに見えるおばあさんだが、若かったときはかなり美しい姿だっただろう。当時の夫はベトコンであった。韓国軍が来て首に刀を突きつけて脅し、子どもを抱いていたのに子どもを奪って投げ、服を脱がせたという。レイプされたのかという質問には「子どもを抱いていたので……ほとんどされそうになった」とだけおっしゃった。これ以上はお話しされないので、何度も聞いて見ることもできなかった。私たち一行は何人もいたし、男たちもいたからでもあった。着ておられた服があまりにボロボロで家の中も非常にみすぼらしくて気が重かった。ずっと、申し訳なかったという私たちに、おばあさんはむしろ訪ねてきてくれてありがとうと言った。

韓国軍にレイプされた女性たちは男たちが結婚しようとしないので、ちゃんとした結婚をすることができず、それで１人で暮らしていたり、生活しながら父を知らない子どもたちを持った場合も多かった。グエン・ティ・ボンおばあさんは、１９６６年当時、１８歳で、母親といっしょにいる間にレイプを受けたという。夫も無く、子どもも無く、現在まで１人で生きてきたとおっしゃった。1980年、父を明かさずに子どもを１人産んだのだが、頭が異常な子どもで、現在もありとあらゆる仕事をして生活を立てて行っているとおっしゃった。体もあちこち痛く、視力もよくないとおっしゃった。グエン・ティ・バイおばあさんもそんなケースであった。彼女も29歳のときに、３－４人の韓国軍にやられたという。結婚できず１人で暮らしている途中で父の無い娘を産んだのだが、その娘が稼いで生活しているとおっしゃった。15歳になった７学年の孫がいるが学費と生活費が充分でないとおっしゃった。耳もよく聞こえず、目に問題があるというのだが、白内障の問題もあるようだった。40年前のことだから思い出すのが悲しく恥ずかしいと言われる言葉に私たちが恥ずかしかった。

チン・ティ・ナムおばあさんは慰霊塔の彫像の中に刻まれた生き残った母子のなかの母親であった。７人の家族のうち、姑と２人の義姉（妹）、そして３人の子どものうち、息子と娘が犠牲になったという。彼女は両側で息子と娘が火に焼かれるのをただ見守らねばならなかった。動けば自分はもちろん、胸に抱いている息子も死ぬだろうから、身じろぎもできなかったという。大きな声で泣きながらずっと話をされるのに、通訳に聞いて見ると同じ話の繰り返しだと言うだけなのでもどかしかった。当時、生き残った息子が１歳半で、そのほかに息子２人をさらにもうけて夫も生存しているという。私たちが出会った証言者のうちそれでもいちばん暮らし向きがましに見える方だが、もっとも激烈に話をされるのをみれば、そばで子どもが死んでいくのを見た人の受けた悲しみがいちばん大きいからだろう。泣き続けながら話をなさるので、聞いている私たちも脂汗が出た。

不幸は重なってやってくるという言葉がある。レイプされたおばあさんが障害のある家族まで扶養しながら生きねばならないチャン・ティ・ルン（80歳）おばあさんの場合は、あまりにも悲惨であった。彼女は当時、息子1人と娘2人がいて、食糧を探しに出かけた途中に3人の韓国軍に会い、やられたという。夫のブイ・ド（83歳）さんは、米軍の刑務所で3年3ヶ月間いて解放されたが現在は両目が失明状態で、後に産んだ娘も知的障害児で家族3人が非常に貧しく暮らしていた。政府から戦争補償金が出るが病院費がなく病院に行けず、赤十字社の助けで暮らしているとおっしゃった。

「この村はぜんぶがベトコンだったのですよ。しかし私は違いました。」当時ベトコンだという事実は誇らしい事柄になるのに、グエン・ティ・フォイおばあさんはこのように言った。彼女は1967年3月に野良に出ていて韓国軍人たちに出くわしたという。その後、兄と弟妹たちは結婚後、分家して、母親と2人で暮らしていたのだが、48歳のとき母親が亡くなり今は1人で住んでいるという。現在64歳で夫は無く1人で野良仕事をして生きてきた。今は土地はあって、牛が4匹いる。生きていくのに充分かという質問に「自分で満足だと思おうと努力している」と答えた。野良から帰ってきたばかりで土の付いたままのそのおばあさんの手と足に、このかんの労働の痕跡がそのまま染み付いていた。

1人でわびしい生活を生き抜くおばあさんたちがほとんどだったが、家族たちと団欒して暮らしておられて、それだけでも少し慰めになる方々もいた。グエン・ティ・トゥイおばあさんは次のように証言なさった。「1969年当時、16歳だったとき、1人に一回やられた。父さんが村の人々と駆けつけて彼を殺そうとしたが村の人たちが止めた。部隊の上官に会いに行ったら彼が申し訳ないといい、食事に招待してくれたが断った。病院に連れて行かれ、病院で6ヶ月間過ごし、1年後に正常になった。健康もよくなくそのときから今まで具合悪いのだが病院代がない。現在51歳で両親が生存しており、結婚して夫もいて、2人の息子もいる。」私たちが訪問した女性被害者のうち最も裕福に見え、蒸しジャガイモ (San Luoc) も出していただいた。お父さんに当たる方は黒い色のサングラスをかけて傍らに座り、分かりやすく説明してくださったりもした。

よくみんなが「私は貧しい」と言うとき、その貧しさのレベルはどのくらいだろうか？グエン・ティ・ハイン (Nguyen Thi Hanh) おばあさんの家を見れば、そんな言葉は絶対に言えないだろう。彼女は16歳のときである1966年にレイプされた。野原に連れて行かれ一人は見張りをして4－5人にやられた。20日のあいだ閉じ込められていた。壁に押し付けて足で蹴り、指を刀で刺した。箱に入れた食べ物をくれたが、毒が入っているかと思って食べずに飢えていた。その後、トゥイホア刑務所で1年2ヶ月いた。刑務所を出て家に帰ったら父が亡くなった。結婚はできず、父を知らない子どもが3人（息子2人、娘1人）いる。自分の家が粗末で恥ずかしいと隣の息子の家でインタビューをした。（写真）後で知って行ってみた家は倒れかけの穴蔵のようで、人が住む家だと思えないほどみすぼらしかった。台所も到底、台所とはいえない状態だった。土間に器がいくつかあるだけで、屋根も雨を防げないほどに粗末に見えた。

死地から1人生きて戻った人々の話を聞いていると現実でない遠い漠然とした話を聞いているように思われることもある。集団虐殺で銃を撃つ前に先に倒れて助かったとか、油をかけて火を付ける時、一番下になっていて助かったとか、母親が腕で抱いてかばったので赤ん坊だけ助かったという、そして失神していて殺されることを免れたケースである。1966年、当

時26歳で夫と子どもがおり、5－7人の女性たちが韓国軍4人にいっしょに捕まったのだが、自分は気を失って倒れ、気がつくと一緒に捕まった女たちはすべて刀で切られ死んでおり、死んだ女たちは当時20－26歳だったと証言したおばあさんもいらっしゃった。当時、韓国軍の間ではレイプ後には必ず殺せという話があったという。

証言者のおばあさんたちは、最初のおばあさんと違い大きな声で経験した内容を比較的詳しく話してくださる場合がほとんどだった。当時、既婚だった方はお2人だがその方々は子どもたちもいるし、夫が後に死亡した場合は再婚もなさった。子どもたちも傍に住み、子どもが10人いる方もいた。家族も行き来する平凡な生活をしておられたが、ほとんどすべての方が経済的な困難を訴えられた。ほとんどが老衰して（お一人は80歳）あちこち具合が悪いとおっしゃり、みなさん病院で治療を受けられたらうれしいとおっしゃった。当時結婚して夫がいたとか、あんなことを経験したあと結婚した方々は暮らし向きが少しはよく見えた。しかしちゃんとした結婚をできず、父を知らない子どもたちだけを産んだり、一生一人で生きてこられた方々の生活はずっと貧しく見えた。

被害女性たちに会いに行くあいだ、女性連盟の方々は一日中、夜遅い時間にもずっと私たちと一緒に歩いた。彼女らの家族の完全な理解があるようだった。

夕食は、ほとんど女性連盟側のみなさんと一緒にした。クアンガイ女性連盟会長はそこの議会の女性議長でもあった。そこの女性たちは家庭や職場、そして職場の地位面で完全な男女平等を享受しているようだった。委員長や他の機関長たちとの対話でも気兼ねせず、対話や態度だけでは地位の高低を見分けることができなかった。もう一つ、特異だった点は私たちの運転手も同じ場所に座り、私たちと同じように対話に参加していることだった。韓国では車を運転してきた運転手は食事も他のテーブルでして、対話に入り込んでもこない。食べ物をもっと注文したりもして、私たちよりももっと口数も多いのが最初は少し変だったが、後になるとそうするほうがより気が楽だった。大部分の女性連盟の方々が食事の時にスプーンの上におかずも載せてくれて、ひっきりなしにもっと食べろと勧める姿は、田舎のおばあさんの家に行った時のように情愛深く感じられた。

4．韓国軍2世たち

トゥイホア市で、フーイエン省女性連盟議長から被害者に対する説明を聞いた。1966、1967、1968年度に韓国軍のレイプが多くあり、犠牲者たちはほとんど死んだという。生存女性3人と2世たち2人に会うというので心がいたたまれなかった。ドンホア県のホアビン村とホアヒエップナム村、そしてホアスアンドン村を訪問することにした。ベトナムで一番長いダラン橋でマー川を渡った。

グエン・ティ・フオンさんの家はきれいに掃除されており、庭には花も植えられていた。私たちは、初めはその人が韓国軍2世の母親だとは知らずインタビューを始めた。（写真）1969年9月－10月の間に経験したことである。当時19歳だったが道で出会った韓国軍3人が高い給料をくれるというので付いて行き、彼らのキャンプに連れて行きワインのような飲み物をくれたという。後で正気を取り戻しレイプされたと分かった。妊娠し産んで1人で育てたという。3人のうち1人はキムと呼ばれていて、それで娘の名前もキムというそうだ。父親の分からない子どもがいれば、男たちは結婚しようとせず今まで1人で暮らしたと淡々と話された。娘のグエン・ティ・キムは証言の途中で感情が激しく突き上げ泣きながら話を続けた。「学校で誰も隣の席に座ろうとせず、家が貧しくて7年生で学校を止めホーチミン市にお金を稼ぎにいった。韓

国人にあってうれしかったが、韓国語が分からないのでもどかしかった。お父さんに会いたい。お父さんを探して欲しかったが家族を苦しめるかと思って我慢した。おばあさんと叔母さんに会ったみたいだ。」と言い、私たちをつかんで泣くので、私たちも離散家族に会ったように抱いて泣いた。母の隣の家に住んでいて、夫は農夫で娘２人と息子１人が、みな勉強も良くできるという。南北離散家族が別れようとしないように、彼らは車の窓を開けて手を握った。私たちが乗った車が出発しようとするや母は両手に顔を埋めて、わっと泣き出した。あの人たちを悲しませているのは誰なのか？

トゥイホアから 80 キロ離れたところに暮らす２世に会いに行った。グエン・ヴァン・ルオン (Nguyen Van Luong,37 歳) の母の名はレ・ヴァン・ゾー (Le Van Ro) であり、2004 年に死亡した。(写真)母方の叔父であるグエン・ティ・ラーさんの証言は次のとおりだ。「1969 年８－９月にレイプされた。正確な日付は分からず、雨季が始まる頃だった。兄弟姉妹が皆ベトコンだった。『スアンラック』というところで韓国軍が作戦遂行中だったが、彼女は知らなかった。捕まってレイプされた後、カチョ (cachot) という小さな隅っこの部屋のようなところで閉じ込められていて刑務所に移された。２年間、刑務所にいる間に 1970 年に息子を産んだ。監獄にいる時、他の人が子どもを連れて行って育てようとしたが断り自分で育てた。父は白馬部隊の大尉 (captain) だった。当時、ベトナム語通訳者がいたのだが、バイ・アイン (Bay Anh) さんだった。」２世は紹介なしに会っても同じ韓国人であるとただちに分かる姿だった。彼は生活が苦しくて７年生で学業を中断して農夫になった。1977 年に結婚して娘２人ができ、上の子が小学校１年生だ。今は海に出て海老を獲って暮らし生活が少し良くなった。いちばん必要なものは何かという問いには「お父さんに会いたい」という言葉だけを繰り返した。「しかし戦争中に亡くなったかも知れない」と言い両目に涙を浮かべるのだが、これは見る者の心を痛ませた。私たちは同じ血筋だという言葉には、自身の腕の血管を指で掻いた。彼らが育つなかで経験しただろう苦難と差別と冷遇を考えると辛くて、見るだけでも気の毒で申し訳なかった。

５．おわりに

戦争は多くの被害者たちを残すが、時節が困難な時ほど、特に女性と子どもの犠牲がより大きいようだ。民間人虐殺で犠牲になった人たちも大部分は女性と老人・弱者たちであり、レイプによるトラウマー永久的な精神障害を残す衝撃ーも女性だけが生涯経験する後遺症だ。わが国では日本軍挺身隊に連行され強制的にレイプされたことが個人的な羞恥として隠さねばならず秘め隠さねばならない出来事と考えられてきたために、挺身隊ハルモニたちには何倍も募る苦痛が伴った。

日帝時代の従軍慰安婦は、日本の長期間の計画された犯罪だったが、ベトナム戦争中の韓国軍レイプ問題は偶発的な犯罪だったので２世問題が発生した。そして社会主義国家として統一されるなかで国交が断絶さ

れ、父母を知らず育った2世たちが大部分で、自分の子どもが居るとも知らないとか、知っていても現在の家庭が壊れるのを望まず無視しようとする父親たちもまた、いるのであろう。しかし今は彼らを認め、韓国人として自らを誇りに思う感情を感じさせて上げねばならない。政府が立ち上がらなければ、団体でも立ち上がって2世たちのアイデンティティを認め、彼らの恨を解いてあげねばならない。ライ (lai) は混血を意味する軽蔑調のベトナム語である。だから私たちはライ・タイハンの代わりに2世 (second generation) という用語で書いたこともあった。公式の資料がなく確実ではないが、韓国軍2世はざっと見積もって少なくとも1500人から、多ければ1万人までだと推算されたこともある。母1人の手で育てられた彼らは、たいてい貧困のために9年の義務教育以上の教育を受けることが不可能であったし、学歴が不足して就職もまともにできず、そうして貧困の悪循環が繰り返されている。「敵の子どもたち」と思われ、仲間はずれにされたり、隠れて暮らさねばならなかった彼らに手を差しのべねばならない。彼らだけではなく彼らの子どもたちまで、きちんとした教育を受けて育つことができるように最後まで支援しなくてはならない。彼ら「悲しい血筋」たちは私たちが支援して責任を取るべき対象であるのだ。

帰国するとすぐに私たちは彼らを支援するための団体ー韓国ベトナム市民連帯 (Korea-Vietnam Friends) を作った。前青龍部隊旅団作戦補佐官だったイソンホ氏が「ベトナム戦争の特殊性と民間人被害の真相」で名づけた「一部不純勢力」であるわけだ。韓国ーベトナム市民連帯（ホームページ：www.koreavietnam.org) は韓国軍が参戦したベトナム戦争で被害を受けた犠牲者たち、特に韓国軍にレイプされた女性たちと韓国軍2世たちとその子どもたちを直接後援し、韓国で建ててあげた学校を支援し、ひいては大韓民国とベトナム両国の紐帯を強化することで、平和を構築することをその目的にする。私たちがベトナム人たちに補償するときに最高に適切な補償はその国の教育施設をちゃんと備えてあげることではないかと思う。個人レイプ被害者を経済的に助け、その地の女性たちのための職業教育支援やセンターの建物建設も重要だが、そこの子どもたちのための支援がいちばん優先されねばならないだろう。

ベトナムの次の世代の主人公になる子どもたちの教育のために後援することが未来の平和のために投資することであるだろう。

私たちは日帝植民地時代に日本が私たちに行った無慈悲な殺戮と挺身隊問題のような反人倫的な振る舞いに対して「謝罪せよ、補償せよ」と要求している。しかし日本は妄言と歴史歪曲と靖国神社参拝で応えている。今までベトナム人たちは私たちに何も要求していないが、私たちはベトナム戦争で私たちがベトナム人たちに負わせた被害を忘れてはならない。私たちは韓国軍が行った民間人虐殺とレイプに対して謝罪し賠償せねばならない。その痕跡について無関心で無視したくてこっそり通り過ぎようとしてはいけない。彼らは忘れていなかったし、忘れようとしてもいないという事実を直視しなければならない。

私たちの恥ずかしい過去を謝罪し賠償し、彼らの古い深い傷を治癒して、心から染み出す和解を実現できるとき、真の隣人になることができるし、平和がやってくるだろう。

【永谷ゆき子　訳】

戦争の女性化ーベトナム戦争再考

片山須美子

はじめに
Ⅰ バーダムダン運動ー戦争の女性化の始まり
Ⅱ 農業の女性化
Ⅲ ホーチミンルートの建設ー青年運動の女性化
Ⅳ テト攻勢の失敗と社会の女性化
Ⅴ 戦争終結ー女性化の終焉
おわりに

はじめに

ベトナム戦争[1]当時、多くの女性の姿が、戦争の中で目に見えるものとしてあった。子どもたちを抱きかかえたまま川を泳いで渡る女性や、ナパーム弾を浴びて全裸で走る少女の姿は、ベトナム戦争を世界にもっとも強く印象づけた写真に数えられる[2]。戦争には避けられない女性の受難の姿とともに、ベトナム戦争では、戦争に参加した女性たちが注目を集めた。その代表は、南ベトナム臨時革命政府外相としてパリ会談に臨んだ、グエン・ティ・ビンであろう。その絵姿は、米国の反戦運動の行進の中で高く掲げられた [Bergman 1975: 161]。南ベトナム解放軍副司令官グエン・ティ・ディンの持つその肩書きは、人々を驚愕させるのに十分であった。撃墜された米機のパイロットに銃をつきつける小柄な女性民兵に象徴されるような、北ベトナム（ベトナム民主共和国）で戦闘と生産に励む、名も知れぬ多くの女性たちの姿もあった。それらは北ベトナムと南部解放民族戦線の宣伝や、米国の反戦運動の中で育ってきた女性解放運動の担い手たちによって、当時の世界に広まった[3]。

しかし、膨大な蓄積のあるベトナム戦争研究において、女性の参加を論じたものは少ない。民衆と戦場という視点に女性を大幅に取り入れた吉澤南の研究、女性解放やジェンダー問題という視角で、ベトナム戦争やその後のベトナム社会の変化を追い続けている米国のワーナーの研究が、数少ない例である[4]。一方ベト

1　いわゆるベトナム戦争について、ベトナムでは抗米戦争と呼ぶが、本稿では人口に膾炙したベトナム戦争とした。その時期については論者によって異なるが、本稿では米軍が直接介入した 1965 年から 1973 年までを中心にして、その前後も含めた時期をさす。

2　銃弾に追われ、急流を渡るベトナム人母子の姿と表情を捕えた、澤田教一の写真「安全への逃避」は、1966 年のピュリツァー賞ニュース写真部門を始めとして、数々の賞を受賞した。1972 年 6 月 8 日米軍の誤爆によりナパーム弾を浴び、燃える服を脱ぎ捨てて、全裸で走る少女を撮った AP 通信の写真は、世界の新聞の第 1 面を飾ったという。チョン [2001] は少女のその後を追い、南ベトナムの一般の農民にとっての戦争と戦後を描く。

3　米国の女性研究者ターナーは、ナパーム弾を浴びて走る少女の写真と、米軍パイロットに銃をつきつける女性民兵の写真とが、自分たちの罪と失敗を表わすものとして記憶に残ったとしている [Turner 1998: 6]。

4　[吉澤 1999; Werner 1981, 1993, 2002]。佐伯 [1996] はベトナム戦争中のバーダムダン運動（後述）を研究対象とし、ベ

ナムの女性、あるいは女性史をテーマとした研究は、それ自体多くはないが、代表的なものとして、ベトナム戦争終結前後に完成した、ベトナムのレ・ティ・ニャム・トゥエットと米国のバーグマンの研究が挙げられる。そこでは女性と戦争との関わりは大きな比重を占めるが、戦争の側から女性の参加を論じたとはいえない[5]。1990年代、冷戦終結後の世界において戦争の性格が変化する中で、従来の戦争を振り返る研究がさかんになった。また湾岸戦争以来の米軍での、大量の女性兵士の出現を契機として、女性の戦争参加というテーマが論じられ、米国の女性研究者の中から、いつの間にか忘れ去られていた、ベトナム戦争の中の戦闘するベトナム女性を掘り起こす研究が出てきている[6]。女性の参加によって、ベトナム戦争の勝敗が決したという論調さえ見られる [Turner 1998: 19]。

本稿ではベトナム戦争への女性の参加に、「女性化」という概念を取り入れ、「戦争の女性化」として論じることを試みる。「女性化 (feminization)」は、「労働力の女性化」「雇用の女性化」「移民の女性化」「貧困の女性化」など、1960年代から70年代以降の全世界的な社会の変容を表わす有効な概念として登場した[7]。一般に女性化とは、女性の量的拡大が質的な変化を引き起こす流動的な状況をさす。一方「雇用形態の女性化」に見られるように、元来女性に特有なものとされてきたことが男性にも適用され、パラダイムの変換を伴う社会変化が生まれつつあることもさす[8]。またベトナム史研究においては、フエ・タム・ホー・タイが1920年代後半の革命運動において、女性の参加が増加し、女性問題をめぐって議論が沸騰したことを、「革命の女性化」として分析し [Tai 1992: 198-213]、前述のワーナーは、ベトナム戦争時に女性が農業の主な担い手になったことを「農業の女性化」、そしてドイモイ後の農業の状況を「農業の再女性化」と表現している[9]。本稿は、ベトナム史研究における「女性化」概念による分析を継承するとともに、1960年代以降の世界的な女性化の現象をベトナム戦争が共有していたととらえ、女性連合会や労働党の機関紙や運動資料に見る北ベトナムの事例を中心に、女性の戦争への大量の参加や、女性的な方法の広がりが、戦争状況に質的変化を引き起こした過程を論じる。

以下のⅠでは、ベトナム戦争における戦争の女性化の始まりとして、1965年のベトナム戦争の本格化とともに始まった、北部の女性大衆運動であるバーダムダン運動を取り上げる。次にⅡにおいて、バーダムダン運動の大きな部分として、女性たちが農業を全面的に担った「農業の女性化」を論じる。Ⅲでは、若い未婚の女性たちが、青年運動の担い手となって、ホーチミンルートの建設を始めとする軍事に大きな役割を果たしたことを明らかにする。Ⅳでは、テト攻勢失敗後の社会全体の女性化という現象を取り上げ、それによって戦争の退潮局面を乗り越えたのではないかということを論じるとともに、南部における女性化についても

トナム女性連合会の運動資料を駆使して論じている。

5 Le[1975]、Bergman[1975] のほか、Le[1975] の内容に沿った英文の概説である Mai, Le[1978]、ベトナム女性連合会の立場で、女性運動史を統一後にまとめた Nguyen[1980-81]、統一後のベトナム女性の地位の低下までを扱った Eisen[1984] がある。

6 Taylor[1999] は南ベトナムの解放戦線の女性兵士について、Turner[1998] は北ベトナムの女性の戦争参加について、いずれも聞き取りによるオーラルヒストリーの叙述を試みている。 Pettus[2003] はベトナムの国民統治における女性の扱いの重要性を分析する中で、戦時の女性のイメージが巧みに利用されていることを明らかにする。

7 1986年ハーバード大学で開かれた、先進7か国の女性労働の現状に関する国際会議において、「労働力の女性化」「雇用の女性化」というテーマが取り上げられたのが「女性化」概念による議論の始まりではないかと思われる [竹中 1994: 6]。経済のグローバル化のもたらした、発展途上国における労働力の女性化は、「移民の女性化」などをも伴った新たな展開を見せている [伊豫谷 2001]。また世界の絶対的貧困人口の7割を女性が占めるという「貧困の女性化」は、1995年の北京女性会議で重要事項として取り上げられた。

8 フランツ・アルトは、元来女性が育児休業や生理休暇、パートタイムなどで馴れていた柔軟な就労構造を、男女ともに自由にとれる雇用形態にすることが、高い失業率を解消し、家族の再生を促すとしている [アルト 2003: 34,47]。いいかえれば、パートタイム労働を、正規の労働としての権利を確立した短時間労働として、男女に平等に開かれた、労働の選択肢の一つとして位置づけるという主張である [久場 1994: 319]。

9 ワーナーは1993年には女性化という言葉は使わず、戦時の農業経済を「女性経済 (a woman's economy) といえるほどである」[Werner 1993: 92] と表現する。2002年の著作においてドイモイ後の農業の再女性化 (refeminization of agriculture) を論じる際に、1993年の著作では、戦時の農業の女性化を述べたとしている [Werner 2002: 36]。

言及する。最後のVにおいて、戦争が軍事的に終結していくとともに、女性化が収束していった過程を検証する。

I バーダムダン運動ー戦争の女性化の始まり

1965年2月7日、米軍機が17度線北方のヴィンリン地区を空爆して北爆が開始され、3月8日には米軍海兵隊がダナンに上陸して、米軍のベトナムへの直接介入が始まった。3月19日、女性大衆組織であるベトナム女性連合会の中央委員会は、3号決議によりバーダムニエム（ba dam nhiem 3つの担任）運動を発動した。これがその後ベトナム戦争終結まで、北部のほとんどすべての女性を巻きこんだバーダムダン運動の始まりであった。ここでは、運動発動までのベトナム女性連合会の歴史を概観した上で、バーダムニエム運動がバーダムダン運動へと改称されたいきさつを検討し、その後の運動の多様な展開と、労働党と政府がそれに対応して、3つの決議と呼ばれる、女性の登用や昇進をはかった女性政策を出すにいたるまでを論じる。

ベトナム女性連合会は、現在ベトナムにおいて公称1100万人の会員を擁する、世界でも最大の女性組織である。フランス植民地下の1930年に、インドシナ共産党[10]の女性大衆組織として発足した女性協会がその前身であり、その後、民主女性会、解放女性会、反帝女性会など、名称と組織を変遷しながら、一貫して女性解放と男女平等を掲げた運動を継続してきたとされている。1941年にベトミン戦線下で、救国女性団として多くの女性組織を糾合したころから、多数の女性を結集する大衆組織としての実体を持ちはじめたようである。その救国女性団を中核として、独立後の1946年10月20日、ベトナム女性連合会が設立された。1950年4月には抗仏戦争のさなかに第1回全国大会が北部で開催され、「前線に行く男性のため後方で生産を行ない、積極的に軍隊を支援し、前線に奉仕する」というスローガンが謳われた。1951年には会員は300万人に達したといわれる [Nguyen 1980: 136]。1954年ジュネーブ協定による南北分断後は、女性連合会はハノイに中央本部を置き、南北の統一を待った。1956年5月に開催された第2回全国大会は、北部での土地改革への女性の支援と、社会的生産への女性の参加を主張している。

しかし統一は実現されず、やがて南部で武装解放闘争が開始され、1961年3月8日南部解放女性連合会がベトナム南部解放戦線の一翼として結成されて、女性連合会は組織的にも運動的にも二分された。北部のベトナム女性連合会は、名称はそのままで、南北女性の一体性を表象しながらも、南部を支援しつつ北部の社会主義建設に女性を参加させるという、北部独自の女性組織としての道を歩み始めた。そのころすでに、北部だけで400万人の会員を擁する一大組織となっていた [Le 1975: 246, 271]。1961年の女性連合会第3回大会では、北部の第一次五か年計画の超過達成と期限前達成に貢献するという任務を掲げるとともに、「1. 団結して生産・節約をよくおこなう。2. 政策をよく実行する。3. 管理によく参加する。4. 政治・文化・技術をよく学習する。5. 家庭を建設し、子どもをよく育てる」という内容の、ナムトット（nam tot 5つのよく）競争運動を発動した。運動は、政府の政策をよく実行し、社会主義建設と管理を下から支えるものとして、労働党に歓迎されたようである。その最中にアメリカが北部を攻撃し始め、女性連合会は運動の内容を大きく変えざるをえなかった。

バーダムニエム運動の内容は「1. 戦争に行く男性に代わって生産と活動を担任する。2. 家庭を担任し、夫や子どもが安心して戦闘に行くよう激励する。3. 必要なときには戦闘奉仕を担任する」というもので、

10　1930年初頭に設立されたベトナム共産党は、同年後半にコミンテルンの意向を受けて、インドシナ共産党に改称した。1945年に形式的な解散をおこなったのち、1951年からはベトナム労働党という名称で公然化し、南北分断後は北ベトナムの政権政党となった。南北統一後の1976年、ベトナム共産党と改称して現在にいたっている。

臨戦体制と、予測される男性の不在という状況において、女性の任務を簡潔に表現していた。3月末に開かれたベトナム労働党中央委員会会議では、戦争が「特殊戦争」から「局地戦争」に転換し、全国が戦争状態に突入したとして、南部を「大前線」、北部を「大後方」とすることを決議したが、バーダムニエム運動の発動は、それに先んじて「大後方の女性化」を明示していた。運動は、青年たちのバーサンサン運動（後述）に刺激されて始まり、趣旨に賛同する女性たちの登録運動として展開され、6月中旬までに、北部全域で200万人が登録するという大規模な女性大衆運動となった [PNVN1965年6月16日]。

運動の高揚を見て、労働党中央書記局は1965年6月8日の第99号指示により、バーダムニエム運動の大衆運動としての評価と、党の指導方針を決定した [Le 2003: 31]。そして同年半ばには、運動はバーダムダン（ba dam dang 3つの担当）運動に改称された。ダムニエムとダムダンは、それぞれ「担任」と「担当」の漢越語であるが、いずれも日本語とは異なり、引き受けたことをやりぬくという意味がある。特にダムダンには、女性が家事をこなすという意味合いが強い。今日では、その改称をホー・チ・ミンが指示したという言説が定着しているが [Le 2003: 31]、当時の女性連合会機関紙を見る限り、ホー・チ・ミンの名はなく、唐突に名称の変更が行われており、各地の運動報告ではバーダムニエムの名称も使われている [PNVN1965年9月1日]。機関紙の記事では、ダムダンという言葉を、女性が家事に関わりすぎることを批判する、否定的な意味合いで使っている例がいくつかある[11]。6月の党書記局による承認と、その後の改称は、労働党中央が女性運動へ介入し、指導と被指導の関係の確認を意図したものであり、女性連合会はそれをホー・チ・ミンの女性運動への関心の表れであると、自らを納得させて受け入れたのではないだろうか。

しかしバーダムダン運動は、改称の混乱を乗り越えて、多くの女性を結集する運動として発展した。1965年末から66年にかけては、成人女性に対する基礎学習を保証し、特に女性幹部の質を高める教育運動として展開され、バーダムダン学校やバーダムダン学級が、各地に続々と作られた。1966年7月からは、南部の女性ゲリラ兵士グエン・ティ・ウット・ティックをモデルとした小説『銃を取る母』の読書運動が開始された。6人の幼い子どもを抱えた母であり、男性に優るとも劣らぬ銃の使い手であり、時には子どもを放置してまで武装闘争に明け暮れる、1人の生きた女性の姿が、北部の女性たちの心をつかみ、機関紙には投書が次々と寄せられた [PNVN1966年7月16日]。このように、バーダムダンとは、ダムダンの意味や、3つの担当とは何をさすかということはさほど問題ではなく、個々の具体的な目標を持った女性運動として、多くの女性を結集した合言葉のようなものであった。保育所や幼稚園の建設運動、女性の衛生・健康管理など日常生活の改善運動にもなり、後には1968年テト攻勢失敗後の暗い社会を勇気づける大衆運動として、あるいは農業の目標を達成する農業運動として展開される。

バーダムダン運動のめざましい展開を前に、1967年になって労働党と政府は、女性の昇進や女性幹部の増加、そのための制度や設備の充実を、具体的にはからざるをえなくなった。1月10日労働党中央書記局第152号決議「女性動員工作の組織と指導についてのいくつかの問題について」、同第153号決議「女性幹部工作について」、3月8日政府会議第31号決議「国家の各機関・企業の女性労働力を増強する決議」が、3月8日国際女性デー前後に相次いで発表された。第31号決議は「1968年末までに国家の労働者・職員の女性の比率を35%以上にする。教育・医療・軽工業・商業部門では50%から70%、あるいはそれ以上の比率をめざす」として、クォータ制を導入した。それらは同年7月から、「3つの決議」と総称され、その学習運動が各地の党支部を中心に展開された。女性の昇進を促し、党組織や地方行政組織、各部門での女性比率を上げることをめざしたが、同時に妻を殴る夫を糾弾し、妻の昇進を喜ばない夫を批判する、「封建制

11　女性班長が仕事が忙しく、家でも家事を1人で負担して、病気になってしまったことを注意する詩では、括弧付ではあるが家事のやりすぎを「ダムダン」という言葉で表わしている [PNVN1965年1月]。「そんなやり方のダムダンはやめてください」というタイトルの六八体の詩では、都市に夫を残して疎開した妻が、夫が訪ねてくると、豪華な食事を始めとしてあれこれ世話をして、土産まで用意している [PNVN1966年2月16日]。

度の残滓の一掃」をめざす運動もさかんに行われた [PNVN1967年7月16日; ND1967年7月2日,16日,19日]。そこには労働党が農民女性を「農村においてもっとも抑圧された階級」と位置づけ、資本主義化に反対する闘争の象徴にすえようとする動きもあったと思われる。

バーダムダン運動とは、北部が戦争状態に突入する中で、女性連合会が大後方の女性化をみずから引き受けるとともに、女性解放と男女平等を実現する好機ととらえて、女性の地位を上げ、知識や技術を高める運動としたものである。運動に参加した個々の女性たちは、南部の女性ゲリラ兵士の生き方に共感しつつ、自己犠牲的に奮闘したが、それは自己実現のためでもあった。労働党にとって女性解放とは、社会主義の高邁な理想といいながら、「女性の生産力の解放」にほかならず、女性運動の展開を歓迎しながらも、党の指導性を守ろうとした。「3つの決議」は、女性運動の高揚が引き出したものであったが、同時に労働党は、戦時の引き締めのための階級闘争に女性を利用した。戦争の女性化の始まりであるバーダムダン運動と、その制度化の始まりである「3つの決議」は、女性運動の側の主体が堅固に存在したために、労働党との交渉の中で複雑に展開された。そしてバーダムダン運動のもっとも大きな部分は、女性が主要に担うことになった農業生産であった。

II 農業の女性化

ベトナム戦争下の北ベトナムの経済と社会を支え、南部への戦闘員の補給を保証したのは、農業合作社による農業の集団化であり、逆に戦時において農業の集団化が定着したといわれる[12]。しかし完全な集団化が実現したのではなく、耕地面積の5%にあたる自留地でおこなわれた、「家庭経済」と呼ばれる農業生産が、個々の農家を支え、合作社にとっても不可欠なものであった。農業の集団化と、それを補い支える家庭経済の両方において、女性は大きな役割を果たした。ここでは、女性が農業労働力の大部分を占める「農業の女性化」について、女性と集団化との関わり、1965年以降女性が農業の中核的な指導者となったという意味での女性化の進展、それを支えた保育所建設などの具体的な面、および女性連合会が農民組織としての役割を担っていく過程を論じる。

北ベトナムの農業の集団化は、農業労働の集団化、農地の私的所有権を存続させたままでの初級合作社への組織化を経て、農地を合作社の集団所有とする高級合作社化が、1961年の第一次5か年計画開始時から、本格的に開始された。しかし個人経営に対する合作社の優位性は受け入れられにくく、集団化は順調にはすすまなかった[13]。それが1965年の北爆の恒常化以来、急速に集団化が進展し、同年には北ベトナムの全農家の90%が農業合作社（65%が高級合作社、25%が初級合作社）に加入したとされる [白石 1993: 82]。高級合作社においては、合作社所有の農地で、各生産隊が定められた作業時間に、一斉に農作業をおこない、労働点数で評価された。籾米の収穫後は、国家へ納める分などを除いた残りが、各世帯に労働点数に従って配分された。しかし「家庭経済」での農業が、農家の主な、ときには唯一の現金収入の源であった[14]。戦時中の農家では「95%は5%に及ばない」と言われていたという [Werner 1993: 82]。合作社にとっても、個々の農家の家庭経済による野菜や果物の栽培、豚や鶏の飼育、家畜の糞の肥料としての提供は不可欠なもので

12　古田元夫は、ベトナム戦争が泥沼化し米軍が撤退せざるをえなかったのは、北の人民軍兵士の南の戦場への大量投入のためであり、農業国である北ベトナムで先進工業国並の動員を可能にしたのが、社会主義体制、特に農業合作社であるとする [古田 2002: 192-93]。

13　1962年の労働党中央開催の全国思想会議では、農業集団化を時期尚早とする意見が公然と提起されたという [古田 2002: 194]。

14　家庭経済は正式には「家庭副経済 (kinh te phu gia dinh)」と呼ばれた。1981年の共産党第5回大会で初めて正式に「副」が除かれて「家庭経済」と呼ばれるようになり、「中農」経済として公認された [Werner 1993: 80]。

あった[15]。

1960年代初めには、農業合作社の労働力の66%近くが女性であり、女性は農業の集団化の積極的な推進者であった [Nguyen 1981: 60]。「女性が率先し、男性はあとからついてきた」「男性は女性ほど働かず、労働がいやで合作社に入りたがらなかった」との証言や、合作社をやめようとする動きに、女性は応じなかったという例もある [Werner 1993: 83-86]。農具や家畜がなく、戦争で男性労働力も奪われた貧しい農民女性は、集団化に生活の道を見出した。集団化によって重労働が軽減されることを望む女性も多く、家庭経済を支えるためにも合作社は必要であった。個々の農家世帯が合作社に加入するには、16歳以上の全員の署名が必要で、男性の反対で家庭内の争いにもなった。女性連合会はハノイから幹部や宣伝隊を派遣して、集団農業の利点を説明し、女性の生活が楽になり、教育の機会なども増えることを宣伝し、家庭内の争いは地方の幹部が仲裁を手助けした [Werner 1993: 83-85]。女性は合作社において男性とともに主要労働力であり、老人と子どもが補助労働力であった[16]。このように、戦争が激化する以前に、農業の女性化がすでに定着していたために、労働党は北部の男性を大量に南部に送ることに踏み切ったのではないだろうか。

ベトナム戦争下での女性と農業の関わりは、農業労働力の7割が女性になったというように、単なる労働力の女性化として語られることが多い[17]。しかし戦争の激化は、労働力としてむしろ老人・子どもの補助労働力の動員を促した[18]。1965年以降の農業の女性化とは、女性が生産隊隊長や合作社主任として、また農業技師として、合作社の指導と経営や農業技術の改良を担い、農業幹部の中核となって、保育所や幼稚園の建設、衛生の普及など、生活の社会化を積極的に推進することであった。それには、バーダムダン運動による女性たちの意識の高揚、女性幹部への教育、3つの決議による女性幹部の登用・抜擢の制度化が大きく貢献した。女性連合会は、これまでは女性運動をおこなう政治幹部が中心であったが、技術幹部と専門幹部を増やし、質を高めなければならないと主張した [PNVN1967年3月16日]。女性幹部の養成と登用は、厳しく複雑な思想と組織の闘争であったという地方の報告もある [PNVN1967年10月1日]。

保育所の建設は、1965年以降大幅に増加した[19]。保育所は、合作社ができれば、付属施設の一部として自然に作られるというものではなかった[20]。女性連合会機関紙上で4回にわたって連載された、「よい保育所を建設するにあたってのズックトゥー（Duc-tu）社の経験の教訓」がそれを物語っている[21]。ハノイ郊外のズックトゥー社では、1965年に麻疹が流行して、400人の女性が仕事を休んだことがきっかけで、保

15　合作社が個々の農家に生産を請負わせる家庭請負制度は、一部で実行されて、増産の効果を上げていたが、資本主義化の道をあゆむものとして批判され、消滅した [古田 2002: 196-197]。しかし合作社の不足分を補うものとしての「家庭経済」は、不可欠のものであり、奨励さえされた。家庭経済は、資本主義的個人主義を復活させるから、廃止せよという主張もあったが、左翼的偏向としてしりぞけられ、家庭副業経済は家族労働であり、集団経済の一部であるとみなされた [三尾 1970: 47]。

16　主要労働力は男性16-55歳、女性16-50歳の労働年齢に達した男女をいい、16歳未満の未成年と56(51)歳以上の老人が、補助労働力とみなされた [三尾 1965: 11; 1970: 55]。また労働には性別分業があり、男性の労働とされた耕起などの方が、はるかに労働点数が高かった [岩井 1999: 531]。年齢による性差と、労働の種類の性差があり、いずれも女性に不利であった。戦時には、出征した男性に代わって、男性の労働を女性がおこなったために、女性が男性と同等の労働点数を稼ぐことができたのである。

17　大雑把な統計では、1965年頃の農業部門への女性の進出を70%、場所によって80%、例外的には90%としている [Vietnamese Studies no. 10(1966): 307]。「多くの合作社では残っている労働力はほとんど婦人」[三尾 1970: 54] という表現が的確なように思われる。

18　フンイエン省のある果樹園生産隊の労働者60名のうち、20名は老人男性、30名は老人女性、10名は10-15歳の子どもであったという、1967年11月頃と思われる記述がある [三尾 1970: 56]。

19　保育所や、民家を借りて小人数の子どもの世話をする保育グループでは、乳児から3歳までの幼児を預かり、3歳以上6歳までの幼児は幼稚園に預けられた。ベトナムでは現在も保育所と幼稚園の違いは年齢によっている。

20　岩井美佐紀は長期にわたるフィールドワークによって、北部のある村の合作社と、その保育所の変遷を、具体的に詳細に描き出している [岩井 1999]。そこでは1963年に、合作社で初の女性副主任が選出され、その主張によって、同年保育所が初めて設立された。

21　「社」はいくつかの自然村が集まった行政村をさす。合作社の高級化と大規模化にともなって、合作社を社の範囲と一致させることが多くなった。各生産隊は、自然村の単位に従って組織された。保育所は、各生産隊ごとに作られることが多かった。

育所の組織化が始められた。近隣のナムハー省の先進的なトンブイ (Thon Bui) 合作社の保育所を、社の幹部らが2台の車を借りて、各自食料持参で、全社で見学に行った [PNVN1967年4月16日]。北爆下でのこの余裕には驚かされる。見学後学習運動が起こり、戦時に保育所を建設しても無駄だといった意見に打ち勝って、短期間に7つの建物が建てられた [PNVN1967年5月1日]。若い女性たちが、保母の仕事は前途がないと言うので、保母の労働点数を合作社で最高にした [PNVN1967年5月16日]。また子どもたちの栄養や健康のために、専門の執行委員2人を配置した [PNVN1967年6月1日]。男性をも巻きこんだ積極的な取り組みが、理想化されたかたちではあれ、生き生きと描かれている。

女性連合会は、女性の大多数である農民女性のために心を配ったが、それ以上に積極的な役割も果たした。機関紙には毎号、各省や各合作社での女性農民の生産活動、農道や水路の建設運動、競争運動が紹介され、保健や衛生の普及運動も重視された。女性連合会は、各省・各合作社の横の連携をはかる、農民組織としての性格を明確にしていった。1968年には、1ヘクタール当り1人の労働力・籾5トンの収穫・豚2頭の飼育をめざす農業三目標運動が開始されたが、女性連合会は農業三目標の達成を、バーダムダン運動の主要な目標とみなし、テト攻勢の失敗後や、ホー・チ・ミンの死後の立ち直りの過程において、まず第一に、農業三目標の達成を掲げた。1972年の春季攻勢の準備として、1971年2月労働党中央書記局は女性運動工作総括会議をおこない、後方のすべての任務を女性が担当することを確認した [Nguyen 1981: 131]。女性連合会の農業に対する責任が、そこで確立されたのではないかと思われる。同年4月1日から、会の機関紙が一般女性版と農村女性版の2種類に分かれ、農村版には、新しい農業技術や各合作社の近況が詳しく掲載された[22]。

ベトナム戦争を支え、戦争下で定着した農業合作社による集団化は、北爆下でのナショナリズムの高揚や、敵に勝つための人々の団結によって、あるいは社会主義的理想によって動かされたというよりはむしろ、農業の女性化によって支えられたものであった。元来農業の大きな部分を女性が担っていたことに加え、1960年代前半から、男性が気乗りのしなかった合作社への加入を、女性は集団化による労働の軽減や、より豊かな生活を求めて推進した。家庭経済も女性が担っていた。すでに定着していた農業の女性化をさらに高度化したのが1965年以降の戦争の状況であった。女性が農業労働力としてのみではなく、農業幹部として合作社経営や技術改良を担い、バーダムダン運動が農業三目標達成を運動の主要な目標とみなし、女性連合会が農業の担当組織となって、女性農民専用の機関紙を発行するにいたって、農業の女性化は、女性の主体性を強化する方向で進展し、北爆の猛威の中で休みなく食糧の増産を保証し続けた。その一方で、農村の若い女性たちの中には、故郷を離れて、南方の激戦地へと向かう者も多かったのである。

III ホーチミンルートの建設ー青年運動の女性化

ベトナム戦争において、米軍と北ベトナムの攻防の戦略的な焦点となったのが、北部と南部を結ぶ、いわゆるホーチミンルートであった。米軍は550万トン以上の爆弾を投下し、無数の地雷を敷設し、大量の枯葉剤まで散布して、北部から南部への兵員と物資の補給路を断とうとしたが、ついに成功しなかった。中でも、クアンビン省のラオス国境に位置する、最も重要な地点であった高く険しいムザー (Mu Gia) 峠に、米軍はB52の出撃も含めて激しい爆撃を連続的に加えたが、道路を破壊することはできなかった。米軍の報告書は「……[敵は] 自由に通行している。情報によれば何千人ものクーリーがこのルートをいつもきちんと補

22　女性連合会機関紙 Phu nu Viet Nam は、1954年に創刊されたが、1959年頃から1965年まで農村版が別にあったのが、バーダムダン運動の高揚の中で、女性の一体化をはかって、1965年5月から一本化されていた。女性連合会が農民組織を兼ねるようになって、再び農村版が発行されるようになったのである。

修している」と嘆いている[23]。この「何千人ものクーリー」の大多数が、抗米救国青年突撃隊の隊員として、北部各地の農村から志願してやってきた、20歳前後の若い女性たちであった。ここでは、準軍事的な青年運動を若い女性たちが担い、ホーチミンルートの建設に大きな役割を果たしたことを論じ、ベトナム戦争において、「軍事の女性化」、「軍隊の女性化」という現象があったのかどうかについて検討する。

1959年1月に労働党中央委員会会議は、15号決議によって南部の武力解放を決定し、同年5月19日のホー・チ・ミンの誕生日に、南北を結ぶルートの建設が開始された。抗仏戦争時の連絡ルートと、1954年の南北分断後に形成されたルートをもとにして、第559兵団が建設を担当した。それまで人間やせいぜい自転車が通れるだけだった道を、戦車やトラックが雨季にも通行できる本格的な道路や、ガソリンのパイプラインまでを含んだ一大交通システムへと仕上げる建設事業が本格的に開始されたのは、1965年米軍の直接介入が始まってからである。同年2月、青年のための大衆組織であるベトナム労働青年団の中央委員会は、「すすんで戦闘し、すすんで軍隊に入り、すすんでどこへでも行き、どんな敵にも打ち勝つ」という内容のバーサンサン（ba san sang 3つのすすんで）運動を発動した[24]。同年6月には、運動の趣旨に賛成する登録をした青年男女は250万人以上になったという [ND1965年6月21日]。また6月には労働青年団の傘下に、抗米救国青年突撃隊が結成された。その主要な任務が、ホーチミンルートの建設であった。

抗米救国青年突撃隊隊員の過半数は、若い女性であった。バーサンサン運動発動当初は、多くの若い女性が登録して、軍隊への入隊を志願し、武器を取って米軍と闘いたいとの決意を表明している [ND1995年3月7日,3月21日]。しかし実際は、若い男性が軍隊の主力であり、若い女性たちの熱心な志願と、ホーチミンルート建設の緊急の必要性とが、女性中心の突撃隊を生み出したと思われる。学校や合作社や工場でも、突撃隊は結成され、北爆時の救急活動や、遺体の処理の中心部隊であり、やはり若い女性が担っていた [Turner 1998: 85-87]。ホーチミンルートの建設維持部隊としての突撃隊の、実際の人数やその実態は不明な点が多いが、少なくとも1965年から75年の間に17万人が参加し、その70%から80%が女性であったとされる [Turner 1998: 20-21]。また1965年から68年にかけて、7万人の女性がホーチミンルートで労働しており、任務の70%以上を女性が行なっていたともいわれる [Turner 1998: 34-35]。若い女性たちが、爆撃でできた道路の穴を埋めるというイメージが定着しているが [小高 2005: 161]、むしろ岩を切り開く困難な道路建設が主であり、また多数の兵士と車両を通過させるという、厳しい重労働を伴う任務も負っていた。

突撃隊に入隊した女性たちの中には、都市の知識人階層もいたが、ほとんどが農村出身であった。入隊を許されるのは17歳以上30歳以下とされていたが [ND1965年7月7日]、年齢を偽って参加した10代前半の少女もいた。突撃隊は正規の軍隊ではなかったが、軍服を支給され、軍隊式に編成された部隊単位で、軍隊の指揮に従って行動した。しかし軍隊のような事前の訓練はなく、故郷での出発時にシャベルと鍬をわたされて初めて、道路建設に行くとわかった者もいた [Turner 1998: 93-94]。ほとんどの女性が志願して入隊したが、その中には、家族と権威から離れた人生を送りたいと願った若い女性もいた。また貧しい家庭では、一人分の食い扶持が減るという経済的な動機もあった。北爆で死んだ家族や友人の仇を討つためという理由も、かなり普遍的にみられた [Turner 1998: 81-82]。それら様々な理由に、「侵略戦争に打ち勝つため」という大義名分があり、平時ならば家庭を離れることさえむずかしかった、結婚前の20歳前後の女性たちの大量の離村が可能になったのである。

23　1966年の米空軍報告書（U. S. Air Force briefing notes）[Turner 1998: 93]。

24　発動当初の内容はこのように軍事色が強く、軍隊への入隊志願運動そのものであった [ND1965年2月22日]。バーサンサンの内容はその後次第に軍事以外への広がりを意味するようになり、最終的には「1. すすんで軍隊に入る。2. すすんで生産を促進し学習する。3. すすんで祖国の必要とすることのためにどこへでも行き、どのような仕事もおこなう」という内容になった [ND1965年7月17日; 白石 1993: 89]。

1966年になって、北爆がハノイ中心に及ぶという危機的な状況の中で、7月16日にホー・チ・ミンは「独立と自由ほど尊いものはない」という有名な抗戦アピールを、ラジオで全北部に流した。その直後から突撃隊への志願者が激増し、200人から300人が割り当てられた地域に、2000人から3000人が応募したという [Turner 1998: 33-34]。ホー・チ・ミンの言葉の「独立と自由」は、国家や民族の独立と自由という意味を超えて、若い女性たちにみずからの独立と自由を希求させ、行動に駆り立てる力があったのではないだろうか。また若い女性は、労働青年団と女性連合会に同時に参加していることが多く、1965年3月に女性連合会がバーダムニエム運動を発動したとき、すでに行われていたバーサンサン運動とのどちらに参加すべきかといった身の上相談も見られた[25]。一般に既婚の若い女性は、女性運動に参加しつつ青年運動も行ない、家を離れることのできた、あるいは離れることを望んでいた未婚の若い女性が、ホーチミンルート建設などに参加したようである。

ホーチミンルート建設の現場の実態は、悲惨なものであった。米機の爆撃によるよりも、事故や病気で死ぬ方が多かったという。食糧は基本的に軍隊に優先されたため、建設現場では慢性的に不足していた。生理用品もなかったが、重労働と栄養不足で、ほとんどの女性は生理が止まっていた。1990年にドキュメンタリー映画が上映されるまで、その実態は多くのベトナム人も知らなかった。重い荷物を運びながら、爆撃を避けて走る若い女性たちの、疲労と病気で暗く翳った顔に、映画を見た人々は泣いたという [Turner 1998: 11]。現場の同僚や軍隊の指揮官の男性たちは、女性たちに深い同情を寄せたが、中央は理解があるとはいえず、彼女らが帰郷しても帰還軍人扱いされず、戦後の補償もないという結果を生んだ。1967年の女性連合会の機関紙には、軍隊にいる義理の息子が親に宛てた手紙という形で、次のような文が残っている。

> ……ぼくがもっとも嬉しいのは、妹のミンの進歩です。まだ小さくあどけなかったぼくの妹が、困難に耐えて、こんなに立派に熱心に活動するとは、思いもよりませんでした。ぼくたちは本当の軍隊にいますが、青年突撃隊にいる妹のミンに比べたら、苦労ではありません。妹は本当に、あっというまに成長しました[26]。

ここでは青年突撃隊の女性たちの活動を、青年運動の女性化として論じたが、青年運動自体が、軍事的な運動になっていたことから、「軍事の女性化」といってもよいであろう。北爆が中断された1969年から71年の間には、多くの突撃隊の青年たちは帰郷し、軍隊の工兵隊がルートの建設と維持に当たっていた。それは本来、軍隊の任務であった。それでは、ベトナム戦争において「軍隊の女性化」といえる現象はあったのだろうか。北部の人民軍の女性は正規軍・地方軍・民兵・専門職を含めて150万人いたといわれる。うち民兵が100万人近くいた[27]。ターナーはそれを世界一としており、1943年に80万人から100万人の女性兵士がいたとされるソ連が、唯一ベトナムに近いと言う [Turner 1998: 19-21, 23-24]。しかし、「民兵の女性化」ということはいえても、正規軍を頂点とし、末端まで労働党の政治委員の指導を徹底させたヒエラ

25　相談者の若い女性は、婚約者とともに故郷を離れて地方の建設現場で働いていたが、婚約者の青年は自分の老いた両親の面倒を彼女に看させたくて、バーダムニエム運動に登録して、帰って家庭を守るようにという。助言者は青年の身勝手さを見抜き、青年の家庭の世話は村や合作社に任せて、女性に任務を達成するよう諭す [PNVN1965年5月]。2月に発動されたバーサンサン運動に参加した若い女性たちの中で、すぐに入隊できない女性や夫のいる女性の間から、バーダムニエム運動の原型ともいえる女性運動が発生してきたようである [ND1965年3月8日,3月17日]。

26　「誇らしい家庭」[PNVN1967年8月16日]。記事自体は養子も含めた8人の子どもたちをわけへだてなく育て上げた夫婦の苦労話で、年上の3人の息子は軍隊に、1人の娘は青年突撃隊に志願して家を出たということが、夫婦の子育ての成功として称えられている。

27　男性退役軍人でもある戦史家のグエン・クオック・ズンによる。正規軍は6万人、専門職は数千人としている。彼は女性の集団的活動が戦争の勝敗を決したとし、また北部の防空活動のほとんどすべてを女性が担ったとしている [Turner 1998: 19-21]。

ルキー体制である軍隊は、あくまで男性中心であり、「軍隊の女性化」とはいえないであろう[28]。しかし、その軍事が失敗し、戦争が退潮の局面に入ったとき、軍隊内も含めた社会全体が、女性的なものに救いを求めたのである。

Ⅳ テト攻勢の失敗と社会の女性化

1968年のテト（旧正月）の始まる1月31日の未明、解放武装勢力が南ベトナムのすべての大都市と多くの地方都市に大規模な同時攻撃をおこない、米軍司令部と米国民を驚愕させた。しかしこのテト攻勢は、解放勢力に4万人の死者を出し、主力を崩壊させる完全な失敗であった。労働党内部では、当初テト攻勢は失敗したとの評価を下していたらしい[コルコ 2001: 426]。しかしそれ以上に米国は政治的・経済的・社会的に大きな痛手を受け、和平交渉と撤兵への道を選ばざるをえなくなった。労働党にとって予想外の幸運であり、テト攻勢が抗米戦争における一大転換点であり、決定的な大勝利であったという論調をその後保ち続けた。しかし現実には、南部の経験豊かな多くの幹部が失われ、その後の米国による農村掃討作戦は、無数の活動家の殺害や離村を招き、解放民族戦線側の脱走者が相次いだ[コルコ 2001: 429-433]。その後南部での軍事勢力は、北部人民軍の男性が主力となり、南北ともに戦後まで尾を引く大きな社会的変化をもたらした。ここでは、戦争の退潮局面において、北部では女性運動が社会を支え、社会の女性化ともいえる現象があったことを検証し、南部においても外交闘争や政治闘争を女性が担ったことを論じる。

テト攻勢失敗を大勝利といいくるめた労働党の姿勢は、北部においてしだいに重苦しい沈滞を引き起こした。北部の男性が人民軍兵士として南部に送られていく中で、北部の経済と防衛と社会を支えたのは女性運動であった。1968年5月末、女性連合会中央常任委員会は3号決議でバーダムダン運動を再定義し、その内容をより高度で複雑なものにして、男性に代わって女性が全面的に社会を支えることを表明した。生産と活動の担当では、集団の主人となる意識を育て、科学技術を学習し、管理に参加することを挙げ、家庭の担当では、夫や子どもや兄弟が「敵を殺して功を立てる」ように激励するとともに、保育所・幼稚園・共同食堂を積極的に建設するとしている。戦闘の担当においては、直接の戦闘行為への参加や、防空と疎開の任務を明確にした[PNVN1968年6月16日]。このように、女性が社会の全領域を担当するという意味での女性化がすすむとともに、他方では、日常生活を重視するいわば女性的な運動が、男性を含めた社会の各集団に広げられるという意味での女性化が見られた。

「よい人よい事 (nguoi tot, viec tot)」運動は1969年初頭から開始され、労働運動、青年運動、子どもの運動、軍隊にまで広がった。まず各組織や大衆団体付属の出版社が小冊子の「よい人よい事シリーズ」を出版し、その読書運動が発動された[29]。いずれも日常生活の中のささやかな美談を取り上げた内容であり、男女を問わず小さなことから生活を改善し、組織化しようとする動きであった。ハノイの高射砲隊のある兵士は『国のため、人のため』を読んで、米袋を繕ったり、サンダルを作ったり、子どもたちの散髪や洗髪をしてやる

28　ベトナム人民軍の創設者であり、現在も軍隊の象徴的存在である、元国防大臣のヴォー・グエン・ザップは、ベトナムの女性の戦争への貢献として、息子を軍隊に捧げた母たちを強調し、軍隊に直接参加した女性たちの姿を見えなくさせている。息子を戦死させた母親は英雄の母と呼ばれ、多くは農村の貧しい老人女性であるため、その対策がドイモイ後やっと問題にされ始めた。しかし帰ってきても、婚期を逸したり、障害を負ったりして、孤独に暮らす帰還兵士や元青年突撃隊員の女性たちには、光が当たらないままである。また英雄の母（me anh hung）という表現は、ベトナム戦争時の女性英雄グエン・ティ・ウット・ティックを指す「英雄的な母（me anh hung）」の意味を無化してしまう。

29　労働総同盟付属の労働出版社は『英雄の民族、先鋒の階級』、人民軍隊出版社は『国のため、人のため』、労働青年団の青年出版社は『英雄の世代』、女性連合会の女性出版社は『勇敢、担当』、その他の市民を対象とした普通出版社は『後方は前線と競争する』、子どもを対象としたキムドン出版社は『小さな仕事、大きな意味』を全部で60万部近く出版した[ND1969年1月15日]。

兵士の話に感動し、自分の部隊にもそういう兵士が多数いるのに気づいたこと、衛生や掃除、野菜栽培など、今まで軽んじていた小さなことを、今後はしっかり実行しようと決心したという投書を労働党機関紙に寄せている [ND1969年2月1日]。女性はどの部門の冊子でも、四分の一から半数近くを占める。女性出版社の『勇敢・担当』では、当然全員が女性であるが、水利工事や、肥料となるホテイアオイの栽培などに携わる、合作社の女性農民の話が多く、農民全体を代表する組織や出版社がなきにひとしい中で、女性連合会が農民組織的な役割をしていることがここでも窺える [ND1969年1月25日]。

ここで、当時の北部の社会において、男性を「姉さん」や「主婦」と呼ぶ例があったことに触れたい。1968年1月6日の労働党機関紙に載った「やさしい姉さん―英雄的な高射砲兵レ・スアン・ラウ同志の勇敢な戦闘の模範」という記事では、部下の服の繕いをする面倒見のいい副隊長が、「やさしい姉さん」と呼ばれている。また同年6月21日の同紙の、やはり「やさしい姉さん」という記事では、ある中隊の食事担当の責任者である青年兵士の細やかな心遣いが、「やさしい母や姉のよう」と称えられている。男性中心の軍隊の中で、しかもテト攻勢前後の緊迫した情勢の中で、このような表現が見られるのは注目に値する。また1967年3月2日の同紙の、「力を合わせて高原地方を刷新する（商業部門労働英雄レ・ヴァン・フーの話）」という記事では、買い物に慣れていない少数民族ヴァンキエウ人の各家庭を訪問して、必要なものや好みにあったものを代わりに購入し、激しい北爆下でも必需品の供給に努めた商業合作社の男性幹部を、「有能な主婦 (noi tro dam dang)」と称えている。女性的なものに価値をおく、ベトナム社会の基層的な文化といえるものが、北部の戦時社会においても見られ、社会の女性化を促したと思われる。

1969年9月初めのホー・チ・ミンの病死は、ようやく立ち直りかけた社会に、再び打撃を与えた。荘重で儒教的な追悼儀式とその報道は、男性中心のヒエラルキーを強化し、それまで「おじさん」と自称し、他称されていたホー・チ・ミンは、「父」「教師」と呼ばれて、父性化と神格化が強まった。ヴォー・グエン・ザップは人民軍創立25周年記念の演説で、ホー・チ・ミンを「わが人民武装勢力を創設し、教育し、養成した親愛なる父」と明言した [ND1969年12月22日]。一方、少数民族のムオン人が投稿した「ムオン人はホーおじさんを悼む」という詩は、ホー・チ・ミンを「子どもをいつくしむ母」と称えた [ND1969年10月28日]。また青年に対するホー・チ・ミンの教えについて、「母の広大な愛の心、父の周到な教え、教師の遠く広く見つめる聡明さが表れている」という表現もある [ND1969年9月21日]。女性連合会副会長のハー・ティ・クエは、ホー・チ・ミンには「一人の父としての周到な世話もあれば、一人の母としての広大な愛の心もあった」とする [ND1970年5月26日]。ここでは「父」も、権威ある存在というよりは、子どもを世話するやさしい親である。ホー・チ・ミンの女性化は、その父性化に対抗する文化であった。

テト攻勢後の南部でも、女性化と呼べる現象があった。1968年に開始された和平交渉の拡大予備会議出席のため、解放民族戦線代表としてパリの空港に降り立ったグエン・ティ・ビンのアオザイ姿は、全世界の注目を集めた。翌年6月、ベトナム南部共和国臨時革命政府が樹立され、グエン・ティ・ビンは外相兼パリ会談首席代表に任命された。同年8月に始まった労働党のレ・ドゥク・トとキッシンジャー米大統領補佐官との秘密会談が、実質的な和平交渉を進めたとされるが、全世界を飛び回って米国と南ベトナム政権を非難し、人々の支持を訴えた女性外相の姿が国際世論に与えた影響は測り知れない。またテト攻勢を機に南部各都市に成立した民族民主平和勢力連合は、いわゆる第三勢力を形成したが、その代表的人物が、女性知識人のゴ・バ・タインであった[30]。彼女は解放民族戦線とは一線を画した非暴力の平和運動に固執し、長期間投獄されながらハンスト闘争を続けた。一時は女性たちの合法・半合法活動や獄中闘争が、南部での唯一の政治闘争となった[31]。また政府軍への男性の徴用と、米国式の農業近代化とが進む中で、女性が全雇

30　ゴ・バ・タインと女性運動については小菅 [1997]、To so phu nu Nam bo [1989: 442-445] を参照。グエン・ティ・ビンと外交闘争については Le [1992:98-100] 参照。

31　1961年労働党は南ベトナムの山岳部においては武装闘争を主とし、都市部においては政治闘争を主とし、平野農村部に

用農業労働者の四分の三を占めるという農業労働の女性化が、南部でも見られた [コルコ 2001: 626]。

米国ニクソン政権による「戦争のベトナム化」が成功していないことを見抜いた労働党は、守勢から攻勢に転じ、1972年春季大攻勢に踏み切った。ニクソン政権は北爆を再開し、特に1972年末のいわゆるクリスマス爆撃はすさまじいものであったが、米国内と世界の非難を浴び、和平交渉を早める結果となった。1973年1月27日、臨時革命政府代表グエン・ティ・ビンらが署名してパリ協定が発効し、3月末には米軍の最後の部隊が撤退して、ベトナム戦争は最後の局面を迎えた。1968年初めのテト攻勢の失敗から1972年の巻き返しに至るまでの困難な時期において、形態はまったく異なるとはいえ、南北ともに女性化と呼べる現象が社会を支え、運動を支えていた。その深い社会的変化を考慮せず、またパリ協定に表わされていた、南北統一への多様な可能性をも無視した、その後の労働党の軍事中心の行動は、戦争の女性化の側面を大きく変えるものとなった。

V戦争の終結ー女性化の終焉

パリ協定調印後、労働党は100万以上の兵力と近代的装備をもつ南ベトナム政府軍の優位性に対し、当初は慎重な姿勢をみせたが、南ベトナム政府による農村平定や、農地改革の一定の成果に危機感を抱き、米軍の再介入の可能性がないことを確信した1974年9月、南部解放作戦に踏み切ることを決意した。1975年1月の労働党政治局会議では、その年のうちに戦略的打撃を与えることと、翌年の総攻撃と一斉蜂起を決定した。その後の展開は、人民軍の攻撃を受けた政府軍の、雪崩のような瓦解によって、労働党の計画を超えて急速に進み、4月30日、圧倒的な北部人民軍の武力によってサイゴンが制圧され、5月1日までに南部全土解放がなされた。1976年には北ベトナムの主導する南北統一が実現し、南部の男女革命家や活動家たちが考えていたような漸進的な統一は葬り去られた。思いがけない早すぎた勝利は、北部の労働党の男性指導部に錯覚と驕りを生み出した。そして勝利の成果から排除されたのが、それまで重要な役割を果たしていた南部であり、また南北の女性たちであった。ここでは、パリ協定調印後の北部の女性運動の変容、バーダムダン運動や農業の女性化の終焉、南部の武力解放の問題点を論じる。

北部の女性運動は、パリ協定調印後大きく変わった。1973年10月、労働党中央委員会会議は南部の武力解放の確認とともに、74年から75年にかけての北部の経済復興発展2か年計画を採択し、社会主義的工業化を急速に進めようとした。1974年3月4日から7日にかけて開かれた、第4回全国女性大会の決議に挙げられた第一の任務は、「社会主義的女性を創造し、祖国と社会と家庭に対する義務をよく果たす」、第二の任務は「「競って労働と生産をおこない、勤勉に節約して社会主義を建設する」運動に参加する」であった。女性連合会は労働党の路線に従って、社会主義建設と家庭への責任を重視する「社会主義的女性」を掲げたのである [Hoi lien hiep phu nu Viet Nam 1974: 10-23]。決議の前文には、バーダムダン運動を新しい内容で続けるとあり、バーダムダンは「国のことを上手におこない、家のことを引き受け、男女平等を実現するよう奮闘する」というスローガンに変わった。生産・家庭・戦闘の3つの担当から戦闘が消え、1976年以降の全土社会主義化の下では、男女平等のために女性の政治参加を促すという内容になった。しかし困難な経済状況で、女性の政治参加は後退し、バーダムダン運動はいつしか立ち消えになって、「総括のない運動」と言われるようになった[32]。

おいては双方を並行して推進するという戦略を立てたが、農村において政治闘争を担ったのは、長髪軍（doi quan toc dai）と呼ばれた女性部隊であり、武器を持たずに大挙して政府軍や行政に対峙した。1960年代前半から南ベトナムでは政治闘争の女性化が確立していた。

32　女性の政治参加を如実に表わす国会議員の女性比率をみると、第1回国会（1946）では2.5%、北部のみで開かれた第2

1973年以降、大量の男性兵士たちが北部の農村に帰郷し、それまで女性たちが占めていた合作社の主任などの指導的地位に、当然のように復帰した。さらに性別・年齢に関わらず、同量の籾米を支給する制度に不満を持ち、健康な成年男性とその家族がもっとも利益を得るように、制度の手直しをはかった例も見られた [岩井 1999: 530]。しかし女性たちの不満はもっと大きかったはずである。全国女性大会で労働党の路線に従った女性連合会の機関紙には、料理や服装、刺繍の仕方など、平和を享受するかのような、穏やかな「女性的な」記事が目につくが、なおも闘い続ける南部の女性たちの記事が、紙面から消えることはなかった。そして、女性を対象にした学習運動が弱まっていること、合作社に女性の管理委員がいなくなったことへの危機感が述べられている [PNVN1974年9月17日,11月26日]。一方1974年末から、南部へ向かう人民軍の大部隊を通すために、5万人の若い女性が青年突撃隊として再び動員され、道路を切り開いた [Nguyen 1981: 209]。多くの女性たちが一線を退く中で、準軍事運動としての青年運動は、最後まで女性化に頼っていた。

パリ協定調印後も、協定の実施を求め、政府軍による違反を摘発し、グエン・ヴァン・ティエウ大統領の辞任を求める南部の女性たちの闘争は続いていた。中でもゴ・バ・タインの作った「生きる権利を求めるベトナム女性運動」は都市の女性運動の中心であった。1975年の春の攻勢に先立って、解放女性連合会の幹部たちは、ひそかにサイゴンに入って武器や食料や救急施設の準備をした。また全南部で20万人以上の女性たちが、戦闘の準備や手助けをしたという [To so phu nu Viet Nam 1989: 495-497]。南部解放武装勢力の特別攻撃隊の男性兵士が「北の正規軍でなければサイゴン突入は不可能だった。しかしわれわれ南部のものたちはあらゆる勢力を動員した」[小倉 2005: 284] と語るように、戦争の最終局面において南部の解放勢力のおかれた、重要であるが劣位とされる位置の大きな部分を、南部の女性が担っていたのである。そしてその劣位の位置は、北部の新しい状況における女性運動の前途を模索していた北部の女性幹部たちや、大部隊を南部に送るために黙々と道路を建設し補修していた、北部の若い女性たちも共有したのではないだろうか。

また1975年の春の人民軍の圧倒的な勝利を導いた、政府軍の瓦解の大きな要因に、政府軍兵士の家族の存在があった。米国の援助によって、あり余る近代的な装備に守られながら、政府軍兵士は、その給料の低さのために家族を養うことができず、兵士の半数近くは家族を、部隊内やその周辺に住まわせていた。そして妻や娘の稼ぎで生計を立てなければならない、増大しつづける貧民の群れと化していた [コルコ 2001: 350,356]。人民軍の突然の攻撃を受けた政府軍の兵士は、家族を守るために自分の持ち場を放棄した。そして家財道具を運びながらの逃避行は混乱を極め、略奪や強姦、兵士どうしの撃ち合いの中で政府軍は悲惨な最期を迎えた [コルコ 2001: 675]。家族を伴う軍隊という、政府軍の前近代的な性格は、北ベトナムとは異なる意味で、女性の軍事への参加の一形態であった。それが北部人民軍の、予期せぬ勝利を導いた。しかしそれは、南ベトナムの社会が荒廃し、地元に密着した解放戦線幹部にさえ把握できない、大きな流動状況のもとにあったことをも意味していた。それは急速な統一や社会主義化によって解決できるものではなかった。

かつて輝かしい全土解放、民族の統一の成就と称えられた事柄に内在する問題点は、南部解放後30年を経た今日、海外の研究者がようやく公然と研究対象にするようになった [中野 2005]。消滅してしまった解放民族戦線や民族民主平和連合、第三勢力の見直しがされており、本国でも資料の保存や研究などが徐々に考えられているようである。ベトナム戦争の終わり方を考察するとき、南部も含めた戦争の女性化とその終焉という視点が必要ではないだろうか。女性化に頼って戦争を進め、社会を維持しながら、北部の男性指導

回（1960）から第5回（1975）までは、それぞれ11.6%, 18.2%, 29.7%, 32.3%と急増した。全国での第6回国会（1976）からは26.8%, 21.7%と減少していき、第8回国会（1987）では17.7%まで落ち込んだ。その後次第に回復し、2002年の第11回国会では27.3%までになった。

部中心の強引な統一と、その後の社会主義化をはかった政府は、困難な経済建設にふたたび女性の力を必要とした。しかし、戦時のような女性の動員はもはや不可能であった。戦時に苦労して獲得した地位も機会も失った北部の女性や、自主性と地道な努力を否定された南部の男性と女性を無視した統一と社会主義化は、成功する基盤を失っていたといえよう。

おわりに

北ベトナムが戦争状態に突入する中で、ベトナム女性連合会は後方の女性化を引き受け、同時に女性解放と男女平等を実現する好機ととらえて、バーダムダン運動が多様に展開された。中でも、女性が農業労働力の大部分を占めただけではなく、農業指導者の中核の役割を果たした農業の女性化は、戦時化の農業生産と農村社会を支えた。一方、農村の若い女性たちを中心とした、青年運動の女性化は、ホーチミンルートの建設と維持を担い、軍事の女性化の中心となった。テト攻勢失敗後の戦争退潮局面は、社会全体の女性化によって乗り越え、南部においても、外交闘争や政治闘争の女性化が見られた。それらがなければ、ベトナム戦争における北ベトナム側の勝利はなかったであろう。しかし、戦争が軍事的に終結するとともに、女性化は終焉した。

女性化そのものは、従来のジェンダー役割が揺らぐ、流動的な状況を表わすにすぎず、それが女性にとってどういう意味をもつかは、女性たちの主体や社会との関係などによる。ベトナム戦争下の北ベトナムの女性たちは、戦争が女性解放と男女平等を実現する希有な機会であるととらえて、積極的に関わった。それが可能であったのは、一方では、以前から強力な女性運動が存在し、儒教社会といわれながらも、女性や女性的な価値を尊重する面のあったベトナムの社会によってであり、他方では、先進国において女性の社会進出による労働力の女性化が進み、発展途上国においても開発体制の中で女性の状況が大きく変化した、1960年代後半以降という時代によるものであった。しかし女性化には、先進国における主婦のパートタイム労働者化や、発展途上国の女性の移民化などの、新しい女性役割を固定化する働きもある。北ベトナムの女性運動は、男性が不在であったとはいえ、家庭を女性の主体的な活動の場ととらえ、女性の家庭からの自立を問題としなかったために、戦争の終結とともに、男性への譲歩と女性の家庭役割を甘受しなければならず、女性化の終焉と、戦後の女性運動の後退を招いたのである。しかし、戦争の女性化のもとで、主体的な運動を繰り広げた実績と記憶を持ったベトナムの女性運動は、ドイモイ後に復活し、農業の再女性化、起業の女性化などの新しい状況の中で、積極的に活動している。

ベトナム戦争は、東西冷戦期に起こった戦争であった。本稿で論じた戦争の女性化は、第二次大戦のいわゆる総力戦における女性の戦争参加、あるいは冷戦後の現代の地域・民族紛争下における女性の戦争参加と、どのような共通点や差異があるのかを考察する必要がある。女性連合会は、女性の戦争協力を促し、男性の出征を激励することを女性の任務とした。それは、そうした女性の補助的役割に反発し、みずから兵士として戦争に参加することを望む若い女性たちをも生み出した。また一方では、女性連合会は1946年の発足当時から、会のマークとして、青い地球とオリーブの枝をくわえた白い鳩の図案を採用しており、ベトナム戦争中には世界の女性たちに、反戦平和を訴えた。女性連合会の持っていたこのアンビヴァレンスをも踏まえて、ベトナム戦争における戦争の女性化を、より広い歴史的コンテクストの中で解明することを、今後の課題としたい。

略記

ND: *Nhan dan*（ベトナム労働党（共産党）中央機関紙『ニャンザン』）

PNVN: *Phu nu Viet Nam*（ベトナム女性連合会中央機関紙『ベトナム女性』）

参考文献

Bergman, Arlene Eisen 1975. *Women of Viet Nam*. Rev. ed. San Francisco: Peoples Press.

Eisen, Arlene 1984. *Women and Revolution in Viet Nam*. London: Zed Books.

Hoi lien hiep phu nu Viet Nam 1974. *Nghi quyet dai hoi phu nu Viet Nam lan thu tu*. Ha Noi: Nha xuat ban Phu nu.

Le Chan Phuong (bien soan va suu tam) 2003. *Phong trao phu nu "3 dam dang" trong cuoc khang chien chong My, cuu nuoc*. Ha Noi: Nha xuat ban Lao dong – Xa hoi..

Le Thi Nham Tuyet 1975. *Phu nu Viet Nam qua cac thoi dai*. Ha Noi: Nha xuat ban Khoa hoc xa hoi. In lan thu hai.

Le Tuyet Thanh 1992. *Phu nu mien Nam*. Ho Chi Minh: Bao tang phu nu Nam bo.

Mai Thi Tu, Le Thi Nham Tuyet 1978. *Women in Viet Nam*. Ha Noi: Foreign Languages Publishing House.

Nguyen Thi Thap (chu bien) 1980-81. *Lich su phong trao phu nu Viet Nam*. 2 tap. Nha xuat ban Phu nu.

Pettus, Ashley 2003. *Between Sacrifice and Desire: National Identity and the Governing of Femininity in Vietnam*. New York and London: Routledge.

Tai, Hue-Tam Ho 1992. *Radicalism and the Origins of the Vietnamese Revolution*. Cambridge: Harvard University Press.

Taylor, Sandra C. 1999. *Vietnamese Women at War: Fighting for Ho Chi Minh and the Revolution*. Kansas: University Press of Kansas.

To so phu nu Nam bo (chu bien) 1989. *Truyen thong cach mang cua phu nu Nam bo thanh dong*. Ho Chi Minh: Nha truyen thong phu nu.

Turner, Karen Gottschang with Phan Thanh Hoa 1998. *Even the Women Must Fight: Memories of War from North Vietnam*. New York: John Wiley & Sons.

Werner, Jayne 1981. Women, Socialism, and the Economy of Wartime North Vietnam, 1960-1975. *Studies in Comparative Communism*, vol. xiv: 165-190.

——1993. Cooperativization, the Family Economy, and the New Family in Wartime Vietnam, 1965-1975. In Jayne Werner & David Hunt (eds.) *The American War in Vietnam*. Ithaca, N.Y.: Cornell University: 77-92.

——2002. Gender, Household, and State: Renovation (Doi Moi) as Social Process in Viet Nam. In Jayne Werner and Daniele Belanger (eds.) *Gender, Household, State: Doi Moi in Viet Nam*. Ithaca, N.Y.: Cornell University: 29-47.

アルト，フランツ（村上敦訳）2003.『エコロジーだけが経済を救う』洋泉社.

伊豫谷登士翁編 2001.『経済のグローバリゼーションとジェンダー』明石書店.

岩井美佐紀 1999.「ベトナム北部農村における社会変容と女性労働ーバックニン省チャンリエット村の事例からー」『東南アジア研究』第 36 巻 4 号：525-545.

小倉貞男 2005.『ドキュメントヴェトナム戦争全史』岩波現代文庫.

小高泰 2005.「ベトナム人民軍の素顔」中野亜里編『ベトナム戦争の「戦後」』めこん：143-180.

久場嬉子 1994.「新しい生産と再生産システムの形成へ向けて－21 世紀へのパラダイムー」竹中恵美子・久場嬉子編『労働力の女性化　21 世紀へのパラダイム』有斐閣：291-321.
小菅幸一 1997.「ゴ・バ・タイン ドイモイ時代にも生きる第三勢力の精神」山崎朋子編『アジアの女性指導者たち』筑摩書房：259-295.
コルコ，ガブリエル（藤田和子・藤本博・古田元夫訳）2001.『ベトナム戦争全史 歴史的戦争の解剖』社会思想社.
佐伯理子 1996.「ベトナム戦争期における戦時動員体制と女性ーバーダムダン運動研究」1996 年度東京外国語大学地域文化研究科修士論文.
白石昌也 1993.『ベトナム 革命と建設のはざま』東京大学出版会.
竹中恵美子 1994.「変貌する経済と労働力の女性化ーその日本的特質ー」竹中恵美子・久場嬉子編『労働力の女性化　21 世紀へのパラダイム』有斐閣：1-30.
チョン，デニス（押田由起訳）2001.『ベトナムの少女 世界で最も有名な戦争写真が導いた運命』文春文庫.
中野亜里 2005.「ベトナムの革命戦争」中野亜里編『ベトナム戦争の「戦後」』めこん：29-58.
古田元夫 2002.「インドシナ戦争ー救国戦争と「貧しさを分かちあう社会主義」」末廣昭編『岩波講座東南アジア史 9』岩波書店：181-204.
三尾忠志 1965.「北ベトナムの経済事情」『季報国際情報』第 15 号：1-26.
――1970.『新たな重要段階に入った北ベトナムの農業合作社運動』国際情勢研究会.
吉澤南 1999.『ベトナム戦争ー民衆にとっての戦場ー』吉川弘文館.

母と子

チャン・ダン・コア

私たちの前に２人の母子が坐っていた。チャン・ティ・ルーと、タインホア市グエン・ヴァン・チョイ基礎中学校 8A 学年の生徒のグエン・ザン・ティエンである。この３月[1]に、ザン・ティエンは、13 歳になったばかりだった。痩せて小さく、青白かった。10 歳の子どもにしか見えなかった。しかし、ザン・ティエンは、すでに４冊の分厚い短編集の作者だった。『ザン・ティエンの物語』（1996 年）、『家から学校まで』（1997 年）、『母さんはおこわを売る』（1997 年）、『ザン叔母さん』（1998 年）である。ザン・ティエンを読んで、多くの人々は、そのきびきびとした、経験豊かで、鋭い文体と、特にその言葉使いの能力に驚愕した。疑いを表明する者も少なくなかった。それもうなずける。天賦の才能は、常に理解しがたいからである。

「私は無学な人間です」チャン・ティ・ルーは話を始めた。

「私は 1946 年、クアンスオン県クアンルーで生まれました。私の故郷は大変貧乏でした。クアンスオン県は、タインホア省で一番貧しい県の一つであるといえるでしょう。今ではドイモイ政策のおかげで、タインホアの多くの人は大金持になりました。でもクアンスオンの人は、今でも貧しい食事をしています。ずっと飢えている人も少なくありません。私には７人の兄弟姉妹がいますが、ほとんどが字が読めません。1965 年、私は青年突撃隊[2]に入りました。私の部隊には、教師や学生だった人たちがいました。たくさんの補習学級ができました。それで私は読み書きができるようになりました。1966 年６月に労働党に入党したときは、私はまだ字を知らず、申請書と履歴書を人に書いてもらわなければなりませんでした。私の部隊には、150 人もの人がいましたが、ほとんどがクアンスオンの人でした。私たちはクアンビン省に駐屯しました。私たちの任務は、道を開き、ロンダイの船着場まで道を通すようにすることでした。1966 年になって、私は青年突撃隊第 104 部隊の小隊長になりました。私の小隊は、ブンの川底車道を防衛しました。それは、かなり広い渓流の川底を横切る岩場です。敵は昼も夜も爆撃しました。地域全体が真っ白になりました。人々は家を壕の中に移しました。私たちも壕の中にいました。爆撃が止むと、すぐに道路に突進しました。私は女性たちに、彼らが撃ってくればそうさせておきなさい、と言いました。彼らが多量の爆弾に頼るなら、気がすむまで撒き散らさせておきなさい。彼らの落とす爆弾は、当たるとは限らないし、当たっても死ぬとは限りません。人を殺すということは、たやすくできることではありません。爆弾を見たら、顔を地面に伏せて、爆弾の破片がどこを切ろうとしても、切らせておきなさい。でも顔を切らせてはなりません。後で結婚できるように、顔を守らなければなりません。大人の女性も若い娘も、それぞれの顔があるのに、爆弾にやられたら悲惨であり、恐ろしいことです。ところが不思議なことに、私の部隊全体には 100 人以上もの人がいるのに、毎日あんなに爆弾でもうもうとする戦場の真ん中にいて、誰も何事もなかったのです！絶対に欠けることがなかったのです！」

1　［原注］1998 年。

2　［訳注 以下同様］「4 月の記憶」注 11 参照。

私は驚いた。

「あなたは冗談を言っていませんか」

「戦争はけっして冗談ではありません。私自身、信じられないほど理不尽だと思います。私たちが戦場にいたのは、決して短くはなく、満５年もいたのです。私の部隊は、その後さらにチュオンソンの山中深くまで行きました。主な仕事はやはり、道を切り開くことでした。雨季には、かわかした服は煙のにおいがして、いつもとても湿っていました。その爆撃の何年かの間中、女性たちは疱疹と白斑病にかかっただけでした」

「それは本当に不思議です。激しい戦場で、そのように人数の多い部隊の誰も何事もないなんて。この話をしても、信じない人もいるかもしれません」

「私も信じがたいのだから、世間の人は言うまでもないでしょう。実際、その時行った中で、２人は戦死しました。でも２人とも、部隊を離れていたのです。１人目はタンさんで、故郷はクアンスオンでしたが、総隊に引き抜かれて、通信兵をしていました。彼は電線を敷設しに行って、奇妙なことに、元の部隊、つまり私たちの部隊の入口のところまでちょうど来たところで、磁性爆弾に引っかかったのです。私たちは彼を収容に行きましたが、髪の一房と腕の半分しか残っていませんでした。２人目は、ウオン・ゴック・マンさんで、とてもハンサムで、歌が上手でした。総隊は彼を引き抜いて、文芸工作に行かせましたが、公演に行く途中で、やはり爆弾で死にました。でも部隊にとどまった人たちは、誰も何ともありませんでした。まるで爆弾が私たちを避けているかのようでした」

「あなたはまた冗談を言っています！」

「冗談なんか言っていません」ルーはほほえんだ。

「この話も、あなたは信じないかもしれません。それは1967年のテト[3]の時でした。その年、爆撃はとても激烈でした。でもテトには、臨時休戦しました。両側ともそのように公表していました。通常、私たちは一晩中働き、昼間は壕にもぐって眠ります。道路が塞がったり、人が負傷したり、壕が崩れたり、車が燃えたりするような不意のできごとが起こって、女性たちが飛び出していくことを除いては。平穏な日があれば、女性たちはその機会を逃すまいとします。私たちは、ちょうどテトの１日目の朝に仕事に出ました。部隊全員が出てしまい、数人の娘が残ってテトのご馳走を作っていました。そのご馳走はかなり贅沢なものでした。第14兵站所のホアン・チャー所長が、部隊に70キロ近い豚を丸々１頭贈ってくれたのです。アメリカが約束を破ると誰が思ったでしょう。彼らはテトの一日目の正午に、大量に押し寄せて爆弾を投じました。爆弾は道の真ん中に命中しましたが、誰も何事もありませんでした。でも家では、１個の爆弾が台所に飛びこみ、豚肉の鉄鍋に激突したのです！ 女性たちは岩の隙間に身を寄せて、難を逃れました。しかし、豚肉の鉄鍋は消えてしまい、豚肉の破片も残っていませんでした。女性たちは惜しがりました。「何ということ！ 家にご馳走があるので、犬や猫だけを見張っていた。ジョンソンがこっそり入りこみ、豚肉の鍋ごとかっぱらうなんて、誰が思っただろう。本当に悔しい！」」

3　旧正月。

そう言って、ルーは笑った。その笑いは、痩せて厳しい顔の上で輝いた。私はまだ驚きを止められなかった。

「あなたには、実際信じがたい話がいくつもあるのですね！」

「だからこそ、私は覚えているのです。そしてしっかり覚えています。この話もありますよ。それは1968年の中頃で、テト攻勢[4]が終わったばかりのころ、第14兵站所が英雄・競争戦士大会を開きました。私の部隊は、２人だけが参加しました。政治委員のドアン・マンさんは招待客で、私は正式な代表でした。私たちは森を越え、川を渡り、一日中歩いて、暗くなってやっと大会の場所に着きました。それはとても広い石の洞で、千人もの人を収容でき、ホーチミンルートの14番目の道標のところの山の洞窟にありました。行く前に私は女性たちに、「あなたたちはがんばって私の仕事を受け持ってくださいね。私はご馳走を食べに行くけれど、帰ってきたら、とにかく分け前をあげますから。あなた方の分け前をとっておきますから」と言いました。大会は本当に楽しくて、何もしなくてよく、発表するだけで、その後は歌い、拍手し、モントゥックやタウバイといった山菜や野生の筍で宴会をして食べるのです。夜寝るときは、足を洗うようにと、兵士が川から水を担いできてくれました。本当に皇帝や女王と変わりありません。組織委員会が私に賞品を受け取るように呼んだとき、私はとても恥ずかしくて、マンさんが代わりに受け取らなければなりませんでした。かなり大きな包みでした。私は開けないで、しっかり抱えて帰りました。今度は全部隊が楽しい時を過ごすだろうと思いました。でも開けてみると、数メートルの混紡の布と、手書きの賞状と、４本のゴムサンダルの紐しかありませんでした。おやまあ！ 私たちは涙が溢れるほど喜びました。私は女性たちに分けました。「誰がもらっても、喜んであげて、もらわない者も、ねたんだり、疑問を持ったりしないようにしましょう。さもなければ後悔するでしょう。私たちは今は生きているが、明日は死ぬかもしれないのですから」でも誰も死にませんでした。あなたは可笑しいと思いますか」

可笑しなことなど何もなかった。しかし、この勇敢な女性にとっては、すべての危険なことは、過ぎてしまうと、可笑しな話になるのだった。私は好奇心から尋ねた。

「あなたは何年に復員しましたか」

「一時休戦になったときです。1970年に私はタインホア省青年団に移りました。組織は私が学校に行けるようにしてくれました。でも私は勉強できなかったのですよ。とても頭が痛くなったのです。爆弾は私を避けたけれど、字も私を避けるのです。省の青年団に数年いてから、私はタインホア食糧倉庫に移りました。1990年に私は退職しました。夫も退職していました。あの人も以前は青年突撃隊でした。私たちは戦場で出会い、愛しあったのです。今彼は弱っていて、もう何年も腸の病気で、野菜しか食べず、蛋白質を食べることができません。たびたび、特に天気が悪くなると、寝台で寝たきりになります。でも私たちはとても幸福に暮らしています。私と夫の退職金は、全部合わせて40万ドンになりました。家には５人います。夫婦２人と娘２人、それに今年83歳の私の父です。退職金をもらったとき、私は20万ドンを娘２人がもっと勉強できるようにと取っておきました。５万ドンを電気料金に、15万ドンを米を買うのに当てました。さらに家のすべての費用については、私の蒸し器にかかっています。毎日私はおこわを売りに出て、娘たちの

4　1968年の旧正月に、南ベトナムの解放勢力と北ベトナムからの人民軍勢力が、南部各都市や米軍施設に一斉にしかけた総攻撃。その後の和平交渉や米軍撤退を引き出したが、解放勢力の損害も甚大であった。

学費にし、家族全部を養います。娘たちに、父母は無学だから、あなたたちは一生懸命勉強しなければならない、本当によく勉強しなければならないのだと言っています。幸い、娘たちは２人とも、勉強がとてもよくできます。上の娘のホアイ・トゥーは、ラムソン特別学校の 12 学年です。最近、全省のフランス語の上手な生徒テストで、２等を取りました。今は選抜隊にいて、国家の上手な生徒テストを受ける準備をしています。ザン・ティエンも、省で文才のある生徒の１人です」

「あなたはザン・ティエンの小説を読みますか」

ルーは首を振った。

「私は目が回るほど忙しく、本を読む時間などありません。娘が熱心に書き、書いては消し、紙を浪費するのを見て、黒板２つとチョーク１箱を苦労して買ってやりました。娘が一日中でも、一年中でも書けるように」

「君は黒板の上に文を書くの」

私は驚いて、ザン・ティエンの方を向いた。子どもははにかんで笑い、部屋の端から端までを占めている、２つ並んだ黒板を指差した。

「はい。あれが私の原稿です。気に入らないところは、消して書き直します。字が２つの黒板にぎっしり詰まると、物語を終わらせます……」

私は笑い出した。おそらくこの世で、ザン・ティエンのように文章を書く作家はいないだろう。チョークで黒板に書く。原稿を直すのも黒板の上である。それなのに完璧である。文章や言葉は明快でわかりやすい。私は尋ねた。

「君はひとつの話を長い間書くの」

「場合によります。ある短編は、半月で書きました。たとえば「母さんはおこわを売る」の物語は、私の母について書きました。青年突撃隊のころからの母の話もです。速く書いた物語もあります。姉のトゥーの自転車について書いた「おんぼろ自転車」のようなものです。あるいは、「ザン叔母さん」「サック伯父さん」のような話も、とても速く書きました。サック伯父さんは、私の実の伯父さんですが、酒飲みで、気難しい人でした。私が物語を書き終えて、伯父さんに読んで聞かせる前に、死んでしまいました。私が書く人物は、すべて本当にいる人たちです。私は作り話はしません。毎日、私の人物は、黒板の前に立って、自分自身についての話を読むことができるので、正しくないところは、私に直すよう意見します。とても怒って、すぐに消してしまった人もいました。そうすると物語はなくなってしまいます」

そんなこともあるのだろうか。おそらく、子ども作家ザン・ティエンほど、自分の人物と近い作家はいないだろう。人物は反乱を起こし、作家に反対し、作品を破壊することもできる。私は尋ねてみた。

「君はたくさん読書するの。どの作家が一番好きなの」

「以前は私はあまり読みませんでした。本がなかったからです。本はとても高いからです。母は買えませんでした。最近、私の短編集『家から学校まで』がキムドン出版社で印刷されたとき、私はハノイまで行って、本を受け取り、原稿料をもらいましたが、出版社の人たちがリュック一杯の本をくれました。私は家に持って帰って、一晩中読みました。どの物語もおもしろいと思いました」

ルーは笑った。

「去年、タインホア教育局局長のレ・ディン・ヒン先生が、娘に「若い才能基金」の賞金をくれました。ホーチミン市のホアンカウ外国語学校も、娘に毎年1人当り100ドルの奨学金をくれます。私は娘が本を買うのに使わせてしまいました。来年のことは、予定を立ててあります。ホアイ・トゥーが大学に受かったら、父を故郷に帰して、叔母に面倒を見てもらいます。夫はタインホアにいて、ザン・ティエンを育てます。私はトゥーについてハノイに行きます。朝はおこわを売りに行き、夕方は野菜を売り、金を稼いでトゥーが大学で勉強できるようにします。娘たちは大学を卒業しなければなりません。もしかしたら、今後大学を出ても、失業するかもしれず、私のようにおこわを売るだけかもしれません。でもおこわを売る人も、大学の水準のあるおこわ売りでなければなりません。以前、アメリカの爆弾も私を殺すことはできませんでした。今、全国が平和になったのに、貧乏や苦労が私に毒を飲ませるように、じわじわと殺すようなことがあっていいものでしょうか。そんなことは一番信じられません。それは理不尽なことだからです。この上なく理不尽だからです……」

【片山須美子　訳】

解説：「母と子」－ひとつの人生の話、ひとつの時代の資料

ブイ・ティ・ロアン

少女はまだ8学年なのに、読者の注意を引く作品を書く作家としてすでに有名である。文章の才能は「神童」の質がある。それは誰なのか。どんな環境に生まれたので、そんな才能と成功を授かったのか。読者は、愛読すればするほど、それらの疑問に答えてほしくなる。おそらくそのため、作家チャン・ダン・コアは「母と子」を訪ね、会って話すことで、答えを見つけてあげようとしたのだろう。

「インタビュー」はタインホア市のチャン・ティ・ルー（1946年生まれ）の家で、1998年に行われた。そのとき、彼女の娘のグエン・ザン・ティエンは13歳だった。インタビューの内容は、作家チャン・ダン・コアによって「母と子」の記述となった。それは2001年にハノイで出版された青年出版社の『よく会う人々』の中にあり、約10ページ（13 × 19cm）の長さである。

母と子は、2世代に属する2人の母子であり、現在、20世紀末から21世紀初めの今日の時間の中で、我々とともに生きている。

母は、すでに「退職」した人である。退職金は生活するのに足りず、おこわを売って、彼女のほかに、1人の老人、1人の病人、そして普通学校に通う2人の娘がいる5人の家族を養わなければならない。

母は、対米抗戦の青年突撃隊員であった。さらに小隊の指揮官でもあったが、競争戦士あるいは英雄ではないだろうか。なぜなら彼女は、1968年の半ば、テト攻勢の後に、ホーチミンルートの第14番目の道標のところにある山の洞窟で、第14兵站所が開催した「英雄・競争戦士大会」に出席した正式代表だったからである。

女性英雄は、貧しい農民出身であった。自分の7人の兄弟姉妹や、同郷の多くの人々と同様に、学校に行けなかった。彼女は青年突撃隊が組織した文化補習学級のおかげで、読み書きができるようになった。学歴がないので、現在「失業」しており、おこわを売る商売をしなければならない。彼女は何としてでも、子どもたちを大学まで行かせなければならないと決心した。

彼女の子どもたちは、貧しい生まれの娘たちだが、勤勉で勉強がよくできる。2人とも多くの賞をとったことがあり、その賞は、学習の成績によって、また才能を競う競争などによってであった。最初の成功をおさめるために、「母と子」は非常に多くの努力をして、貧乏や極度の困難を乗り越えなければならなかったが、ザン・ティエンの「文を書く」仕事についての詳細を読むだけで、それがはっきりわかる。

少女は文学が好きだが、本を買う金がなく、本が少ししか読めなかった。文学の創作でも、紙を買う金を節約するため、黒板とチョークを使わなければならない。今日の「母と子」の、貧しさに抵抗する努力は、昔の戦争での必勝精神に劣らないといえるだろう……。

「母と子」の物語は、我々に社会と歴史の多くの資料を提供してくれ、読者を、自分が生きた一時期の雰囲気をもう一度体験させ、あるいは抗米戦争の時期の生活と人間について理解させてくれる。

ルーが思い出させるひとつひとつの出来事は、歴史と結びついた正確な時間・空間・地名を持つ。それは1967年のテトの元日に、豚肉の鍋を吹き飛ばした爆弾である。それはホーチミンルートの第14番目の道標のところにある山の洞窟で開催された「英雄・競争戦士大会」である……。彼女が思い出す死んだ人々は、名前を持ち、明確な経歴を持ち、ルーの記憶の中で、そして多くの親しい人々、同じ部隊の人々、今日生きている人々の記憶の中で生き続けている。

ルーとともにあるのは、貧しい農村の出身で、幼い時は学校に行けず、国が戦争をしている時に成長した人々の世代全体である。彼女らは、平然と、純粋に、戦争に行き、自分の運命と生命を時局に託した。困難

と危険と欠乏の中で、彼女たちは力の限り働き、力の限り生き、「私たちは今は生きているが、明日は死ぬかもしれない」と思っていた。しかし、そう思うことは、気ままに生きるためではなく、よりよく生き、後悔しないように生きるためであった。彼女たちは多くのことを信じることで、力を生み出した。その中には、「爆弾は当たるとは限らないし、当たっても死ぬとは限らない」という、偶然を信じることさえあった。実際、彼女たちは幸運にも死を免れたが、なぜ自分がそんなに幸運だったのか、信じられなかったのである！

過ぎ去った日々の記憶を思いおこすとき、ルーはいつも気軽なふざけた調子で話す。それは、ひとつの時代の人々が担い、乗り越えなければならなかった困難の程度、戦争の苛酷さ、大きな犠牲の数々を和らげるかのようである。

しかし我々は、彼女がおもしろおかしく自然に物語る、具体的な生き生きとした詳細から、理解できることがある。それは、英雄や競争戦士たちが大会に参加した日々に、山菜ばかりの宴会を、「皇帝や女王と変わりない」と喜ぶことである。それは何百人もいる、すぐれた青年突撃隊の女性の一部隊全体への賞品が、数メートルの混紡の布と、4本のゴムサンダルの紐だったことである。それでも彼女たちは、涙が溢れるほど喜んだ。そして彼女の話を聞く者も、きっと心の中で、涙をため、言葉に詰まるのをひそかに感じたであろう。彼女と同じ時を生きたことのある者は誰でも、数メートルの混紡の布の価値がどれほどのものであるか、とてもよくわかる。特に、「服は煙のにおいがして、いつもとても湿っていた」環境にあった青年突撃隊の女性たちにとって……。

作家チャン・ダン・コアと話すとき、ルーはいつも自分の話を「信じがたい」と言い、誰も信じないだろうと言う。まさに、困難に満ち、物質的に欠乏しながら、情感と夢に溢れ、当時の人々の情に富んだその日々を生きたことがなければ、信じることができないだろう。

しかし、それは事実なのである。

ルーの「信じがたい」話は、ベトナム民族が、ルーの世代のような1人の人間の一生に値する長い歴史的段階の間、耐えて経験しなければならなかった戦争での困難な苦しみや、こうむった犠牲と厳しい残酷さの小さな資料であり、精密な挿し絵なのである……。

【片山須美子　訳】

四月の記憶

チャン・ダン・コア

I

私はブイ・クアン・タンに会った日を、今でも覚えている。彼は1975年4月30日の昼、独立宮殿[1]の屋上に軍旗を立てた人である。道の埃と硝煙に染まった、半分が赤く半分が青いその旗は、平和を表わす鳩の両翼に変わった。そしてそれこそが、抗米救国戦争の勝利の終点であった。私はブイ・クアン・タンに、旗を立てたことについて尋ねたいと思った。ところが彼は、1人の死んだ人について、悲しげに語ったのである。それは、ゴ・ヴァン・ニョーであった。ブイ・クアン・タンを通して、私はゴ・ヴァン・ニョーが、フオンザン兵団203旅団第1戦車大隊の大隊長の大尉であったと知った。4月30日午前7時、ゴ・ヴァン・ニョーの指揮する第1大隊は、サイゴン橋に進撃した。それは、サイゴン－ビエンホア高速道路上にある986メートルの長さの重要な橋で、我々の進攻の鋒先の枢軸であった。そのため、敵は必死に防御した。敵は14台もの戦車と装甲車、歩兵中隊2隊を動員し、橋の防衛に配置した。さらに飛行機が爆弾を注ぎ、戦艦が川から射撃して援護した。敵の戦車3台が、橋の真上で遮っていた。他にも数台の戦車が、地面の低いところに隠れ、橋の方に向かって砲身をもたげていた。彼らはそれらの戦車を、地中トーチカ、地上トーチカ、移動トーチカにして、断固最後まで固守し、何としても我々の進攻の鋒先を遮ろうとしていた。橋はとても長い上に、アーチ型をしていた。そのためわが戦士たちは、敵を観察することが、特に橋の向こう側の戦車を観察するのが、非常に難しかった。一方、敵の方はいともたやすく、我々を発見した。先頭を進んだ我が方の戦車3台が、撃たれて炎上した。炎はすさまじく燃え上がった。鉄の焦げるひどい臭いがした。戦闘は激烈に行なわれた。敵がどこにいるのかもわからず、わが方のどの戦車も、突出しては敵に撃たれて炎上するものがほとんどであった。ゴ・ヴァン・ニョー大隊長は、戦車の蓋を押し上げ、真暗な弾雨の中に身をすっかり乗り出し、敵を観察し、部隊を指揮して、橋を渡ろうとした。「サイゴンをめざそう！ 進め！」それは、焦げ臭い硝煙の中の、彼のかすれた叫び声であった。それはまた、この世で響いた彼の最後の声であった。全大隊は一気に橋を渡り、戦車の砲塔の上に突っ立った指揮官の号令に従って、進撃しながら敵を倒した。その後、連絡が途絶えた。しかし兵士たちにはまだ、ゴ・ヴァン・ニョーが砲塔の上に半身を突き出して立っているのが見えた。彼は大隊が進撃するのを指揮し続けていた。号令をかけて指揮していた。ゴ・ヴァン・ニョーが橋の上で戦死していたと、誰が思っただろうか。AR15銃の一発の弾丸が、彼の額に命中していた。しかし、戦車の戦士たちは、彼が指揮していた戦車の中の、彼のそばにいた兵士たちさえもが、彼が戦死したこと、砲塔の上に立ったまま死んだことを知らなかった。彼らは、彼の号令に従い、彼の影に従って進撃し続け、目標を次々に倒していった。ゴ・ヴァン・ニョーはそのようにして、まさに完全勝利のその日に、サイゴン市内に入ったのであった。まさにその歴史的瞬間に、彼と結ばれていた間ずっと従順で、彼がすでにこの世にいなくなっても彼に貞節だった妻が、キンバック地方[2]のある小さな村で出産しようとし

1 ［訳注・以下同様］ベトナム共和国大統領官邸。

2 キンバック（京北）とは、史跡の多い現バクニン省の雅称。ロアンのいたヒエップホア県は、現バクザン省であるが、当時はバクニンとバクザンがハバック省として統合されており、またヒエップホア県はバクニンに近いため、キンバック地方とし

ていたことを、彼は知らなかった。そして彼の血の最後の一滴であり、炎の地クアヴィエト[3]での彼女との唯一の記念である男の子が、この世に生まれた。それは、再会の日の彼の出現であった。そして、大隊長の息子で、父の戦死した日に生まれたゴ・ヴァン・ヴィエトは、今では20歳になった。ヴィエトが満18歳になった年、彼の若い母であり、烈士ゴ・ヴァン・ニョーの妻であるロアンは、夫の部隊であった203連隊に息子を連れて行った。「私にはこの一滴の血しか残っていませんが、それはニョーの血の滴でもあるので、私はこの子をあなた方に託します。この子が父親の後を継げるように、昔の父親のような戦車隊員になれるようにしてください……」

ブイ・クアン・タンの話のままに、私は203連隊に行ってみた。

「ヴィエトに会いたいのですか」

前身が203旅団である203連隊の連隊長グエン・ヴァン・トンは、にこやかに私の手を握った。

「彼はもう下士官です。夜、あなたに会いにここまで来るように言いましょう。とてもハンサムな子です。父親に似てハンサムで、広い額がそっくりです。あの子は、大隊の大事な子なのですよ。誰もが彼を可愛がります。ブイ・トゥンさんが私に手紙をくれたところです。トゥンさんのことは、きっと知っていますね。彼は元旅団の政治委員で、グエン・ヴァン・テさんと一緒に、ズオン・ヴァン・ミン大統領を逮捕した人です。今彼は退役して、ずっとサイゴンにいるのです」

そう言って、グエン・ヴァン・トンは私にブイ・トゥン政治委員の手紙を渡した。

> トンさん、革命の成果を防衛しているあなた方すべてに挨拶させてください。トンさんはヴィエトをしっかり助けてやってくださいね。私はあの子が可愛くて仕方ないのですが、どうすればいいかわかりません。今や年取って身体も弱り、その上退役してしまって、あの子を助けることができないので、すべてトンさんにお願いします。トンさん、あの子を可愛がってください。可哀想に、あの子には生まれたときから父親がいないのです。ニョー君のことを思って我々にできることは、あの子を養育し、成長させるようにすることだけです……

「トゥンさんはずっと私に手紙をくれます。どの手紙にも、ヴィエトのことが書いてあります。あの子についての話はとても長いのです。作家には小説が書けるほどですよ。おそらく映画が1本作れるでしょう。私も少しは知っていますが」

「もしかして、あなたもニョーさんの部隊にいたのですか」

「はい。ニョー君は大隊長でした。私はその時、偵察小隊の副隊長だったのです。私の主な仕事は、敵の状況を探って上部に報告し、上部が状況を把握して処理の方法を見つけるようにすることでした。私の一生でおそらく、あれほど強く美しい愛を見たことはないでしょう。そしてその愛の結果が、今は私の兵士であ

たと思われる。

3　17度線のすぐ南にあるクアンチ省の地名。

るヴィエトの誕生なのです」

「何か話していただけますか」

「もちろん私の知っていることは、それほど細かくはありません。私の任務は偵察でしたが、敵の偵察であって、我が方の偵察ではありませんから。ニョーさんがロアンさんと故郷でどのように愛しあっていたのかは、私ははっきり知りません。でもロアンさんがクアヴィエトまでわざわざ、夫を探しにやってきた日のことは知っています。私が始めに彼女と会ったのです。彼女は私に挨拶しました。その時彼女はとても若く、また美しかったのです。丸顔で、肌は白くきれいでした。黒い絹のズボンと青紫色の上着を着ていて、片手で菅笠を胸の前に抱え、片手は布の袋を下げ、足にはゴムのサンダル－軍隊の型のゴムのサンダルを履いていたのを、今でも覚えています。彼女を見て、私はすぐに農村の人だと思いました。尋ねてみると、そのとおりでした。彼女は、ハバック省[4]ヒエップホア県ドゥクタン社[5]の人でした。農村の人はいつも、濃く深く、激しく愛するものです。どれほど強く愛せば、わざわざ戦場までやって来るでしょうか。クアンチ省のクアヴィエトは、当時燃えさかる戦場でした。敵が四方に駐屯していました。不慣れな土地で、うっかり敵の地に入りこみ、敵に道を尋ねようものなら、命を落としてしまいます。だからニョーさんに、彼の妻が訪ねてきていると言っても、彼は信じませんでした。信じられるわけがありません。彼は私がだまして、からかっていると思い、どうしても迎えに行きませんでした。ロアンさんは、ニョーさんの塹壕まで手探りでやってきたのです。その時彼は初めて呆然としました。本当に妻だったのです。100パーセント本当でした。結婚したばかりの妻でした。そこで私たちは、あわただしく、2人のための幸福の部屋を用意しました。幸福の部屋といえば聞こえはいいですが、実際には、覆いのついた壕で、夫妻がしばらく滞在するようにと仲間たちが譲って出て行ったものでした。当時戦場に、ゲストハウスなどあるわけがありません。でも戦場を口実に、暮らしが乱雑になったり、なおざりになったりしてはなりません。私たちは壕をパラシュートの布や、新聞紙で装備し、それからひそかに係を決めて注意深く警護し、壕の屋根に葉を挿しました。それは、「軍事機密」を示す印でした。ある者はさらに、壕の入り口に立てた砲弾に、「極秘軍事区、立入禁止」と走り書きしました。我々は、我々のゴ・ヴァン・ニョー大隊長と、その若く美しい妻が、もっとも激烈な戦闘に入る前に、本当に穏やかで安らげる時を持てるようにと望んだのでした」

II

戦車隊員のゴ・ヴァン・ヴィエトは、あの1975年の春に生まれた。彼が生まれた年は、歴史的迅速作戦の年であり、彼が誕生した日は、同時に、大隊長であり、英雄の名簿には載っていないが、英雄的な戦車兵であった彼の父が死んだ日であった。その若い兵士は、今私の前に、恥ずかしそうに坐っていた。私は黙って彼を見つめ、彼の中に、死んだ勇敢な大隊長の面影や特徴が少しでもあるかを探そうとした。彼は私が想像していたよりも若く、思っていたよりもハンサムであった。ハンサムと言うのは、間違いかもしれない。正しくは、可愛いのである。髪は黒く艶やかで、やわらかに波打っていた。肌は白くきれいだった。赤く濡れた唇は、一筆で描いたように整っていた。両頬は紅をさしたように赤かった。見た目は、年頃の少女の外見であった。彼は机の縁をもてあそびながら、囁くような声で私たちに答えた。それからはにかんで笑った。そして、新聞記者の「伯父さん」の細かい質問に答える代わりに、自分の母と父方の祖母を訪ねるように、

4 ハバック省は1996年にバクザン省とバクニン省に分割された。ヒエップホア県はバクザン省に属する。

5 社（サー）は、ベトナムの末端行政単位。自然村をいくつか集合させたもの。行政村。

「伯父さんたち」を故郷へ招待すると言った。その祖母は、3人の息子が烈士であり、国家から、「ベトナム英雄の母」[6]の称号を贈られたばかりであった。

III

雑誌『軍隊文芸』の軍用車は、大きな穴のあいたでこぼこの赤土の道を通り、ハバック省ヒエップホア県ドゥクタン社まで、我々をガタガタと連れて行った。作家のゴ・ヴィン・ビンのほかに我々と一緒に行くのは、ゴ・ヴァン・ヴィエト下士官と連隊の政治主任のグエン・マイン・ホン少佐であった。ドゥクタン社に着くと、我々は診療所に立ち寄って、ロアンを探した。連隊長のグエン・ヴァン・トンの言葉どおり、ロアンは、今では年配に近づいたとはいえ、まだ若くて美しかった。農村では、50歳の女性は老女のように見られていた。しかしロアンはまだ老女の様子は少しもなかった。ニョーが戦死した年、彼女はまだ28歳で、それからずっとそこに住んでおり、再婚しなかった。人生の春は一度しかなく、人の一生も一度しかない。天は彼女に損失を与えたが、なぜ、さらに苛酷にも、ありあまる容色を与えたのであろうか。損失を埋めるためであろうか。その容色をもってすれば、彼女は支度をととのえて、新しい旅に出かけることができたであろう。絹に覆われた道がどれほど、彼女の眼前に広がり、彼女が足を置くのを待っていたであろうか。なぜ彼女は望夫の女[7]となって、立ち続けていたのか。この国にはどれほど、そんな望夫の女がいることか。彼女の夫の母であるスウの家だけでも、2人の望夫の女がいた。しかしその濡れた眼の光、象牙のようなきめ細かい肌は、石になどなりはしなかった。

「実際とても多くの人が、私のところに来たがりました。その中には、ニョーと同じ部隊だった人たちまでいたのです。彼らは私をとても思ってくれました。ニョーのために、私と子どもを思ってくれる人もいました。彼らはニョーに代わって、子どもと私の面倒を見ることを許してほしいと言いました。でも私は、義母と子どもがいとおしく、ニョーのこともさらにいとおしかったのです。誰も彼の代わりになることはできません。彼らがとてもよい人たちで、心の底から私を思っているとしても。でも、ニョーではない別の男性のことを考えるたびに、内臓が締めつけられるようでした。私が再婚したらどうでしょうか。義母は、すぐに賛成するでしょう。義母もそれとなく何度も、私を再婚させるつもりがあることを示しました。でも、まさに義母が私をすすんで再婚させようとするからこそ、私はそうできなかったのです。もしそうしたら、義母をとても苦しめるからです。義母はすでに息子をなくしたのに、嫁まで失うのです。子どももそうです。すでに父をなくしているのに、今度は母を失うのです。母はまだこの世にいるのに。そう考えると、私は再婚することができませんでした。人間であるということは、とても難しいのですね。私の義姉もそうでした。ニョーの実兄のドンの妻です。ドンさんは中佐で、連隊の政治委員だったときに戦死しました。その時義姉はまだとても若く、幼ない女の子が1人いるだけでした。それから義姉も、今までずっとここにいて、おばあさんになってしまいました。ニョーの実弟のハオだけは、22歳で戦死し、まだ一等兵で、結婚するひまもありませんでした。もし彼が妻を娶っていたら、おそらくうちには、もう1人寡婦が増えていたでしょう……」

「きっとあなたは、普通学校[8]のときからニョーさんを愛していたのでしょうね」

6　民族解放・祖国防衛に積極的に貢献した母親に贈られる英雄称号。残された老母の戦後の困窮が問題になり、1994年国会で制定された。戦死した子どもの数や、一人っ子かどうかで等級が決められ、住居や給付金も与えられる。

7　妻が帰らぬ夫を待ち続けて、ついに石になったという伝承をさす。

8　日本の小学校・中学校・高校に当たる。ベトナム戦争当時の北ベトナムでは、4・3・3の10年制であった。

「いいえ、普通学校のころは、ニョーは私のことを全く知りませんでした。彼は私より10歳以上年上なのです。彼が入隊したころ、私はまだ幼く、まだ学校に行っていました。それから私は社の青年運動に参加しました。そのころは戦争で、困難で危険で、さらに飢えていましたが、とても楽しかったのです。毎晩集まり、団体活動をして、歌を歌い、それからバーサンサン運動[9]、バーダムダン運動[10]がありました。そして救急活動、救援活動、爆撃の穴埋め、砲撃地まで弾薬を運ぶ活動がありました。それからチュオンソン山脈への突撃[11]です。どの日も人でいっぱいで、騒がしく行き来していました。大きな道路には、出陣する軍隊がどこまでも続きました。どの青年も若く見えました。彼らは歩きながら、勇壮な歌を歌いました。それから、道を自転車で走ったり、水田で田植えをしたり、草取りをしている若い娘たちに、からかいの言葉を投げました。「ぼくを待っていてね。ぼくは帰ってくるから」「ねえ君、ぼくのことを覚えて、待っていてね」その青年たちのうち、帰ってきた者がいるでしょうか。ある晩、私たちは、ニョーさんの家の庭に集まりました。数人の娘たちがつねりあい、スウ母さんの嫁になろうと争いました。「お母さん、私たちはここに一列に並ぶから、お母さんの気に入った人に印をつけてください！」「お母さん、私を優先してくださいね。私は基本階級[12]です！」「いいえ、私の方がもっと基本です。私は烈士家庭です」「お母さん、もうすぐニョーさんが休暇で帰ってきたら、私を彼と結婚させてくださいね！」そうです、そのように、わめきちらしていました。どの娘もよくしゃべりました。でもどの娘もニョーさんの顔を知りませんでした。ふざけすぎて、本当になってしまいました。ニョーさんが休暇で帰ってきて、突然私の家にやってきたのです。私は彼を見て驚きました。最初私はどこかの兵士が、竹をもらいにきたのだと思いました。その人が頼むときに恥ずかしい思いをしないようにと思って、私はすぐに言いました。「うちの竹はあそこの藪です。どれでも気に入ったのを切ってください。社会主義の竹ですから」彼は恥ずかしそうに笑いました。「いいえ、竹をもらいにきたのではありません。ぼくの名前はニョーです。ラムとスウの息子で、ドンの弟です。一週間の休暇で帰ってきましたが、母が君と君の家族を訪ねるようにいうのです……」そうです。彼はそれだけしか言えず、顔を赤くしました。両手はかわるがわる、ボールを回すように、鉄兜を回していました。それから彼は行ってしまいました。数週間後、私は手紙をもらいました。1973年の中頃になって、やっと彼は休暇で帰ってきました。私たちはその短い休暇の間に結婚しました。その年、義母が家を建てました。工事はとても大変でした。家の地盤固めも終わらないうちに、彼はまた行ってしまいました。そしてそれ以来、彼はもはや帰らなかったのです……」

「あなたが彼を訪ねて行ったのはいつですか」

「1974年の中頃です。夫の父が、私に会いにいくように勧めたのです。義父は変わった人で、めったに話さない人でしたが、非常に子どもを愛していました。子どもが戦死したという知らせがあったとき、義父は石になったように、ずっと坐っていました。表情に何の変化もないかのようでした。家でドンさんの法事

9　ベトナム労働党の青年組織であるベトナム労働青年団が1965年初に発動した青年動員運動。バーサンサンとは「3つのすすんで」という意味で、「すすんで入隊し、すすんで生産を推進し、学習し、すすんで祖国の必要とするどこへでも行き、どんな仕事でもする」という内容。

10　女性大衆組織であるベトナム女性連合会が1965年3月に発動した女性運動。バーダムダンとは「3つの担当」という意味で、入隊する男性に代わって、生産・家庭・戦闘（防衛）の3領域を女性が担当するという内容。

11　ベトナム労働青年団は、バーサンサン運動の一環として、1965年6月に抗米救国青年突撃隊を組織したが、その主な任務は、チュオンソン山脈に、北部と南部を結ぶいわゆるホーチミンルートを建設することであった。隊員の過半数は若い女性であったといわれる。

12　労働者・貧農・雇農階級出身者をさす。

を行なっていたときに、社がハオの戦死の知らせを持ってきたのを、今でも覚えています。社の人たちは、家で法事をしているのを知らなかったのです。義母はすっかりショックを受け、もう少しで倒れるところでした。一方義父は平静でした。平然と茶を入れていました。手が少し震えていました。でも表情は、何もなかったかのように、落ち着いていました。それから、「あの子はどこをやられたのだ。あの子を殺した弾はどこから来たのか。前からか、それとも後からか」とだけ尋ねました。私はなぜ義父が、そのことにしか関心がないのかわかりませんでした。ニョーも含めて、義父の子どもたちはすべて、前方からまっすぐ撃ってきた弾に倒れたのでした。息子が戦死しても、義父はいつもそのように、何事もなかったかのように、平静でした。そして夜中になるのを待って、家中が眠ってしまうと、義父は初めて寝台にもぐりこみ、布団を被って一人で泣くのでした。私がニョーを訪ねたのも、義父のおかげでした。義父は「私はもう年老いた上に身体が不自由なので、あの子に会いに行けない……」と言いました。（義父は 1972 年に自転車で転びました。家が貧しく、年中飢えていて、治療費もなかったので、障害が残ってしまいました。義父はよろよろ歩き、とても大変でしたが、最後には寝台に寝たままになり、死ぬまで寝たきりでした）「あの子のところに行きなさい」義父は私に勧めました。「もうすぐきっと大きな戦闘がある。今度の行軍で、あの子はもう帰らないかもしれない。あの子は私の息子だ。父親にはわかる。何とかしてあの子のところに行って、あの子と少しでも一緒にいなさい」私が躊躇しているのを見て、義父は言いました。「金がないのか。家には値のつく水牛が 1 頭残っている。いいから、私が売って金を作ろう。あの子のところに行きなさい」少し考えて、義父は言いました。「私は嘘をつけと言っているのではないが、この場合は本当のことを言ってはいけない。もしあの子に会ったら、家には食べるだけ十分にあると言いなさい。私も病院に行って、足を治すことができて、治療に金はかからなかったと言いなさい。それから忘れずに、この瓦葺きの家のことを話して聞かせなさい。立派な家で、家の中には足りないものはないと言いなさい。少しぐらい言いすぎてもかまわない」そして私は荷物をまとめて、出かけたのです……」

彼女は話を止めた。一陣の冷たい風が吹きぬけたかのように、丸い両肩が静かに震えた。私は彼女の顔を見る勇気がなかった。私は彼女の仕事場でもあり、主な住まいでもある部屋を見回した。部屋は簡素で、何の設備もなかった。1 台の大きな戸棚が遮るように置かれ、薬を収納するとともに、1 枚だけの花ござを敷いた 1 人用の寝台を隠す衝立てにもなっていた。外には、底を露わにし、竜眼の落ち葉で溢れた溜め池がひとつあった。診療所は全く人気がなかった。

「なぜあなたは、ニョーさんが戦死した日から、家にいないで、ずっと診療所に住んでいるのですか。ここは診療所とは言っても誰 1 人いません。もし運悪く風邪をひいたり、何かの病気になったりしたら、特に真夜中など……」

私は、部屋中を覆う重い雰囲気を追い払おうとして尋ねた。

「家にいることはできないのですよ。ニョーの家にいると、どんな物も彼を思い出させます。家はあとで建ったものですが、昔の土地の上に建っています。家の叔母や叔父や兄弟たちは、私をとても思ってくれて、私のために 1 間を別にしてくれました。でも 1 人でいると、とても恐いのです。家はがらんとしています。1 人足りないと、すべてが足りなくなるのです。ヴィエトが入隊した日から、私はここに移ってきてしまいました。ここにはとにかく人がいて、寒さを減らし、少しでも悲しみが消えるのですよ……」

そう言ってロアンは立ち上がり、戸を閉め、当直の看護師にいくつか指示を出すと、私を連れて家に急いだ。

ニョーの家は、村の奥にあった。それは1973年から建っている、3部屋の瓦葺きの家であった。瓦屋根は竜の鱗の形をしていて、雨と日差しですでに黒ずんでいた。家は暗く静かで、寒そうで、教会のある一区画のように森閑としていた。今は73歳のスウが、末の息子と一緒に住んでいるだけであった。彼女は1部屋すべてを、戦場で死んだ3人の息子を祀るのに当てていた。1つの祭壇に3つの線香の鉢と、3人の息子の写真が集められていた。初めに1973年に戦死した、連隊政治委員の中佐ゴ・ヴァン・ドン、次に1968年に戦死した一等兵のゴ・ヴァン・ハオ、最後に1975年4月30日にサイゴンへの要路で戦死した、戦車大隊長で大尉のゴ・ヴァン・ニョーである。

ロアンは我々を義母と話させておいて、きびきびと庭を掃き、家を片づけた。彼女を見ると、1人の従順な嫁の、機敏でしとやかな様があった。この20年以上、彼女はそのような嫁の役をするのに慣れていた。夫のいない嫁であったが……。

「私はニョーが可哀想です」

スウの声は沈んだ。

「家は貧乏でした。子どもたちの誰も、普通学校を修了できませんでした。ニョーも7学年を終えただけで、軍隊に入りました。その前は、弟を養う金を稼ぐために、働きにも行っていました。軍隊に入って、1か月5ドンの給料をもらうと、私を助けるために、使わずに送ってくれました。結婚するために休暇を取って帰ってきたとき、私はこの瓦葺きの家を立て直していました。その前は、藁葺きの家で、雨も降らないうちに雨漏りし、風も吹かないうちに寒くなっていたのです。あの子が帰ってきた日、家はもう解体していて、その夜、雨で寒かったのに、あの子は庭で寝ていました。今、あの子がここに帰ってきて、家は立派になったのに、あの子はずっと外の庭で寝なければならず、家に入ってくることはできません。可哀想に。あの子は、瓦葺きの家には住めない運命なのです。家は今でもこんなに広いし、こんなに暖かいのに、あの子は外のあの庭で、露と風に当たったまま横たわっていなければならないのです……」

母は手拭いを取って涙にひたし、それから静かに、開け放った窓の向こうを指差した。そこは広い庭だった。パイナップルの畑の背後に、数本の白檀柳の木が、霧のような小糠雨の中に悄然と立っているのが、この家の烈士の墓地であった。そこには、テト[13]を機に建てられたばかりの4つの墓があった。家の3人の勇敢な息子全員が、そこに運ばれ横たわっていた。3人の息子の墓のそばには、軍服を纏ったことはなかったが、革命の兵士であった老兵の墓があった。それはゴ・ヴァン・ラム老人で、数年前に亡くなったばかりであった。

「お母さんは、ニョーが戦死した知らせをいつ聞いたのですか」

「あの子が死んだその日にわかりました。その日は4月30日でした。ラジオがサイゴン解放のニュースを知らせました。村中がテトのように喜びました。夕方には大雨が降りました。水が堰から溢れました。息子がとてもたくさんの魚を捕まえ、夜にはお祝いのご馳走をするつもりでした。でも私は、桶に入れておいて、息子のニャットが帰ってくるのを待って、家族がそろったら食べようと言いました。ニャットはその日、

13　旧正月。ベトナム人にとってもっとも重要な祭日。

ハイフォンのあたりまで出かけていたのです。そしてその夜、私は寝ていて夢を見ました。ニョーが顔を血だらけにして帰ってくるのを見たのです。あの子は２人の兵士と一緒に帰ってきました。私は食事をするように引き止め、家には弟の捕った魚があると言いました。でも誰も食べようとしませんでした。兵士たちはすぐに出発するように言いました。ニョーは何も言いませんでした。私はニョーに、どうかしたのかと言いました。どうして何も言わないのかと。兵士たちが、ニョーは頭に怪我をした上に、圧迫されて正気を失い、話せないのだと言いました。ニョーは立ったまま、私をじっと見つめました。それから泣きました。涙に血が混じっていました。そこで私はぱっと目が覚めました。そのときロアンはヴィエトを産んだところでした。ロアンのお母さんもここにいて、孫の世話をしていました。私はロアンに何も言いませんでしたが、お母さんに言いました。「もしかしてニョーは死んだかもしれません。あの子が頭を撃たれたのを見ました。きっと死んでしまったのでしょう」そして翌日ニャットが帰ってきましたが、その顔が青ざめていました。私は「お前、病気なのかい」と尋ねました。ニャットは何も言いませんでした。夜になって、ニャットは台所の裏に出て、しくしく泣いていました。私が問いつめると、ニャットはやっと話しました。ニョーが死んだというのです。新聞に載っていたのでした。ハイフォンに行って、ニャットは『ニャンザン』[14]を買いました。5月1日号でした。どこを見ても赤い字がありました。新聞には、記者がサイゴン橋の上のニョーの戦闘について書いた記事があって、ニョーが戦車の上で死んだことがありのままに書いてありました。新聞記事には、レ・チョン・タンさんがニョーについて語った言葉までありました。でもニョーだとは書いていなくて、第1戦車大隊の大隊長ゴ・ヴァン・Nとだけ書いていました。第1大隊の大隊長とはまさにニョーの大隊です。ニャットはそう話しました。そして数日後、私はトゥンさんからの手紙を受け取りました。それからトゥンさん本人が、ここに来ました。トゥンさんは私にラジオを1台、ロアンにミルクを12缶くれました。あれほど情義のある人がいるでしょうか……」

「それではお母さんは、ずっとトゥンさんに会っているのですか」

「いいえ、あの人はサイゴンに行ったままだそうです。とても遠いです。ニョーの部隊の人たちならいつも訪ねてきます。毎年必ず来ますが、今ではヴィエトよりもよく訪ねてくるときがあります。ヴィエトは父親に瓜二つです。とても勇敢です。で、お前はどうして女好きの男みたいにぼんやり坐っているんだい、ヴィエト。立ってお父さんに線香を上げなさい。ドン伯父さんとハオ叔父さんにもね……」（1995年記）

【片山須美子　訳】

14　ベトナム労働党（現ベトナム共産党）機関紙。

解説：「四月の記憶」－抗米期の女性たちを象徴するひとつの例

ブイ・ティ・ロアン

ゴ・ヴァン・ニョー大尉は、203旅団に属する第1戦車大隊の大隊長だった。いくつもの戦車から成る大隊は、1975年4月30日の昼に、鉄の門を押し倒して独立宮殿に進入した。大隊の戦士たちの1人は、独立宮殿の頂上に解放の旗を立て、抗米戦争を終わらせる歴史的瞬間を記した。しかし、それより数時間前、その大隊長は、サイゴンの入り口で敵の激しい防御の炎を乗り越えようと、戦車を指揮していて戦死した。

サイゴンが解放されて20年後、作家チャン・ダン・コアは、1975年4月30日朝のニョーの戦死と、サイゴン橋での戦闘についての話を聞いたあと、ニョーの知り合いの多くの人々に出会った。作家は、ニョーと同じ部隊の上官や部下である、独立宮殿の頂上に旗を建てた人物や、ズオン・ヴァン・ミン大統領を逮捕した人物など、歴史の生きた証人たちに会った。その後作家は、ニョーの故郷の家で、彼の息子と妻と母に会った。

「四月の記憶」は、作家がこれらの邂逅について書いたものである。

物語は、短編集『沈む島』（チャン・ダン・コア著、青年出版社、2000年）に収められている（pp.43-61）。

「四月の記憶」は、ニョーの親しい人々が、以前と現在－彼が戦死した日から20年後、国が平和になり統一して20年後の現在－の彼について、彼の家族について、彼のもっとも親しい人々について語った記憶である。

ロアン（彼の妻）とスー（彼の母）の「記憶」を通して、記録は私たちに、祖国を防衛する戦争に自分の愛する子どもたちほとんどすべてを捧げた、ベトナムの農民の家庭の姿を見せてくれる。それらの烈士たちは、黙って耐えて犠牲を払った妻たち母たちを後に残したが、彼女たちはどのような思いを持ち、どのような生活をしているのだろうか。彼女たちは、具体的な女性たちであり、抗米戦争期のベトナムの女性を実際に代表している。彼女たちはまた、多くの時代を経て、民間に伝わる「望夫の女」、今も古典文学に伝わる「天地が風塵を巻き起こす時」[1]の征婦たちの表象を作り出したひとつの民族の女性を代表している。

ベトナムでは、家庭について述べる時は、女性の役割を思う。逆に女性のことを語る時は、女性がその基礎となっている場所である家庭について考える。言い換えれば、女性の幸福は家庭と結びついている。女性は家庭のために生き、夫・子ども・父母・兄弟姉妹を気にかけ、世話できるとき、本当に幸福なのである……。女性は家庭の物質的・精神的生活を考慮し、ととのえる者である。夫・子どものため、家庭のために、犠牲を払い、耐えることが、彼女たちの喜びであり、生きがいである。家庭の幸福のために、女性はすべてを犠牲にすることができるし、その用意ができている……。

しかし、戦争は女性に、彼女たちの家庭に、何をもたらしたか？スーやロアンや、スーの家庭の他の女性たち、ロアンが物語る話の中の女性たちの人生を通して、私たちは彼女たちがどれほど大きな犠牲と損失を被らなければならなかったかを想像することができる。その犠牲は家庭のための犠牲ではなく、逆に、戦争が家庭を奪い、愛する人々を奪い、彼女たちの幸福を奪ったためのものであった。従って、彼女たちの犠牲と損失は倍加し、苦しみは何倍も大きく、死よりも大きくなった。

ロアンの世代は、抗米戦争期の青年たちである。娘たちは「困難で危険で、さらに飢えていたが、とても楽しかった」中で成長した！　彼女たちは、バーサンサン運動やバーダムダン運動、負傷者の運搬、弾薬の

1　［訳注］18世紀の女性詩人ドアン・ティ・ディエムによるチューノム演音本『征婦吟曲』の冒頭部分。17世紀から18世紀のベトナム南北抗争期に、出征する夫の無事を祈る妻の思いを述べた作品で、今も人々に好まれる。

運搬に参加した。青年突撃隊に入って、チュオンソン山脈の森の中で道を切り開いた人々もいた。彼女たちが楽しかったのは、若く、前途にすべてがあったからである。そのころ大きな道路では、毎日、出陣する軍隊が群れをなして通っていた。出かける若い青年たちも楽しくふざけていた……。彼らは、「ぼくの帰るのを待っていて、僕は帰ってくるから……」と約束した。そして20年後、作家チャン・ダン・コアと話す時、ロアンはその日の記憶を思い出して、「その青年たちのうち、帰ってきた者がいるでしょうか」と問いかける。

後方に残ったのは、次第に女性だけになっていった。彼女たちは相変わらず楽しくふざけて、戦場にいる人々、名前を知っているだけで顔を知らない人々を「からかって愛した」。ロアンもそれらの女性たちの中にいた。しかし彼女の「からかった」愛情が、現実になった。ニョーと彼女は、戦時の休暇で知りあい、後方と前線の間の手紙を通して愛しあった。結婚したのも、ある休暇の時だった。彼らの夫婦生活は、指で数えられる日数だった。ロアンの場合非常に独特だったのは、夫の父の勧めに従って、危険に満ちた境界の地にいる夫に、勇敢にも会いに行き、子どもを1人得たことである。子どもが生まれた時は、夫が戦場で倒れた時でもあった。ロアンは家にとどまって、子どもを育て、嫁のつとめをし、孝行な嫁という、1人の女性の夫の家族に対する本分を果たした。彼女は特別な女性であるが、夫のいない嫁は彼女だけではない。彼女はまさに「望夫の女」であり、まさにその家には、2人の望夫の女と、3人の烈士がいた。

ロアンは他の人と再婚することもできたが、自分だけの幸福を受け入れることはできなかった。彼女は夫の母と自分の息子のことを思った。彼女は、すでにニョーを失ったのに彼女をも失うという、母たちのさらなる損失を望まなかった……。他の人のために犠牲になり、他の人のために生きることは、ベトナムの女性の伝統の道徳である。ロアンは具体的な例である。

母のスーは、抗仏戦時に青年であった世代に属する。この世代の女性も、抗戦に参加したり、生産を増やし、農業税を納め、敵と闘う部隊に食糧を供給して、前線を支援した。必要な時には、彼女たちも民工に行き、食糧弾薬を運搬したり、道路を補修した……。多くの人々は戦闘で夫・子どもを失った。彼女たちは烈士の母や妻となったり、あるいは1人で子どもを育てる母となった……。

スーは幸運にも4人の息子に恵まれた家庭を持った。しかし抗米戦争が起こると、息子のうち3人が戦争に行き、3人とも次々と戦死した。母の家には、末の男の子しか残らず、1部屋全体が1968年、1973年、1975年に戦死した3人の息子たちを「祀る部屋」になっている。

スーは最初に戦死した息子の法事のちょうどその日に、第2の戦死の知らせを受け取った。どれほどの悲しみであっただろう。戦争が終わった日、すべての人々の共通の喜びの中で、母も、ニョーが帰ってきて、これからもはや別離も死もないと希望していた。しかしまさにその晩、母はニョーの死を、奇妙な、この上なく神秘的な夢の中で予知した。

母の夢は実に奇妙である。それは、心霊の住むところ、「人の魂」の世界ー生きている者と死んだ者の共通の世界、愛情と悲しみが永遠に続く場所であろうか。とにかく、そのように少しずつ悲しみを受け入れる準備ができていたおかげで、スーは「運命」の苛酷な打撃を受けても、倒れずにすんだのである。社会と周囲の人々、家庭に残された人々の支援によって、母は立ち直り、生き続けることができた。その貢献と、大きな犠牲と損失によって、母は「ベトナム英雄の母」の栄誉ある称号を受けた。

スーは何千人もの「ベトナム英雄の母」の1人であり、女性にとって単純で神聖な天賦の幸福の源泉である、親しい人々、家庭、夫、子ども……を戦争によって破壊され、奪われた、何百万人もの普通の女性の1人である。

「四月の記憶」は、女性と戦争の問題についての、価値ある参考資料のひとつである。

【片山須美子　訳】

資料【クアンドイニャンザン［人民軍］紙1993年7月24日掲載】

ドンロク三叉路の10人の娘の25年

ヴー・ズイ・トン

25年は、生まれたばかりの子どもが父親になり、年若い青年が老いていく時間である。歴史は何度も繰り返すようで、ひとつの戦争が終わり、銃声が次第に静まり、爆撃の煙が消散する時はまた、その戦争の政治面についての議論が湧き起こる時でもあるが、その多くは部外者によるものである。声を上げるのにもっともふさわしい人々は、永遠に戦場にとどまっている。彼らと同じ部隊の者で、幸運にも帰ってきた者は、自分が過ぎ去った一時代の人間であり、自分の考え方や依って立つところに従って戦争を描き出そうとしても、そのための小説の書き方も知らないという劣等感につきまとわれるのである……。

そういった考えを分けあってくれるのなら、私と一緒にドンロク三叉路まで立ち返ってほしい。そこは青年突撃隊の10人の娘が、ひとつの爆弾の音のあと、一瞬にして、遺体は全く損なわれずに、同時に戦死したところである。

その時代を生きた者なら誰でもきっと覚えているだろうが、1968年は、戦局の中でもっとも激烈な年であった。テト攻勢のあと、アメリカはベトナムの泥沼から徐々に足を引き抜いていくことを受け入れざるをえなかったが、我々の側も非常に多くの損失を支払わなければならなかった。勢力を強化し、地盤を守るために、戦場に人員、武器、食糧、ガソリンを増援することが、この上なく緊急に必要となった。アメリカは無制限の爆弾投下から、制限つき爆弾投下の戦術に変えたが、それはすなわち、空軍と海軍の全力量を集中して、旧第4区に属する4省[1]を破壊し、前線への支援の道を切断することであった。おそらくその時期、米軍参謀の各機関の机上に、ハティン省カンロク県の地方の何千枚もの写真が撒かれていたにちがいない。中でもドンロク三叉路についての詳細な写真が目立ったことであろう。ゲアン省西部の森林山岳地域を越えると、ホーチミンルートはラム川、ラー川を渡り、ハティン省に入るが、そこで50キロほど、平野の間を隠すものもなく身をさらさなければならない。バイヴォット三叉路に来ると、道路は二本に分かれる。一本は1号線道路で、海岸に沿ってガン峠を越え、完全に敵機の監視範囲にあり、ほとんどの大きな橋は破壊され、雨季には浸水し、泥濘の地となった。もう一本は15号線道路で、ドンロク三叉路を超えてフオンケに上り、重なり合ったチュオンソン山脈に隠れて、クアンビン省の西部に入る。ドンロク社にはいくつかの小さな村落があり、裸の丘の麓に静かに隠れていたが、荒れ果てた田畑は、我々と敵の戦略的な力を量る地点になっていた。ドンロク三叉路は、一本はカムソンを過ぎて1号線道路に再び合流し、一本はチュオンケン峡谷を通ってフオンケに登る、裸の丘の麓に沿った3キロの道であり、道の縁は泥田であり、北側も雨季にはいつも浸水する道になっていた。このごく細い糸が切れると、いくつもの兵団も、米、銃弾、ガソリンを積んだ何千台ものトラックも立ち往生してしまい、米機が追跡する餌食になってしまうであろう。

以上に書いた文字の羅列は、軍事報告のように無味乾燥である。しかし当時は、我々16000人

1 ［訳注］17度線の北のタインホア、ゲアン、ハティン、クアンビンの4省

の人間はすべて、それを本当に細かく理解しなければならなかった。なぜなら、ドンロクに来ることは、死を選ぶ準備ができているということであったからである。我々は自分が何のために死ぬのか理解しなければ、すすんで死ぬことはできない。半年間ずっとドンロクは爆弾と銃弾で震動していた。ミサイルを除いても、42000以上の爆弾が三叉路に降り注ぎ、平均して3平方メートルの土地に1個の爆弾が落ちた。昼も夜も、三叉路は燃え尽くす火にさらされ、夜には照明弾に照らされた。照明弾は目がくらむほど明るく、ラ・ティ・タムが坐って爆弾を数えている高い丘から数キロ離れているのに、4枚のアルミの羽根を地面に広げたマグネット爆弾をはっきり見ることができた。爆弾の埃と煙が真っ黒に固まり、雨が降るたびに、外で掬った水を入れた甕には、爆弾の煤の膜が張った。行軍して通り過ぎていく軍隊まで含めれば、2万人近い人々が、三叉路の竹垣の下の壕の家にとどまっていたことがあった。アメリカの軍事芸術は、機械のようにきまりきっていたので、駐屯地ではこれといった損失もなしに、夜の帳が下りると、何千人もの人々が三叉路に溢れ出て、時限爆弾を解体し、爆撃の穴を塞ぎ、車が通るように道を案内した。夜が明けると、車一台、人一人三叉路にいることはできなかった。

その時、ハティン省青年突撃隊第55総隊第2中隊は、三叉路から約2キロ離れたタインロク社に駐屯していた。我々3人からなる前線の特派員グループは、青年突撃隊総隊に一日中はりつき、男女の青年たちと壕の小屋を分けあって眠った。ヴォー・ティ・タンの第4分隊は、村の中心にある4つの民家に分散していたが、そこは我々が一番よく立ち寄るところであった。20歳前後の年齢で、我々はすぐ親しくなり、いろいろなことを喋りあった。分隊長のヴォー・ティ・タンとホー・ティ・クックは、2人とも小柄で小太りで、長姉然としていた。一番年下のヴォー・ティ・ハーは、歌を小さな青い手帳に書きつけるのが好きで、中隊の文芸活動の中心だった。年月は1人1人の姿の思い出をぼんやりと覆ってしまった。なぜならそのころ彼女たちは、他の人々にように普通の人々であり、我々がハティン省の省委員会に帰ってニュースを書き、フィルムを現像してハノイに送る前に分隊と別れた時も、戦場での多くの別れのように、純真で明るい若さがあった。娘たちが、「写真を私たちに送って下さいね。写真がなければ552に来てはだめですよ」と言いながら、一字一字丁寧に住所を書いていたのを今でも覚えている。

フィルムの現像も間に合わず、記事もまだ書いていないのに、1968年4月27日の午後、その時から「ドンロクの10人の娘」という共通の名を持つようになった第4分隊の10人の娘は戦死した。ドンロクでの損害の知らせは毎日のようにあった。ドンロクでの英雄的な模範もまた少なくなかった。グエン・ティエン・トゥアンは、時限爆弾の野原を横切り、出発しようとしていたトラックの一団を止めるのに間に合った。ラ・ティ・タムは爆弾の野を走り、新しい爆弾に標識を差した。ヴオン・ディン・ニョーは車で爆弾を押して、道の横に落とし、車が通るようにした。第210高射砲大隊は、多くの高射砲分隊が倒れるまで、毎時間米機と対峙していた……。しかしこの集団的な戦死は、前線全体をおののかせた。彼女たちはすべてとても若く、誰も恋人がいなかった。その死はおそらく、彼女たち自身も気づかないうちにふりかかった。その日の夜、道を通すようにという特別命令があったが、道の真ん中に爆弾の穴が2つあり、午後からすぐに埋めなければ間に合わなかった。中隊の命令を受け、娘たちは肩にシャベルをかついで、真っ昼間に三叉路に出た。昼間に三叉路に出て任務を行えば、身を守るものは丘の麓にあるいくつかの簡単な壕しかなく、生きているのは万にひとつの幸運に頼るようなものであった。予想したとおり、何度かA3J電子偵察機が通り過ぎると、その日の午後は、地上攻撃機の群れが15回飛んできて、下方で移動している

小さな目標を狙って爆弾を浴びせた。三叉路は爆弾の煙で真暗になり、分隊は3回爆弾に埋められたが、土を振り払って立ち上がり、土を掘り、石を運んで、爆弾の穴に投げ入れる作業を続けていた。15回目の爆撃になって、作業はまだ途中だったが、ひとつの大きな爆弾が壕の入り口の前に落ち、爆弾の風圧と入り口を塞いだ土が、彼女たちを殺した。1分たち、5分たったが、監視塔からは、地面に倒れた10人のうちの誰も立ち上がるのが見えなかった。戦場全体が静まりかえり、それから同じ部隊の人々のすすり泣く声が起こった。

私がそこへ行ったときは、1人1人の顔はもはや見ることができなかった。雑木で作った戦時の棺が10人分、野戦小屋に並べられ、バナナの幹が切って線香立てにしてあった。天人花、ムア、マウダンなどのカンロクの痩せた丘の野の花が、彼女たちの周囲で紫色に咲いていた。声を詰まらせ、怒りを抱えて、追悼式は静寂の中で行われた。我々の頭上には敵機が飛び回り続けていた。三叉路では爆弾が破裂し続けていた。

その年月は過ぎ去ってしまい、ドンロクの娘たちの墓は3度移され、今は、松や白檀の葉の緑と、人々が記念碑のまわりに植えた花の香りに包まれたドンロク三叉路のそばに戻った。ドンロク社は今では、2500万立方メートルの湖から引いた水で、70ヘクタールの田を耕している。娘たちの故郷のドゥクトとカンロクには電気が来ている。アスファルトで舗装した数キロの道が、1号線道路から三叉路までをつなぎ、橋や水路も作り直された。周囲の住民は以前ほど貧しくはなくなったが、飢えと貧困は過去のものにはなっていない。今度の機会にハティン省とカンロク県は、英雄的な10人の娘の追悼式を盛大に開催するであろう。土地は貧しいが、人々は情義に富んでいる。

今では、当時の英雄と同じ部隊の人々は、人生の坂の向こう側に行く最初の数歩を歩んだ。我々は、年取った男女が、髪は白く胸には勲章をぎっしりつけて、風雪の中に立ち、かつて赤煉瓦のひとつひとつが戦勝した軍隊の歩みに合わせて響いた広場の真ん中で、震える手で小さな旗を掲げているのを、少なくとも小さな画面の中に見たことがないだろうか。ドンロクの英雄たち、何万何百万の英雄たちは、独立と自由のために倒れたが、自分を守ることはできなかった。しかしそれは、今日の我々と明日の世代が、独立、自由、幸福を享受するためのこの上ない犠牲である……。さらに10年、100年たって、忘恩背義の輩が、我々が200年以上前に生きていた英雄を、臆病で卑劣な人間のように描写するのと同じように、娘たちを戦争の「愚かな犠牲者」のように話さないだろうか。そんな暗い考えが、ドンロクの日々を思い出した時、私の頭をよぎった。一瞬悲観的になったことを、あのころの女性の友人たちよ、許してほしい。なぜなら、高邁な犠牲は、あなた方の、大義のためのかけがえのない選択であったのだから。なぜなら、あの苦しく豪胆な時間は、本当にあったことなのだから。あなた方はいつまでも若い人々であり続け、人々の心の中でいつまでも生き続けるであろう。

【片山須美子 訳】

論文・研究ノート

Essays and Research Notes

光州民衆抗争と女性

安眞（アン・ジン）

1、はじめに

5.18 光州抗争（もしくは光州民衆抗争として知られている）が起きてから約 26 年が経過した。1980 年 5 月 18 日までの韓国社会を民主化するというあの抗争が持った歴史的な意味、そしてまたそのことが現在の韓国社会にとってもなお重大な意味をもっているという点において、光州抗争は韓国の支配階級と民衆運動の両方にとって歴史的な分岐点であった。その歴史的重要性は韓国近現代女性史の研究においても、重要な意味をもっている。

あの破滅的な時代、抑圧的な権力に対し社会の解放を求め闘った民衆は空挺部隊の銃弾によって殺害され、警官の鉄パイプによって傷つけられた。もし歴史を連続的な出来事の単なる集合体としてみなすのならば、1980 年 5 月に起こった光州民衆抗争を国家暴力によって鎮圧された、たった 10 日間の抵抗運動と捉えることも可能だろう。しかしその内実を見ると、光州抗争は 1960 年代及び 70 年代に増大していた支配階級と民衆運動間の長期永続的な対立の表出ということができる。

光州民衆抗争は男性市民にとってだけではなく、社会の解放を切望していた女性たちにとっても大きな意義を有する。なぜならそれが彼女たちの生活と意識変革の基礎を築いたからである。この論文の目的は、韓国資本主義の発展が女性の生活条件にどのような変化を与えたか、及び生活条件に不満をもつ女性たちの変革を求める潜在的な切望が、光州民衆抗争という歴史的分岐点においてどのように噴出したのかを明らかにすることにある。

2、光州抗争への視座

光州民衆抗争に対しては様々な立場から論点が提起されている。韓国社会の改革と関連したこの出来事から我々は何を学ぶのか。光州民衆抗争の指導部は誰で、打倒される敵は誰だったのか。さらに光州民衆抗争にも様々な名称があり、光州民衆抗争をより深く考察しようとする立場も多岐にわたる。もっとも一般的に受け入れられている視点は、社会運動の発展の度合いとともに明らかにされてきており、民主化運動の成功が的確な視点を生み出しているといえるだろう。光州民衆抗争の直後、第五共和国期の初期段階においては、民衆蜂起の歴史的な意義は軍政によって否定されていた。80 年代中期及び後期に、我々は民衆を解放した民主化運動に対して光州民衆抗争の果たした役割の本質を重視し始めた。

第五共和国期、第六共和国期の支配階級は各々「光州事態」「光州学生市民民主化運動」として光州民衆抗争 に言及した。名称の選択から判断されることは、彼らが本質を覆い隠そうとしているということである。彼らは光州民衆抗争に関与した者を、北朝鮮のスパイや国家を破壊しようとしている政治家に指示された暴徒であるとみなした。これが「暴動論」である。もしくは、銃を撃ち民衆を残忍なやり方で虐殺するよう軍に命じた数人の国軍指導部が光州民衆抗争の責任をとるべきだという考えも存在する。これは光州民衆抗争の原因と責任を民衆と国家の双方に求めていることから「双方責任論」と呼ばれている。

12・12クーデターを決行した軍指導者は、光州民衆抗争の首謀者を暴徒であると表明し残忍に弾圧した。しかし民衆が軍指導者たちに欺かれることはなかった。また民衆は1980年代後期に何が起こっているのかということを正しく認識していたので、軍指導者が自らが行ったことを正当化することは不可能だった。民衆のこうした認識があったため、支配階級は副大統領に盧泰愚将軍の選出を試みた時、暴動論の代わりに双方責任論を受け入れざるを得なかった。なぜなら彼は軍の最高指導部の一人であったからだ。双方責任論は自由主義的な政治家に受け入れられた考え方であり、暴動論よりはましではあったが、それでも公平な立場ではなかった。それは私たちが韓国社会の対立状況そして支配構造という本質的問題のなかで、光州民衆抗争を客観的に理解することを困難にする。さらに我々が光州民衆抗争の本当の原因とそれに関わった者の責任の所在を明らかにすることを妨げている。この理論は、限られたごくわずかの軍指導者に光州民衆抗争の責任を負わせるだけであり、他の支配階級メンバーはその責任を免除されている。この観点は、当時権力を保持していた軍の利益を反映している。またこれはアメリカと、軍部に影響を与えその舞台の裏で暗躍していた独占資本家たちの利益をも反映している。

もうひとつの視点は、双方責任論と類似しているのだが、自由主義者の理論から来ている。この視点は光州民衆抗争の原因を「過度の弾圧」にあるとし、光州民衆抗争の主導者たちを当時、絶対的共同体を建設した過激な市民であるとみなす。これは光州民衆抗争を「光州義挙」あるいは「光州市民抗争」と呼ぶ。この立場からは真相の究明と被害者の尊厳回復がこの問題の解決であるとされる。これは問題の主たる原因が個々の殺人者のモラルの欠如と、偶発的な被害者の各々にあるとしている。そのためこれは根本にあった紛争構造を無意識的に覆い隠している。つまり独占資本家やそれに協力的な軍部と、権力を持たない被支配階級との対立構造である。したがってこの視点は支配階級に利益を与え、全羅道市民の反体制的、抵抗気質に分析の重点を置いたプチブル知識人の考え方と一致している。

しかしながら、光州民衆抗争の本当の原因と本質を理解するためには、我々は光州民衆抗争を10日ばかりの出来事というミクロな視点で捉えるべきではない。そうではなく、社会状況というマクロな視点から理解する必要がある。事態を直接誘発した原因は新たに形成された軍隊内グループの権力への欲求と激烈な弾圧であったが、我々が注目すべきは一般市民の意識的な参加である。80年代後期の進歩的知識人はこの反乱をマクロな視点から「光州民衆抗争」または「光州民衆武装蜂起」と呼んだ。この立場の人々によると、先にあげた支配階級の見解は特定の地域における民衆の社会心理学的性質に重点を置いているか、あるいは光州民衆抗争の直接の原因にだけ注目するというものなので不十分な視点だということになる。これは事態の構造的原因に対する理解を完全に妨げ、地方主義の受容を促す。そしてこの受容によって支配階級は光州地域、全羅道地域に国を分断し、それによって自らを正当化したのである。

もし我々が光州民衆抗争を独自の視点から理解したいのならば、近代韓国社会の階級構造、支配階級の戦略、そしてそれに反対する民衆抗争の必然性を考慮する必要がある。この視点によって、我々は資本主義が韓国社会に持ち込んだ対立の普遍性に着目し、工業化された韓国における未発展地域としての光州市の抱える特殊性を理解できるのである。

言い換えれば、軍が意図的に光州を選択したということ、そして感情的暴力的弾圧で対応してしまったことに原因があるということから光州民衆抗争を単純に説明することはできないのである。我々は軍の「選択」あるいは権力維持の目論見を、次の二点両方を考慮に入れて理解しなければならない。1）光州抗争において広範なスケールでの民衆蜂起を可能にした、韓国社会の階級対立の普遍性。2）民衆蜂起のデモンストレーションの場として選ばれた光州、全南県の地域的特質性。つまり我々が光州民衆抗争の完全なる理解に到達するためには、社会構造的要因と事態を引き起こした直接原因の両方を結合させなければならない、ということである。

上記の視点から、我々は光州民衆抗争を韓国独占資本に反対する民衆の蜂起と仮に定義できるだろう。独

占資本家階級は彼らの利益を保護する強力な軍を動員して、労働者階級、農民、学生、中産階級、そして小資本家をも同様に弾圧した。

歴史的にみて、光州民衆抗争は独占資本家、支配階級、そして民衆運動間の社会対立が長期的発展を経て表出したものであった。支配階級と被支配階級間の複雑な対立については、民主化運動と独裁との対立過程の研究においてすでに具体的に明らかにされている。その対立は他に例を見ないほど激烈なものだった。(Se－gyun Kim, p. 14)

1980年当時、韓国社会の独占資本家たちは朴正熙独裁政権の崩壊によって突然、政治的空間が開けたことに戸惑い、資本蓄積を安定的に維持するために支配構造の再組織化を必死に要求した。支配階級の中にもいかに階級構造を再構築するかという点に関して、特殊な対立があった。そして新たな軍部グループの勝利がこの対立を解決したのである。

光州民衆抗争間に一時的ではあれ革命勢力が創造されたという点において、労働者階級の果たした主導的役割に注目するという立場も提起されている。革命勢力の視点を支持する立場からは、民主闘委（民主市民闘争委員会）や武装機構である「機動打撃隊」のような、光州コミューンが建設されていた間の独立した民衆勢力の努力が強調される。彼らの分析によると、その二組織のメンバーはほとんどが労働者階級であった。彼らによると、ピープルパワーを生み出した種々の人民委員会は労働者階級とそのほか様々な運動団体に指導されていた。労働者階級が他の階級よりも民衆と自らを結びつけていたことは事実である。しかし、労働者階級はそれ自身が闘争のために十分には組織されておらず、闘争技術という点でも有効なレベルには到達していなかった。さらに彼／彼女らは光州民衆抗争の全期間を通してみても、明白な政治的立場やヘゲモニーを有していなかった。したがって光州民衆抗争を単に労働者階級の蜂起とみなすことには限界がある。

3. 光州抗争の歴史的背景

韓国資本主義の発展と維新体制の崩壊

連続的な事象を観察するだけならば、光州民衆抗争は戒厳令下の光州及び全南で1980年5月18日から27日までの間に起こった、軍空挺部隊と市民間の対立である。抗議者は学生、市民で抵抗の対象は空挺部隊であった。それは当初、兵士の残虐な弾圧と無差別殺人に反対する学生のデモからはじまった。しかし光州民衆抗争は単なる個別の事象ではなく、むしろ1979年10月26日から80年5月まで続いた民主化運動の一環である。もし光州民衆抗争をより長期的な観点から捉えるのなら、それを1970年代初頭の維新体制や1987年6月闘争、あるいは新植民地独裁主義の文脈に組み入れ理解することが可能である[1]。言い換えれば1980年5月は維新独裁と1987年6月闘争の間に位置し、軍事体制に和解策の受容を余儀なくさせた闘いだった。光州民衆抗争はファシスト政権から自由民主体制への移行期に勃発した。それは文民大統領選出を求める暴力的要求として噴出した。そして、その根底には工業化から疎外された民衆によって激化していた階級対立が存在していた。(Jin gyun Kim & Keun sik Jung,1990, p. 70)　10・26以降権利を求めて市民は闘い続けていたのだが、彼／彼女らは独立した政治的権力の創造に失敗し、保守政党のヘゲモニーのもとで取り残されていた。

1945年韓国は日本の植民地支配から解放されたが、すぐには独立国家にはなり得なかった。韓国は革命

1　新植民地主義ファシズムとは暴力的テロリストの独裁制、もしくは新植民地社会における資本の独占資本への移行過程で、資本蓄積の危機を乗り切るために登場した軍事ファシズムを意味する。韓国では5・16軍事クーデター以降樹立された政治体制である。(Association of Korea Academy, 1989, p. 23, p. 35)

派と反革命派の対立を避けて通ることはできなかった。最終的には米軍政に支援された反革命派が権力の座に着き、必然的に朝鮮は二つの体制に分断された。

韓国では1945年の解放から1953年の朝鮮戦争の終結に至る八年間の紛争ののち、反革命派のグループが勝利を収めた。その後、韓国社会は従属的資本主義体制のなかにあり続けている。援助依存の経済に起因する1950年代後半の危機は、朴正熙政権下の借款を基本とする経済開発計画の中で回避された。1960年代には大規模な経済発展が見られたが、それは安価な労働力と農産品の低価格政策に支えられていた。したがってその経済発展は農民の生活が破滅する危険性を深め、労働者階級内の相対的貧困層を拡大した。

60年代の韓国資本主義の大幅な発展は独占を強化した。しかし借款に依存する開発政策は、世界経済の転換の中で国を脆弱にしていた。韓国が国際市場で競争することはもはや不可能だったのである。財政的に不安定な企業は急速に消滅した。その一方で、特に労働者を過酷な状況に追いやった独裁政権下で、労働運動を含む民衆運動はますます増大し始めていた。この危機に瀕した朴政権は、議会制民主主義に見切りをつけ維新体制を開始する。そして国家防衛の名のもとに特別法を発令し、重化学工業に重点を置く輸出志向型の産業化を推進した。韓国は石油ショック後の70年代に大幅な成長を遂げた。(Jin gyun Kim & Keun sik Jung, 1990, p. 78) しかし大幅な成長は労働運動の弾圧と海外の市場・資本・技術への依存のもとでのみ可能だったのである。

政治面において維新体制は、議会を麻痺させ完全なる権力を大統領に付与した。つまり大統領が立法、司法、そして政府行政機関を支配したのである。さらにこの体制は大規模な弾圧装置をも大統領に付与した。それは強固であるように思われたが、実は脆弱で不安定なものであった。

70年代、韓国資本主義の飛躍的発展の陰に潜んでいた潜在的対立は、世界的な資本主義の危機のもとで爆発した[2]。世界経済の停滞が独占資本主義と維新体制下で弾圧費用を支払っていた者たちを圧迫した。さらに労働者階級を含む一般民衆の生活レベルは日に日に悪化していた。これらすべてが70年代終盤に政治的危機を加速させる原因となる。民主化要求は次のような抗議行動をもって現れた。70年代終盤の新民主党事務所におけるYH女性労働者のストライキ、10・26直前の釜山及び馬山闘争。脆弱な維新体制は、民主化要求にいかに対処するのかという問題に直面した。そしてこの問題は全権力を保持していた大統領の暗殺という形で10・26事件が発生すると、さらに深刻になった。

激しい民主化要求にも関わらず体制内部の衝突、問題点は解決されなかった。そこで支配階級は、軍隊を動員し軍事独裁政権の再編をもくろんだ。これがいわゆる12・12事件である。

第五共和国時代初期に国家防衛の名目で緊急立法委員会が作成した法律は、労働者階級を含む民衆への支配を効果的に行うための権限を付与していた。その一方で第五共和国政府は企業の買収と合併を通じて、独占経済体制の再組織化を試みた。これら諸取組みのいくつかの結果は、ユルサン、ハンヤン、ミョンスンといった財政的に不安定な企業の買収と受け入れ、重化学工業の買収と閉鎖を結果した。

1980年頃の民主化要求闘争

10・26事件は70年代終焉の前兆ではあったが、民主化を求める民衆の直接闘争の結果ではなかった。すでに見てきたように、それは70年代における韓国資本主義の発展と維新体制の危機的状況が抱えていた問題の表出だったのである。1979年10・26事件後の朴政権の崩壊は、独占資本家と軍事エリート、そし

2 世界規模での資本主義の危機的状況下で、アメリカはイラン革命やニカラグア革命のような民族革命に反対し、反革命戦略を計画した。

て被支配階級の間の政治的社会的階級闘争への扉を開いた。

独占資本家たちは既存の構造から、自らが資本を無制限に蓄積できるような構造への再編を実現するために、事態への全面的な介入を必要とした。一方、市民は自分たちの暮らしを葬り去った蓄積構造の根本的改革を望んでいた。10・26事件で政治権力に空白が生じたことによって、民衆の抜本的改革を求める声は加速した。この象徴的な例が1980年ソウルの春である。

ここで維新体制の崩壊はまた新植民地ファシズムの崩壊でもあったということに留意することが重要である。なぜならば10・26事件の勃発は本質的には被支配階級の抵抗に起因してはいるが、直接的にはファシズム体制の再編を求める支配階級内部からの要求によって引き起こされたからである。ある意味ではこの事件そのものが反革命的だったといえる。このことを通して支配階級は、保守政党をも含めて被支配階級に対して保持していた権力をさらに強固なものにした。権力装置内部の対立は10・26事件後の経過のなかでひとつの妥協に到達し、この過程で新たな軍将校グループが権力の中心を占めるにいたった。

しかし穏健派と強硬派の対立は続いた。その対立が軍隊内に12・12クーデターと呼ばれる軍事的衝突を引き起こした。強硬派は独占資本主義の利害を代表する新しい軍将校グループを形成した。全斗煥がその指導者だった。軍隊を支配下に置き政治情勢の前面に現れた。新しい軍将校グループは、市民や保守的野党のリーダーたちに支持されていた反独裁運動の指導者を排除する必要性を感じていた。

保守的野党は反独裁という一面をもっていたので人々から一定の政治的に支持を受けていた。だが実際には民衆の要求ではなく資本家の利益の代弁者であった。当時、労働運動は未成熟で民衆の政治意識もさほど高くなかったので、市民は自らの利益と保守的野党のそれとを区別しなかった。つまり彼／彼女らは非独裁権力またはプチブルのヘゲモニーの下に存在していたといえる。(Choon Kim, p. 135, 1990: Jin gyun Kim & Keun sik Jung, p. 85, 1990)

新しい軍将校グループが新たなファシズム体制を再構築すること、また独占資本がさらなる蓄積を進めることを阻止できるか否かは、民衆の力にかかっていた。学生運動、労働運動、農民運動及びその他の社会運動における最初の共通課題は、革新的機運を押しとどめようとする動きを阻止し、維新体制の残骸を除去することであった。この民衆の底辺からの要求は、10・26以降に活性化した政治領域において活発に展開された。

この時期、労働運動は経済主義から自由になるために組織化を協力して開始した[3]。この組織化は農業関連法の改正を求める全国的な要求のさきがけとなった。

生活を営むうえでの最低限の権利と民主化を求める学生の運動は、大学の改革を要求する運動として始まった。10・26は学生委員会の復活を可能にし、学生たちは自らを組織して、民主化要求のフォーラムを開催した。全斗煥大統領が4月14日、政治の舞台に登場すると[4]、すべての大学は全国同時に声明を発表し維新体制のメンバーの追放と弾圧的な法案を無効にするための政治闘争を開始した[5]。

しかし一般市民の間ではいまだ政治意識は高くなく、学生デモの要求は理解されなかった。また学生運動は急激に街頭デモへと向かったが、指導グループ内の闘争方針は未形成のままだった。全国に拡大する街頭

3　維新体制はサボック事件、ドンゴク鉄鋼、仁川鉄鋼などのストライキによって引き起こされた。これらのデモや民主化運動には占拠、警官との闘争といった激しい方法が取られた。また労働運動との関係では、1980年1月からの4ヶ月間で1,011の労働争議が起こっていた。

4　1980年4月14日、全斗煥空挺部隊司令官は韓国中央情報部（略称KCIA。国家安全企画部を意味するANSPに改名後、盧武鉉政権下で再び国家情報局NISと改められた）を支配下に置いたが、それは維新体制の重要な弾圧装置であることが明らかとなっている。また彼はすぐに記者会見と軍司令官会議を開き、現況を「無秩序状態」であると見なした上で、「徹底的な対応を行う」ことを宣言した。

5　光川における学生デモ。5月13日の月とソウル駅広場でのデモは1960年4月19日革命の以来、規模という点に関しては過去最大のものであった。

デモに触発された政治家たちは戒厳令の撤回を求めた。新たな軍将校グループは、全斗煥と維新体制指導者に対する辞職要求の声のなかで、5月17日、戒厳令の延長を決定し12・12クーデターを最後的に完成させた。彼らは影響力を持つ政敵たちを、反乱謀議と不正蓄財で告発した。また大学を封鎖し、新聞検閲をおこなった。さらに労働者のデモの禁止、市民が風評を流すこと、大統領を批判することをも禁止した。

全南地域、光州の地域状況

すでに見たように維新体制の最高権力者暗殺によってもたらされた5・18以前の1980年春の状況は、二点によって特徴づけられる。一つ目は支配階級が支配構造の再構築を試みたこと。そしてその目的は危機のなかで、独占資本を蓄積させるための条件を再調整することにあった。そしてもう一つは民衆が自らの階級的利害を積極的に表明したことである。

強大な軍事独裁権力と民衆の間に対立があった1980年の春は重要な分岐点だった。この状況下では二つの可能性が存在していた。一つはファシスト支配体制の再構築によって既存体制が維持される可能性、もう一つは民主化闘争によって民衆が社会改革を成し遂げる可能性だった。

我々はすでに1980年の韓国社会における概略的な対立状況をみてきた。しかしその対立がなぜ軍将校グループの強硬派と光州市民の間での軍事衝突という形で現れたのか、そしてなぜ光州と全南地域が闘争の中心となったのか、という点について考察することが重要である。つまり我々は次のような質問に答えなければならない。新しい軍将校グループはなぜ光州を選択したのか。そして闘争の終結に至るまでの間、なぜ光州市民は他の地域の住民よりも残虐な弾圧に対する抵抗を続けたのか。

さらに我々は70年代後期の未成熟な女性運動と彼女らの固定的な組織が欠如していたことを踏まえながら、女性の抵抗がどこから派生したのかということも問題にしていきたい。

1）光州 - 全南地域の社会経済的状況

単なるデモが全地域的な民衆の武装蜂起へと発展したその背景となる社会的背景を理解するため、全南地域の特徴を考察してみよう。その特徴は資本主義の一般的特質でもある不均等発展という観点から理解されうる。資本主義が発展するにつれて、地域間の不均等発展も、また国家レベルあるいは地球規模での不均等発展も拡大する。韓国社会も例外ではなかった。

韓国社会が日帝から解放され、世界資本主義体制に組み込まれた時から不均衡発展は続いていた。工業、農業間の不均衡な発展は農業を中心としてきた光州、全南地域の社会を崩壊させた。このことが1960年代に始まる産業化過程での労働者階級の形成に影響を及ぼした[6]。このことが光州、全南地域は民主化運動を成熟させた特殊な条件となった。つまり韓国内のほかの地域よりも深刻な階級矛盾が存在していたのである。1950年代の農地改革は当時、湖南の支配階級であった地主階級に大きな影響を及ぼした。植民地主義者が保有していた企業の分割再編、国際援助の分配、および国家権力の主導によって1950年代には韓国に独占資本主義が形成された。嶺南（慶尚道：韓国南東地域）の既存の資本家たちは資本を蓄積させるための更なる機会を手にした。反対に湖南（全羅道：韓国南西地域）の地主たちが産業資本家へ転身する機会はほとん

6　この地域の人口の特徴は以下のようなものがある。第一に若年層が農業を放棄したため、高齢者の大半がその地域から退去した。第二に他地域出身の人々は少数であったのだが、このことは移住者が少なかったことも意味する。1980年には全南市民の96,7％がそこで出生した者だった。移住人口が少なかった要因としては、雇用機会が減少したことが挙げられる。このことが他地域と比較した場合、全南地域における階級間の差異を減少させる役割を果たした。さらに伝統的コミュニティーの風景を維持する役目をも果たしていた。

ど得られなかった。国家は60年代から経済開発計画を開始したが、その計画は他国及び国内の独占資本を基盤とし、自らの権力基盤である特定地域に優遇措置を施すという形で進められた。

1960年代の韓国における工業化の中で労働階級人口は急激に増加したが、全南地域の産業労働者はその制限された産業化のため比較的低位置におかれた。公害を引き起こしていた石油化学工業を中心とするエユチョン工業地域以外には、大企業はほとんど存在しなった。つまり光州、全南地域からは多数の労働者が生み出されたが、その大半が他の地域で生活することとなったのである。全南地域で生活していた労働者の大半は期間雇用もしくは日雇労働者であった[7]。

この全南地域の社会経済状況は二つの現象を引き起こした。一つは中小企業の経営者のなかに既存の政治権力に対する批判的風潮が生まれたこと。もう一つは階級間の差異化が大きくは進まなかったこと。そしてそのことが、外からの攻撃に対して連帯や市民という共通意識の形成を容易にした。

今日と同じように、当時も光州は湖南地域の政治的中心地であった。1980年の人口は73万人を数え、雇用率は43.6％であったが大企業がほとんど存在しなかったため、大企業で働く者はごくわずかだった。労働者の大半は第三次産業に従事する者か、期間雇用労働者であった。

1970年代後期、繊維産業の女性労働者と中小企業の労働者たちはカトリック労働青年会のような宗教系組織の仲介のもと、民主的労働組合の設立に着手した。1980年の春には政治的な場で労働問題をめぐる激しい対立も起っている。

光州における労働者の闘争条件は決して良好ではなかったが、1980年頃には闘争の機運が非常に高まっていた。労働者たちはその後の蜂起では非常に積極的に闘った。抗争の前進に対して労働者が与えた貢献は多大だった。それは運輸労働者、アジア自動車産業の労働者、日新紡織、及び全南紡織の女性労働者、日雇労働者や期間雇用労働者など様々な労働者、郊外の貧しい民衆たちから構成されていた。

農業地域に周囲を囲まれていたので、光州は行政、消費活動、教育などがそこに集中するある種の総合都市としての性格を持っていた。光州は農村や他の小都市に対する教育の中心地であり、11万人の高校生以上の学生を抱えていた。これは80年代の全人口の七分の一に匹敵する。このことが中等、高等学校の学生、ならびに大学生がその初めから抵抗運動に参加するという状況をもたらしたのである。

階級という点では、学生の多くが農業の崩壊にともなって都市への移住を余儀なされたプチブル農民家庭の出身者であった。したがって蜂起のための状況が整ったとき、その闘争に参加する潜在性を学生たちは秘めていたのである。

光州はまた交通の中心地でもあり、湖南の他地域も光州を中心に繋がっていた。したがって湖南からソウルに至る交通経路だったのである。ここに民衆蜂起が木浦、羅州、咸平、ホワソン、河南、唐津、英陵など他の近隣都市に容易に拡大した理由がある。さらになぜ軍が光州市以外の住民を多数殺害したのかという問いに対する答えもここにある。つまり近隣都市の市民と連帯することを防ぐためである。

2）光州、全南地域の政治的状況

すでに見てきたように、光州、全南地域の社会経済的状況が他地域に比べて、支配階級に対する民衆蜂起のより大きな可能性を市民に植え付けたことは確かである。中小資本家は支配政党を批判する立場をとっていたが、それは中小資本家たちが支配階級の一部を形成しながらも、社会的、経済的な面で不平等な扱いを受けていたからである。

7　1980年には500人以上の雇用者を抱える企業が全国に604社あったが、全南地域に存在していたのはそのうちわずか15社である。

不均衡発展と権力ブロックの構成とは密接に関連していた。中流階級、プチブルジョアジーは権力ブロックへの参加を妨げられ、資本家、軍部指導者、政府の高級官僚が権力を独占していた。このような状況は支配階級にとって、仮に権力を保持するために湖南地域を犠牲にしても、支配権力の内側に与えるダメージは小さいと考えるのに十分であった。

1980年の韓国政治においては、民衆には政治的ヘゲモニーはなく、それは保守的野党に代表される非独占ブルジョアジーもしくはプチブルジョアジーに帰属していた。相対的には進歩的であるというその性格によって、この勢力のヘゲモニーは特に湖南地域において不均衡発展を通じて圧倒的なものとなった。

このことは民主化闘争のシンボル的存在である金大中を民衆が支持したことに示されている。金大中への強力な民衆の支持は当時の政治状況によって制約された形での民衆の意思の表れであった。当時の政治状況と民衆の力量のなかでは、金大中への支持が民衆にとっての現実的な選択肢だったのである。

光州のこの政治状況は権力を掌握した新たな軍将校グループが、攻撃対象を定めるのには十分であった。つまり民衆蜂起の直接の原因は民衆の積極的な決断にではなく、新しい軍部エリート側の決断にあった、というべきなのである。軍部エリートたちは光州という選択によって支配階級内のダメージを軽減することができた。そして他方では階級的本質を隠蔽して地域主義の問題にすりかえることができ、リスクを限定的なものにしつつ効果的な支配体制を再構築することに成功した。新しい軍部エリート集団が軍事独裁政権を準備し、民衆の民主化要求に対する最も効果的な弾圧の方法を持って現れたのである。

> 「朴正熙体制を継承しようとする軍部は、増大する民衆の力に対して新たな弾圧体制を構築するために、自らの権力を誇示する必要に迫られていた。軍部は自らの権力を実証するための最適な場として光州を選んだ。当時の光州は金大中グループとも軍部に絶対的に反対する民衆グループとも結びついていた」(Hyun chae Park, 1990, p. 51)

端的に言えば、光州民衆抗争は1980年の政治状況下、これら二つの特殊事情が凝縮した形で表出した出来事だった。つまり一方では韓国資本主義の発展過程においてこの光州の状況が形成された。そして新しい軍部エリートが意図的に光州を選択したまさにその時、民衆の政治的要求が爆発したのである。

4. 光州抗争における女性の役割

1980年代における韓国女性の社会状況

1980年代は社会運動が質的発展を実現した時代であった。韓国女性運動にとってもその後の展開に重大な影響を与えた一時代だった。女性の光州民衆抗争への自発的参加は、1970年代に進んだ女性の社会生活をめぐる変化を反映したものだった。光州民衆抗争への女性の参加を理解するため、我々は1980年までの韓国女性の社会状況と、光州、湖南地域における女性運動の発展状況を考察する必要がある。

日本からの解放後、韓国において発展した資本主義は社会的生産の領域に大規模な女性の進出をもたらした。特に1970年代及び80年代の工業化は女性の低賃金労働がその基盤であった[8]。また第二次、第三次産業における資本蓄積も低賃金女性労働者の存在を基盤としていた。労働条件がいかに過酷であろうとも、

8　1960年代、経済活動に従事する女性の割合は26,8％から42,8％へと増加した。(Kang Ee soo, "The changing of Female labor Since 1980s". および Jong Jin sung, Ahn Jean et al., 2004, "The Current History of Korean Women, Seoul: Hanul, p. 202.

労働者を含む民衆は社会的生産の過程に参加するしかなかった。これは資本主義の全体的発展に伴って女性労働力への需要が増大したこと、また蓄積の構造が低賃金労働と農産品の低価格化によって支えられていたことに原因がある。資本主義の利害からすれば、家父長制イデオロギーのもとでの女性労働力は、家族を基本単位とする経済システムを支える役割を負い、また一方ではパートタイム労働者として雇用できるという都合の良さをもっていた。女性労働力は男性労働力よりはるかに安価であった[9]。

女性労働者はたいてい繊維産業や洋服、電気産業などの製造業に従事していたが、それらは低賃金の労働集約型産業であった。このような女性労働者の大半は未婚で劣悪な労働条件に苦しみ、男性に比べて半分程度の賃金しか与えられないため労働力を再生産することが困難であった。女性の劣悪な労働条件のために、1970年代には女性が労働運動の先頭に立った。その主要な例として東一紡織とYHの労働運動が挙げられる[10]。(Shin In ryung, 1985, p. 341)

家族の収入を支えるため、貧しい既婚女性は肉体労働、都市の上中流階級家庭の家事請負、行商、小規模の商売、内職などに就いていた。彼女たちは長時間労働と低賃金に苦しみながらも、社会的にはまったく保護されていなかった。それは彼女たちの仕事がインフォーマルで周縁化されたものだったからだ。彼女らの状況は農村部の女性の状況と類似していた。農村部の女性は生産に携わっていたが農産品の低価格政策の結果、農業は崩壊しており生活は貧しくなる一方であった。彼女たちは生産活動に加えて家事労働と育児をも担っていた[11]。

1960年代及び70年代の産業化は中産階級の主婦たちの生活と意識の変革もたらした。教育機会の拡大に伴い高等教育を受けた女性数は増大したが、雇用機会は非常に制限されていた。製造業においては女性労働力が必要とされていたが、ここでは事情は反対だった。行政の規模拡大と、産業化にともなって雇用が拡大し、新たな中産階級層は増大したが、女性の雇用はごくわずかで、高等教育を受けた女性も主婦として生活せざるを得なかった。資本主義的産業の生産活動は家庭という領域をその埒外に置いたので、都市部の中流階級の主婦たちは孤立した家庭内で満足するしかなかった。だが興味深いことに、家庭での孤立と相対的な余暇時間が彼女らに更なる自覚を与えた。女性の抱える問題に気づき、政治問題に関心を向けるようになったのである。さらに彼女らが高等教育を受けたという背景が、下層階級の女性を不平等な状況の下に放置するのではなく、彼女たちとの連帯の可能性を模索していく可能性を与えた。

女性の社会参加は産業化の過程とともに拡大したが、それ自身が女性の生活条件を改善することはなかった。むしろ女性の疎外を深め、特に底辺にいる女性や単純労働に従事する女性たちの生活環境は苛酷を極めた。このような状況の下で女性運動が発展するための客観条件は成熟していた。しかし1970年代まで女性運動は他の社会運動ほど発展することはなかった。女性運動の潜在的可能性は日本からの解放後にも現出したのだが、それは国家の分断と朝鮮戦争によって消失してしまった。「女性運動」は長い間、実質的にも自己満足のためのお遊び運動、あるいはボランティアの一環に過ぎなかったのだ。もしくは政府主導の運動であったとも言うことができる。1970年代中頃、宗教組織という隠れ蓑でその本質を隠しながら、女性運動は政府主導の運動から分離した。そして1970年代終盤、宗教者運動を中心としたこの女性運動は女性労働者たちと結合した[12]。1974年、クリスチャン・アカデミーが女性団体の指導者、労働組合の女性リーダー、主婦、キリスト教者、農村女性など様々な階級の女性のための教育プログラムを主催した。このプログラム

9　1980年、第二次産業で働く女性労働者の75.5%が24才以下であった。

10　1975年の女性労働者の平均賃金は男性の42.2%だった。一方、女性の一日の平均労働時間が9時間であったのに対して、男性は8.7時間であった。

11　農村地域の人口は次第に女性化、高齢化していった。1970年代には女性が農業の全過程に携わるようになった。

12　1977年ナム・ヤン・ナイロン社で女性労働者が火傷を負う事件があった。YMCAや韓国教会女性連合などの六団体が消費ボイコット運動を主導し、彼女らの職場復帰を勝ち取った。東一紡織で事件が起こったときも七つの女性団体が募金の送付や、声明の発表などを行った。

を受講した者たちが様々な分野で活動家として活躍した。さらに韓国キリスト教教会女性連合会は政府の妓生観光政策に反対する運動を展開し、YWCA は家族法の抜本的改革を求めて運動を起こした。しかし、これらの運動が与えた影響はさほど大きくなかった。この時期、最も多大な影響を及ぼしたのは 1970 年代中盤の生存権要求闘争と民主労働組合運動であった。

言ってしまえば、当時の韓国における女性運動は単に生活条件を改善するための闘争に過ぎず、イデオロギー的にも組織化においてもとりわけ前進があったわけではない。しかし女性運動の客観条件は、産業化過程における女性労働者の登場と農村女性の成長によって成熟していたと言える。

1980 年の全南及び光州の女性たちの生活水準は基本的に全国的な女性のそれと同等であったが、一方では地域特殊的の条件が存在していた。光州、全南地域は他地域よりも多くの女性労働者を抱えていた。他地域の状況と比較すると製造業より第三次産業に従事する女性が多く、学生も同様に多かった。70 年代後期、多くの女性労働者を雇用していた巨大企業は日新紡織、全南紡織、湖南ロケットバッテリーであった。これらの企業の労働者はカトリック労働青年会と結びついた小規模なグループでの活動を経て、民主的な労働組合の設立を目指した[13]。1980 年に組織された労働組合の大半が繊維産業で働く女性たちだった。

光州においては、大企業で働く女性労働者の割合は他地域と比較しても少ない。中小企業で働く期間雇用、もしくは日雇労働者の生活水準は劣悪であった。車両デモに参加した女性の大半は労働者であった。学生と共に道庁で料理をした女性もその大半が労働者だった。

全羅道の女性農民は生産のなかで極度に搾取されていたが、自分たちを結びつけるようないかなる組織をも持っていなかった。農民運動を指導していたキリスト者農業者協会はあったのだが、女性農民のための独立した組織は存在していなかった。女性農民たちは組織がなかったため光州民衆抗争に的確には呼応できず、闘いが農村にまで波及した時に自然発生的、個人的に参加しただけだった。

1970 年代の光州において特筆すべき女性組織の一つが松柏会である。これは 1978 年の 11 月に様々な立場の女性によって設立された。例えば 1974 年民青学連事件の政治囚の家族たち、教師、労働者、看護師、主婦、そして大学生などである。この組織の主要メンバーは学生運動、社会運動を経験した進歩的な女性知識人たちであった。彼女らは、下層階級の女性たちと結合して女性運動の組織化を主導したというわけではないのだが、一定の資金的基盤をも持ちながら社会問題について学習し、政治囚の支援を行った。当初の 20 人だった松柏会のメンバーは、50 ～ 80 人にまで増大していた。メンバーたちは数グループに分かれ、韓国近現代史やフェミニズム運動について学ぶと同時に、労働問題、環境汚染、妓生観光などの社会問題についても理解を深めようとした。そしてこれらの諸問題についてメンバー内で共通の認識を持っていた。松柏会は光州民衆抗争の勃発からその終わりまで、組織的に参加した唯一の女性団体であった。光州民衆抗争の間、彼女らは個人参加者を束ねることでその闘争に貢献したのである。

この団体に加えて光州民衆抗争の間、闘争を展開していたグループがもう一つあった。それは野火夜学、広大（文字通りには韓国伝統曲芸を意味する）に参加した女子大学生たちであり、文化活動を行っていた団体である。

大学生が光州民衆抗争に参加していたことは強調される必要がある。学生たちは学生運動を経て、1980 年光州、全南地域における民主化運動で主導的役割を果たした。前述したように、この地方における学生数は他地域よりも圧倒的に多かった。こうした地理的特質をも背景として、学生らは 5・17 以前から街頭デモや集会を通じて市民と強く連帯していた。学生たちは市民と共に政治状況に対する理解を共有し、公平か

13　カトリック労働青年会の主な活動は小グループでの教育を通じて労働者を組織することにあった。またカトリック労働青年会のほかに、1970 年代に労働者運動を支援した宗教団体の例として都市産業宣教がある。しかし政府による厳しい弾圧のため、光州ではその活動が行えなかった。

つ客観的理解を身につけていた[14]。戒厳令が布告され全国に拡大されると、光州では高校生たちが即座に街頭デモに参加し、そして時期の違いはあれ多くの市民たちも運動に主体的に加わっていたのは、こうした背景によるものである。

学生たちは全南地域の全大学生を代表して「国家情勢に関する第二次声明」を宣言し、5月15日に15の政治要求を採択した。声明によると学生らは、緊急戒厳令の撤回、国軍および警官隊の本来業務への復帰、政治スケジュールの公表、報道及び大学の民主化を要求していた。また民衆的要求であった労働問題及び農業問題の解決をも掲げた。労働問題の解決のために、学生たちは労働三権の保障、最低賃金制度の実施、労働組合委員長の直接選挙を掲げた。さらに5月16日、道庁前で学生と市民が再結集したときには、報道闘争委員会が作成した「学生の声」という印刷物も配布された。「ソウルの春」の間、全国を駆け巡った民衆の要求と同様に、学生らが求めていたものは金大中を解放せよという光州人民の統一した地域スローガンであった。

光州民衆抗争の発展と女性の活動

1）光州民衆抗争の発展

単なる現象として捉えるならば、光州民衆抗争は学生や市民が戒厳令の拡大に抵抗しはじめた5月18日から、戒厳軍に鎮圧される5月27日までの10日間の抵抗運動にしかすぎない。しかし長期的、歴史的な観点から見ればそれは1970年代の維新体制下に存在していた無数の矛盾の産物であった。
光州民衆抗争の過程は次の4つに分けられる[15]。

a）蜂起の準備段階：5月18日以前の学生街頭デモ
b）蜂起の拡大段階（18－19日）：軍の残虐行為と学生、市民の抵抗
c）蜂起の全国的拡大（20－25日）[16]
d）抗争指導部の設置と市民自治の成立（26－27日）

戒厳令が宣告された5月17日の夜、学生はその撤回を求めてデモを開始した。18日の早朝に全南大学正門前に集合し、翌日午後3時から1500人の学生及び市民が全南路で警官隊、空挺部隊への投石闘争に突入した。空挺部隊の残虐な弾圧に激怒した市民は同日午後6時半から全力で弾圧部隊と対決した。空挺部隊による残忍な無数の弾圧が5月18日から19日にかけて断続的に起こったことで、市民は何が起こっているのかを知り事態についての共通認識を学生と共有したのだが、後にこの共通認識が大規模な蜂起を可能にした。様々なグループが加わっていくにつれて、民衆の抵抗は大規模な蜂起へと発展した。5月20日

14　1980年5月、全南大学の学生委員会が主導した街頭デモの中で、市民は全斗煥の退陣と維新体制に加担したシン・ヒュンホクの処罰、及び労働三権の保護を要求した。ヤンドン、デインの市場の路上行商人たちが市民と共にデモに参加し、それを支持した。

15　ヤン・ユルビュンは光州民衆抗争の武装闘争という面を強調し、光州抗争を非武装蜂起段階（5月18日から20日）と武装蜂起段階（5月21日から27日）の二段階に分けた。

16　戒厳軍が銃撃戦を開始した後、市民と軍の間に紛争が勃発した。5月21日午後12時50分のことである。それは武装市民が道庁を占拠し、同日午後8時に蜂起の幹部会を公式に発足させる以前のできごとであった。市民収拾委員会と学生収拾委員会の両委員会はこの期間中、政府及び軍との交渉を試みた。

午後7時には錦南路を200台の車で走行するという[17]車両デモが行われた。また同日午後10時にはMBC報道局の歪曲した報道にずっと怒りの念を抱いていた市民が同局を完全に焼き払った。軍は厳しい局面に追い込まれていた。血にまみれ必死に闘っていた光州市民は、新しい時代が始まるという強い連帯感を持って錦南路に集結した。21日午前10時頃、約10万人の自動車と市民が錦南路に集まり朝鮮大学校法科大学1年、27才の金範泰と舞踏塾講師で31才のチョン・シンチョンを代表者に選出し、全南州知事ヤン・ヒョウテとの交渉を開始した[18]。

しかし不幸にも交渉は決裂する。午前12時50分頃、軍が集団で発砲を開始すると市民も銃を手に取る必要に迫られた。これ以降、民衆は光州市および各地の警察署から銃を奪取し、デモは武器を携えた闘争として展開されていった。市民はアジア自動車工場の車を使用し、200丁のM1小ライフル銃と600丁のカービン小ライフルを武器として持った。最初の段階では武装した市民の大半は10代後半もしくは20代の男性だったが、闘争が続くにつれて軍事教練のユニフォームを身に着けた高校生の男子が参加したり、30代、40代の男性の参加も見られるようになった。学生、様々な職種の労働者、サービス業の労働者、靴磨きなどが参加した。

武装した市民と軍の間では全面的な交戦も発生した。空挺部隊が道庁を放棄し、午後5時半頃、部隊を撤退させたことによって光州は解放され民衆は完全な自治共同体を勝ち取った。空挺部隊の撤退がはじまった頃、ある地域では市民軍が武装自衛部隊や特別攻撃隊を組織していた。5月22日、市民軍が道庁を占拠したことが知らされると、人々はそこに集結し始めた。市民は荒廃した道路を清掃し治安の回復に努めた。女性からの要請と活動が治安回復を早めたといえる。女性たちはおにぎりや海苔巻き、飲み物を市民軍に提供した。昼12時半に15人の聖職者、法律家、役人、企業家などが収拾委員会を設立し、その代表を法律家のイ・ジョンギが務めた[19]。収拾委員会は交渉のための文書を作成し、その中で、事態が収拾するまで政府がこれ以上軍を派遣しないこと、逮捕されたすべての市民を処罰なしに保釈することを要求した。委員会は全南（湖南南部）及び全北（湖南北部）の戒厳令支部を訪れ政府と交渉したが、交渉は非常に生ぬるいものであり、軍は要求にまったく応じなかった。したがって収集委員会が民衆に武器を放棄するよう提起したとき、民衆は強く反対したのである。

民衆の声に押されて、光州で労働運動や文化運動を先導していた若い男性たちが民衆の意見を集約し総合的なものにするための集会を準備した。一度目の集会は民主主義を求めるもので、10万人の市民が集まった。一方、5・18収拾委員会は5月23日午前10時、南洞教会にて組織の再編を行い、市民収拾委員会へと改編された。様々な宗教グループの著名人、大学教授、弁護士などが委員会に参加していた。キム・チャンギルを代表に、キム・ジョンベを副代表に構える学生収拾委員会は市民収拾委員会とは別に組織され、民衆のために活動していた。学生収拾委員会の主たる活動は武器の回収、交通整理、治安の維持、死体の処理、葬儀の実施、修理及び医療活動であった。このように学生収拾委員会の活動は、軍との交渉と市民の説得を主に行っていた市民収拾委員会のそれとは異なるものであった。

市民収拾委員会は民衆が勝利を収めることは不可能だと考え、穏健的な立場を選択した。つまり民衆に武

17　負傷者を病院に搬送していた運転手を軍が残虐にも殺害した直後、200名の運転手が車両デモの実施という自主決定をムドゥン競技場において下し、錦南路に向かって車を走行させた。光州民衆抗争の中では3名の運転手が殺害されたという記録がある。

18　要求は以下の通りである。1、流血事件に対する政府の公式な謝罪。2、すべての逮捕者及び学生の釈放と負傷者の所在を知らせること。3、軍の光州からの完全撤退を5月21日正午までに遂行すること。4、全南北道軍司令官と市民の代表者による交渉の仲介。

19　交渉の席における収拾委員会の政府への要求は次の通り。1、状況が改善されるまで一切の軍隊を派遣しないこと。2、すべての逮捕者の釈放。3、軍による過度な弾圧の事実を認めること。4、後に報復措置を取らないこと。5、責任を要求しないこと。6、死亡者への補償。7、すべての要求が受け入れられれば、市民は武装解除する。

器の返還を提案する一方で、軍には謝罪を要求したのである。その提案によって5月23日には約半数にあたる約2,500丁の武器が返還された。(Jang Eul byung, 1990, p. 162)

最後まで抵抗を貫いた若い活動家たちは民衆の意志と闘争力を高めて、民主化を求めようと集会を毎日催していた。集会を通じて民衆の意志を確認し闘争の継続を訴えた。5月25日午前10時、彼らは抗争指導部として光州民主民衆抗争委員会を設立した。その指導者たちは尹祥源（ユン・サンウォン）[20]、キム・ジョンベ、ジョン・サンヨン、パク・ナムスン[21]らであった。ほどなく道庁で活動していた学生収拾委員会代表のキム・チャンギルも含めた約200人の市民は道庁を離脱した。その一方で、三つの流れがなおも共に活動を続けた。「野火夜学」など労働運動のメンバー、民青学連事件に関連した青年運動メンバー、そして「広大」、「松柏会」のような社会運動である。それらは最後まで抵抗を続けるという市民の意志に賛同し、5月27日未明に軍が市街地に侵攻してくるまで、主導的な役割を果たした。それらの運動に関わっていた人の大半は5月18日の蜂起初期段階からデモに参加していた人々であった。彼／彼女らは市民に向けた闘士会報のような新聞を発行し、武装蜂起に参加し、いくつかの集会も開催した。そのような人々が光州民衆抗争で不可欠な役割を果たしたということを理解する必要がある。抗争指導部[22]は25日夜に設置されたが、そのメンバーは公式決定がなされる以前から実際に抵抗運動を指導していた。指導部メンバーは以下の通りである。

代表：キム・ジョンベ。1954年生まれの25才。学生収拾委員会前副代表。朝鮮大学商学専攻、3年。すべての事業の管理担当者であった。

内的事業副代表：ホ・ギュジュン。1953年生まれ26才。朝鮮大学3年。道庁や対民業務、葬儀準備などの内的事業を担当。

外的事業副代表：チョン・サンヨン。1950年生まれの30才でボスン産業の貿易部門マネージャー。全南大学法学校除籍。軍や収拾委員会メンバーらとの交渉を担当。

広報担当：尹祥源（ユン・サンウォン）。1954年生まれ。全南大学政治学部卒業、29才。野火夜学代表。記者たちとの打ち合わせやすべての広報物の作成などを取り扱った。

情勢部門代表：パク・ナムスン。1954年生まれの26才。運輸労働者。市民の武器に関する事柄を担当。

企画部代表：キム・ヤンチュル。1948年生まれ32才。YMCA活動の指導者で、クワンチュン洞の貧困者運動活動家。指導部の方針全般を作成した。

宣伝部代表：パク・ヒョスン。全南大学朝鮮語朝鮮文学部卒業の教師。"広大"のメンバー。集会や宣伝業務を担当。

調査部門代表：キム・ジュンボン。1959年生まれ21才。高麗セメント事務職員。光州民衆

20　抗争指導部の主要なリーダーである尹祥源（ユン・サンウォン）は、光川工業地区の江南プラスチック工場の労働者で野火夜学を率いていた。彼は貧困者、若者、文化運動とだけでなく民主化運動とも結びついていた。さらに10・26以後設立された全労働者連合にも深く関与していた。彼はソウルにおける社会運動団体と直接接触していたようである。そして5月18日以降、民衆抗争にも参加し、5月27日軍が放った銃弾に倒れるまで、抗争の全段階において主導的役割を果たした。

21　進歩的な観点を持っていた人々は収拾委員会の武器返還方針を、抗争指導部と比較して「諦めの団体」と非難した。しかし収拾委員会内部においても異論があったことから、この評価は公平ではない。宗教者や学者（いわゆるナムドン・カトリック教会グループ）たちは、政府の立場から武器返還論を展開した地元有力者らとは立場を異にしていた。彼／彼女らは正義を再確立し民衆蜂起の増強に寄与したが、増大し続ける犠牲者に心を痛め、有効な交渉を試みたのだった。イ・スンハク（キリスト教指導者）やキム・スンヤン（カトリック司祭）たちがこの例である。彼らは26日未明の軍の占領に反対した。また学生収拾委員会のキム・ジョンベ、ホ・ギュジュン、パク・ナムスンらも武器返還に反対した。

22　光州における社会運動団体の主要人物たちは蜂起の初期段階から連絡を取り合っていた。尹祥源（ユン・サンウォン）、ジョン・サンヨン、イ・ヤンヒュン、パク・ヒョスン、パク・ヤンジョン、キム・サンジプ、チョン・ユア、イ・ヘンジャらとその他の学生たちは5月24日午後5時YWCAの小ホールで会議を行い、市民集会実行委員会を事実上設立した。

抗争の初期段階から市民軍に参加。公的秩序の破壊者を調査。
炊事部代表：ク・スンジョン。25才。米と食事を供給した。

民主民衆抗争委員会の広報である尹祥源（ユン・サンウォン）は、野火夜学を通じて労働者と学生の間に連帯を築こうとしていた。彼は光州民衆抗争を積極的に闘い、5月18日の朝から街頭闘争に参加、野火夜学で活動していた学生と共に「民主化を求める光州民衆闘争新聞」（後に闘士会報と改名）を5月19日の午後に印刷、分配した。光州民衆抗争が激しさを増してからも彼はいくつかの出版物を作り、「闘士会報」を第9号まで編集、発行した。さらに民主主義を守るための集会を開催し、秩序維持と市民的業務の活動を含めて光州民衆抗争の全過程に主導的に参加したのであった。彼は民青学連事件に関わる活動家たちや「広大」や松柏会のメンバーらと共に活動していた。

抗争指導部は公式に民衆の要求と抗争の情勢を調査し、検討作業を行った。さらにすでに収集されていた武器を効率的に使えるよう再配置した。指導部は外部から自己を防衛するために自衛軍の組織化が必要であると考えていた。これを組織するために指導部は、予備役兵たちに各洞（市内地域における行政単位）で任務に就くよう命令を発した。さらに抗争指導部は7か条の市民要求からなる「80万光州市民決議」を宣言した。内容は以下のとおりである。

1、暫定政府が全責任をとり、被害者、損害、傷害を含むあらゆる被害に対して補償すること。
2、軍事的弾圧を続けている不当な戒厳令を即時撤廃すること。
3、殺人者全斗煥を民衆の名において公式に処罰すること。
4、民主化を求めて闘ったすべての囚人を即刻解放し、国家救済のため暫定政府の樹立を認めること。
5、政府も報道機関もでっち上げの報道及び歪曲した情報の流布を中止すること。
6、我々は補償と逮捕者の釈放を単に求めているのではない。我々が要求しているのは真の民主主義政府の設立である。
7、要求が果たされるまで、80万人の仲間が最後の瞬間、最後の一人となるまで闘うことを我々は民衆の前で厳粛に誓う。

抗争指導部が提示した上記の決議は、以前に市民の代表が要求した内容あるいは収拾委員会が提示していた要求とはかけ離れていた。それらとは違い、抗争指導部は戒厳軍及び政府との交渉を拒否した。この要求には現代韓国社会の矛盾のなかで、民衆が抱える深刻な問題が提起されていた。つまり戒厳令の撤回、全斗煥の処罰、民主政府の設立である。しかし5月27日午前3時に始まった軍の弾圧と光州民衆抗争の失敗のために、これらの要求が実行に移されることはなかった。光州地域は完全に孤立させられ、蜂起は拡大しなかった。結局、光州民衆抗争は民主化闘争としては失敗に終わったのである。

2）女性の活動

武器を取って軍に抵抗することはなかったものの、女性たちは光州民衆抗争の全過程において絶対不可欠な役割を果たした。5月18日に全南大学正門でデモに参加した女性の大半は学生だった。その後、5月19日の闘争には様々な階級の女性が加わった。軍が市内に侵攻すると女性の被害者数は直ちに増大したのだが、これは軍が無差別に女性への暴力行為をはたらいたことによる。兵士たちは女性を短剣で殴打しそこら中で

強姦した。女性の被害者数は男性よりも比較的多かった[23]。このような女性への残虐行為がすべての市民の感情に激怒をもたらし、年齢や階級に関わらず多くの女性を抗争の最前線へと駆り立てた。5月19日には中央女子高等学校の生徒が校内でデモを行った。また負傷者が急激に増大したため、同日午後2時には光山女子高等学校学生委員会のリーダーたちが市民に献血を呼びかけた。さらには飲み物や海苔巻きを届けることで光州民衆抗争に自主的に関わっていった。既婚女性は歩道のブロックを壊し、デモの前線へとそれを運搬した。また5月19日の午前10時以降は石を収集しデモ隊の背後に運んだ。あるいは彼女たちは各洞単位で集まって米料理活動を組織した。多くの無名の女性たちが闘争をしっかりと進めるため、抗争指導部への資金調達活動にも参加した。彼女らはデモ隊に自分たちが持っていた薬品などあらゆるものを与えた。路上で売り子として働く女性たちは自分たちの商品をもデモ隊に与えた。また多くの売春婦たちが献血に協力し、不潔な死体の処理という不快な仕事にも積極的に参加した。老いも若きもみんなで負傷者を看護し、世話をした。20日夕方の車両デモは民衆抗争の重要な分岐点であったのだが、その後、女性労働者たちが集団で車両デモに参加した。空挺部隊の無差別殺人に抵抗し闘うため、民衆は軍の倉庫から武器を奪った。そこに参加した人々はよく統制がとれており、そのことが早期の市内安定化をもたらした。武装市民が道庁を占拠し光州を解放した後、多くの女性たちが殺害と発砲によって破壊された街の通りの掃除と治安維持活動に参加した。加えて彼女らは行方不明者の受け入れや道庁の入場券の発行、料理、街頭での宣伝、集会準備などの対民業務にも関わっていた。

松柏会の女性たちはまた別の役割を果たした。女性労働者、近隣の農婦、女子学生、街頭の女性の売り子、スラムの住人、そして中流階級の主婦など女性のいくつかのグループが抗争に関与したが、こうしたグループを組織したのが松柏会の女性たちだった。彼女らは光州民衆抗争の初期段階から情報を収集し市民に知らせていたのだが、これらの活動拠点は緑豆書店だった。女性たちは新聞や他の出版物を編集、印刷、出版すると同時に、火炎瓶を用意し街頭デモにも参加した。軍の撤退後は対民業務や調理などを引き受け、また道庁の指導部たちとも密接に連携し集会で必要とされる資料の準備にも携わった。光州民衆抗争が始まってからはYWCAのビルも活動拠点となった[24]。光州民衆抗争の過程において彼女らの果たした不可欠な役割とは金銭的、物資的供給である。彼女たちは松柏会自身の財政をつかって政治囚の支援、自分たちの活動の維持、デモや集会のための物品購入、報告書や資料の印刷などを見事に行った。また自分たちカンパ金を集める活動も行った。

松柏会の女性メンバーに加えて、自らを組織し抗争指導部とも密接に連携しながら民衆蜂起に参加した他の女性たちがいた。それは各工場での労働者運動に関わり、カトリック労働青年会に指導されていた女性労働者たちである[25]。また小規模ながら光州民衆抗争に参加した他の女性団体もあった。それは広大で文化運動をおこなっていた女性たちで[26]、伝統的な仮面舞踏の実演やプンムル（韓国の伝統民族的楽器）、ノリ（実

23　初期段階での犠牲者の一人はソンウォン商業女子学校を卒業し、求職中であったソン・オクレという19才の女性だった。彼女は5月19日、全南大学病院に友達の見舞いに向かっていた。後に彼女は死体となって発見される。彼女は胸と全身を空挺部隊の銃剣でめった刺しにされていた。また彼女の体は右胸、あご、骨盤、腿などを銃弾が貫通したことも物語っていた。父親はマンウォル墓地で気を失い一年後に死亡した。母親は娘のおぞましい死に衝撃を受け神経麻痺を患い六年の闘病の後、死亡した。彼女の兄は軍の銃剣によって刺された後、精神障害という診断を受けた。

24　YWCAの文字通りの意味はキリスト教女子青年会である。ここでは組織を意味するものではなく、単にチョニル路を挟んで道庁の正面に位置するビルを指す。そこは5月25日以降女性運動の拠点となった。道庁及びYWCAのビルは光州民衆抗争における最重要拠点かつ歴史的舞台である。

25　その内の一人、光州、全南地域において「労働者のシスター」と呼ばれていたパク・ギスンを忘れてはならない。彼女は労働運動の指導者であった。また彼女は1978年に全南大学の教授たちが中心となって発表した教育改革のための6・29宣言を支持しデモに参加したため、全南大学（歴史学第三学部）から退学処分とされていた。学生身分を剥奪された後、昼間は工場で勤務し、夜間は野火夜学で教えた。1978年12月石炭ガス中毒によって死亡した。野火夜学における彼女の功績が民衆蜂起を育て、その力を生み出したと言うこともいえる。

26　これは文化活動団体の一種である。また「広大」は文字通りには「韓国伝統曲芸」を意味する。

演）を教えることによって、労働者運動との間に連帯を創造しようとした。広大メンバーは「闘士会報」の出版、配達を担った。「闘士会報」は光州民衆抗争において核心的役割を果たしたのであるが、それを発行し分配したのは労働運動活動家の尹祥源（ユン・サンウォン）に主導された野火夜学や広大のメンバー、そして松柏会の女性メンバーたちであった。

ここからは女性の活動をさらに掘り下げて考察してみよう。彼女らの活動は主に街頭デモ、宣伝活動、道庁での活動、物品供給と献血運動であった。

a：街頭闘争

5月18日の朝、学生たちはデモを組織した。そこに参加した女性たちは大学生だった[27]。18日から19日にかけての夕方、軍が民衆を無差別に弾圧したため、若い中等学校の生徒や高等学校の女子生徒、主婦、売春婦、中高年の女性市民といった参加者が劇的に増大した[28]。女性の参加というのは非常に意義深いものであった。なぜならデモ参加者たちはいつものような平穏な方法でデモをおこなったのではなかったからだ。そうではなく、デモ参加者は兵士からの残虐な暴力のただ中に身をさらして、命をかけて訴えた。

20日の車両デモの後、街頭デモは街頭闘争へと発展していく。日新紡織と全南紡織の女性労働者も車両デモに積極的に参加し[29]、また数名の女子学生は武器を調達するために市外へと車を走らせた[30]。多くの女性はデモ隊の最前線で軍と直接対峙するというようなことはなかった。女性たちは隊列の後ろでスローガンを叫び、火炎瓶や石をデモ隊に供給しながら歩いていた。また女性たちは街頭闘争においても直接参加したのではなかったが、その代わりに水やタオル、飲み物の付与、応急処置の実施といった非常に重要な役割を果たしていたのである。女性のデモ参加者の証言から、参加者の3分の1は女性であったと推測される。またスローガンのいくつかは「戒厳令の撤廃」「全斗煥打倒」「労働三権の保障」「金大中の釈放」というものであった。

b：宣伝活動

デモや武装闘争は基本的に男性によって主導されていたが、それが光州民衆抗争を短期間のうちに民衆蜂起へと発展させたという点において非常に重要である。また他方では、女性たちが行った宣伝運動も一般市民の間に絶対的連帯を作り上げたという点で決定的に重要な意味を持っていた。

二種類の宣伝活動があった。その一つはいかなる組織的な動きともつながっていなかったが、抗争に強大な衝撃を与えるものであった。この一団は不意に登場し市民が光州民衆抗争に参加するよう鼓舞した。全春心（チョン・チュンシン）、チャ・ミュンソクといった卓越した個人扇動家たちがこうしたグループで活動していた。もう一つは松柏会や広大のメンバーが行った組織的な情宣活動であった。

全春心（チョン・チュンシン）は31才の舞踏塾講師で光州に居住し、彼女の突出した活動をいまだにはっきりと記憶している市民もいる。彼女は恐怖や怒りといった感情を、共同の闘争の中で活動するという積極的な連帯感へと変化させた。また彼女は街頭放送を通して闘争を拡大させるという重要な役割を果たした。彼女のアピールは戒厳軍の隊列を乱すほど強烈なものであった[31]。

27 ガン・ボンヒの証言による。

28 ホン・ウォンヤン（スピア女子高等学校生徒、16才）の証言による。

29 チョン・ヒュンジャ、およびキム・ジョンスンの証言による。

30 アン・ユンギュンの証言による。

31 なぜ全春心（チョン・チュンシン）が蜂起鎮圧前の5月26日にスパイとされ、陸軍保安司令部に引きずり込まれたのかは、

5月19日、全春心（チョン・チュンシン）は両親を訪ねて光州にやって来た。20日未明、彼女は光州イェリ高等学校前で胸を切り裂かれた一人の女子学生の死体をたまたま目にする。空挺部隊が銃剣で彼女の胸を突き刺したに違いなかった。全春心（チョン・チュンシン）は衝撃を受け、この光景を目にしたことで彼女はマイクとアンプを手に他の市民参加者に自分の発見を熱烈に知らせるため街頭へ出るようになった。街中を行き来しながら、彼女は軍の残虐性を知らせ市民参加者に全力で抗議を訴えかけた。20日午後から彼女はデモの先頭にたつようになる。21日の朝、朝鮮大学校法科大学の学生である金範泰と共に彼女が市民代表として政府関係者と交渉を開始した。この困難な状況下で、彼女は車両デモの最前線にたちながら、車で二体の死体を運んだ。交渉が決裂し軍は集中的な発砲を行った。街を行き来し、安全確保と治安維持とを市民に訴えかける街頭放送を行いながら、彼女は約30の死体を赤十字病院、基督病院及び他病院へと運搬した[32]。

全春心（チョン・チュンシン）、チャ・ミュンソク[33]が民衆抗争拡大過程にそれぞれ影響を及ぼしていた間、松柏会メンバー及び広大女性メンバー、野火夜学のメンバーたちは組織された体系を持って情宣活動を行っていた。光州民衆抗争の初期段階から、松柏会メンバーは軍の動きに関する情報を収集し19日の朝から緑豆書店であらゆる場所と[34]連絡をとっていた。

彼女らは19日の夕方から印刷物を作成し[35]、23日夜からYWCAのビルに集結、道庁で抗争指導部と活動した。彼女たちは光州解放後、道庁で作成された計画を実行に移したのだが、それは一般市民からの広い参加を実現するためのものであった。野火夜学のメンバーで「闘士会報」の印刷担当だったパク・ヨンジョンとともに、彼女たちは資料を印刷し、その配布を行った。さらに何が起こっているのか、そしてそれにどのように対処すべきかを知らせるためにビラを作成し街中に張り、配布した。またプラカードや横断幕、パフォーマンスとして燃やすための全斗煥人形などの集会での使用物も作成した。

広大の女性メンバーによる活動[36]も偉大であった。彼女たちは約30もの横断幕や市民集会で使用する巨

この事実によって説明がつくであろう。

32　多数の死体が軍のトラックによって運ばれ、軍の撤退前にはなくなっていた。死体は軍による光州奪還後に発見されたものと仮定される。全春心（チョン・チュンシン）は言葉では言い尽くせないほどの拷問を受けた。調査過程において保安司令部は残虐な諸方法を使って、彼女に拷問をかけた。彼女は懲役15年の刑罰を宣告されたが、これは蜂起に参加した女性の中で最も重いものであった。全春心（チョン・チュンシン）は保安司令部から受けた性的暴行のために、結婚後も妊娠できなかった。さらに彼女は長期間、政府の監視下に置かれていた。全春心（チョン・チュンシン）の証言から。

33　貧しい農家の出身であるチャ・ミュンソクはソウルで家政婦として働くなど、インフォーマルな労働に従事していたようである。しかしこの当時は光州で働いていたようだ。彼女に関しては情報が少ない。我々が手にした情報は、彼女と共に街頭宣伝活動を行った全春心（チョン・チュンシン）の述懐によるものである。

34　緑豆書店は学生運動及び労働者、農民運動諸団体と関係を持っていた若者たちの活動拠点だった。緑豆書店は光州の大学生たちに社会科学系の本を提供した。キム・サンヨンは5月17日の夜、書店経営者として取調べを受けた。彼の連れ合いは松柏会で活動していたのだが、活動家たちに潜行するように連絡した。尹祥源（ユン・サンウォン）は当時書店で働いており、中心部でのデモに参加する前、5月18日朝の全体状況を把握した。彼は中心部から書店までのデモの様子とともに、軍の動きに関する情報も仲間たちに伝えた。5月18日街頭デモのため外出した際、「我々はこの闘いをさらに一歩前進させなければならない」と語っている。彼はソウルと連絡を取っているようで、全国的な蜂起の拡大を期待した。彼はまた民衆連合の中心人物で、1979年1月に設立された民主労働者連合中央委員会のメンバーでもあった。社会運動の活動家たちは事態収拾のために会議を開き、民衆蜂起が武装闘争へと発展する前に、自然発生的な闘争を組織化するため年長の民主化運動活動家らとも連絡を取り合っていた。これらの活動の中心が緑豆書店だったのである。

35　松柏会のメンバーはジョン・ヒョンエ（教員）、ホン・ヒヨン（松柏会執行部委員長）、イム・ヤンヒ（現代文化研究所所長）、ジョン・ヒュンジャ（全南繊維労働組合議長及び韓国労働組合全南支部女性部長）、ジョン・ヨア（YWCA委員長）、イ・ヘンジャ（YWCA委員長）たちであった。彼女らは抗争初期から物品の供給、情宣活動、街頭デモで火炎瓶を投げるなどしていた。道庁近くのYWCAビルが活動拠点だった。彼女たちは蜂起が弾圧されるまで闘争に参加した。蜂起が鎮圧されてもなお、民衆抗争の本質を知らせるため彼女らは活動を続けた。そしてこの目的のために光州民衆抗争を記録したテープを秘密裏に作成したのであった。

36　広大は1980年1月に設立され、YMCAの青年部に所属していた。メンバーたちは当時、YMCAの事務所で活動の準備を行っていた。全南大学朝鮮語朝鮮文学部を卒業した教員パク・ヒョスンが活動を組織していたのだが、彼は道庁の抗争指導部における広報代表者でもあった。

大人形を洪成潭というプロの芸術家の協力の下で作成しただけでなく、23日の朝から街頭情宣活動にも参加していた。そしてキム・テジョンという全南大学朝鮮語朝鮮文学部の学生で、広大のメンバーでもある女性と共に集会を主催した。ビラの内容は主に、戒厳令の撤廃、全斗煥の処罰、労働三権の保障などの民衆要求であった。光州民衆抗争初期は、空挺部隊が犯していた残虐行為を知らせることと、蜂起に参加するよう市民によびかけることがビラの主な内容であった。23、24日両日には決議に示された七か条の要求に対する支持を集めるためのビラが作成された。軍が市内への侵攻を予定していた25、26日にはビラの主眼は軍とアメリカの存在に置かれていた[37]。

c：道庁での活動

道庁の市民収拾委員会に参加した女性の活動に焦点をあてておこう。ただしそのためには道庁における全般的な活動と関連づけて、それを考察する必要がある。

YWCA会長の曺亜羅と総務の李愛信は、カトリック及びプロテスタント教会のリーダー、教員、弁護士などの知識人によって組織された市民収拾委員会に所属していた。年長者である曺亜羅は「光州民主化の母」と呼ばれていたが、彼女は南洞教会で他のリーダーたちと会い、軍が市民を残虐に殺害し始めたことに対してアメリカ文化協会に抗議している。曺亜羅は武器を持ち続けることが更なる犠牲者と殺害を呼び起こすと考え、市民に武器の放棄を呼びかけたのだった。彼女と李愛信は国外の韓国系教会や人権団体から寄付を集め、負傷者及び犠牲者の家族に対する支援を行った。

光州解放後には道庁で個別に活動する市民収拾委員会の女性メンバーもいた。道庁における300～500人の全活動家のうち、女性メンバーはおよそ30～50人。25日の夕方に学生収拾委員会が道庁をあとにし始めたので、そのうち約10人の女性たちはYWCAのビルにいた女性たちに合流することにし、軍によって弾圧される直前までそこにとどまった。道庁での活動は武器の収集と管理、負傷者の搬送、死体の処理、米の供給、道庁と周辺地域の防衛、状況対策室での活動などである。その中で女性は負傷者の看護と搬送、死体の処理、葬儀準備、調理と米の供給を行った。また行方不明者の記録や死者名簿の公表、街頭情宣、情勢の報告、警戒情報の伝達、入場券の配布といった道庁状況対策室での職務も行い、カンパ集めも担った[38]。

調理を担当していた女性の中には、当初中等学校や高等学校の女子生徒もいたのだが、学生収拾委員会指導部の離脱に伴い姿を見せなくなった。その後はカトリック労働青年会に関わっていた約10人の女性たちが自分たちを二つのグループに分けて、交代しながら最後まで調理を続けた[39]。

学生収拾委員会に関しては数名の女子大学生が状況対策室の職務に就き、高等学校の女子生徒と売春婦たちが死体の処理に携わっていた。これらの具体的な例としては、シヌィ女子商業高校三年の朴賢淑（パク・ヒュンスク）という18才の女性と他二名の女性の存在が挙げられる[40]。アバンオンというパブ出身の二人の女性は軍の侵攻と逮捕によってその活動が続行不可能になるまで、ひどく腐乱した死体の清掃と埋葬を続

37　当時、光州民衆抗争を闘う市民を支援するため釜山に米軍艦が到着した、と伝えるビラが作られた。だが証言によると、抗争指導部は米国が新しい軍将校グループを支持していたことを明確に認識していた。このビラは、戒厳軍の再侵攻が予期される状況のなかで、民衆のなかでうずまく恐怖心を緩和させるために作られた。

38　その代表は高校生のキム・ギュンリンと中学生のパク・ミスクである。

39　ジュン・ヒャンジャの証言による。彼女は当時、全南紡織労働組合の女性委員長であり、韓国労働組合全南支部の女性部長でもあった。また彼女は70年代後期にカトリック労働青年会を指導したこともあった。

40　朴賢淑は23日に殺害される。彼女は田舎の貧しい農家の生まれだった。日記からは彼女が社会の不平等性に目覚める様子がみてとれる。彼女は学生時代から自立し、7月には光州銀行に採用される予定でもあった。

けた[41]。

d：YWCA ビルでの活動

光州が解放され抗争指導部が組織されると、主に緑豆書店の労働者で、かつ社会運動サークルに関わっていた進歩的な女性たちが 23 日夜、YWCA のビルに集結した。

YWCA ビルで活動するため、集まったメンバーたちは集会計画班、街頭情宣班、ビラ作成班、印刷班の各チームに振り分けられた。松柏会メンバーと広大の女性メンバーが一般市民とともにその活動を進めた。彼女らは集会を準備し、また 20 の募金箱を設置して抗争のための基金を募った。YWCA ビルで活動していた松柏会メンバーの一人は集会で、女性市民を代表して民衆要求を代弁する声明を読み上げた[42]。そうした活動には参加しなかった女性も YWCA で 10 人ほど 27 日の未明まで YWCA にとどまった。彼女らの活動は、多くの無名の女性たちや民主化を求める市民の自主的参加と支援があったからこそ可能だった。米やキムチといった料理材料の大半は市民が寄付したものだった[43]。

e：その他の活動

以上の活動に加えて、多くの無名の女性たちが抗争のための物資供給、献血運動、看護といった様々な活動に参加した。一般的に多数の女性が年齢や社会的地位に関わらず献血に参加したと言われている。女性たちの中でも、特に多くの女子学生が献血に参加した。チュンテ商業高校三年で 17 才だった朴今喜（パク・ケウン）という女子学生は、基督病院での献血を終えた直後、帰宅途中に殺害された。多数の市民が献血に参加したが、それは戒厳軍の無差別殺人によって負傷者が急増したため、血液が非常に重要となったからだ。また光州市が完全に孤立していたことも血液の重要性を増した。

主婦たちは自主的に街頭で住民から米や金銭のカンパを集めた。彼女らは海苔巻き、丼、副菜、飲み物などをそれぞれのグループで調理しデモ隊に分配した。また集会のためのプラカードを作成して抗争に参加したり、その他様々な方法で抗争に関わった[44]。

抗争期間中、もっとも特徴的だったのは宣伝扇動活動である。街頭に響く女性たちの声は民衆を覚醒させるのに大きな効果を発揮した。宣伝、扇動は女性が主導した活動であった。ビラの作成や配布も女性たちが中心になって進められた。これらの活動は家父長制社会における労働の性分業が存在する中で、女性がすぐに貢献できる分野だった。デモと街頭闘争に参加した人々のうち、全体の 3 分の 1 は女性だった。しかし武装闘争の段階で銃を手にした女性はいなかった。

5、まとめ

光州民衆抗争は支配者と被支配者間の対立構造の中で、ファシスト体制の再構築を試みた新しい軍将校

41　最も献身的に死体の洗浄にあたった一人はホン・ベオという日雇労働者であった。彼は 5 月 27 日未明の闘争で命を落とした。

42　ホン・ヒヨンが女性代表として声明を読み上げた。現在作家である彼女は、当時松柏会の委員長を務めていた。

43　そこにはパク・スンチェという男性もおり、調理に参加した。

44　18 日からデモに参加したある女性が民衆に献血を呼びかけた。多数の市民がその場で献血に応じ、少し後にさらに多くの市民が献血を申し出た。ホン・ヒヨンの証言による。

グループの暴力的弾圧と、これに抵抗した光州市民の闘いだった。10日間の民衆蜂起は失敗に終わったが、光州民衆抗争は韓国民主化における歴史的分岐点を作りあげた。

すでに見てきたように、光州民衆抗争は女性運動にとっても歴史的分岐点となった。それは人々の意識に新たな覚醒をもたらした。つまり女性解放は全社会の変革をともなわなければ成し遂げられないということを教え、さらに女性運動の主体は誰なのかということも明確に示しめした。

女性たちは犠牲者という受動的な存在として留まるのではなく、光州抗争の中で抗議行動に積極的に参加し闘った。光州民衆抗争は女性解放が社会全体の変革なくしては達成されないということを我々に教えた。女性の抵抗は光州民衆抗争の中で自発的に拡大したが、それは組織化されないままとなった。リーダシップを取ったのは下層階級の女性たちではなく、広大のメンバーというような進歩的知識人女性であった。一方で抗争の中で最後までこれに参加し、重要な局面で活動を続けたのは常に社会の最底辺に置かれていた女性労働者や下層階級の女性たちであった。このことから光州民衆抗争は、女性運動に新たな地平を築いたといえる。なぜならこの時から誰が女性運動の主体たるべきか、ということが問題化され始めたからである。

【牧野幸子　訳】

参考文献

Academic Conference Commemorating 25th Anniversary of Gwangju Uprising, *Democracy and Korean Politics in 21 Century*, 5/18 Institute, Chonnam National University.

Academic Groups Association, 1989, *Korean Society and its Ruling Structure in the 1980s*, Poolbit.

Ahn Jean, 1991, "Gwangju People's Uprising and women," in Research Group for May Women(ed.), *Gwangju People's Uprising and Women*, Seoul: Social Institute of Korean Christianity.

Ahn Jean, 2003, "The Socio-economic Background of the Gwangju Uprising, *New Political Science*, vol. 25, no. 2, pp. 159-176

Ahn Jong-chul, 1997, "The Background of Gwangju People's Uprising and its Progress", Na Kahn-chae (ed.), *Gwangju People's Uprising and May Movement* , Gwangju: 5/18 Institute, Chonnam National University, 1997.

Park Hyun-chae, 1990, "The Significance and Roles of the Gwangju People's Uprising in the 1980s' National and Democratic Movements", *History and Sites*, vol. 1.

Jeong Sang-yong, et al., 1990, *Gwangju People's Uprising*, Dolbegae.

Jeong Jin-sung, Ahn Jean et al., 2004, *The Current History of Korean Women*, Seoul: Hanul.

Deulbool Yahak (Wildfire Night School), 1979, *A Fact-Finding Survey on the Gwangju Factory Complex*.

Historiography Institute of Modern Korean History (ed.), 1990, *Historical Records Series of Gwangju May People's Uprising*, Seoul: Poolbit.

Hwang Seok-young and Association of Social Movement in Junnam Area, 1996, *May 18: a Record of Life and Death*, Seoul: Poolbit.

Jang Sang-hwan, Jung Jin-sang, 2001, *Social Movements in South Korea*, Gyeongsang University Publishing Department.

Kang Ee-soo, "The Changing of Female Labor Force since 1980s", Jeong Jin-sung, Ahn Jean et al., 2004, *The Current History of Korean Women*, Seoul: Hanul, pp.200-225.

Kang Hyun-ah, 2003, "Women's Experiences in the Gwangju Uprising: Participation and Exclusion, *New Political Science*, vol. 25, no. 2, pp. 193-206

Katsiaficas, George. 2003, "Comparing the Paris Commune and the Kwangju Uprising", *New Political Science*, vol. 25, no.2

Kim Dong-uk, 1990, "The Contradictory Structure of Korean Capitalism, and the Subject of the Uprising", *Gwangju People's Uprising*.

Kim Jin-gyun, Jung Keun-sik, 1990, "The Socio-Economic Background of the Gwangju Uprising", Institute of Korean Modern History, *Gwangju People's Uprising*, Seoul: Poolbit.

Kim Joon, 1990, "The Political Development and Confronting Composition in 1980", *Gwangju People's Uprising*, Sagyejul.

Kim Myunghye, 2004, *Women and Democratization Movement*, Seoul: Gyungin-moonhwasa

Kim Sang-gon, 1997, "The Evaluation and Continuation of the May Movement as a Political and Social Movement," Na Kahn-chae, (ed.), *Gwangju People's Uprising and the May Movement Studies*, Gwangju: 5/18 Institute, Chonnam National University.

Kim Se-gyun, 1990, "The Social Background of 5/18 Gwangju People's Uprising", *History and the Sites*.

Lee Choon-hee, 1991, "Women's Activities in the May Uprising," in *Research Group for May Women, Gwangju People's Uprising and Women, and Seoul*: Social Institute of Korean Christianity, pp. 116-233.

Lee Jung-ro, 1989, "A revolutionary perspective turnover of the Gwangju Uprising", *Labor Liberation Literature*, May 1989.

Lerner, Gerda. 1986, "Reconceptionalizing Differences among Women," *Journal of Women's History*, vol. 1, no.3, New York: Oxford Univ. Press

N, Denzin, 1989, Interpretive Biography, *Sage University Series on Qualitative Research Methods*, 17, CA: Sage.

Na Kahn-chae (ed.), 1997, *Gwangju People's Uprising and May Movement*, Gwangju: 5/18 Institute, Chonnam National University.

Na Kahn-chae, (ed.), 1997, *Gwangju People's Uprising and the May Movement Studies*, Gwangju: 5/18 Institute, Chonnam National University.

Research Group for May Women (ed.), 1991, *Gwangju People's Uprising and Women*, Seoul: Social Institute of Korean Christianity.

Scott, John, W. 1988, *Gender and the Politics of History*, New York: Columbia Univ. Press

Son Ho-chul, 1995, "A People's Uprising or a Citizens' Uprising?" *50 Years of Korean Politics Since Liberation*, Seoul: Saegil.

Taylor, Charles. 1994, "The Politics of Recognition", *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, Princeton: Princeton Univ. Press

The Committee of the 5/18 Historiography of Gwangju City, 1998, *5/18 Gwangju Democratization Uprising Materials*, Vol. 14, Gwangju City.

The Third International Conference for Democracy and Human Rights Commemorating Gwangju Uprising, 2002, *Democratization Movements and Women*, Gwangju: 5/18 Institute, Chonnam National University.

2006年、ウランバートルとソウルで開かれた２つのフォーラム

今岡良子

筆者は、このジャーナル第１号で、モンゴルにおける女性研究の動向を紹介した。その中で、これからの課題として、民主化によって解禁された伝統や習慣とジェンダーの間で生じる矛盾や少数民族の女性が抱える問題も研究対象とする必要性を述べた。この２つの問題について、2006年９月にウランバートルで開かれたフォーラムで報告があった。まず、そのフォーラムから紹介していきたいと思う。

（１）ウランバートルで開かれたフォーラム

2006年３月にウランバートルを訪問した時、９月にＤＶセンター主催のフォーラムが開催されると聞いた。会場にマスコミは入れず、女性だけで自由に語りあうことを目的にしているということで、ますます興味をもった。

ＤＶセンター（NCAV: National Center Against Violence）は、1995年にモンゴルで最初の女性のシェルターを作って以来、今日まで被害女性と向き合ってきたNGOである。今ではモンゴルの女性研究をリードする存在になっている。おそらくモンゴルで女性のNGOを紹介してほしいと言うと、一般の人でも、この名前をあげるだろう。2005年６月にソウルで開かれた世界女性大会のパネル Domestic Violence and Women's Movement in East Asia: Moving towards Regional Networking and StrategiesではＤＶセンターもパネルディスカッションに参加し、P.ナラントヤー（P.Narantuya）がモンゴルの現状を報告していた。以後、韓国のＮＧＯをはじめ国際的なネットワークを広げている。

2006年８月にウランバートル滞在中、DVセンター主催のフォーラムが９月５日に開かれ、そのテーマが、文化とＤＶのかかわりであると聞いた。これまでモンゴルでは常に市場経済移行後の貧困との関係からDVの問題を捉えてきたので、ますます興味をもった。筆者は、GCSD [1] のはからいで、特別に参加させてもらえることになった。

フォーラムの正式なテーマは、"Culture and Violence Against Women"で、伝統文化や習慣に潜む女性差別に関する報告が朝10時から夕方の６時まで続けられた。報告集は、ＤＶセンターから発行されるので、ここではごく簡単に紹介することにする。

第一部では、モンゴル国の多数を占めるハルハ族の知識人や活動家による報告であった。

- D.Enkhjargal (Director National Center Against Violence), 'Inter linkage Violence Against Women and Culture'
- T.Amgalan (Director Gender Center for Sustainable Development), 'Consequence on

1　GCSDは、NGOのGender Center for Sustainable Developmentの略である。GCSDの代表のT.アムガランは、DVセンターの代表のD.エンフジャルガルとともに女性を代表して意見を述べる機会が多く、組織としても共同行動をとることが多い。このフォーラムについての情報はアムガランから聞いたもので、筆者の参加も彼女によって実現した。

macro economic policy and women'

- S.Timendelger (Lecturer Department of Social Science Mongolian State University of Education), 'Discrimination against women and distortion in the labor market'
- D.Tungalag (Director Department of Social Management on Academy of Manahement), 'Consequence on social protection policy and women'
- B.Onon (information officer Gender Center for Sustainable Development), 'Development of Belief and requirement –Freedom of culture'
- J.Zanaa (Director Citizen's Alliance), 'New tendencies on culture'
- B.Togtokhbayar (Gender researcher, Kh,Enkhtuya director on Journalism Department Otgontenger University), 'One step forward, two steps back'

これらの報告の中で伝統と文化に関するものは、J.Zanaa と B.Togtokhbayar の報告であった。

J.Zanaa のべらんめえ口調の発言は圧巻だった。モンゴル帝国 800 周年の大小イベントが一年間続けられたが、ウランバートル市の区長までが封建領主の衣装を付け、チンギスハーン気取りで 9 人のお供を連れてイベントの開会式に登場するほどのはしゃぎぶり。そこでは女性は召使を演じる以外に出る幕はない。封建的な男女のあり方が再現され、繰り返される。「伝統」に興味をもつ若い人たちへの影響は大きい。女性は第二の存在であるという意識が浸透する。これでは、ますます女性の地位の低下につながっていく。男たちがはしゃいでいる「800 年」は、女性にとって何のプラスにもならない。このように語気を強めた。彼女の主張は、笑いと共感をもって受け止められていた。

B.Togtokhbayar も、軽快で、テンポのいい口調で、笑いを誘いながらの発言をした。彼女は、ことわざの中の女性蔑視、1990 年の民主化以降禁止を解かれたシャーマニズムや仏教の宗教儀礼における女性差別を取り上げた。民主化以降、男性の意識の中に存在していた差別も解禁され、市場経済への移行の過程で加熱するコマーシャリズムによって具象化、典型化されている。それが若い世代に強い影響を与えていることを指摘した。

1990 年以降、伝統を賛美し、宗教活動を復活させることが可能になり、むしろ、それらを批判の対照とすることを遠慮する傾向にあった。つまり、社会主義時代に行うことがタブーだったことが、民主化以降、解禁になると、批判することがタブーになったのである。2 人の報告は、私の知る限り、後者のタブーに挑む最初の報告であった。「800 年」に対する批判を公的な場で聞くのも初めてで、胸がすく思いがした。

第二部は、モンゴルの少数民族の女性の報告であった。モンゴルで少数民族の女性が自らジェンダーの問題を語るフォーラムはこれが初めてである。

フブスグル県からトゥバ族(トナカイ遊牧民)、スフバートル県からダリガンガ族、ドルノド県からブリヤート族、ホブド県からザハチン族、バヤンウルギー県からカザフ族の女性たちが、市場経済移行後に再生する伝統的な習慣の中に残る女性差別について語った。

カザフ族女性の報告をとりあげると次のようになる。人民革命前、イスラム教のカザフ族の女性は、「家事をする家畜」と見られ、わずか 13 歳で父、複数の妻をもつ高齢の夫に嫁がなければならず、夫が亡くなった後はその兄弟と結婚しなければならなかった。その状況は、革命後も 1930 年代まで続いた。その後、人民革命党の女性解放政策は、モンゴルの最も西に端に住むカザフ女性にも届くようになり、また、女性たち自身、教育を受け、意識改革をし、女性の地位向上に努力した結果、ハルハ族と同じように男女平等を勝ち取っていった。しかし、民主化後の伝統復活により、過去の悪しき習慣まで復活してしまった。このような少数民族の実態を理解し、共感し、ともに力をあわせて女性が抱える問題を解決していきましょう。このように呼びかけて締めくくった。

このようなカザフ族女性や他の少数民族の女性たちの発言に対し、ハルハ族の女性たちは、同じ女性として共感すると同時に、マイノリティに対する自分たちの無知を改めて確認し、話に聞き入っていた。

第三部は、ＤＶを取り巻く問題について報告が続いた。

- D.Dolgorsuren, Coordinator 'Gobi regional information and service center' on NCAV, 'Implementation on Law Combat Domestic Violence'
- D.Tsendayush,Lawyer and ADVocate, Center Human Right Development, 'Legal situation on human trafficking crime'
- L.Badamtsetseg, Coordinator Child Protection Program on NCAV, 'Legal regulation on rape crime'
- B.Altantsetseg, Director National Aids Foundation, 'Law against prostitution and prostitution'

特に、最後の報告は、貧困女性が性を売ることを止めることは難しい。しかし、エイズ予防のためには、性売買を許可制にすることも検討する必要だという主張であった。新聞でも、しばしば性売買を許可制にすべきだという意見が述べられる。これについては、特に反論もなく、質問もなかった。このフォーラムに参加している女性たちは、実際に性労働に携わる当事者ではないので、貧困から脱出する手段として、それも仕方がないという立場に立つ人もいるだろう。DVセンターは、2005年にDVの被害者が発言するシンポジウムを組織し、今年は少数民族女性の発言の場を作った。DVセンターなら、これまでの経験を活かして、性労働者が語る場を作ることができるだろう。この問題は、私たちの研究会の大きなテーマの1つでもあるので、モンゴルにおいても、当事者とも交流を深めながら、本格的な議論をする必要性を感じた。

第四部は、全国のＤＶセンターの支部[2]からの発言が続いた。どの支部の代表も、地元の警察やマスコミと協力しながら被害者の人権を守る難しさを語った。支部は、地域の人々が自主的に設立しているが、まだ支部のない県からも設立支援を呼びかけていた。

モンゴルのジェンダー研究は、DVセンターの活動を中心に、着実に進んでいる。また、DVセンターは、次に紹介するソウルのフォーラムから韓国に移住した女性も対象としていくのである。

（2）ソウルで開かれたフォーラム

2006年6月、モンゴルからの帰りにソウルに寄り、モンゴル人妻たちの会代表シュルンツェツェグを訪ね、韓国人男性と結婚したモンゴル人女性が抱える問題について話を聞いた。特に最近は、WEBサイトや結婚紹介所を通じて、年の離れた韓国人男性と結婚する10代のモンゴル人女性が増え、ウランバートルに仕送りするために愛のない生活や暴力に耐えているという。シュルンツェツェグ自身はソウルに働きに来て、職場で知り合った韓国人男性と恋愛結婚した人である。それでも、韓国の生活習慣に慣れず、家庭に溶け込めず、辛い時期を過ごした経験がある。貧困から脱出する手段として韓国人男性と結婚する女性の問題を自分の痛みとして話す表情が印象的であった。

翌日、シュルンツェツェグといっしょに移住女性人権センター（Women Migrants Humanrights Center

2　トゥブ県、同県バガノール地区、同県ナライハ地区、ダルハン＝オール県、セレンゲ県、同県シャリンゴル地区、ウブルハンガイ県、バヤンホンゴル県、ドルノド県、ドンドゴビ県。

in Korea）のチーフカウンセラーのCHOI, Jennyさんを訪ねた。モンゴルに限らず、アジアの様々な国で韓国のドラマが放送され、ソウルの豊かな生活と優しい韓国人男性に憧れてやってくる女性が増えている。結婚紹介のWEBサイトやソウルの結婚紹介所を通じてくる人も増え、国際結婚という形式の人身売買の被害者もいる。このセンターを訪ねるモンゴル人女性は少ない。これまで訪ねてきたのは2、3人であるが、いずれも韓国人の姑が生活になれないモンゴル人嫁を心配して連れてきたというケースだった。そのモンゴル人女性達は、韓国社会に定着したいというよりも、ここをステップにして渡米したいという意識が強かった、と淡々と語られた。

同センターは11月に偽装国際結婚による人身売買を防止するためのフォーラムを開催し、アジア各国からスピーカーを招待する準備をしていた。また、9月にウランバートルのＤＶセンターを訪ねた時、ＤＶセンターがこのフォーラムに報告者を送ることになったと聞いた。その帰り、ソウルのモンゴル人妻たちの会を訪ねた時、様々な相談が寄せられるようになったが、メンバー自身の仕事と生活に手一杯で、韓国の法律について学んだり、もめ事の仲裁に入ったりする余裕がなく、何もしてあげられないということだった。ソウルに来るＤＶセンターの代表を妻たちの会に紹介することは双方にとって重要と考え、筆者自身もこのフォーラムに参加することにした。

また、ウランバートルでモンゴル国立大学外国語文化学部の日本語学科を訪問した時、朝鮮語学科の主任ツェツェグが私を訪ねてきた。韓国人とモンゴル人の国際結婚について社会問題化しているので、自分は言語学が専門であるけれども、「上」から調査研究するように言われている、とのことだった。「上」とは誰かと聞かなかったけれども、モンゴルでは社会主義の時代から、「上」からの業務命令で新しいテーマに取り組むことがよくある。政府として本格的にこの問題に取り組もうとしているということだろう。

その後、ソウルのモンゴル人労働者支援センターのオットゴンがウランバートルに帰っていたので会って話をすると、国際結婚を仲介する業者のあり方の問題、結婚後のモンゴル女性の抱える問題がますます深刻になっているということであった。この春、ノムヒョン大統領がモンゴルを訪問し、今年だけでも9000人のモンゴル人を受け入れる話が進んでいる。残される家族、移住した家族、それぞれに問題を抱えている、ということであった。

この2人の話から、ノムヒョン大統領のモンゴル訪問以降、モンゴル側からも、韓国に移住したモンゴル人の問題を研究し、取り組むムードが高まってきた、ということが感じ取られた。

さて、11月21日から24日にかけてソウルの移住女性人権センターが開催したフォーラムは、"Asian Women Migrants' Strategy Discussion for Protection and Prevention of Human Trafficking in International Marriage" というテーマであった。討論の課題は次の6つで、1: 国際結婚の現状について、2: 国際結婚の増加による社会変化について、3: 外国人と結婚した女性の帰国後のサポートについて、4: 女性が国際結婚を選択する要因と背景について、国際結婚を奨励する政策について、5: 国際結婚に関する政策について、6: 国際結婚に関するＮＧＯの活動について、ということであった。

100人ぐらいの会場がほぼ満席で、2005年のソウルの女性大会で知り合ったKorea Women's HotlineのPak, In Heさん、Incheon Women's HotlineのMarieやDurebang（トゥレバン）のYu, Young Nimさんに再会できた。また、梨花女子大のジェンダーの専門家、フィリピン人移住者を支援している在韓ＮＧＯ、モンゴル人妻たちの会も参加していた。

スピーカーはベトナム、フィリピン、台湾、中国、モンゴル、日本の現状について報告した。予稿集"Asian Women Migrants' Strategy Discussion for Protection and Prevention of Human Trafficking in International Marriage" が出版されたので、詳細はそれを参照していただきたい。テーマをあげておくと、次のようになる。

- Han, Kuk Yom (Chief Director of women migrants human rights center),'The task and recent situation of international marriage trafficking -around Korea-'
- Cao Thi Hong Van (Vietnam Women's Union),'Report on the marriage of Vietnamese women with foreigners'
- Lee, Hae Eung, 'International Marriage in China-Current Situation and Problems'
- Sorormaa Chuluunbaatar (National Center Against Violence), 'The Human Trafficking in International Marriage'
- Florence May B.Cortina (Kanlungan Ceneter Foundation, INC.(Center for Migrant Workers),'Filipinas marrying Koreans: what's wrong with that?'
- Rossana Tapiru (Filipino Worker's Center),'Trafficking in International Marriages'
- Allison Lee (Hope Workers' Center),'Report of the Hope Workers' Center'

国際結婚については、日本でも事例は多いが、研究の蓄積は浅い。人身売買の被害者を出さないためにどうすればいいかという観点からこれからも国際的な共同研究や共同行動が展開していくだろうと思われる。

少し、気になった点を2つあげると、1つは、送り出し国からも、受け入れ国からも発せられた「国際結婚が貧困から脱出する手段になっている」という言葉である。確かに、貧しい国の貧しい地域から豊かな国に移住することで、その人は生活水準をあげることができる。豊かな国の貧しい農村に移住しても、出身地よりはましな生活を送れるかもしれない。初め、この言葉が、そういう国際結婚を受け入れる側から発せられた時、何とも言えない違和感を覚えた。それをまだ充分に分析できていないのであるが、こういうことではないかと思う。

1つの国なり、地域なりが豊かになる時、それはその地域の勤労者が勤勉に働いた成果である。しかし、実際には、それだけではない。資本は、国と国、地域と地域の間に存在する労働者の賃金、土地代、原料代などの格差を巧みに利用する。グローバル化は、豊かな国がより豊かになる構造を作り出す。少子高齢化と教育熱の高い韓国で、経済を持続的に発展させるには、韓国人よりも賃金の安い国からの移住労働者は欠かせない。また、生産した商品を売るためには、第三世界は重要な市場となる。韓国ドラマは、ソウルの豊かな消費生活を宣伝し、購買意欲を掻き立てていく。第三世界の労働者にとって、自分の国の賃金は低く、いつまでたってもそんな生活が実現しない。それなら、ソウルで働こう、と移住労働を選択する者が出てくる。3Kの仕事は男性向けなので、女性の場合、移住労働者になる機会が少なくなる。それなら、永久就職も兼ねて、国際結婚を選択する者が出てくる。この女性にとって国際結婚は、確かに、文化の違いや経済の格差、国境を乗り越えて、貧困から脱出する手段であろう。しかし、豊かな国の側の人間が、「国際結婚が貧困脱出の手段になっている」と言う時、貧しい国から搾取してより豊かになる自分たちの資本主義経済のあり方について、どう考えているのだろうか。それは問うことをせず、貧しい国から豊かさを求めてやってくる人のみを問題にするのだろうか。もしそうだとしたら、受け入れ国と送り出し国の女性は同じ立場に立って、移住女性の問題を語り合えるのだろうか。という疑問から違和感が生じたのだろうと思われる。

それから、送り出し国の第三世界の側から発せられた時にも、違和感を覚えた。これは、ウランバートルのフォーラムで、「エイズ予防のためには性売買を許可制にすることも検討する必要だ」という主張に対し、強い反論がなかった時に覚えた違和感に似ている。

また、2006年11月にこの研究会でベトナムを訪問し、アンザン省の女性同盟を訪ねた時、こんな話を聞いた。メコン川流域の住民の暮らしは貧しく、国外に出稼ぎに行く人が多い。女性同盟では、人身売買の被害者にならず、少しでもいい条件で働くことができるよう、語学や技術を教えて送り出している、という話であった。この時も、筆者は違和感を覚えた。

この国際結婚のフォーラムにおいても、ベトナムの女性同盟の代表が、女性同盟が結婚紹介所の役割を果たし、人身売買の被害者を出さないように努力しているという報告をした。ソウルのモンゴル人妻たちの会の代表バットゲレルは、DVセンターの代表と打ち合わせをしている時に、悪徳な業者を追放することはできないため、自分たちが紹介所の役割を担うべきだ、とくり返し述べていた。同じ送り出し国の人間として、貧困状況を熟知し、手段として国際結婚を選ばざるをえない女性の立場を理解し、貧困からよりよく脱出させるための手助けをしたいというのである。

しかし、メコンデルタは肥沃であり、そこで働く農民が食っていけないのは、農業を国民経済の中でどう位置づけるかという政治の問題である。モンゴルで高学歴な女性に就職口がないのは、コメコン下の国際分業で中小零細企業を育てることのできなかった歪な経済のあり方を、市場経済移行後も修正できていないという、やはり、政治の問題である。政治的矛盾を抜本的に改革する政治勢力（仲間づくり）を形成するのが「同盟」の役割だろうし、雇用の機会と労働条件と待遇、生活条件を高めていくのが運動であろうと思う。おそらく、そのような地道な活動は、報告されなかっただけで、行われているのだろう。しかし、それなしに、飢餓輸出を幇助しているとしたら、「人身売買の被害者を減らす」という言葉は、自分たちの組織の存在意義を説明しているにすぎない。

国際結婚を受け入れる側と送り出す側も、送り出す側の知識人と貧困者も、それぞれがグローバルな資本主義と向き合い、闘うということを通じて、お互いに連帯し、同じ目線で同じ問題を解決していけるのではないだろうか。

2006年度のゼミの学生三宅晶子さんが、仲介者を通じて国際結婚をしたモンゴル人女性のアンケートをとるため、３度ソウルに足を運んだ[3]。筆者と交流を重ねてきたいくつかの組織が喜んで協力するということであったが、実際には当事者に会うことすらできなかった。仲介所のWEBに自分の顔とプロフィールを掲載し、積極的に自己アピールすることで、韓国人男性のチョイスを待つ女性たちは、貧困から脱出するためなら何でもする、一見、たくましそうに見える。しかし、実際には、三宅さんの聞き取りによると、そのような結婚方法を選んだこと、結婚後の抑圧的な生活を恥じて、モンゴル人が集まる東大門のモンゴルタウンにすら現れないという。モンゴル人が毎週100人集まるというモンゴル人牧師の教会にも現れないという。この話をもとにすると、「貧しさから脱出する手段として国際結婚を選択をした」女性というレッテルも、安全な国際結婚を薦めることも、当事者女性を助けて、解放することにはならないのではないかと思えるのである。

このフォーラムには、日本から名古屋のFMC（フィリピン人移住者センター）のロサーナ・タピルさんが参加し、日本とフィリピンの間の国際結婚と人身売買の現状、ご自身の２人の子どもの内、１人は日本国籍を取得したが、１人は取得できず、係争中であることが報告された。裁判で闘うだけでなく、町内会の活動に参加したり、FMCで自文化を紹介し、子どもたちがよりよく生きていける環境を築いたりしていることも紹介された。ロサーナさんの報告は自分の経験にもとづく切実な問題で、途中、涙で言葉が途切れ、会場は水を打ったように静まりかえることがあった。しかし、子どもたちが、お母さんを応援するサインを送り、その可愛く、のびのびとした姿が会場を幸せな空気に変えた。ロサーナさんが、自分のさまざまな困難と闘いながらも、フィリピン人移住者のボランティア活動に打ち込むのは、この子どもたちの未来を拓くためであった。筆者が感じていた違和感も、彼女たちの存在によって解決されたような気がする。生まれ故郷に住んでいても、国外移住先であっても、当事者が仲間を作り、組織を運営し、社会的に問題を解決することが重要なのである。フォーラムに参加したＤＶセンターの代表も、ロサーナさんとの出会いは、非常に意

3　三宅晶子さんの卒業論文のテーマは「韓国人男性と国際結婚仲介業者を介して結婚したモンゴル人女性の韓国における現状」である。

義深いことだったと思われる。この報告の初めに、ウランバートルのフォーラムで、カザフ族女性が、革命前の一夫多妻制などの悪しき伝統が復活し、ともに力をあわせて女性が抱える問題を解決していこうと報告した、と述べた。「ともに力をあわせ」る主体の中に、裕福な家庭のカザフ族男性と結婚せざるをえない貧しい家庭のカザフ族女性も含まれてくるはずである。

2005年は韓国、北朝鮮とのかかわりからモンゴルを考える機会を得た。2006年はさらに南のベトナム、フィリピンとのかかわりから考える面白さを実感した。2007年はいよいよ中国、北朝鮮、モンゴルがこの研究会の研究対象となる。当事者の日々の努力に学び、広がるネットワークを大事にしていきたいと思う。

専門家でない者の立場から「歴史」を再考・再審する試み

大越愛子

一　「歴史」への問い

「歴史は必ずしも専門家だけが語るものではない。歴史はその時代、時代に生きていた切実な問題意識を持った人たちが、色々な角度から語っていいのではないか」[1]。

これは、歴史専門の研究誌に当時取りかかっていた日韓「女性」共同歴史教材編纂プロジェクトについて寄稿した際に、冒頭に掲げた言葉である。ジェンダー視点で東アジアの近現代史を書きかえるという大胆な試みに、大半が歴史学の専門家ではない者たちが挑戦することに対して、歴史学者が感じるであろう異和感を予想して書かれている。同時に、専門家たちに囲い込まれた「歴史」がいかに多くの問題を切り捨ててきたか、そしてその欠落が、「歴史」をいかに歪んだものとしてきたかを指摘する意図もこめられている。

日韓「女性」歴史教材編纂プロジェクトが開始される契機は、１９９０年代に被害女性の告発によって明らかにされた日本軍性奴隷制問題がある。戦争時に行使される女性に対する暴力は、有史以来公然の秘密とされてきたが、いわゆる「歴史」においては隠蔽され、被害女性たちの声は沈黙の中に封印されていた。戦時性暴力に関しては、「歴史」は加害者を不処罰の状態で放置してきたし、他方被害女性たちを無視するか、あるいは加害者に都合のいい解釈装置の中でスティグマ化してきた。

これは、「歴史」において重大な不正義が行われてきたということを意味しているのではないだろうか。現実に生起する出来事に顕現する歴史は、近代の歴史哲学者が論じるような「理念の自己実現」でもなければ、「共同体のアイデンティティ・ポリティクス」として物語れるようなものでもない。規範や秩序も表層的なものでしかなく、内実においては形態を変換した様々な暴力が荒れ狂い、無力な人々を餌食としてきたといえる。そのため「歴史に正義を求めるなんてありえない。それこそ抑圧的だ」という冷笑的な論者の言葉も、もっともらしく聞こえる。

だがここでいう「不正義」とは、訳知り顔の論者たちが「正義」と命名するものに関する基準で捉えられる「不正義」ではない。近年特に支配する側が多用する「正義」によって、彼らに服しない者が「不正義」のレッテルを貼られる傾向が露出している。このように「正義」「不正義」を命名する権力が「歴史」を支配し、そうした権力から排除されている者たちの痕跡が消去されていること、これこそが重大な不正義に他ならない。

しかし専門的な歴史家たちは、このような不正義に対して鈍感であったと言えるのではないか。彼らの多くは、歴史的資料と認められるものを重視し、そこに表象されるものによって形作られる世界のみを記述することに努めてきた。その外部にあるかもしれないものに関しては、確証がない仮説にすぎず禁欲すべきものとしてきた。このような「歴史」のあり方に関しては、シモーヌ・ヴェイユの鋭い言葉を思い出したい。

1　大越愛子「なぜ日韓〈女性〉共同歴史教材編纂プロジェクトを立ち上げたか」『日本史研究』497号、2004年、24頁

「いわゆる歴史家的精神は、肉と血とを発見するために紙背に徹することはない。それはただ、思惟を資料に従属させることにあるのだ。そもそもことの本性上、資料は権力者や征服者のところから出る。このゆえに歴史とは、虐殺者が犠牲者たちと自分たち自身にかんしておこなった供述の編纂に他ならない」[2]

ヴェイユは資料を否定しているのではない。彼女は、書かれたものの行間の意味を読み取り、「想起された事件のなかにおのれを移し換え、深い意味を秘めた小さな事柄に長い間おもいをこらし、その意味するいっさいを見破る」思惟の力が必要だと言うのである。だがこのような思惟の力を資料に従属させるのが、専門的な歴史記述のあり方とされてきた。だがヴェイユが暗示しているように、専門家と言われる人たちがその思惟の力を資料に従属させたというのは、客観的立場にいるというよりむしろ、資料を構成しそれを伝達した者たちの価値判断に従属したということではないだろうか。それは、資料に表象されることのなかった出来事、あるいは人たちの存在、彼らの思いなどを排除する行為に他ならないのではないか。

「資料に語らせる」ということは、「資料が語っていないことをも資料に語らせる」思惟の力を発動することであろう。それは、特定の専門的訓練を受けることでのみ生成されるものではない。むしろ切実な問題意識を持って資料に切り込むことで、資料の厚化粧がはぎ取られ、資料が発生しつつある状況、そこに発動している権力関係、資料化されることなくゴーストと化したものたちが立ち現れてくることではないのか。

日本軍性奴隷制問題に関しては、その立案、制度化、実行過程を明確に記述した公的な資料はない。その点を、実証主義を盾にとるナショナルな歴史家たちが執拗に追及した。だが公的な資料（この場合は加害側の資料）がむしろ語っていないということが何を意味しているのか、あるいは僅かに残された断片をつなぎ合わせることで何を浮かび上がらせることができるのか等、このような問題に取り組むことこそが思惟の力ではないだろうか。

日本軍性奴隷制を告発した被害女性たちは、公的資料の中に記されることはなかった。それゆえ彼女たちが生身の身体をかけて証言しているにもかかわらず、その証言は疑惑の眼差しに曝され、別の解釈装置に押し込まれた。被害者として自分たちが存在すること、その存在をかけた証言が「歴史」として認知されないことの理不尽さに、被害女性たちは懊悩した。それは彼女たちの身体に突き刺さった不正義である。彼女たちは「不正義」を身体化された者として、彼女たちを無化する「歴史」にその自己省察を迫ったのである。

このような問いかけに対して、「歴史」はどのように応えることができるのだろうか。少数ではあるが、専門的歴史家からこのような問いかけへ真摯に応答する試みが行われつつある。その地道な応答実践は、いわゆる公的な「歴史」を突き破り、「歴史」を語ることの意味に新たな地平を開いていると言える。

それとともに、いわゆる歴史専門家ではないが、「歴史」に現れてきた、あるいは消去されてきた様々な個別的問題に切実な問題意識を持って関わる複数の者たちによって、「歴史」を語ることへの挑戦が始まった。それには、いわゆる「歴史」記述からこぼれ落ちてきたものを補足・補完するという意識に基づくものもあるが、従来的な「歴史」記述そのものを解体していくという挑発的なものもある。いずれにせよ、そこには「歴史」を多様に複数的に開放していくことに対する、強い意欲がある。

二 「歴史」研究者たちの苦闘

「歴史」の脱専門化への要求は、専門家を称する人たちによって「歴史」とされてきたものに対する不信感、さらにいえば、異議申し立てという営みと無縁ではない。専門家による「歴史」に人が最初にふれるの

2 S.Weil, The Need for Roots,trans.A.Williams,Harper & Row, New York,1971, p.225 山崎庸一郎訳『根をもつこと』春秋社、1967年、246頁

は、通常「歴史」教科書を通してである。もちろん「歴史」教科書以外に歴史読み物は巷間に氾濫しており、それらの読み物は具体的事実や事件の詳細を書き記すことで、いわゆる公的な「歴史」の外部にあるものへの好奇心を煽り立てる。とはいえ、「歴史」の外部にあるものが何故外部にあるのか、その外部のものは何故公的「歴史」に書き込まれることがなかったのかという疑問は、厳重に封印される。　日本軍「慰安婦」とされた女性たちの存在も、その典型である。彼女たちの存在は、戦場から帰ってきた兵士たち同士の仲間内の語り、火野葦平などの戦場を舞台にした小説の中などに散見されていた。それらを取材して１９７３年に出版された千田夏光のルポ『従軍慰安婦』はベストセラーにもなっている。しかし、彼女たちの存在は１９９７年までの「歴史」教科書には全く欠落していたし、２００５年に検定を受けた公的「歴史」教科書からは再度抹殺されてしまった。

彼女たちの存在は、公的「歴史」から排除されていたが、兵士たちの語りやルポには描かれていた。とはいえそこでの彼女たちの姿は、一方的に日本軍「兵士」の側の視点や、その視点に同化した者によって書かれたものであり、彼らに都合のいい解釈装置にはめ込まれたものである。その意味でも、彼女たちの声は何重にも消去されていた。しかし彼女たちが、このような「歴史」に抗して声を挙げ、証言を始めた時、「歴史」の再審が始まった[3]。

既成の歴史学者の中からも、彼女たちの声に応じようとした人々がいたことを、先ず指摘しておかねばならない。証言者の声に心を揺さぶられ、その応答を自らの歴史学の分野で誠実に行おうとした代表的な人として、石田米子を挙げたい。

彼女は、１９９２年に東京で開かれた日本軍「慰安婦」問題の国際公聴会で中国人の被害女性万愛花の証言を受け、彼女が被害を受けた中国山西省の村に入って、現地で生活している村人たちから聞き取り調査を行うことを決断した。その作業は彼女が調査報告として２００４年に『黄土の村の性暴力』を刊行するまでに、すでに７年間を経過しており、今なお続行中である。

読み書きの訓練を受けることのできなかった高齢の女性たちから、彼女たちの人生において最も苛酷な体験を聞き取るという作業は困難極まるものである。まして加害者側に属する日本人歴史研究者に不信感こそあれ、自身においても共同体においても「恥」とされたきたことを彼女たちは果たして語るだろうか。この厳しい状況において、石田は、その歴史学者としてのキャリアをいったん白紙にし、被害女性たちと個人的な人間関係を築きつつ、その個別的な語りを聞き取る中で、試行錯誤を重ねつつ、個人の内部に隠蔽されていた生身の個人史がリアルに立ち上がってくる現場を目撃していくという、独創的な方法を編み出していった。

「５０年以上たって目の前に現れた日本人に対し、その長い年月、村人はもちろん家族に対しても自らの被害の苦しみを訴えることができず、重い沈黙を強いられてきた被害女性たちは、最初から自らの被害を順序だてて語れたわけではない。誰もが自らの被害を恥じ、自分を責め、被害の核心を語ろうとすると気分が悪くなったり失神したりした。とぎれどきれの記憶の断片を受け止めながら、語る被害女性たちと聞く私たちの過去に向き合おうとする双方向の、苦しいが相互の信頼を築いていく貴重な過程があった」[4]。

石田によれば、被害女性たちが、自らの被害に向き合い、自分は悪くないという自信を取り戻すことで、被害を具体的に物語れるようになったのは、聞き取りを開始して１年後であったという。厳しい条件的制約の中で、個人の体験とその記憶の個別性にこだわるという聞き取り方法が、被害女性たちの意識変化を促し、分断されていた人間への信頼を取り戻した。彼女たちは、個別化されていた怒りと無念さが歴史的暴力と結びついているということに気づき、それを公的なものにしていくために裁判で闘うことを決意するに至った。

3　この経緯については大越愛子『フェミニズムと国家暴力』、世界書院、2004年参照

4　石田米子他編『黄土の村の性暴力』、創土社、2004年、22頁

彼女たちは、日本政府に対する裁判に乗り出すとともに、「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」にも参加し、心身を切り裂くような証言を行ったのである。

石田の方法論は、戦争や軍隊暴力があったから、悲惨な犠牲者が数多く出たという俯瞰的な歴史記述ではなく、個別的な身体に刻まれた暴力の記憶の実態を詳細に叙述していくことで、それらを排除していた大文字の「歴史」それ自体のあり方を串刺しにしていくという、まさに「歴史」解体的な試みと言える。個別的な語りは、大文字の「歴史」が前提としているイデオロギーや国家史観などの欺瞞をもえぐり出してしまうからである。

三 「歴史」の再審

２００１年１２月の「女性国際戦犯法廷」ハーグ判決には、「歴史」に関する様々な言及がある。先ず第１部の「序文と裁判の背景」はA「沈黙の歴史を破って」から始まる。その第６項に「法廷」の目的として、「本法廷は、女性に対する犯罪、特に性的犯罪を矮小化し、免責し、無視し、曖昧にする、これまでの歴史の傾向を正すために設立された。そうした犯罪が従属的地位にある民族集団の女性に対して行われる場合、この傾向はいっそう顕著である」[5] と明記されている。

ここで、従来の「歴史」が、女性に対する犯罪、特に性犯罪を矮小化、免責してきたという不正義に対して再審する必要があること、このような不正義を曖昧にしたままで「歴史」が語られることに対する倫理的判断が要請されるという問題が提示されている。このような「歴史」の再審の動きは、「女性に対する暴力」が不処罰化されてきたことに抗する世界的な女性運動と連動している。

そこにまた「従属的地位にある民族集団の女性」と特に付記してあるように、支配民族集団による被支配民族集団への暴力、不処罰化されていた植民地主義暴力の論点も導入されていることを看過してはならないだろう。植民地主義暴力の問題は、ハーグ判決と同年の夏、８月末から９月初旬に南アフリカのダーバンで開かれた国連主催の「人種差別・奴隷制・外国人嫌悪」撤廃に向けての世界会議において、有史以来初めて主要論題となっていたのである。

しかしこの世界会議は、その直後に生じたニューヨークの世界貿易センタービル、およびワシントンのペンタゴンへの航空機激突事件、いわゆる９．１１事件によって、「歴史」から消去されようとしている。本論ではこれ以上論及できないが、いずれにせよ、欧米植民地暴力の上に成立した「世界史」を再審する、この世界規模の画期的な試みを消去させてはならないだろう。そして同年１２月のハーグ判決は、明らかにこの「世界史」の再審の動向を踏まえて出されたものである。

「歴史」の再審を遂行して提示されたハーグ判決の第８部「結論」は、次のように「歴史」に対する国家の責任をも、論及している。

「国家は、歴史を通じて繰り返し、武力紛争下における女性に対する性的犯罪およびジェンダーに基づく暴力を無視し続けてきた」[6]。

このような論点は、「女性国際戦犯法廷」が国家機関や国際機関ではなく、国家を超えた国際市民社会に依拠する民衆法廷だから出てきたと言えるかもしれない。そこでの民衆法の論拠は、ジョン・ロールズやリチャード・ファークなどの理論に基づいており、国民国家が「正義を保証する義務を履行しない場合」、国境に制約されず、国境を越えて共有された共通の価値観、即ち「国際人道法」による市民たちの介入の権利

5 VAWW-NET Japan 編『女性国際戦犯法廷の全記録』Ⅱ、緑風出版、2002年、109頁

6 同上、442頁

を主張している。

「国民国家は、直面するさまざまな問題、旧来からの問題もあれば新たな問題もあるが、それらに対処する能力が十分でないことに気づいている。・・・・民衆が一定の役割を果たし、重点が国家から民衆に移行したこともこれまでなかった現象である。このような変化の一側面として、国際市民社会が成長している。このような変化により、国際協力の方法、つまりグローバル・ガバナンスの制度とプロセスの改革が求められている」[7]。

国家による歴史の再審は現時点では困難な状況にある。そして国家間の連合である国連も、一度は「世界史」の再審に踏み込もうとしたものの、再び国家間のパワーポリティクスの強化によって、再審は不可能な事態に陥りつつある。このような場合は、国境を越えた市民のネットワークによって「歴史」を再審する行為が正当性を持つのである。

これは、「法廷」の倫理的正当性のマニフェストと言えるものである。「法廷」は、「法廷」非難の論者がいうような、リベンジでも見せしめ裁判でもない。不正義に基づいて構成された「歴史」へ倫理的観点を導入することで、「歴史」を揺さぶり、その実像を暴き出し、その再考を促そうとするものである。判決結論の最終部分において、そのことが明確に主張されているのを注目すべきであろう。

「歴史のページに名前が刻まれてきたのは、せいぜい犯罪を犯した、あるいはその犯罪を訴追した男性たちであり、被害を受けた女性たちではなかった。しかし、この判決は、証言台で自らの体験を語り、それによって少なくとも四日間にわたり、不法を断頭台に送り、真実を王座に据えたサバイバーたちの名前を、銘記するものである」[8]。

「歴史」の再審は、「歴史」が誰のものとされてきたかを明らかにし、このような「歴史」の有り様を存在自体で告発する声に耳を傾け、その存在を可視的に書き込むことで、「歴史」の転換をもたらすことの必要性を提示している。それは、「歴史」を暴力や権力の跳梁する場と居直ることから、「歴史を語ることの倫理」へと、思惟の力を向けることと言えるだろう。

ここで「歴史」の再審とは、間違った不正義の「歴史」に対して、「正しい歴史」を対置することでは決してないと、明確に論じておく必要がある。「歴史」が再審されねばならないということ自体、「正しい歴史」はあり得ないということを前提としている。「歴史」は過ちをおかすのであり、その過ちは事後的にしか検証されえないのである。

国家や共同体が「歴史」を管理していた時代は、「正史」が仮想された。国家や共同体それ自体が問い直されている現在だからこそ、国家や共同体が正当化してきた「歴史」を事後的に検証することができる。ナショナリズムや民族主義の呪縛、イデオロギーのレンズをはずした時に、そこにどのような過去の光景が現在的に蘇るだろうか。

もちろん何かを論じ記述する場合、無垢・無謬の立場はありえず、何らかの思惟の形式あるいは思いこみを通してしか言説化しえないことは、周知のことである。「歴史」を検証することは、論者自身が内包している価値観・世界観を検証すること抜きにはありえない。一定の出来事が様々な視点において異なった相貌を帯びて現れてくること、その差異がどのような権力関係、時代背景、ポジションのずれとつながるのかなどは、常に検証され続けねばならないだろう。

「歴史」を書く現場には、いわゆる歴史資料のみならず、それを読む複数の視点の交差、様々な言説が飛びかう論争、意味が生成されたフィールドへの踏査などが要請されることになる。「歴史」を書くことが共同作業となること、それも統一された意見の共同作業では決してなく、不協和音をも含有した作業となるこ

7　同上、122頁

8　同上、443頁

とが予想される。しかしそのことはマイナス要因ではなく、むしろそれが「歴史を書くこと」の倫理性を開くことになるのではないかと問いかけておこう。

四　Her-story の試み

ここで、前述した石田米子の方法論をさらに考えてみたい。彼女は、加害者と被害者の二元論が圧倒的に自明視されている山西省の村の中に、加害国の女性として個別的被害者に寄り添おうとする重層化したポジションによって参入し、警戒されつつ信頼関係を築く中で、個別的身体に刻まれた暴力と権力の複雑な位相を読み解いていった。それは、被害国一色に塗りつぶされた大文字の「歴史」においては隠蔽されてしまう、錯綜した暴力のベクトルの解読という困難な営みである。

石田は、日本軍に支配された農村において、性暴力被害を受けた女性たちの個別的体験と向き合うことで、彼女たちが被害者となっていくプロセスに発動した権力、決して言語化されることのなかった日常的権力の発動の場にも、果敢に向き合った。

「家族と村がかばいあい守ろうとしたものは何であったのか。まぎれもなく侵略した国家・軍隊こそが被害の構造を強いたのではあるが、抗日する民族・国家もまた集団の生存と集団の自尊のために女性個人の被害の個別性にこだわりきらなかった。〈敵の女〉であることによって人間としての尊厳を蹂躙された女性たちは、〈敵によって蹂躙された女〉であることによってその存在自体が共同体の名誉を傷つけるものとなったのである。文字を知らない、村の歴史も知らない性暴力被害者の女性たちが、その記憶を自ら語り始め、自らの歴史と自尊を取り始めたことで、加害と被害のモザイクのような関係と沈黙を強いてきた構造が一つ一つ姿を現し、ここに関わる様々な人々に自らの人生と向き合わせた。沈黙を破った被害女性たちによって見えてきた日本軍の侵略と住民支配、性暴力被害の実態により、彼女たちを記録しなかった史料は今までと違う読み方をされなければならなくなったのである」[9]。

石田は、「歴史」において最も言葉を奪われてきた、その意味でサバルタン化していた性暴力被害女性の証言を記述し、いわゆる「歴史 His-story」から排除されてきた「彼女たちの物語 Her-story」を構築していると言える。しかしその場合の Her-story とは、書かれてこなかった女性に関わる記述をすれば事たれりというようなものではない。そうした意味での女性史は、男性中心の「歴史」を補完するものにすぎない。石田の紡ぎ出す Her-story は、記録されることのなかった女性たちの眼差しによって、彼女たちを無視してきた「歴史」とは何であったのか、という「歴史」の問い直しを迫るものであり、既成の「歴史」観に安住して書かれている諸資料の批判的読解を要求する作業でもある。

それは、単に被害女性たちをステレオタイプな犠牲者として記述するのではなく、彼女たちに沈黙を強いた構造的暴力に彼女たち自身もいかに組み込まれていったか、男性に都合のいい価値観を内面化させられることで、女性たちが分断に陥り、無力化させられていったかを解き明かすことである。このような苛烈な作業によって、個別的な人間関係、身体や性意識、共同体の防衛と維持などの日常的に行使される無数の行為や事件こそが、構造的暴力を再生産していることが明らかにされる。そうした無数の行為や事件に付与されてきた意味の呪縛を解くことが、構造的暴力の解体につながることが提示されていく。

石田は、「歴史を語る」という行為実践が、語る者とそれを聞き記す者の相互に生き方の変革を促し、新た生の意味を発見する場を開くことを示唆している。その意味で Her-story は記述されるものというよりも、生成してくるものである。個別的な関係性の中で、その都度生成する Her-story が実体化された His-story

9　石田米子他編『黄土の村の性暴力』、232 頁

に突き刺さり、その硬直した意味の体系を揺さぶり、そこに作動していた暴力や権力の痕跡を露呈していくのである。

振り返れば、「女性国際戦犯法廷」とは、被害女性たちの証言とそれを真剣に聞き取る法律家や支援者たちとの開かれた関係性によって、無数のHer-storyが生起した、象徴的な場であったと言える。それらのHer-storyが、硬直化していたHis-storyの再審を促したのである。

とはいえ「法廷」が提示したHer-storyによる「歴史」の再審は、未だ象徴的段階にあり、第一歩にすぎない。実際に「歴史を書く」ことにおいて、どのようにHer-storyを生成させていくかという困難な課題に、私たちはぶつからざるをえないのである。

五　試行錯誤を経て

２００１年秋に「法廷」の提起を受けて、切実な問題意識を持つ日韓の複数の女性研究者、アクティヴィストたちが、共同で東アジアの近現代史を再考する歴史教材作りに取りかかることを決定した時、「女性と戦争・人権」センターの金允玉は、次のように述べた。

「この仕事は、２１世紀はじめから再燃した歴史教科書問題に直面して、両国の女性たちが共同で、女性たちが望む新しい世界のビジョンを教えることのできる歴史教材を、両国の女性たちの手で創ってみようとする合意から始まった。…これは歴史的にはじめて試みられる〈韓日女性の共同作業〉となるだろう。二つの国の女性が、いわゆる"ジェンダー的観点"という共通分母によって、今まで両国の男性たちが作った教科書を、再構成・再解釈しようというのである。このことの重要さは、植民地支配の加害者と被害者という立場をもちながらも、両国の女性たちが、"ジェンダー視点"という共通の認識を基礎に据えながら、近現代史を再構成・再解釈する作業だという点にある」[10]

この時点で、Her-storyとして東アジアの近現代史を生起させるということの意味が明らかであったわけではない。熱い志は共有されていたが、方法論などに関する合意は無かったと言ってよい。Her-storyの意味は、激しい論争や試行錯誤を経て、次第に開示されてきたのである。しかもそのことは執筆者間で容易には受け入れられたわけではなく、結局従来のやり方が無反省的に繰り返されるという事態も多々生じた、

そこで目立った問題をまとめてみると、第一にHer-storyをいわゆる「女性史」と捉え、女性の生活や生き方、あるいは思想を記述していけばよいする、本質主義が強固であったことがある。第二に、「二つの国の女性」という言葉に残っているように、国家や民族という枠組みを超えることの困難さである。第三に登場する人々をステレオタイプなイメージから解きはなち、彼／彼女がどのようにしてジェンダー化されたかの権力作用をえぐり出す作業が不十分であったことである。

これらのことは、３年間の共同研究と、１年間の共同執筆という試行錯誤のプロセスを経て、ようやく明示的となってきたものである。そのため残念ながら2005年10月に発刊されたものは、上記の問題点を克服しているとは到底言えない[11]。今回の共同作業が、「歴史」の再審、Her-storyの生成だと辛うじて言えるのは、書かれた教材の中身よりはむしろ、「歴史を書く」という実践が、日韓、在日の執筆者たちとの交流、激論、差異の確認、合意、誤解、再協議などの関係性の場を開いたことにある。個別的な関係の中で、「歴史」を書くことに関する各自の問題意識や価値観が露呈され、厳しい試練に出会う場面も少なくなかった。

しかしながら、何らかの統一的な視点ではなく、複数の執筆者が各自のパートを各自の論点で書いていく

10 「女性・戦争・人権」学会ニューズレター特別号、2002年

11 日韓「女性」共同歴史教材編纂委員会編『ジェンダーの視点からみる日韓近現代史』、梨の木舎、2005年

という叙述スタイルは、プリコラージュとしての「歴史」記述の可能性を提起したと言える。全く異なった視点から書かれた「歴史語り」の共存は、読者に違和感を与え、相互の語りに対する批評性を促すからである。

この作業で再確認できたのは、私たちは「正しい歴史」を書くことを目指したのではなく、「歴史」は様々な視点から構成されているものという前提の下に「歴史」の中に事後的に参入し、それによって新たな亀裂、分裂を呼び起こし、たえざる解体と再建を反復するプロセスをたどろうとしたということである。今回の作業は、「ジェンダー視点から東アジアの近現代」を再考するという大きなビジョンから考えれば、まさに未だ端緒にすぎないと言えるが、複数の語りから生成してきた地平を、さらなる切磋琢磨によって多層化していくこと、その可能性を今後も追求していきたいと思う。

意見交換

日本現代女性史の課題と展望

―『全国女性史研究交流の集い in 奈良』から浮かび上がったもの―

加納実紀代・平井和子・藤目ゆき

藤目　『全国女性史交流のつどい in 奈良』[1] から、ちょうど1年が経ちました。この集いには長い歴史があり、日本で女性史に関心を持つ仲間が全国から集まる貴重な機会になっています。昨年の「つどい in 奈良」には、アジア現代女性史研究会からも参加しました。そこで『アジア現代女性史』上にもこの集いの成果を報告したいと考えました。

とはいえ「つどい in 奈良」で発表された諸報告や発言は、すでに、主宰者の奈良女性史研究会がきちんと報告書[2] をまとめられています。それで、ここでは日本現代女性史の課題と展望に関して「つどい in 奈良」から浮かび上がってきた重要な諸要素を紹介したいと思い、この集いに参加された加納実紀代さんと平井和子さんに協力をお願いしました。

神奈川から新潟へ　そして奈良へ

藤目　加納さんはこれまで女性史の新しい流れを創り出すために大きな力を発揮されてきました。それで最初に加納さんにこれまでの流れをお話しして頂けたら、と思うのですが。

加納　「全国女性史研究交流のつどい」は 1977 年の愛知大会以来全国持ち回りで開かれ、昨年の奈良が第10回だったわけですが、私が参加したのは1998年に神奈川で開かれた第8回からです。私は「銃後史」と称して戦時期の女性の戦争協力に焦点をしぼって研究してきましたので、ちょっと視点が違うような気がしてそれまでは参加していませんでした。

第 8 回の神奈川大会は地元でもあり、神奈川女性史の編纂でともに苦労した江刺昭子さんが中心になってやろうというので、それじゃあということで実行委員になりました。

その時こだわったのは「現在からの発想」ということです。歴史をただ過去から現在への時の流れでみるのではなく、まず「現在」の問題を考える。20 世紀末の現在、日本の女たちはどういう状況

1 「第 10 回全国女性史研究交流のつどい in 奈良」は、2005 年 9 月 3 日・4 日の両日、「歴史に学び、未来を拓く　平和と平等を創るために、今、女性史に問う」を合い言葉に、奈良市で開催された。北は北海道から南は沖縄まで、女性史に関心を寄せる約 430 人の人々が全国から参加した。参加者の圧倒的多数は女性で、大学などの研究機関に在籍することなく、地域で女性史のサークル活動に取り組んできた人が多い。日本における「女性史」研究は、アカデミズムの世界よりも、草の根の女性たちの活動に支えられて発展してきた。

2 『第 10 回全国女性史研究交流のつどい in 奈良―歴史に学び、未来を拓く　平和と人権の確立にむけて歴史認識の共有を！報告集』2006 年 3 月 31 日、第 10 回全国女性史研究交流のつどい実行委員会編集発行、全 148 頁。

にあるのか、どんな問題をかかえているのか。それを洗い出してテーマを立て、分科会を設定して現状と歴史的背景について検討する。

こう考えた背景には、女性史と女性学の結合をはかりたいという「野望」がありました。女性史の研究者には、女性学に対するうさんくさいまなざしがありますよね。女性史はずっとこつこつ努力してきたのに、あとからきた女性学が横文字ひけらかして大きな顔をする、といった…。それはよくわかるんです。女性史研究者はほんとうにポスト的にも報われていませんから。

藤目　女性史の業界にはたしかにそういう閉塞的な面があるし、女性学と女性史のあいだの対立みたいなものがありますね。

加納　でもそうした対立はお互いに不幸だと思う。私は女性学を、既成の学問すべてを女性の視点で問い直す学際的な学問だと思っているので、これまでの his-story を女性の視点で見直す女性史は女性学の一環と思っています。でもそれを言うと女性史の人たちから猛反発される。神奈川の実行委員会でもそうでした。結果的にはシンポジストに上野千鶴子さんと安丸良夫さんをお願いし、９つの分科会の一つとして「性」の分科会を設定できたので、私の「野望」も少しはかなえられたといえるかな。

「性」分科会では、「基地」と「セックス・ワーカー」、「慰安婦」の３つの柱を立てました。神奈川は沖縄に次ぐ基地県です。神奈川でつどいを開催するからには、基地売春の問題をぜひ取り上げたい。研究チームを作って占領下の横浜・横須賀の状況を調べるとともに、すでに御殿場について実績を上げている平井さんに報告をお願いしました。体調が悪くてけっきょくテープでの報告になってしまいましたが、おかげで研究の視点や方法など得るところが大きかったと思います。

セックス・ワーカー問題は、藤目さんの『性の歴史学』に触発されてのものです。それまでは「売春」を「醜業」視して、そこで働く女性を道徳的に劣った存在、あるいはかわいそうな女性として救済の対象にしていたわけですが、セックス・ワーカー論は彼女たちを働く女性、権利の主体とする視点を開いた。それは現在日本の性産業で働くアジア女性の人権を守る上で重要なパラダイムチェンジだったと思います。藤目さんに報告をお願いしましたが、ご都合がつかなくて残念でした。

「慰安婦」問題は実証研究というよりは、「なぜ日本の女性史は、慰安婦制度の実態解明をしてこなかったのか」をテーマにしました。それこそが日本女性史の現在的課題だと思ったからです。ここでは報告者の金富子さんから、日本の女性史研究者の一国主義を厳しく指摘されました。

第９回の新潟大会はその流れです。

藤目　私は学生時代から全国女性史交流の集いに関心があって、いつも報告だけは読んだり聞いたりしていましたが、実際に参加したのは新潟が最初でした。女性史業界のなかにも新しい風が吹いてきていると実感し、とても元気づけられました。

加納　新潟女性史クラブの方々の努力で開催出来たのですが、たまたま私が 2002 年から新潟の大学で教えることになったので、話し合った結果未決の女性史の課題として占領下の「性」の問題をとりあげることになりました。藤目さんにシンポジストをお願いして、今度は実現できました。平井さんにもお願いしたのに、またまた体調が悪くてだめでしたね。だから去年、奈良でお元気な報告をうかがったときはほんとうに感無量でした。

新潟のつどいでは、参加者に対して RAA や基地売春について調査研究を呼びかけました。神奈川の性分科会で、鳥取から参加した女性が、かつてそうした所で働いた女性が近所にいて孤独な老後を

送っている、彼女たちの体験をこのまま埋もれさせていいのかと発言されたのが心に残っていたからです。当事者の声をきちんと聞き取るにはもう遅すぎるかもしれないが、でもまだ間に合うかもしれない、最後の機会ではないかと思いました。

もう一つ、新潟では新しい試みがありました。これまでの集いでは、各地域女性史がそれぞれの地域について研究発表をする。相互の関連はなかったのですが、新潟では「女工」について、送り出した農村側と受け入れた都市側の地域女性史が共同研究して発表しました。これはすばらしいことです。RAAや基地売春についても、各地域の研究を持ち寄ることで実態の解明がすすむのではないだろうか。

その結果が昨年の奈良での「基地と女性」の分科会です。そこでは平井さんの熱海についての報告をはじめ、新潟、神奈川、奈良、佐世保から研究報告がなされました。おこがましいいい方ですが、神奈川以来の私の思いが共有された、と胸が熱くなりました。

藤目　平井さんはいかがでしたか？　平井さんは静岡県をフィールドとして占領下の女性史の実証研究にパイオニア的な仕事をしてこられたわけですが…。

平井　加納さんの「現在からの発想」ということにとても共感します。

私が占領下の基地売春の研究をはじめたきっかけは、1992年、沖縄県での第5回大会に参加したとき、全体会でフロアーから若い男性が、「今、従軍慰安婦問題について、上坂冬子さんなどが必要悪であったという発言をしているが、女性史をやる皆さんはどのように考え、行動されるのか？」という問いかけをされたことが一つです。その場では打てば響くような各地での取り組みや反論が出されなかったことに[3]、女性史研究者の端くれとして胸が痛んだという苦い思い出です。このとき、沖縄の方々は「慰安所マップ」を共同でつくって提示されました（「戦争と女性－『慰安所マップ』が語るもの」第1分科会メンバー、1992）が、「本土」のわたし達はどうなのか？とも自問しました。

それでまず、自分の住んでいる場所から、「基地と女性」「占領と女性」という重たいテーマに取り組むことによって、わたしなりに沖縄の女性たちに連帯したい、そしてフロアーから質問された方へ応答をしたいと思ったのです。

その後、神奈川で加納さんが取り掛かりをつくられ、新潟から奈良へと実証的研究が広がり、この第5回の沖縄大会に対する応答が、十数年の時を経て「本土」からなされようとしているという気がして、これはわたしの勝手な解釈ですが、この間の「つどい」の流れに感動しています。

対「テロ」戦争と日本女性史

平井　もう一つ、2001年11月に藤目さんが中心となって呼び掛けられ、京都で開かれた「軍事基地と女性」集会の体験[4]が、今回の「つどいin奈良」に流れ込んでいると感じています。この年は日米安保50年、9・11の「米国同時多発テロ事件」を発端にアフガニスタンへの攻撃が開始された年でもあり、何とか東アジアから非軍事の波をつくりたいという思いで、「女性がつなぐ、韓国・沖縄・『本

3　もちろんこの時点で、女性史研究者による日本軍「慰安婦」問題への取り組みは着手されつつあった。が、この場で「必要悪論」への反論はだされなかった。このような時代性をおびた「一般の人の関心事」に遅滞なく研究の成果を提示することと、運動との結びつきの重要性は、その後の「つくる会」歴史教科書問題でも浮かび上がった、歴史学全体の課題であると思う。

4　詳しくは『東アジアの軍事基地と女性』「軍事基地と女性」集会報告集編集委員会 2002,3 参照

土』」を合い言葉に交流会が開かれました。

わたしはこの時、米軍基地を有する地域の女性たち・男性たちが、国境を超え、アクティヴィストも研究者も一緒に、学際的な対話ができたことに新たな可能性を感じました。この時、参加した人たちが、今回の「つどいin奈良」でも大きな役割を果たされました。大林美亀さんたちは「つどいin奈良」を開催する中心になられたし、鶴田律子さんもシンポジストとして発言されたり、活躍されましたね。

藤目　2001年の京都での集会は、私自身にも大きな励みになりました。この集会の参加者たちでその後「軍事基地と女性」ネットワークという会を作り、ゆるやかですが、連絡を保っていて、新しい仲間も増えてきました。その中のお一人が、「つどいin奈良」の「基地と女性」分科会で報告して下さった宮脇明子さんです。

ここに宮脇さんの御発言のメモがあります。近現代を通して軍港の街である佐世保に生まれ育ち、現在も軍港が窓から見えるお家にお住まいの高齢の方ですが、会場で御発言を聞いていて涙が出ました。こんなふうにおっしゃっていました。

「佐世保の場合は今も基地です。それで戦前の60年と戦後の60年、120年をまとめて軍事基地のもとでの女性の歩みということで、性暴力という観点から考えてきました。軍人の慰安婦にされた女性も、一般市民も、戦争があり軍事基地があったために、痛みがあり、それが倍増され、未来ある青少年にも影響がある。女性への人権侵害である性暴力に私たちは力を合わせて抗議して、そして心豊かな住みやすい街づくりをしたい」。

佐世保では近年も米兵のレイプ事件があり、宮脇さんたちのグループも抗議行動をなさったそうです。女性史の実証研究の進展が、たんに学問的に水準が高いというだけでなく、地域の女性たちの平和や人権への希求と結びついて実現してきたことが感動的でした。沖縄からの参加者が会場から「沖縄を忘れないで」と発言されたのも忘れられません。

平井さんはこの分科会で、イラク戦争に言及され、日本占領史を女性の視点から洗い直す必要があるということを指摘されましたね。とても重要な指摘だったと思います。

平井　ありがとうございます。この分科会で、各地から「米占領と女性たちへの抑圧」が具体的に報告されましたが、これらの研究を、現在展開されている英米を中心としたミリタリズム批判に繋げて考えなくてはいけない、それが「現実的課題に応える女性史」だ、という思いで発言しました。

先にも触れましたが、アメリカのブッシュ大統領が、2001年のアフガンや2003年のイラク攻撃・占領に際して、戦争目的を肯定化させるために、こともあろうに成功例として「日本モデル」を引き合いに出しました。また、「アフガンの女性、子どもたちは、十分苦しんだ。われわれの偉大な国アメリカが、救済し、希望を与える」という彼の演説に見られるように、戦争目的に「女性救済」を掲げるという事態に、日本の女性史研究者の一人として、これは座視できないと思いました。

もちろん、ベトナム戦争の記憶ではなく、恣意的に60年前の日本占領を例に出すというこの悪質な歴史の横領に対して、日米の占領史研究者が抗議の「声明」(2003/1)を出しました。が、私は、この男性研究者を中心にまとめられた「声明」が前提とする枠組み[5]だけでは、ミニタリズムとセットになった「ブッシュ型女性解放論」への批判にはなりえないと思いました。占領期研究者のなかにも、ジェンダーの縛りは存在します。男性研究者の多くが見過ごしてきた、勝者ー敗者の男性間で取

5　2003,3に雑誌『世界』に掲載された、ブッシュ政権のイラク攻撃に反対する日米豪の日本占領史研究者24人の声明。「イラク戦争・占領は歴史を無視する計画である」と非難したが、日本占領は「成功」とする認識は共有されている。

引された女性の側の視点からの問い直し、これが日本女性史の取り組むべき役割だと思います。

藤目　従来の日本占領史研究には性暴力被害を被った女性の経験が捨象されてきた、ということですね。

平井　そうです。「平和的進駐」という表現ひとつとっても、なるほど「米軍への組織的テロは皆無」[6]だったかもしれませんが、女性への暴力（レイプや「慰安」提供という名の買売春・性的管理など）は多発したわけです。これで「平和的」と言えるのかどうか。

いま、イラクやアフガンで何が起こっているか気がかりです。東京に来て報告されたイラクの女性は「占領が始まってから起きていることがある。女性や子どもを拉致して暴行する。そして国外で女性を売買している。イラクではそれまで知りもしなかったことだ」（ハナ・イブラヒム「占領下イラクで何が起こったか？！」2005,8/12）と言っています。

わたしたち日本の女性史も、隠蔽されエピソードとしてしか語られることのなかった、被占領地の女性たちの体験や語りに意味を与え、従来とは違った日本占領の実態を明らかにすることによって、今も続くアメリカの世界戦略の問題性を浮かび上がらせることが出来ると思うのです。それはトランスナショナルな女性たちの結びつきによって可能になります。その点でも、このアジア現代女性史研究会の取り組みは重要だと期待しています。

藤目　平井さんが「つどいin奈良」で、「従来の日本占領史で女性問題が抜け落ちてきたことが、日本占領という成功例があるとイラク占領を合理化する論理を許してきた」といった趣旨の発言をなさったとき、感激しました。よくぞ言って下さいました、というか（笑）。

「現実の課題にこたえる女性史を」というのは、女性史に対する平井さんの一貫した御姿勢ですね。以前、その題で論文を発表されましたね[7]。その当時「従軍慰安婦」問題が国際問題化しつつあったけれど、鈴木裕子さんは特別で、一般の女性史関係者の反応は必ずしも積極的なものばかりではなかった。その平井さんの論文に出会い、本当に良いことを言って下さったと感激したのですが、奈良での御発言を聞いて、そのときの感激を思い出しました。平井さんのおっしゃる「現実の課題にこたえる女性史を」というのは、加納さんがさきほどおっしゃった、「現在からの発想」ということと共通していると思います。

アフガニスタンやイラクを米軍が攻撃し、それに日本が加担し自衛隊まで派兵しているという、それこそ「現実の課題」に対して、それに応える女性史、少なくとも、応えようとする女性史研究とそのための視点が必要だと思います。

日本占領は、イラク占領と類型的に比較されるという要素と同時に、占領状態を利用して米軍が日本を全面的に朝鮮戦争遂行の基地にした、という要素もありますよね。仮に性暴力被害女性が日本国内にいなかったとしても、少なくとも日本占領米軍が南北朝鮮の人々に対する軍事攻撃の格好の基地にした事実ははっきりしているはず。でも、それも日本女性史のなかでの研究は立ち後れています。

平井　藤目さんが以前、『国連軍の犯罪－民衆・女性から見た朝鮮戦争』（不二出版、2000）という編集復刻の本を出版されていましたね。これは、私も全く知らなかったのですが、朝鮮戦争中に17カ国の代表からなるNGOの女性調査団を朝鮮へ派遣している。そして、女性への暴力（レイプや米軍が朝

6　ジョン・ダワーの発言。彼は新聞のインタヴューで「日本占領はなぜあれほど平和的だったのか」「なぜ成功したのか」という問いを立てる。（『朝日新聞』2005.7.25）

7　「現実的課題に応える女性史を－従軍慰安婦問題をめぐって－」『歴史評論』1993,10

鮮人女性を「慰安婦」化していることなど）を含めて国連軍の非人道的行為を事細かに報告しています。同時代に国境を超えた女性たちの連帯があったことに感動しますし、その報告は非常に今日的意味をもっていると思います。
ちょうど、この年の1月、両院に憲法調査会が設置され、「国際貢献」の名のもと、国連へ軍隊を派遣できる「普通の国」に向けての動きが加速されようとしている時だったので、国連軍の実態がこれによって広く知られるようになればいいな、と。非常にタイムリーなお仕事だと思いました。

藤目　そうですね、『国連軍の犯罪』は2000年に出したのですが、それ以後、とくに最近、軍事的緊張が急速に高まっているだけに、日米韓軍事同盟の枠組みから離れて、朝鮮戦争という終わらざる戦争に対する歴史認識を確立してゆく必要があると痛感します。

加納　私はこの8月に北朝鮮を訪問し、祖国解放戦争勝利記念館を見学したのですが、そこでは朝鮮戦争下の国連軍の犯罪が写真や資料で展示されていました。じつは藤目さんの『国連軍の犯罪』はつい最近知ったのですが、ほんとうに貴重なお仕事だと思います。これが戦後史のなかで抹殺されてきたのは、まずは占領軍による言論弾圧の結果ですね。

「戦後」の戦争と複合差別

藤目　日本が侵略する側に立ち、女性が再び銃後に動員されつつあるのではないか。その問いを女性史のアプローチで最初に発してくださったのが加納さんだったわけですが・・・。

加納　わたしは1970年代初めから仲間たちとともに，女性の戦争協力の実態をしらべて機関誌『銃後史ノート』にまとめてきました。「銃後」という言葉は戦争の後方支援活動を意味しますから1945年で終わるはずですが，1986年からはひきつづき戦後の女性の歴史を辿り『銃後史ノート・戦後篇』にまとめてきました。「男は前線・女は銃後」という構造は戦後も変わらないと思ったからです。直接武力は使わないが，戦後日本はアジアに経済侵略して，その先兵たちの銃後を女が支えている。

藤目　それですね、そのような戦後日本に対する見地、第二次大戦後のアジアと日本の関係に対する基本的な見地がないと、「戦争」や「銃後」の話題は1945年で終わってしまうのだと思います。
「つどいin奈良」の主宰者たちの基調は、「一国主義」と「複合差別」を批判的に検証しようということにありました。性・階級・民族といった複合的な女性抑圧構造を解明せず「日本」の「日本人女性」のことだけを見ていては真の日本女性史は書けない、という問題意識です。それは、アジア現代女性史研究会に共通する問題意識です。
　が、集いの参加者の中にはそういった基調になじまない人、もしかしたら反感を抱いた人もいたかもしれません（笑）。日本女性史叙述の一国主義的視野狭窄を危惧している人が多数いるとはいえませんから。
　本号はベトナム戦争特集号なのですが、編集をしながらその思いを強めました。ベトナム戦争は周知の通り、アジア全体を巻き込みアジア各地の女性たちにも直接間接に大きな影響を与えました。祖国が戦場となったベトナムはもとより、韓国においてもユン・ジュンオク先生たちのような主体的にベトナム戦争を見つめている女性たちがおられます。それに対して、日本ではいかにこの戦争が女性

史のなかで扱われてこなかったかを再確認したのです。サイゴン政権とのみ結んだ賠償協定、ベトナム戦争中の対米協力、ベトナム統一後の米国が主導するベトナム孤立化への加担といったことが日本女性史の課題として意識されたことは稀であり、ベトナム戦争時代に反戦活動をした日本の女性運動に関してさえ、まとまった叙述がありません。無い袖は振れないので、第３号に「ベトナム戦争と日本女性史」という実証的な論文を掲載することは断念せざるをえませんでした。

けれども、今後、日本女性史の中にベトナム戦争を視野にいれた研究が進む必要があると思うのです。それはたんに「他国の女性のことも」研究するということではなく、自分が生き暮らしている日本とは何であるのか、自分はどこにいるのか、という自分自身を認識することだからです。

集いのなかで、「戦争と平和」という分科会がありましたね。加納さんはそちらにも参加されたのですね。

加納　奈良のつどいは、わたしは一参加者で全体はわからないのですが、参加した「戦争と平和」分科会で新しい試みがありました。「戦争の記憶」の検証です。

80年代後半から各地で地方自治体による地域女性史が出されはじめましたが、そのなかには戦争体験が集積されています。それは戦後40年以上経った時点での「戦争の記憶」です。日本の女性たちはあの戦争をどう記憶しているか？　一口で言えば被害者として、ということです。それはなぜなのか、どうすればそこから脱却できるのか、という視点から報告がなされました。これは戦後６０年ならではの画期的な試みだと思います。もちろん戦争体験の掘り起こし・聞き取りはまだまだ必要ですが，それだけでなく戦争の記憶とその語られ方への視点をきちんと持つ必要がある。

それと同時に、「戦後」に埋めこまれた「戦争」をどう可視化するかが，今後の日本女性史の課題ではないかと思いました。日本では「戦争」は1945年に敗戦で終わった、あとは平和な「戦後」ということになっている。しかし世界ではずっと戦争はつづいていて日本も無関係ではない。とくに朝鮮戦争、ベトナム戦争では日本はアメリカに協力して大もうけした。あの無惨な敗戦にも関わらず世界に冠たる経済大国になったのは、そのお陰といえます。

それに無自覚で、「戦後」と言ってきたことそのものの中に、現在の「戦前」状況を生む大きな要因があったのではないか？　女性史も同様で、戦争といえばアジア太平洋戦争，そして「戦後の民主主義と平和を守れ」路線です。藤目さんが、ベトナム戦争について女性史の研究がないといわれましたが、朝鮮戦争についてもそうです。それはまさに日本女性史の「一国主義的視野狭窄」にほかなりませんが、研究者だけでなく日本人全体の無自覚さの結果だと思うんです。それを可視化する方法はないものか・・・。

藤目さんが「ない袖は触れない」とおっしゃったのですが、それでいえば、「ない袖を振る」というか、「無自覚さ」「不在」を明らかにする女性史の方法はどうあるべきかと考えたとき、この「アジア女性史」まさにその問いに答えるものだと思います。

藤目　そう言っていただけると光栄です（笑）。アジア諸国の女性史は、これまで知りたいと思ってもあまり本も出ていないし、日本で研究している人も少ないのです。本号には片山須美子さんが寄稿して下さったのですが、片山さんのようにベトナム女性史に取り組んでいる人は日本にはほとんどいらっしゃいません。

加納　ただ、わたしは，日本女性史としてまだやれることをやっていないという思いがあります。日本女性史は「日本人」の女性史ではない。日本という「国家」の範囲で、「戦後」という時代を共有したのは「日

本人」だけではありません。

それをどうやって可視化するか。『銃後史ノート・戦後篇』をだすとき考えたのは、毎号必ず在日朝鮮女性と沖縄からの視点を入れるということでした。

それで朝鮮戦争当時の聞き取りをしたとき、在日女性たちがどんな思いで祖国の戦争を見ていたかを知って、ほんとうにショックでした。ある女性は、当時はまだ子供だったのですが、祖国への爆撃を何とか止めたいというので、雪の降る日に相模原の米軍基地まで歩いていって、フェンスの外から米軍機に向かって石を投げたというんですね。日本女性からは朝鮮特需で景気がよくなったといった話が多いのに。私自身もカネヘン景気に乗っかって屑鉄拾ってお小遣い稼ぎをしました。

同じ日本で同じ空気を吸いながら、こんなにも体験が違うんですね。それを日本女性史がどう可視化してゆくか。この『アジア女性史』はアジアからの視点を入れることによって日本女性史の一国主義を開く大きな役割を果たしている。しかし日本女性史が、在日朝鮮女性をはじめニューカマーの女性たちの体験をしっかり直視することができれば、日本の中から開かれるものも大きいのではないか。わたしはあるべき日本の未来を多文化共生社会と考えていますので、早急に取り組むべきだと思っています。

平井　重要な指摘だと思います。「日本人」の一国狭窄主義は、アジアという広がりと女性たちの連帯のなかで克服されていくと同時に、「日本のなかから開かれるものも大きい」ということですね。

その点に関連してちょっと飛躍するかもしれませんが、韓国をはじめアジアの「慰安婦」にされた女性たちや沖縄の女性たちの証言に頼る傾向が強い、９０年代以降の近現代女性史のあり方に、危うさのようなものを感じてきました。もちろん、闇の中に葬られてきたサバイバーの声を聞くという行為の大切さは強調してもしすぎることはないと思います。でも、なぜ自分たちの地域や「日本」のなかにも存在する重層的な女性たちの体験を浮かび上がらせることができないのか？或いは、サバイバーにさらに辛い証言をさせ続けるのか？つまり、悲惨な目にあった被害者の証言に寄りかかり続ける運動や研究に対する、ためらい。それは、私自身も含めて、どこかで傲慢さがあるような気がします。問題は、そのような女性たちを無自覚なまま踏み続けてきた、あるいはそのような構造を変えることができずにきた私たち自身の「戦後」の「加害性」に向き合えるのかどうか、だと思うのです。

藤目　女性史を日本の中から開く、あるいは、日本の中・自分の地域の中に存在する経験を浮かび上がらせるということ、お二人がおっしゃったことに同感です。それこそ日本女性史の日本女性史たる所以だと思います。

「つどいin奈良」の主宰者たちが「複合差別」というキーワードにこめた思いは、まさに日本女性史は「日本人」女性史ではないはず、意識的に在日朝鮮人女性を視野にふくむようにしたい、ということでした。基調提言の一つを在日女性にお願いしたのも、「複合差別」という分科会で在日女性からの報告や、日本側からもウトロの問題に取り組んできた地域女性史サークルからの報告が行われたのも、そういう思いからでした。

アジア現代女性史研究会も、在日朝鮮人やニューカマーの外国人女性たちと協同して女性史を書いていきたいと念願があり、滞日外国人の暮らすコミュニティーのフィールドワークに行ったりしています。『アジア現代女性史』でもいつか、滞日アジア女性の特集号を組みたいです。それに、加納さんにも平井さんにもどんどん論文を寄稿していただけたら嬉しいです。

今回の「鼎談」は、神奈川・静岡・大阪に住む三人が東京に集まって一泊し徹夜でおしゃべりし、

それから９月から10月にかけてメール上で意見交換をし、原稿を三人で編集するという斬新な試みでした。三人で会うのは、「つどいin奈良」からほぼ一年ぶりでした。

「つどいin奈良」は、全国に散らばっている女性史の仲間が一同に会することのできる貴重な機会でした。たいへんな努力によって集いを実現して下さった奈良女性史研究会のみなさんにあらためて御礼申し上げます。

資料

第10回　全国女性史研究交流のつどいin奈良

開催日：2005年9月3日～9月5日
会場：なら100年会館、あすらな・奈良市男女共同参画センター、三井ガーデンホテル奈良
主催：第10回全国女性史研究交流のつどい実行委員会
参加者数：420人

9月3日（土）
基調提言「戦争と差別のない未来へ　―奈良からの提言」
コーディネーター：藤目ゆき（大阪外国語大学）
提言者：鈴木知英子（かしば女性会議）
松谷操（部落解放同盟東之阪支部女性部）
李愛子（畝傍中学夜間学級生）
分科会Part 1　「戦争と平和A」「軍事基地と性暴力」「教育」「複合差別」

9月4日（日）
分科会Part 2　「社会参加・運動」「暮らし」「労働」「戦争と平和B」
シンポジウム「新たな女性史の視点で戦後60年を考える」
シンポジスト：志水紀代子（追手門学院大学）
鈴木裕子（女性史研究者）
鶴田律子（洛南女性史研究会）
コーディネーター：藤目ゆき（大阪外国語大学）

9月5日（月）
スタディー・ツアー
人権のふるさと御所市柏原「水平社博物館」見学とフィールドワーク
「薬師寺」見学（解説付き）と玄奘三蔵院・平山郁夫画伯壁画鑑賞

基調「戦争と差別のない未来へ－奈良からの提言－」

コーディネーターからの発言　藤目ゆき

「戦争と差別のない未来へ」。

この合い言葉が今ほど切実に感じられる時代はない。イラク戦争は「大量破壊兵器」廃棄なる大義名文が失われてもなお続き、無辜の民衆が大量破壊と大量殺戮の犠牲になっている。平和憲法を持つはずの日本では国民を戦争に動員する有事法が制定され、自衛隊の戦場派遣によって日本人はイラクのレジスタンスから敵視されるようになってしまった。NGOの活動者が人質にとられたり、現地を訪ねた若者が殺害されたが、本人と家族は同情よりも自己責任論やハラスメントに取り巻かれた。日本が参戦国家へと大きく舵をきる中で、草の根にファシズムが浸透し、抵抗する人々や立場の弱い人々に攻撃の矛先が向かっている。日の丸・君が代の強制を拒む教員の大量処分や自衛隊官舎にビラをいれた人々の逮捕、また毎年三万人をこえる自殺者、悪質な差別事件、子どもたちが被害者にも加害者にもなる殺人事件の連続といった近年のニュースは、日本社会が芯から病んでいることの表れではないか。「自己責任」「勝ち組負け組」といった言葉の流行にみられるように人々の社会連帯の意識が失われ、平和や平等への願いが冷笑される空気が充満してきている。

そのような時代状況だからこそ、「戦争と差別のない未来へ」を合い言葉に全国女性史交流の集いが開催される意義は大きい。戦争や差別を肯定し権力者の正統性を示すために書かれる歴史では、女性の経験はとるに足らないことのように忘れられたり、隠されたり、歪曲されたりしてきた。女性が戦争によって受けた傷、差別される苦しみ、家の中・職場・地域でも女性であるがゆえに悔しい思いをしなくてはならなかった女性たちの様々な怒りや悲しみや苦闘は、女性たち一人一人の胸に秘められてきた。日本軍「慰安婦」問題に対するネガティブ・キャンペーンにも表れているように、「胸に秘めておけ」という社会的圧力は今も私たちを取り巻いている。だからこそ、女性史を掘り起こし女性史を書くということは、個人的な記憶として封じ込められていた女性の記憶を集団の記憶として解き放つことであり、女性に沈黙を強いていた社会の抑圧から女性自身が解放されることである。解き放たれた女性の記憶は、人々に真に平和で平等な社会を創る力を与える。

交換される身体、奪われる生
貧困と軍事化のなかのフィリピン女性たち

ジョイ・バリオス
マリー・カーリング、リタ・マリアノ、ホセ・ティト・ロヨラ
ルー・バイロシス、フィリピン女性資料センター

女であることは
戦時を生きること
私たちは貧しき母親
戦争の暴力は
切り落とされた
死者たちの首だけでなく
食べるもののない
食卓の上にも

Ang Pagiging Babae ay Pamumuhay sa Panahon ng Digma（女であることは戦時を生きること）
1990 より

この詩、「女であることは戦時を生きること」が描くように、フィリピン女性の生のあり様は二つの事柄によって規定される。ひとつはフィリピンの極度の貧困である。これは植民地支配の歴史にその起源を持ち、帝国主義グローバリゼーションによって深刻化してきた。もうひとつは軍事化である。これは抑圧的な政治体制とかつての植民地宗主国の軍隊、米軍の駐留継続によるものである。この貧困と軍事化こそが、フィリピン女性たちを糧をえるための身体の売買へと、あるいは国内の他の場所での出稼ぎへと、そしてまた経済的、政治的体制の変革を求める民主化闘争へと駆り立ててきたのである。

この調査報告は、女性のエンパワーメント、情報提供、組織化などの様々な活動に従事する NGO あるは民衆組織の女性たちによるフィールド調査に基づくものである。この中ではフィリピンの三つの地域に焦点をあてている。まず中部ルソン地方、ここにはとくにかつて米軍基地が存在したアンヘレス市と、2004 年に農業労働者の虐殺事件が発生したルイシタ農園があるタルラック市がある。次にフィリピンの北部に位置するコルディレラ地方、ここでは先住民たちが先祖伝来の土地を守るために闘っており、また反乱鎮圧を目的として大規模な国軍の展開が行われている。そしてマニラ首都圏、とくにミンダナオ地方の軍事化を逃れて移住してきたイスラム女性たちのコミュニティーに焦点をあてる。

本調査は大阪外国語大学の藤目ゆき教授を中心とする多国間にわたる「軍事主義とジェンダー」研究の一部である。また本調査ではフィールド調査に基づく資料の分析とともに文芸作品や大衆文化などにも注目し、学際的なアプローチを取った。本調査では次の疑問への答えを提起することを目的とした。軍事化と貧困がどのようにフィリピン女性、とくに調査対象地の女性たちに影響を与えているか。こうした状況に女性たち

がどのような対応を行ってきたか。報道写真に見られる軍事化のイメージからどのように軍隊のマチズモ（男性優位主義）に関する構造的分析を行うことができるか。米比両軍の兵士たちと彼らが駐留する地域との間にどのような性的権力関係が生まれているか。売春するフィリピン女性の身体を、どのような意味で軍事化されたフィリピン社会における暴力のメタファーと見ることができるのか、などである。

調査開始に先立って、調査の計画作成と方針に関するワークショップをフィリピン大学で行った。フィリピン大学のソーシャル・ワーク及びコミュニティー開発学科と女性学部で教鞭をとるジュディ・タギワロ教授、CWR（女性資料センター）のジャートルード・リバン氏、そして私を中心にして開かれたこのワークショップの場において、調査目標と方法論を確認した。本調査はこうした人々の集団的努力の成果として実現されたものであることを強調しておきたい。

枠組、事実および全体像：ケース・スタディーの統合

私たちはフィリピン女性たちの現在の状況を調査するのであるが、そのためにも植民地化、売春、女性に対する制度化された暴力に関する歴史を振り返る必要がある。これについてはブレンダ・ファジャルド（Brenda Fajardo）が描いたフィリピン史をテーマにした一連の絵画作品のなかの二点、「アメリカの占領：マリアをサムに売ったフィリップ」（1989）と「日本の占領：マリアを奪った０脚と、彼女を還せと叫ぶサム」（1989）がその歴史を最も象徴的に描き出している。

この二つの絵画のなかには両方ともその中心に大きな像が描かれ、そしてその周囲を小さな像が取り囲んでいる。占領という暴力はこの中心に置かれたものによって表現される。外国人男性が銃を構え、あるいは戦車にのり、占領軍（米国と日本）の旗（これは男性器を象徴するとも読み取れる）を持つ様子が描かれる。ふたつの小さなイメージがたくさん描かれているが、ひとつは羽を持った女性でそこには「非暴力と愛」と書かれており、もうひとつはまた別の女性でこの女性はライバル関係にある二人の外国人の恋人にはさまれていて、そこには「恋人たち」と書いてある。この両者の対比、つまり軍隊のマチズモ（征服者、植民者としての男性像）と征服の性的シンボル（求愛のなかの女性）あるいは平和を愛する存在としての女性との間の対比関係は、今日においても現実に見られるものである。さらにいえば、この作品は売春女性とくに米軍基地あるいは米軍が駐留している地域で働く売春女性をめぐる複雑さをも示している。

この作品はフィリピン史の重要な部分を描いている。植民地化という暴力によって売春が制度化されたという事実である。マリア・ルイサ・カマガイの著書 *Working Women in the 19th Century*（1995）は国立公文書館とマニラ総合マイクロフィルム・コレクションからの資料を引用して、売春の罪で起訴され投獄あるいは強制移住となった女性たちのリストの存在を明らかにしている。カマガイはスペイン植民地時代（1521 年から 1898 年）の売春をその形態に基づいて 4 つのカテゴリーに分類している。売春宿に囚われる場合、キアポ、ビノンド、トンドそしてシンガロンなどマニラ内の特定の地区での売春、買春者（主に中国系住民）の家に出向いての売春、特定の男性の家で生活し売春したもの、の 4 つの形態である。さらに彼女は 3 つの重要な事柄を指摘している。第一に売春女性に対する呼び名である。prostituta（売春婦）、mujer publica（公の女）、vagamundo（ごろつき）、indocumentada（無登録者、住民登録のない者）などと呼ばれたが、これ自体が売春女性に対する社会からの価値判断を示している。第二に、売春に従事した女性たちの多くが仕事を探しにマニラに出稼ぎに来たが、経済的困難のために売春するようになっているということである。カマガイはこれについていくつかの証拠を示している。第三に梅毒などの性病が流行したために、公衆衛生局が売春女性を統制するために売春の許可制度を作ったということである。（Camagay 1995 pp.109-115）

カマガイの著書からは売春女性の身体が三つの方法によって統制されたことが読み取れる。第一に投獄や強制移住という物理的な監禁。第二に彼女たちの仕事を社会がどのように見ているのかを示すような呼び名によって（例えば「ブラブラしている」とか「公の」など）その身体を「呼び習わす」こと。第三に政府機関による許可証の発行によって「刻印する」こと、である。

こうして売春に追いやられた身体の統制は、短期間に終わったエミリオ・アギナルド将軍の革命政府の時期、さらに前述のファジャルドの作品に描かれた新しい植民者の時代にも継続された。ルイス・デリの著書*A History of the Inarticulate*（語られなかった歴史）（2001）に収録された論文"Prostitution in Colonial Manila"（植民地下マニラの売春）には、1898年8月13日にアギナルド政権が保健委員会を設立して売春を統制することを試みたとの記述がある。トマス・カバンギス博士を長とするこの保健委員会は、売春女性を統制するためのガイドラインを作成する任務を課せられた。このガイドラインのなかには、許可証の交付条件としての強制性病検査などがあげられている。

だがフィリピン革命政府はそれ自身、長くは続かなかった。1989年8月マニラに駐留していた1万人の米軍部隊は、比米戦争の激化のなかで7万人にまで増員された。1902年から1918年という米植民地支配の最初の時期、駐留していた軍人の数は平均で17,000人である。外国軍隊の駐留は売春の増加をもたらした。そこにはフィリピン女性だけではなく、外国人の女性たちも含まれている。1903年の人口調査によれば、この年マニラには476人の登録された売春婦がいたとされている。そのうち75人は白人で、260人が日本人を中心とするアジア系外国人女性、そして141人がフィリピン人である。当時のタフト総督は売春の役割について「軍隊にとっての必需品」と述べている。(Dery 2001. p.136, p.139)

米植民地支配下で様々な統制制度が創られた。まるで憲兵司令官のようにふるまった米陸軍准将ジョージ・デイヴィスは、客となる兵士の階級によって売春を三つのタイプに分類した。将校にサービスを提供するもの、下士官を相手にするもの、一般兵卒を相手にするもの、である。この分類はその後、売春の形態として「間貸し屋」が一般的になると統制の効果を失っていったのだが、それでもなお売春させられる身体の制度的統制を象徴するものとなったのである。(Dery 2001. p.143)

日本による占領期（1942年から1945年）、女性の身体の戦争への利用はよりはっきりとした形で行われた。包括的な統制制度である「マニラにおける売春宿及び許可飲食店に関する法令」が1943年に制定され実施されたのもこの時期である。ジョージ・ヒックスは著書*The Comfort Women*（慰安婦）（1995）のなかで、この種の「休養施設」を開設するためには複雑な手続きが必要だったと述べている。例えば管理者は事業経営の経験を持つ日本人でなければならなかった。また経営計画書と誓約書を含む申請書類を提出しなければならなかった。さらには従業員の名簿と各人の経歴書、そして「売春女性」としての証明書も必要とされた。また様々な遵守事項には次のようなものがあった。感染防止のためのカリウム系水溶液あるいは濃度0.5%のクレゾール石鹸水溶液の定期的使用。一日一度の入浴。接吻の禁止。そして客の階級とサービスの時間に基づく支払額の規定（例えばマニラでは将校は一時間4ペソ、一泊8ペソ。民兵や下士官は2ペソ50センタボ、民間人では1ペソ50センタボ）である。(Hicks 1995. pp.60-62)

ただしヒックスは、売春女性の多くが拉致や強姦の被害者だったと述べている。被害に関して最初に提訴したマリア・ロサ・ルナ・ヘンソンは、14歳のときアンヘレス市で拉致され、監禁中12人から20人の男たちに強姦された。彼女は6人の女性たちとともに精米所に数ヶ月間囚われたと証言している。1996年に出版された彼女の自伝には、男と女、侵略者と被侵略者、そして加害者と被害者との間にある権力関係と彼女の複雑な心境が記されている。(Henson 1996: 71)

「私は自分の母親のことを思い出す。そして私をレイプしたたくさんの兵士たちのこと、彼らの残酷さを。私をレイプし、それでも満足いかなければいつも彼らは私を殴った。私は自分

を無力だと感じた」

「田中隊長だけは私の気持ちをわかってくれていると思った。彼だけは暴力をふるわなかったし、残酷に扱うこともなかった。でも心の中では彼に対しても私はとても怒っていた」

母親が地主にレイプされていたという彼女の回想は、女性を征服の象徴として使う植民地主義の暴力だけではなく、女性を所有物とみなす封建的社会のなかにレイプと強制売春の根拠があるということを表している。ヘンソンが母親の経験について繰り返し語っていること、彼女たちの関係、その結びつきは、女性がお互いの経験を通していかに共感しあえるか、ということを示すものである。(Henson 1996: 42)

「…私は母親に自分の身に何が起こったのか話した。彼女は涙を流し、お前は殺されなかっただけ運が良かったんだよ、と言った。そしてこのことは誰にも言わないでおきなさいといわれた。私はとても悲しかった。自分のなかに痛みを感じた。そのとき私は 14 歳で、まだ生理もなかった。私は考えた。どうして私の身にこんなことが起こったのか。そして母をレイプした地主のことを思い出した。…」

フクバラハップ（抗日人民軍）のメンバーだったロサ・ヘンソンは、日本の支配からフィリピン人民を解放できるのはフィリピン人自身による他はないと信じていた。彼女は次のように述べている。(Henson 1996: 47)「フクバラハップは米国に依存しなかった。米国は退却しており、フィリピン人民は力を尽くして敵と闘ったのだ。米国人がどこにいたというのか。」これは米国によってフィリピンが解放されたという言説、たとえば 1946 年に作られた映画『ビクトリー・ジョー』（LVN ピクチャーズ製作。監督マニュエル・シロス、出演ノルマ・ブランカフラー、ロジェリオ・デ・ラ・ロサ、アート・カントレル）が描きだした世界とは対極をなしている。映画の一場面では、米国人が英雄として登場する。彼らは V サインをかざしながら意気揚々と町に到着し、キャンディを配り、住民たちに熱烈な歓迎を受ける。

アンヘレス市とオロンガポ市には第二次大戦終結後から 1992 年までの長きにわたって米軍基地がおかれた。アンネ・マリー・ヒルスドンの著書『聖母と殉教者：フィリピンにおける軍事化と暴力』には「米国は軍事作戦の実施にあたって、兵士のための慰安計画を組織した」と記されている。性的な充足が兵士たちの「戦闘準備」の一部とされていた、とヒルスドンは指摘する。さらにフィリピン人の性労働者はストリップ・ショウのなかでヴァギナにコインを入れたり、タバコを吸ったり、バナナやソーセージを切ったり、飲み込んだり、あるいは卵を割ったりするという異常な出し物によってエキゾチックさを演出させられた。(Hilsdon 1995: 97-99)

ジェニファー・バトラーは 2000 年に書いた自身の文章「軍事化された売春：語られなかった物語」のなかで、米海軍基地および空軍基地があるオロンガポ市とアンヘレス市のバーやクラブには登録者、非登録者あわせて約 55,000 人の売春女性がいると推定している。このバトラーの文章は日本、タイ、韓国のデータを基にしてアジアでの軍事化された売春の全体状況を概観しているのだが、そのなかに「リタ」という名の女性のケース・スタディーが出てくる。バトラーによれば、リタはフィリピン中部、ビサヤ諸島にあるサマール島からマニラに出稼ぎに来た。彼女は 10 歳のときにメイドとしての仕事を始める。ロサ・ヘンソンの母親がそうであったように、彼女もまた雇い主の息子に強姦されそうになる。その後、彼女はゴミ集積場でスカベンジャーになり、それからオロンガポに移ってふたたびメイドの仕事を探した。だが仕事は見つからず、彼女は売春婦となる。はじめは海軍基地のあるオロンガポで、それから日本の沖縄で。(Butler: 2000 215)

バトラーの多国間にわたる調査によって、フィリピン、韓国、日本、タイというそれぞれの国に同じような「債務奴隷」のシステムがあることが明らかにされている。このシステムによって売春宿における奴隷状態が作りだされている。軍事基地周辺のバーで仕事を探す売春女性たちは当局に登録せねばならず、そのためにエイズ検査や血液検査、尿検査、レントゲン検査や性病検査を受けた上で、登録カードを取得しなければならない。飲み物の売り上げの一部を受け取り、そして客と性交渉することによって彼女たちは収入を得る。「収入のレベルは様々である。だが彼女たちが高額の収入を得ている、というのは神話にすぎない。」(Sturdevant and Stolzfuz in Butler 2000 215)

バトラーが指摘するように売春女性たちを取り巻く環境は似通っている。したがって、フィリピンで米軍基地が閉鎖されたとき、女性たちが沖縄や韓国、グアムの基地へと移っていったという事実も驚くことではない。それらの場所で彼女たちはふたたび軍隊の需要に応えた。

フィリピンにおける売春の歴史を振り返ると、軍隊と人身売買との間のつながりがより明白にうかび上がる。「軍事化された売春」という用語をバトラーは用いた。だが軍事主義が女性に与えた影響はそれだけではない。女性たちがより多く民主化運動に参加するにつれて、また農村部での内戦が激しくなるにつれて、女性たちは武器を手にした反乱軍の兵士として、あるいは様々な運動組織の活動家として、あるいは戦闘に巻き込まれ囚われた民間人として、軍事主義のさまざまな局面に関与していくこととなる。

戦争の身体：現代フィリピンにおける売春女性、捨てられた女性、活動家、囚人

1972年から1986年のマルコス政権による戒厳令の時代、さらにコラソン・アキノ、フィデル・ラモス、ジョセフ・エストラーダ、グロリア・マカパガル・アロヨと続く各政権の時代を通して、フィリピン社会を特徴づけてきたものは軍事主義[1]であった。人権侵害の深刻さには各政権の間に違いがあったが、すべての政権期を通して良心的政治囚が生み出され、刑務所では女性への強姦を含む拷問が行われ、革命勢力を掃討するために低烈度紛争戦略が実施された。さらに、セックス観光を生み出した観光キャンペーンのみならず、外国軍あるいはフィリピン国軍の基地の存在によっても多くの売春女性や捨てられた女性たちが生み出された。

フィリピン研究チームでは各フィールド調査員によって個別の事例調査を進めてきた。収集されたデータはフィリピン女性に対する軍事化の影響についての具体事例を明らかにしている。

売春と軍隊：カビテ市の事例

フィリピン女性資料センター（CWR：Center for Women's Resources）によれば、特定の地域で売春が増加する背景には二つの要因がある。軍事基地の存在、そして政策的な土地転換と失業である。このことを証明するために、カビテ市での事例が紹介されている。

同市では軍事基地が売春をひきつけており、また一方では農地の工業用地への転換が住民の追い出しを引き起こし、その結果、女性たちが売春地区であるサングレイ地区へと追いやられている。調査に協力したローズは次のように述べている。「私の家族がカビテ市に移ったのは基地があったから。故郷に帰っても仕事はないし、失業して家族が飢え死にするのを見るよりも、売春婦になるほうがましだわ」

カビテ市のサングレイ地区（中国系資本家シャン・リの名前に由来。スペイン植民地時代にはサングレイ

1　軍事主義（militarism）について、軍事化（militarization）という用語を用いる場合もある。

岬として知られていた）は、もともと米国植民地時代に米軍の補給基地と海軍病院があった場所である。その後、米軍によって海軍基地に造り変えられた。1971年以降はフィリピン海軍、海兵隊および空軍の基地として使用されている。

軍人と売春との関係は明白だ。なぜなら軍人の多くが売春が行われるバーや休憩所の共同経営者であるか、あるいはその愛人がバーを経営しているかのどちらかである場合がほとんどだからだ。売春街として有名なドクター・サラマンカ通にあった人気の店、ローゼ・ガーデンの場合を見てよう。古くからの住人は次のように述べている。

> 「ここにある施設のほとんどは最近できたもので、軍人が所有しているか、昔は売春婦だった軍人の同棲相手が経営しているものさ」

4人の売春女性、グロリア、エマ、ローズ、レンレン（すべて仮名）たちがフィリピン女性資料センターのインタビューに応えた。4人とも貧しい家庭の出身で、稼ぎ頭である。買春客の多くは博打打ちか軍人であり、彼らは店を経営している軍人の友達や同僚だという。さらに、マネージャーが軍関係者以外を店に入れることは稀だという。軍人は自分たちのグループの部外者と接することになれておらず、部外者の登場によって軍人との間にトラブルが起こるからだ。

捨てられた女性たちと軍隊：コルディレラ地方とポーリン・サラバオの場合

売春女性だけが国軍兵士の犠牲になったのではない。兵士たちはコミュニティーの女性たちをも慰安の手段として利用した。国軍当局は、兵士たちにも楽しむ権利はあると言って、これを正当化している。軍当局から正式なお咎めをうけることなく、兵士たちは女性に言い寄り愛人にしている。

ルソン島北部にあるコルディレラ山脈の村々でも女性たちが国軍の駐留によって影響をうけている。アブラ州ラクプ町では90年代、派遣されてきた兵士たちがインスタント・ラーメンの「マギー」や「クラウド9」のチョコレートなどの食べ物を使って若い女性を誘惑したと報告されている。貧困ゆえに、女性たちは易々とその犠牲になった。

アブラ州、マウンテンプロビンス州、カリンガ州ではすくなくとも103人の兵士たちが地元の女性との間に関係を持っていた。結婚にあたっては部族の伝統に従って、あるいは一般的な形で結婚式を行う兵士もいたが、多くの場合、女性の家族との間で確認を行うだけだった。そして兵士は女性と一緒に暮らすことになる。

ほとんどの場合、二人の関係は長くは続かない。兵士が別の場所へ赴任を命じられれば、地元女性との関係はそれまでとなる。兵士との間に子どもをもうけた多くの女性たちが、自分は捨てられたと感じている。コルディレラ地方のこの三つの州だけで、103人の国軍兵士によって捨てられた98人の女性と118人の子どもたちの事例が報告されている。ある女性の場合、三人の兵士たちと関係を持ったが、すべての兵士がこの女性を捨てた。これらの事例の内訳を以下の表に示す。

3人あるいは4人の子どもをもうけておきながら、全員を見捨てた兵士もいる。報告されている兵士による女性と子どもの切捨ての最も古い事例は1979年のものであり、最近では2002年にも起こっている。

同棲生活のなかで女性の側が、相手の兵士が既婚者である、あるいは他の女性と関係をもっていることに気が付く場合もある。また他の女性との間に子どもがいることが発覚することもある。こうした場合、軍の上官に対して女性が訴え出て正義と賠償を要求することもあるが、うまくいくケースはほとんどない。わずかに援助を得られる場合もあるが、月ごとの仕送りを得ても実際にかかる養育費には足りない。何人かの兵

表1：国軍兵士に捨てられた女性と子どもの事例数（年代別）

国軍兵士に捨てられた女性と子ども（年代別）				
年代	捨てられた女性		捨てられた子ども	
	人数	割合（%）	人数	割合（%）
1986年以前	47	47.96	52	44.07
1986年から1992年	14	14.29	22	18.65
1993年から1998年	16	16.32	15	12.72
1999年から2000年	5	5.1	9	7.64
2001年から2002年	2	2.04	1	0.9
年代不詳	14	14.29	19	16.2
合計	98	100	118	100

表2：国軍兵士に捨てられた女性と子どもの事例数（州別）

国軍兵士に捨てられた女性と子ども				
州	捨てられた女性		捨てられた子ども	
	人数	割合（%）	人数	割合（%）
アブラ州	31	31.64	40	33.9
カリンガ州	58	59.18	71	60.16
マウンテンプロビンス州	9	9.18	7	5.94
合計	98	100	118	100

士は懲罰を受けたとされているが、実際には他の部隊、他地域へ移動しただけである。女性とその家族が訴え出て追及したことによって兵士が除隊させられた事例はわずかに2件である。

本報告にはメアリー・カーリングによるコルディレラ地方での事例研究を収録した。そのなかにカリンガ州バルバラン町に住む女性ポーリン・サラバオのライフ・ヒストリーがある。

1997年1月、バルバラン町は嵐に見舞われた。フィリピン国軍の駐留施設も破壊された。14人の兵士たちがバルバラン町内にあるサルタン村の住人たちに一時的な避難所を提供するよう求めてきた。兵士に場所を提供するためにポーリン・サラバオの一家は近所の家に移ることを余儀なくされた。これがきっかけとなり、ポーリンは自宅を占領した兵士たちのうちの一人、コルポラル・ドミンゴ・カダオアンと知り合う。

その後、数ヶ月にわたってサラバオ家の家屋は軍の特別駐留所となった。この間にポーリンとコルポラル・カダオアンの距離が縮まった。そして二人は婚約することになり、村では「サルワク（sulwak）」という伝統的な儀式が行われた。ポーリンとその家族たちは婚礼の日を待ち望んだ。だが実はコルポラル・カダオアンにはすでに妻と5人の子どもがいたのである。1997年のなかばにコルポラル・カダオアンは別の地域への赴任を命じられ、すでに妊娠6ヶ月となっていたポーリンは置き去りにされた。

1997年11月28日、ポーリンは女の子を出産する。名前はノヴィ・アイリッシュ。だがコルポラル・カダオアンが戻ってくることはなかった。ポーリンの家族が強く要求したために、三年後、ノヴィが三歳になった頃、彼は1,500ペソを送った。はじめてカダオアンに出会ったとき、ポーリンは20代半ばだった。

いまこの貧しい農家の娘は、一人で子どもの養育に責任を負っている。

活動家と制度化された暴力：ハシエンダ・ルイシタの女性労働者の事例

軍事化が女性に与える影響は、売春の拡大やあるいは兵士と先住民女性との間の悲惨な関係だけではない。女性労働者たちは長年にわたってピケット・ラインで制度化された暴力の被害を受けてきた。

本調査の一部として全国的な農民女性団体アミハンがこのことに関して重要な調査を行っている。アミハン議長リタ・マリアノはハシエンダ・ルイシタにおける３人のケースに関して聞き取り調査を行った。そのうちの一人はタルラック市バレテ村に住むフロリダ・V・シバヤン（46）である。

シバヤンは 11 歳のときにハシエンダ・ルイシタで働きはじめた。サトウキビ畑での労働は過酷だった。彼女の仕事はサトウキビの刈り取り、苗の準備、植え付け作業、畑の草刈り、肥料の散布など。労働は午前が７時から 11 時、午後が１時から５時までだった。

1970 年代、一日の賃金は 16 ペソで週に６日か７日働いた。現在では一日 197.5 ペソだが、仕事をできる日数が極端に減らされ、また米代や砂糖代、医療費や教育ローン、社会保障費、組合費などが差し引かれるため、一週間の手取りは 9.5 ペソにしかならない。

農地改革を免れるためにハシエンダ・ルイシタが株式分配制度（Stock Distribution Opotion）を実施した直後から労働日数が減らされた。6,453 ヘクタールの農園全体のうち、4,915 ヘクタールがこの制度の対象とされた。包括的農地改革計画のもとで農民に土地を分配するかわりに、地主であるコファンコ家は小作人に対して合意覚書にサインするよう求めた。この合意は三者によって交わされるものであり、三者とはタルラック開発会社（TADECO）、ハシエンダ・ルイシタ法人（HLI）、そして小作人である。この二つの会社は両社ともコファンコ家が所有しており、したがってコファンコ家は株式全体の三分の二にあたる 66％を所有することになる。この合意によれば、労働者に対する配当は、サトウキビ畑での労働日数によって算出されることとされている。だから労働者がたとえば週に一日あるいは二日しか働くことができなければ、それに相当する額しか受取れないことになる。

一週間の手取りが 9.5 ペソという現実のなかで、シバヤンは家族を支えるために別の収入を探す。彼女は週に二、三度、午前７時から午後２時まで洗濯の仕事をして 100 ペソを手に入れるようになる。だがこの金額も食費に費やせば消えてしまう。電気代などの日々の支出には足りない。

この極限的な貧困こそが、労働組合員であったシバヤンを 2004 年 11 月６日からのストライキへと駆り立てた。11 月 10 日そして 15 日には、他の多くの女性たちとともに催涙ガスにやられ、放水を浴び、警棒で殴られた。そして 11 月 16 日、シバヤンと多くの農民たちは国軍から実弾による発砲を受けた。その日、７人の労働者が命を失った。

それでもシバヤンは毅然とした態度をとりつづけた。マリアノによる聞き取りのなかでシバヤンは次のように語っている。「土地と正当な賃金、仕事と権利。そうしたものを求める闘いのなかで自分の役割を果たすことを通して、私は女性リーダーの模範になりたいと思う」

戦闘地域から来たムスリム女性たち：カリアット地区住民アイーダ・シラヤンの移住経験

軍事化は労働者や農民のコミュニティーに限ったことではない。ミンダナオ、そしてまたマニラ首都圏のような都市部にあるムスリム・コミュニティもまた軍事化の深刻な影響を受けている。そのひとつがケソン市のカリアット地区である。カリアット地区の住民のほとんどはイスラム教徒だ。ただしこの地区は海外に仕事を求めて出国する、あるいは海外出稼ぎから帰国したムスリムの人々が一時的に滞在する中継地である。

皮肉なことだが、ミンダナオでの戦争を逃れてマニラに移住してきたムスリムの人々は、このカリアットでも軍事的な仕打ちを経験している。本報告にはホセ・ティト・ロヨラによるカリアット地区に住むムスリム女性たちへの聞き取りを収録した。それによれば、マニラ首都圏で「テロ」事件（たとえばバス爆破など）が起こるたびにこの地区に対する警察の手入れが行われている。家々が手当たりしだいに捜索され、テロリスト容疑をかけられたムスリムが逮捕される。この警察による手入れは、戦争によって避難を余儀なくされたミンダナオでのトラウマ的な記憶を住民たちのなかに呼び起こす。

ロヨラによるインタビューのなかで、カリカット地区の住民アイーダ・シラヤンはミンダナオ島コタバト州にあるカバカンでの戦争がいかに彼女の人生に影響を及ぼしたかを詳述している。シラヤンによれば、彼女の子ども時代を通してずっと「反乱勢力」と国軍兵士は交戦していた。国軍が「ムスリム反乱勢力」を探すと称して村を襲撃するかもしれないという時には、つねに彼女の家族や近所の人々、さらにバランガイ（フィリピン社会の最小行政単位）の全体が避難した。当時、彼女にはこの戦争の意味はわからなかった。だが、避難して別の場所へと移動していくのが大変だったこと、地下に造られた一時避難所で三家族が身を寄せ合っていたこと、銃撃を避け国軍から隠れている間、一週間分の食料をどうやって保存したか、自分たちの村で一般人がどうやって国軍に逮捕されていったかを聞き取りのなかで語っている。

国軍は様々な方法で住民に嫌がらせを加えた。村にやってくると、国軍は地域税証明書（CTC）を出せと要求する。住民がそれを見せることができなければ名前を書かされるのだが、ほとんどの人が読み書きができない。こうした住民に国軍は屈辱的な命令をする。たとえばその場で歌えとか、踊れとかいうのである。

シラヤンは戦争と貧困のために小学校を卒業することができなかった。幼い働き手として、彼女は両親がトウモロコシや稲などの畑仕事をしている間、家で掃除や洗濯をした。だが戦争が激しくなると、働くことさえできなくなった。

結婚してから、シラヤンは子どもを養うために仕事を探したが、見つけることができなかった。そして海外での家政婦の仕事を探すためにマニラにやってきた。だがそれも簡単ではなかった。しかたなく彼女は小さなお店で働くことにし、なんとか子どもたちに仕送りをしている。ミンダナオでの戦争さえ終れば、状況は良くなり家族のもとへ帰ることができるのに、と彼女は言う。

女性政治囚たち：拷問の手段としてレイプ

ヒルスドンの著書には市民災害復興センター（CDRC: Citizen's Disaster Rehabilitation Centre）、国際赤十字社、ガブリエラによる様々な統計資料がまとめられている。たとえば 1988 年だけで 30 万人の人々が武力紛争によって立ち退かされた。フィリピン共産党の軍事組織、新人民軍（NPA）の疑いをかけた者に対する軍事作戦は、結果として一般人に対する暴力をもたらしている。さらにこうした軍事作戦のなかで性的暴力、性的拷問、レイプが行われている。ガブリエラによれば 1986 年から 1988 年までの間に 56 人の女性が逮捕・拘束され、14 人が避難を余儀なくされ、32 人が殺されている。また 4 人がレイプされ、2 人が行方不明となった。(Hilsdon 1995, pp.110-111)

こうしたデータとならんで、フィリピンの女性政治囚に対する性的暴力に関する彼女の研究は極めて重要である。ヒルスドンは女性たちへの虐待を、ローマ・カトリックが強い影響をもつフィリピン社会の文脈のなかで分析する。処女マリアにならって純潔を守るようにという強い社会的価値観、聖マリア・ゴレッティのように貞潔を守るべしという「殉教者のパラダイム」、処女マリアや聖人たちの純潔な体と他方でのイブやマリー・マグダレーナという性的な体への二元化。こうした文脈のなかで考えれば、新人民軍の女性兵士たちが「アマゾネス」とか「売春婦」などと罵倒され、社会における「倒錯者」だと呼ばれるのも驚くことではない。「売春婦」とされるがゆえに、彼女たちはその肉体に対する暴力という罰を受ける。ミンダナオ

東部での農村コミュニティーを対象としたヒルスドンの研究は、国軍の男性兵士が「農民男性からその妻を借り受ける」と称して、女性を夫の前でレイプしたり、あるいは新人民軍との関係が疑われた男性の妻に対して性的拷問を加えている、といった事実を明らかにしている。

ヒルドソンの論文「フィリピン社会における性差別と軍事化」のなかで、キャロリン・イスラエル・ソブリシアは次のように述べている。「もしもこの国が過去数十年間の間に軍事主義、軍事化の方向へと急激に向かうことがなかったとしたら、女性に対する多くの人権侵害は避けられただろう。」ソブリシアはまた、国の資源が国軍の増強のために使われたと指摘する。兵士の増員と準軍事組織への資金提供、装備の拡充と国軍諜報機関のネットワーク拡大が行われたのである。女性と子どもに対する軍事化の影響を概括するものとしてソブリシアは次の点をあげている。家族の死や失踪に苦悩する母親たち。殺害、レイプ、食料の供給停止、銃による立ち退きと監禁、拷問、違法な拘束、その他の虐待。健康と教育を侵害する女性と子どもへの立ち退き、である。(Sobritchea 1992 pp.20-21)

ヒルドソンとソブリシアの研究から次の事例を知ることができる。

1：エドナ・ヴェレス。1987年4月パナイ島カディス市にて逮捕。取調べのなかで、エドナは性的暴行を受けた上、刃物で刺す、切るなどされ死亡した。
2：アーリーン（通称）。1985年3月ダバオ市で逮捕。国軍は彼女に対し、指から感電させる、指の間に銃弾を打ち込む、新聞紙を食べさせる、ピストルの銃床で襟首を殴るなどした。裸にさせられた上、踊ることを強制された。兵士は満足いかないと、彼女の全身に胡椒をすり込んだ。収監中、彼女は何度も拷問され、強姦された。その結果、彼女は妊娠している。
3：フェミニスト活動家ティタ・ルビはガブリエラ・人権問題委員会の報告書のなかで、自らが虐待された経験を語っている。裸にされ、性器に指を入れられるなどされた上、ヴァギナに唐辛子や瓶を差し込むぞと脅された。またルビは、女性の囚人たちはみな乱暴に扱われ、刑務所に到着する前から兵士に触られたり、抱きつかれたりしたと述べている。なかには刑務所内での自由を得ることと引き換えに兵士の性的な誘いに応じたり、「ガールフレンド」になってましなあつかいを受けようとする者もいた。女性の政治囚はレイプの対象だった。
4：ゼナイダ（通称）。彼女の話はヒルダの著書に収録されている。彼女によればレイプには多くの場合、肉体的、性的暴行がともなう。自らも首を絞められ、顔や腕、足を殴られたと述べている。拉致実行者に銃を突きつけられて、彼女はフェラチオをすることを強制された。

これら女性政治囚の証言は映画にもなった。ボニファシオ・イラガンによる「民衆の崇拝（Pagsambang Bayan)」は1977年にベーン・セルバンテス監督の下、UPレパートリー・カンパニーによって製作され、レイプを含む拷問の様子が描かれている。エドガルド・マラナンの「クリスティーの時（Panahon ni Cristy)」は1978年、これもUPレパートリー・カンパニーによって製作され、女性の囚人たちの悲哀を描いた。また1985年製作のクリス・ミラド「E♭メジャーの月と銃（Buwan at Baril sa Eb Major)」のなかには、軍事化された状況下に生きる先住民女性の姿が描かれている。

以上、いくつかの事例を見てきた。ルソン島南部カビテ州をはじめ、国軍と外国軍の基地周辺における売春の拡大。コルディレラ地方での国軍による軍事化とそのなかで虐待され、捨てられた女性たち。中部ルソン地方タルラック州での農業労働者の集団虐殺に示されたピケット・ラインにおける制度化された暴力。ミ

ンダナオでの戦争による移住。政治囚をはじめとする女性に対する拷問の手段としてのレイプの実行。これらのことから「戦争下の女性の身体」とは新植民地支配に組み込まれ、グローバル化され、使い捨てられる身体のことであり、それはまた新たに資本主義化され軍事化される社会のなかで売買され、あるいは統制されているということが明らかとなる。

まとめ：軍事化された身体を文脈のなかで捉える

こうしたことから本論文は以下のことを明らかにしている。

第一に、フィリピン女性の「交換される身体」はフィリピンの極限的な貧困を物語っている。とりわけ農村部で女性が魚や缶詰、米と引き換えに性的サービスを提供する場合、その対価はその日一日を暮らすためのものでしかない。

第二に、軍事化は売春の拡大を促すとともに、男性兵士による女性への誘惑を生み出す。だがこれらの兵士は「第二の家族」であるこの女性たちを捨てる。このことは女性の身体が使い捨てられる物としての位置に置かれ、男性が戦闘に従事するために必要なサービスを供給する物として位置づけられていることを示している。つまりフィリピン女性は戦争の「不可視」の、また副次的な被害者でもあるということができる。

第三に、フィリピン人女性の身体はいまやグローバル化した新植民地主義体制に組み込まれている。ピケット・ラインで女性労働者たちが経験する暴力は、その身体がいかに軍隊と警察によって統制されているかを示している。「従順で、物言わぬ」身体こそが私的に所有された多国籍企業の利益に合致するからである。

第四に、政治囚に対する拷問の手段としてのレイプの実行は、活動家の身体の統制が、財界および抑圧的政権の利害と関連していることを示している。レイプあるいはレイプするぞという脅迫（身体への暴力）は、外国資本と独裁者のファシスト的支配を維持するという利害から行われている。

本文章はNGOおよび民衆組織で活動する在野の研究者によってなされた調査に基づく予備的文書である。近日発表予定の報告書全文によって、フィリピンにおけるジェンダーと軍事化に関してより豊富なデータと詳細な分析を提供する予定である。

フィリピンにおける女性の身体は戦争によって形作られてきた。いまもつづく帝国主義によるフィリピン経済の支配は、民衆の貧困を拡大する一方、主権と平等な社会を求めるフィリピン民族主義者たちの闘争を呼び起こし、そしてまた資本家と政府の利害を守るための軍事化を生み出してもいる。

本研究が「戦争の舞台としての身体」に関する研究の一助となることを心から願うものである。

【河合大輔　訳】

深刻化するフィリピンの政治的殺害

河合大輔

アジア現代女性史研究会（CAWA）では2005年1月、フィリピン大学のジョイ・バリオス先生の案内で現地調査を行い、タルラック州ルイシタ農園で起きた国軍による農民虐殺事件に関する報告を本誌創刊号に掲載した。農業労働者のストライキ集会に国軍が発砲し参加者7名が死亡したこの事件は、土地を持たない貧しい農民とフィリピンの政治と経済の中心を握る富裕層との対立を象徴する出来事であり、労働争議や土地紛争には軍隊が介入するというフィリピンの厳しい現実を示すものでもあった。

この事件以降もフィリピンでは政治的殺害事件が頻発し続け、一週間に二人、三人と活動家の暗殺が続いている。2006年12月12日にフィリピンの人権団体カラパタンが発表した声明によると、2001年のアロヨ大統領就任からこの日まで政治的理由によって殺害された民間人の数は799名、拉致・行方不明者の数は208名に及んでいる[1]。また行方不明者のうち40％は2006年に発生しており[2]、事態が深刻化していることを示している。かつてのマルコス独裁政権下の14年間で殺害された活動家の数は1,500人とも言われるが[3]、アロヨ政権下では5年半でその半数もの人々が殺害されており、フィリピン史上最悪の状況とも言える。

人権侵害状況が悪化の一途をたどるなか、フィリピン国内では人権団体カラパタンを中心にして数度にわたって国際調査団や国際民衆法廷が開催され、事実を国際的に明らかにする努力が続けられてきた。こうした取り組みを受けて2006年8月にはアムネスティ・インターナショナルがフィリピンの政治的殺害問題に関する報告書を発表。各国メディアでも徐々にニュースとして伝えられるようになった。世界各地のフィリピン人移民組織も告発の努力を開始しており、日本ではCAWAにも参加しているKAFINセンターのアガリン・サラ・長瀬さんや名古屋のFMC（フィリピン人移住者センター）がStop Killingsキャンペーンを進めている。また2006年5月、日本政府の開発事業であるサンロケダム建設に反対していた農民運動リーダー、ホセ・ドトン氏が何者かによって暗殺される事件が起きたことから、ダム建設問題に取り組んできたいくつかのNGO団体も問題を重視して取り組みを始めている。この事件については『世界』2007年2月号に報告が掲載された[4]。

反乱鎮圧作戦「オプラン・バンタイ・ラヤ」

関心と取り組みが広がるなかで、政治的殺害が急増する背景も次第に明らかになりつつある。その一つとして指摘されているのが、アロヨ政権の反乱鎮圧作戦「オプラン・バンタイ・ラヤ（自由の監視作戦）」の

1　"Rights group condemns Arroyo regime for butchery of Filipinos and their freedom", KARAPATAN Public Information, Dec. 12, 2006.

2　"Condemn state terrorism and uphold the Filipino people's human rights!", Philippines – Canada Task Force on Human Rights (PCTFHR), Dec. 10, 2006.

3　"Primer on Oplan Bantay Laya", Ecumenical Movement for Justice and Peace, 2006

4　「農民ホセはなぜ殺されたのか？ - アロヨ政権が対応を迫られるフィリピンの「政治的殺害」」まさのあつこ、『世界』2007年2月

問題だ。これは国内の反政府勢力に対して2002年に開始されたアロヨ政権の軍事作戦であるが、兵士教育用に作成された国軍のパワーポイント"Knowing the Enemy（汝の敵を知れ）"など流出する種々の資料から、国軍が新人民軍[5]などの武装勢力だけではなく、非武装の合法社会運動にも「コミュニスト」とのレッテルを貼り、攻撃対象を拡大していることが明らかとなっている。"Knowing the Enemy"にはガブリエラ女性党、フィリピン学生同盟（LFS）、全国ジャーナリスト連盟（NUJP）、フィリピン・カトリック中央協議会（CBCP）の名前までが並ぶ。

これまでも殺害現場での目撃証言などから国軍の関与が指摘されてきたが、その積極的、組織的な関与が一層明白となっている。政治的殺害問題は、政府・国軍による意図的な社会全体の軍事化の問題であり、アロヨ政権が極めて独裁的な体制を強めていることを示すものである。

被害者たちの実情

2006年8月18日から29日まで日本の学生団体AASJAの主催で、日本とフィリピンの大学生による合同の現地フィールド・ワークが行われ、筆者もこれに同行した。その際、フィリピン学生同盟（League of Filipino Students：以下、LFS）の案内で、政治的殺害の被害者たちが避難しているブラカン州の教会を訪れる機会を持つことができた。

学生も標的に

ここで学生・大学をめぐる状況にもふれておきたい。LFSは約1万人の会員を擁する全国規模の学生団体である。1970年代後半に設立されて以来、学費問題をはじめとする学生の権利要求とともに、農地改革や労働者支援などの社会的課題に取り組み、また米軍駐留問題をはじめとする米国によるフィリピンへの政治的軍事的介入、また日本など先進国との間の従属的な経済関係を批判して政治的活動を行ってきた。2005年11月、米兵による集団強姦事件が発生した際、その直後に女性団体ガブリエラとともにいち早く米国大使館への抗議行動を行ったのもLFSだった。

政治的殺害はこうした学生活動家にも広がっている。2006年3月と7月にはLFSメンバーのクリス・ヒューゴー（20）とリー・モン・グラン（21）がそれぞれ何者かによって銃殺された。2006年6月26日には農村調査のためブラカン州ハゴノイの農家に宿泊していたフィリピン大学の女子学生、シャーリン・カダパン(29)とカレン・エンペニョ(23)が国軍兵士と思われる覆面姿の集団に拉致されたまま行方不明となっている。今回訪れた避難所ではこの拉致現場に居合せた農家の少年にも聞き取りを行うことができた。この事件は被害者の親や仲間の学生、農民たちの必死の訴えから全国に報じられ大きな波紋を呼んだ。その結果、フィリピン大学学長は内務自治大臣と国防大臣に対し情報開示と2名の身柄引渡しを求める書簡を送り、最高裁判所も当該地域の国軍当局に対して身柄引渡しの命令を発した。だが国軍当局は「共産党の地下活動にでも入ったのではないか」[6]などとうそぶき、これを無視したままだ。この事件に関してはフィリピン大学福祉及び地域開発学部のジュディ・タギワロ教授をはじめ教員らも学生救出のために奔走し、同大学デリマン校教授会は政府当局の対応を糾弾する決議を採択している。だが二人の行方は今にいたるまで不明のままである。

5　新人民軍（New People's Army）はフィリピン共産党の軍事部門。

6　"Missing activists may be with NPA' · Army chief", Inquirer.net, Aug. 4, 2006

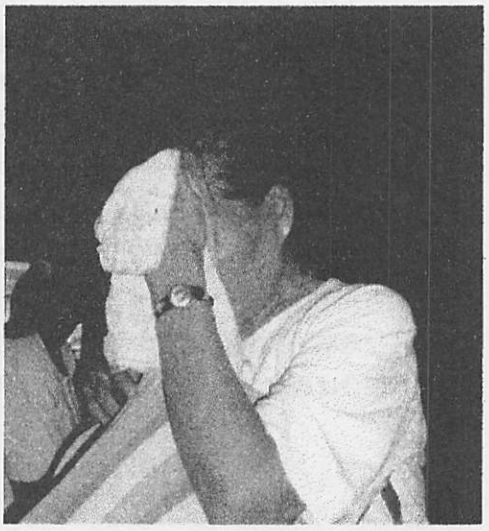
避難所での聞き取り

マニラから車で二時間ほど行ったブラカン州パラディレルにあるセント・ジェームス使徒教会には、2006年7月から人権侵害の被害者たちのための避難所が設置されている。訪問した時点で同州の各地から約70人が避難していた。下は生まれたての赤ん坊から上は75歳まで、自らが命を狙われている人、殺害や拉致の現場を目撃し口封じのために身に危険がおよんでいる人、襲撃を受けたが逃げのびた人、またその家族たちが集まっていた。教会の周辺では国軍の協力者や諜報員が徘徊しているために、避難民たちは一歩も外へ出ることができない。そのため仕事をすることもできず、避難所の運営は市民団体の支援によっているが、相当数の人数を収容しており食費を賄うだけでも大変だと聞かされた。以下、聞き取りの一部を紹介する。

ジェフ（21）は高校生で、友だちと一緒に学費値上げに反対するデモに参加したことがある。それに参加した仲間の二人が国軍に拉致されて今も行方不明。二人は拉致された後、デモ参加者の名前を言うように拷問（水を浸したドラム缶に入れられ、電流を流す）を受けて、ジェフの名前を言ってしまった。国軍は拉致した二人のうち一人を一時的に釈放してコミュニティに戻らせ、スパイとして活動させようとした。その友人はコミュニティに戻った時、拷問されたことやジェフらの名前を言ってしまったことを仲間に告白し、事態が明るみになったという。この友人は結局、国軍の方に戻り、国軍が展開するにあたって情報提供やガイドの役をさせられている。ジェフは安全のためにここに避難し、学校にも通えなくなっている。

リージャ・マナハン（55）はある日の夕方、家族とテレビを見ていたところ突然、国軍兵士が踏み込んできて、息子のパトリシアが銃撃された。銃弾は肺を貫通し重傷を負った。一命は取り留めたものの、手は不自由になり入院したままだ。事件後も別に住んでいる子どもの家に兵士が来て、家族が殴られたり、「家を燃やすぞ」と脅されたりしている。踏み込んできた兵士たちは「お前ら全員殺す。新人民軍にかかわっているだろう」と怒鳴った。だが、リージャにとってはまったく身に覚えがない。子どものうち2人は漁民運動に参加しているが、他の子どもは参加しておらず、リージャ自身も銃撃されたパトリシアも参加してはいない。「国軍は家族全員が新人民軍に関わっていると思ったのかもしれないが、実際は違う。もしそうなら一つの家に定住せずに、転々としているはずだ」と話す。

他の人へ聞き取りを行っていた最中もリージャは傍らで泣き続けていた。その日は息子パトリシアの手術の日で、息子の様態、帰れない自宅のこと、働くこともできなくなってしまい今後の生活のことなどで不安がいっぱいだという。最後に彼女は涙をぬぐいながら、「軍隊にはまず村からでていってほしい。弾圧、嫌がらせをやめてほしい。国軍は本当なら人々を守るのが仕事のはずだから」と訴えた。


リージャは聞き取りの間も泣き続けた。

マーシー・ポロ（75）はサンホセ・デルモンテ市のスラムに住む女性。一年前に自分のスラムを立ち退かせる計画があることがわかった。近所の人たちと相談して全国的な都市スラム住民の連合組織カダマイに連絡をとり、法的な手続きやコミュニティでの組織作りなどのアドバイスを受けた。年長だったこともあり、自分がリーダーになった。最近になっ

聞き取りに応じるマーシー（中央）とリージャ（左）。

て、国軍兵士が近所を徘徊し、「マーシーはどこだ？あいつは新人民軍だぞ」と聞きまわっている。また別の情報から自分の名前が国軍の Order of Battle（攻撃命令）に載っていることがわかったため、ここに避難してきた。「私たちは何も悪いことをしているわけではなく、自分たちの権利を訴えているだけ」「普通に考えてどうして私が新人民軍なのか。75 歳で銃も持てないし、武装闘争に参加できるはずもないのに」とマーシーは腹立たしそうに話した。

ウィルフレッド・ラモス（14）は前述のフィリピン大学の女子学生 2 名の拉致現場に居合せた少年である。6 月 25 日、父が農民運動家である彼の家にこの学生たちがやってきた。次の日の未明、眠っていると突然、ドアを激しく叩く音で目を覚ました。外から男たちが「ドアを開けろ」と叫んだが、父は危険を察知して応じなかった。だが「開けなければ撃ち殺す」と脅され、やむなくドアを開けるとウィルフレッド少年と父、2 名の学生、それに同宿していた農民マニュエル・メリノは押し倒され、縛られて家から連れ出された。シャーリンは妊娠していたが、ウィルフレッド少年は兵士たちが「本名を言え」と怒鳴りながら彼女たちの腹を殴ったのを目撃したという。カレンは服を脱がされ、その服で目隠しをされた。静まりかえった深夜の騒ぎであったが、近所の人が駆けつけることはなかった。同地域には国軍によって夜間外出禁止令が出されており、外にいるところが見つかれば「新人民軍」との容疑をかけられるため、怯えて誰も出てこないのだ。結局、学生 2 名とマニュエル・メリノが車に乗せられて連れていかれた。その後、村を国軍が監視するようになり、現場を目撃したウィルフレッド少年にも身の危険があるため、この教会に避難することにしたという。ウィルフレッドくんは「二人をお姉さんのように慕っていた」といい、「怖かったけど、国軍には腹が立つ。自分が証言しなければ事実が明らかにならないのだから、証人になる」と話した。

この避難所では食事や宿泊など生活の支援を行うとともに、子どもたちへの教育支援、被害者たちが精神的ショックから回復するためのケア活動を行っている。今後は教会の敷地の一角に畑を開設し、避難所のなかでも被害者たちが自分たちで生きる力を獲得できるよう自立支援プロジェクトを行おうと計画している。避難所の財政を支える目的と同時に、被害者たちが尊厳を取り戻すための活動だと避難所のスタッフが説明してくれた。

筆者自身、人権侵害状況の悪化についてはこれまでも何人かの被害者に会い、いくつかの現場を訪れてきたが、大勢の被害者に囲まれ、緊迫した空気のなかで涙ながらに一人ひとりの厳しい状況を聞き、あらためて事態の深刻さに胸が詰まった。

以上、フィリピンでの人権侵害状況の一端を報告した。2001 年以降、大幅に拡大している米軍駐留と対テロ戦争の影響や、日本からの開発援助・企業進出などとの関係にも注目しながら、今後もこの問題を注視していきたい。

資料紹介
『岩国基地と米軍犯罪 1969 ～ 1998 新聞資料集成』

アジア現代女性史研究会では 2006 年 10 月、研究資料として『『岩国基地と米軍犯罪 1969 ～ 1998 新聞資料集成』を発行しました。その経緯について詳しくは本誌末尾の「編集後記」をご覧ください。以下に同資料集の「編集にあたって」を再録し、資料の紹介とします。

編集にあたって

米軍再編が世界各地で推進されている。米軍基地を抱える山口県岩国市では、沖合に滑走路を建設する基地拡張計画が長年議論の的であった。が、近年の在日米軍再編計画のなかで、従来の基地拡張計画の続行はもとより、厚木基地に配備されてきた空母艦載機の移転が新たに求められることになった。岩国市民は 2006 年春、住民投票によってはっきりと反対を表明したが、米国・日本両政府は依然としてその計画を断念していない。

ここに収録した 330 点の新聞資料は、岩国市議・田村順玄さんが、基地問題に関して長年にわたって各紙から切り抜き、保管してきた資料の一部である。

見出しを一覧するだけでも、殺人、強姦、強盗、窃盗、放火、暴行、轢き逃げ、麻薬・覚醒剤、銃器流出、と、基地の街・岩国の人々が無数の米軍の犯罪と暴力にさらされてきた歴史と現在が察せられる。基地が周辺で暮らす人々の命と暮らしにどのような被害を与えてきたのか、これらの資料は物語っている。米軍基地・米軍再編問題を、このような基地周辺住民の経験と離れて考えることはできない。

米軍基地問題は、地域住民の視点と同時に、女性の視点からも洗い直される必要がある。

1995 年の沖縄で小学生女児が集団レイプの被害に遭った事件は、沖縄はもとより日本「本土」においても大きなショックを与え、日米安保体制に対する新たな批判の渦を巻き起こした。が、米軍性暴力事件はその後も絶えることなく、今日なお沖縄でも日本「本土」でも続いている。

女性の人権に対する社会の意識が多少進歩してきたとはいえ、今日も性暴力が被害女性の泣き寝入りで終わることが一般に多い。まして、日米安保体制に守られた米軍の性暴力は、無数に引き起こされているにもかかわらず、そのほとんどは闇に葬られてきた。

米国が主導する世界戦略に従って対テロ戦争の正義・日米の軍事同盟強化の正義が盛んに宣伝される一方で、基地周辺で米兵の暴力によって心身に傷をおった女性たちの正義は無視されている。

ここに収録した地方新聞や全国紙地方版の記事には、ついぞ全国的には報道されなかった女性たちの受難が多くふくまれている。これら基地周辺住民の女性の受難が全国的に報道されてこなかったことを重く受けとめなければならない。田村さんのご厚意でこれらの資料に接することができた私たちは、岩国に相次いで起こった強姦殺人事件さえ、地元でしか報道されてこなかったという事実に二重のショックを受けた。米軍

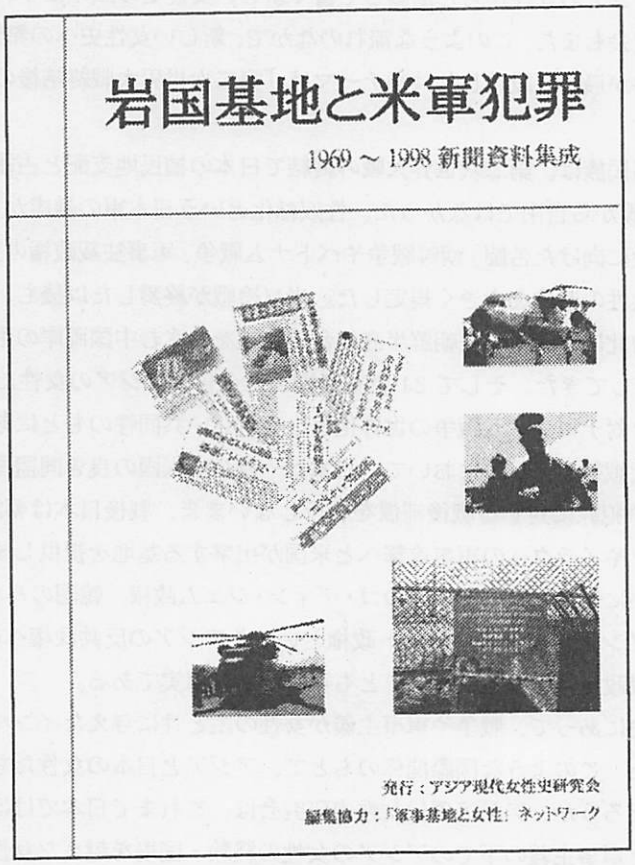
基地・日米安保体制という問題は、女性の人権と無縁に論じられるべきでない。
このように考えて、本資料集には「軍事基地と女性」ネットワークの関係資料をも収録した。

この資料集が、基地の周辺で暮らす人々の苦難に思いを馳せる手がかりとして、米軍再編・基地問題・女性の人権問題に関心を寄せる人々に、役立つことを願っている。

編集委員会代表　藤目ゆき

内容

「岩国基地と女性の性被害　～米兵犯罪の裁判傍聴の取り組みを通して考えること～」麻田和恵
「岩国基地を訪ねて」森一女
「山口地裁岩国支部・裁判長宛申し入れ文」
「日米韓国軍事同盟と女性の人権：岩国基地の米兵による女性に対する犯罪」藤目ゆき
「東アジアの軍事基地と女性：『歴史と現在を問う』講演と報告」黒田薫
「憂慮する日比民衆の共同声明」藤目ゆき
「憂慮する日比民衆の共同声明（原文）」
岩国基地関連　新聞記事資料：1969 ～ 1998（掲載記事一覧表・新聞スクラップ）



「アジア現代女性史」シリーズの刊行にあたって

アジア現代女性史研究会代表　藤目ゆき

「アジア現代女性史」シリーズの刊行にあたって、翻訳・編集を行ったアジア現代女性史研究会を紹介し、刊行の趣旨を説明しておきたい。

アジア現代女性史研究会は、2004年4月に誕生した。創立メンバーは、女性学に共通の関心を抱きつつ、アジア各地の地域研究、歴史学、平和学、宗教学、文学と、それぞれ専門分野が異なる数名の研究者である。第二次世界大戦終結から現在にいたるまでの約60年をタイムスパンとし、北はモンゴルから南は東ティモールにいたるまで、東北および東南アジア全域の女性史を協働して研究しようという大きな夢をもって出発した。2005年に研究成果を発表するためのジャーナルとして年報『アジア現代女性史』を創刊、日本語版・英語版で刊行している。

「アジア女性史」という言葉が日本の女性史研究者の間でしばしば言い交わされるようになったのは、1990年代のことであった。90年代、アジア各地から日本軍性奴隷制度の被害女性がカムアウトし、被害女性のための正義を求める国際市民運動が始まった。その展開は女性史研究者をも励まし、一国主義や性暴力のタブー視を超えて、アジアの女性たちと協働して書く新しい女性史の試みにインスピレーションを与えた。アジア現代女性史研究会もまた、このような流れのなかで、新しい女性史への希望をこめて創立された。

アジア現代女性史研究会が最初に設定した共通テーマは、「第二次世界大戦終結後の戦争・軍事主義と女性」である。

東北および東南アジア諸民族は、第二次世界大戦の終結で日本の植民地支配と占領から解放されたとはいえ、その後も戦争と軍事主義から自由ではなかった。性奴隷化という日本軍の暴虐から解放された後もなお、民族解放と独立国家の建設に向けた苦闘、朝鮮戦争やベトナム戦争、軍事独裁政権の支配といった諸要因が、冷戦時代の東西両陣営の女性の運命を大きく規定した。米ソ冷戦が終焉した以後も、東北および東南アジアの冷戦構造は解消せず、南北に分断された朝鮮半島と台湾海峡をはさむ中国両岸の軍事緊張は続き、米軍はアジア10万人体制を堅持してきた。そして21世紀を迎えた今日、アジアの女性たちは米国主導の資本主義グローバリゼーションと対テロリズム戦争の世界化という新しい共同性のもとにある。

このような第二次世界大戦後のアジアにおいて、日本は一貫して米国の良き同盟国であった。大戦終結までの植民地支配や侵略戦争犯罪に対する戦後補償を履行しないまま、戦後日本は朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、アフガニスタンやイラクへの軍事攻撃へと米国が出撃する基地を提供し続けて今日にいたる。また直接の戦争加担ではないにせよ、南ベトナムのゴ・ディン・ジエム政権、韓国のパク・チョンヒ政権、フィリピンのマルコス政権、インドネシアのスハルト政権といったアジアの反共政権への経済的政治的援助が、民衆の支持がない軍事独裁政権の存続を支えたことも否みがたい事実である。

このようなアジア現代史にあって、戦争や軍事主義が女性の生と性に与えたインパクトとはどのようなものだったのだろうか。また、このような国際関係のもとで、アジアと日本の女性たちはどのようにかかわり合い、結びついてきたのだろうか。アジア現代女性史研究会は、これまで日本ではほとんど知られていない第二次世界大戦後の戦争と軍事主義の下でのアジアの女性の経験・国境を越えた女性たちの移動や交流に光

を当てたいと考えた。

が、アジア女性史は、知見を得たいと願っても、各国・地域における研究蓄積も乏しく、日本語で読める本はさらに少ない。そこで研究会は、会員それぞれの専門言語を活かしてアジア女性史に関する海外の文献を調査し、重要な文献を系統的に邦訳して、それらを共同研究の基礎にしたいと考えた。その計画が、本シリーズの刊行につながった。

シリーズに収録した各巻は、出版予定順に示すと次の通りである。原書の書誌は（　）のなかに示す。

（1）アジア・ウォッチ、女性の権利プロジェクト、ヒューマン・ライツ・ウォッチ編著／古沢加奈訳『現代の奴隷制――タイの売春宿へ人身売買されるビルマの女性たち』（Asia Watch and the Women's Rights Project, Human Rights Watch, eds., A MODERN FORM OF SLAVERY: Trafficking of Burmese Women and Girls into Brothels in Thailand, Human Rights Watch, 1993 年）

（2）林紅著『中国における買売春根絶政策――一九五〇年代の福州市の実施過程を中心に』（お茶の水女子大学博士論文、2005 年）

（3）スニー・チャイヤロット著／増田真訳『フェミニズム、民主主義および人権の理念の統合――スニー・チャイヤロットの経験的研究』（Suni Chaiyarot, Kanlomruam udommakan feminist prachathipatai lae sitthi manutsayachon: suksa phan prasopkan Suni Chaiyarot, タマサート大学修士論文、バンコク、2004 年）

（4）タナッカーの会編／富田あかり訳『ビルマから――女性たちの声』（Thanakha Athin, Myanmar Naingngan hma Amyothamimya i Athan, および Myanmar Naingngan -Pyaun ghlehmu atwet Amyothamimya i athanmya, ビルマ語版、バンコク、2000 年・2002 年）

（5）ジョン・ルーサ、アユ・ラティ、ヒルマー・ファリッド編／亀山恵理子訳『終わることのない年：六五年被害者の経験を理解する――口述史のエッセイ集』（John Roosa, Ayu Ratih, and Hilmar Farid, eds., Tahun Yang Tak Pernah Berakhir: Memahami Pengalaman Korban 65　esai-esai sejarah lisan, Lembaga Studi dan Advokasi Masyarakat (ELSAM), Tim Relawan untuk Kemanusiaan, Institut Sejarah Sosial Indonesia, ジャカルタ、2004 年）

（6）金貴玉著／永谷ゆき子訳『韓国の離散家族――イデオロギーを超えて実像へ』（ソウル、2004 年）

（7）E・チミッドツェレン著／絵音美詩、今岡良子訳『モンゴル人民共和国における女性解放の歴史』（E. Chimedtseren, BNMAU-d emegteichuudiig niigmiin darlalaas chuluulsun tuukhen turshilaga, モンゴル国立出版局、ウランバートル、1971 年）

（8）レ・ティ・ニャム・トゥエット著／片山須美子編訳『ベトナム女性史』（Le Thi Nham Tuyet, Phu nu Viet Nam qua cac thoi dai, Nha xuat ban Khoa hoc xa hoi〔社会科学出版社〕、ハノイ、1975 年、抄訳）

（9）周芬伶著／馮守娥監訳『怒る白鳥――台湾女性史』（『憤怒的白鴿：走過台灣百年史的女性』元尊文化、台北、1998 年）

（10）M・J・B・バリオス編著／河合大輔訳『交換される身体、奪われる生、貧困と軍事化のなかのフィリピン女性たち』（Maria Josephine Barrios, ed., Bartered Bodies, Ravaged Lives: Filipino Women amidst Poverty and Militarization, 執筆中）

以上の 10 冊は、アジア現代女性史研究会の在外会員であるバリオスの著作を除くと、既存の文献から研究会が選定し、訳出した。また、10 冊のなかには通史的な叙述のものもあれば、人身売買・買売春、民衆闘争、

政治弾圧、家族離散といった主題に即して叙述された図書もある。そのようにもともとはそれぞれ別々に書かれた10冊であるが、シリーズで刊行することで、現代アジア女性史の全体像へと接近する手がかりになるであろう。

現代アジア女性史の全体像が通史として書かれるには、まだ長い歳月が必要であろう。とはいえ、第二次世界大戦後から今日までの現代史を三つの時期に区分してみることはできる。シリーズ各巻の位置づけをこの時期区分に照らして説明しておきたい。

第一は、1945年に第二次世界大戦が終結してから54年にジュネーブ協定が結ばれる前後までの時期である。この時期は、中国の国共内戦から中華人民共和国の樹立、朝鮮戦争と38度線付近における朝鮮半島分断の固定化、第一次インドシナ戦争と17度線におけるベトナム分断、米国を盟主とするアジアの反共軍事同盟ネットワークの構築といった、冷戦体制が確立する時期である。

林紅の著書は中国共産党の娼妓解放事業を、台湾海峡を隔てて蔣介石政権と対峙した福建省を焦点にして取り上げている。そこには娼妓制度の根絶がどのように実現されたのか、また、冷戦がどのように娼妓解放事業に影を落としたかが明らかにされている。金貴玉の著書は、朝鮮半島の南北分断がもたらした家族離散を新しい視点から検証したものである。台湾女性六人のオーラルヒストリーである周芬伶の著書のなかには、日本からの解放後、国民党政権の下で厳しい弾圧を受けた二人の元女性政治囚の経験が記録されている。

第二は、1954年のジュネーブ協定で約束されたベトナム統一選挙が実施されず、ベトナムに対する米国の介入が強まり、75年のサイゴン解放にいたるまでの第二次インドシナ戦争（ベトナム戦争）の時期である。

この戦争は、ベトナム・ラオス・カンボジアのインドシナ三国はもとより、東北および東南アジア全域で民衆にとてつもない影響を及ぼした。米国の北爆が本格化する1965年、インドネシア9・30事件が発生する。これはインドネシア共産党のクーデター未遂事件であるとされ、共産党勢力は弾圧を受けて壊滅、それまで非同盟運動のホープであったスカルノ大統領は失脚し、スハルトが政権を掌握する契機となった。ジョン・ルーサらの著作は、スハルト体制下で長く闇に隠されてきた9・30事件以後の民衆虐殺を、オーラルヒストリーの方法で蘇らせている。

フィリピンやタイでは、米軍の大部隊が進駐し、米兵に奉仕する性産業が爆発的なブームとなり、今日にいたる性売買構造の土台が築かれた一方、ベトナム人民の闘いに呼応して反帝民族解放闘争が高揚した。スニー・チャイヤロットの著作は、70年代のタイにおける民主化闘争に参加した著者の自伝である。スニーが提唱する「10・14のフェミニズム」は、学生と民衆の闘いがタノーム政権を打倒した1973年の10・14事件に由来している。

この時期に、トゥエットとチミッドツェレンの原書が刊行された。トゥエットの原書は、古代から現代までのベトナム女性の歩みを叙述した通史的大作である。このシリーズにはそのなかから現代の章を抄訳した。チミッドツェレンの著作は、題名の通りモンゴル人民共和国の女性解放史であり、1921年の人民革命から同書が刊行された70年代はじめまでの通史である。

第三は、ベトナム戦争の終結から現在にいたる時期である。米国の同盟諸国に性産業ブームを巻き起こしたベトナム戦争が終わると、それらの性産業は売春を不可欠の要素とする観光政策を推進する各国政府に庇護され、いっそう肥大化した。その代表例といえるタイでは、開発侵略によって荒廃する農村部から都市部に流入する無数の女性たちに加え、タイ・ビルマ国境を越えて多くの少数民族の女性・少女たちが人身売買され、性産業の底辺に編入されていった。ヒューマン・ライツ・ウォッチの著作は、その調査報告書である。

送出国であるビルマでは、ネーウィン体制が88年に全土で沸き起こった民主化闘争によって倒れたが、国軍の再クーデターで誕生した国家法秩序回復評議会（ＳＬＯＲＣ）が民主化運動を徹底的に弾圧し、90年の総選挙でアウンサンスーチーの率いる国民民主連盟（ＮＬＤ）の大勝にもかかわらず、権力移譲を拒否して今日にいたる。タナッカーの会の著作には、軍事政権の弾圧と迫害を受けるのべ五一人のビルマ女性の

声が収録されている。

フィリピンでは、1986年に「ピープル・パワー」がマルコス政権を倒したが、以降の歴代政権は土地改革や民主化を求める民衆を武力で弾圧する政策を続け、民衆運動のリーダーや関係者が国軍や準軍事集団に暗殺される事件は今も跡を絶たない。2006年2月には非常事態宣言が発令され民衆政党の国会議員が拘束、その後も政治的殺害事件が相次いでいる。貧困と軍事化のなかで生きる女性の現在に光を当てたバリオスの著作は、シリーズのなかで唯一アジア現代女性史研究会が実施した調査と研究の成果を発表するものである。

以上、時代をおって各巻を紹介したが、ここに書き尽くすことができない各巻に固有の豊かな内容と意義について、各巻ごとに解説を載せた。

アジア現代女性史シリーズがこれまで疎遠であったアジアの女性の同時代史を日本に伝え、それが日本の女性とアジアの女性が共に未来を構想してゆくための一助になることを念願している。

2006年9月

（アジア現代女性史研究会は、研究活動について学術振興会科学研究費「アジア現代女性史の研究：東北および東南アジアの軍事主義とジェンダー」〔2004年度～2007年度〕の助成を得た。）

編集後記

アジア現代女性史研究会代表　藤目ゆき

アジア現代女性史研究会(CAWA)の2006年度は「ベトナム年」。そう意気込んでスタートした2006年度も残り二ヶ月となり、「ベトナム戦争と女性」の特集号である『アジア現代女性史』第3号がようやく編集を終えた。励ましや協力を寄せて下さった方々に感謝するとともに、研究会の一年の歩みを振り返っておきたい。

1．ベトナム女性史

CAWAはベトナム女性史上の研究課題として特に三つのテーマを設定している。第一は、抗仏戦争・抗米戦争・カンボジアとの紛争・中越戦争といった戦争における女性の経験である。第二は、枯れ葉剤作戦や性暴力といった未賠償の戦争犯罪とその被害者の現状である。第三は、グローバリゼーションを背景に急増しているベトナム女性の国際移動と性的搾取である。

ベトナム研究の専門家がいなかったCAWAがベトナム女性史に取り組むためには、大阪外国語大学ベトナム語科の先生がたの協力が必要不可欠であった。ブイ・ティ・ロアン先生と片山須美子先生は一年を通して助言、翻訳、執筆の全面にわたって協力して下さった。住村欣範先生には2006年5月ベトナムの計画出産や国際結婚に関する講義をして頂き、スオン先生、富田先生、ホアン先生にも貴重な助言と協力を頂いた。ベトナムの方々にもひとかたならぬお世話になった。2006年10月下旬に行ったホーチミン市及びカンボジアとの国境地方における調査は、南部社会科学院のグエン・ティ・ホア先生の全面的な協力なしには実現できなかった。ハノイ国家大学日本語学部のグエン・ティ・ハイ・エン先生は、CAWAが2007年3月下旬に予定しているハノイ訪問の準備を助けて下さっている。

本号の特集は前述した第一のテーマ「戦争における女性の経験」と第二のテーマ「未賠償の戦争犯罪とその被害者の現状」に直接関係しているが、編集の過程で私たちは、とてつもなく大きなこれらのテーマは一年で消化するのも一度の特集で扱いきるのも到底不可能だと気がついた。例えば、第一のテーマに関して、カンボジアとの紛争に関する現地調査を主な目的に2006年7月にはカンボジアのシャムリアップとプノンペンを訪ね、同10月にはベトナムのタイニン省とアンザン省を訪ねた。そこでポルポト軍の大量虐殺があった村の生存者たちの証言にも接した。が、これらの調査成果の発表は次号に持ち越さざるを得ない。また第二のテーマに関しては、ホーチミン市のツーズー病院と枯れ葉剤被害児童の施設を訪ね、病院と施設の関係者や被害児と交流する機会を与えていただいた。二世、三世へと被害が継承され、同病院だけで今日も枯れ葉剤被害と認められるケースが一年に百件にのぼるという現状を知り、衝撃を受けた。3月にはハノイの枯れ葉剤被害者協会や平和村をも訪問する計画なので、併せて次号に報告したい。

「グローバリゼーションと女性の国際移動・性的搾取」という第三のテーマは、CAWAが当初から関心を抱いてきたアジアにおける女性の性的搾取という大きなテーマの一部であり、前号（『アジア現代女性史』第2号）ではモンゴル・韓国・日本・フィリピンの視座から「グローバリゼーション・戦争・移民女性」

を特集テーマとした。ベトナムに関しても文献調査と現地調査、研究者との交流を進めてきたが、本号にはその一端を今岡良子さんにフォーラムの報告の中で紹介して頂いたものの、一つの論文にまとめるにはまだしばらく時間が必要である。

このようにCAWAの「ベトナム年」は今後の課題が重大で多大であることを確認して年度末を迎えつつあるが、今年度の蓄積を活かして来年度以降もベトナム女性史への取り組みを継続していきたい。

2．米軍再編

米国のブッシュ大統領がイラクへの介入に関連して「ベトナム戦争の教訓は何だったのか」と報道陣に問われ、「撤退は誤りだったということだ」と答えた事はまだ記憶に新しい。本稿を書いている今、メディアは米軍のイラクへの増派計画に「ベトナムの二の舞になる」と反対する米国世論の高まりを伝えている。万人に「ベトナム戦争」を思い起こさせずにはおかないイラク戦争の泥沼化という情勢を背景に、CAWAの「ベトナム年」はベトナム女性史への取り組みと同時に、アジアで推進されている米軍再編の現状を女性史の観点から検証する活動に取り組むことも目標とした。以下にCAWAの一連の取り組みを振り返ってみる。

2006年5月には、漢城大学の金貴玉さんに韓国における米軍再編の焦点である平澤の農村へ案内して頂いた。平澤はソウルの南方に位置し、米国の烏山空軍基地周辺には米兵を顧客とする基地村が形成されている。CAWAはこれまでは平澤の基地村・集娼街を中心に調査を行ってきたが、農村訪問は今回が最初であった。米軍再編計画に基づいて広大な農地が接収されることになり、私たちが訪ねたテチュ里では軍と警察の合同作戦で抵抗する農民たちを強制排除し、人々の拠点であった小学校の建物を破壊するという事態に到っていた。戦闘警察が村の入り口で検問に当たり、村の各所で人々を監視しており、農地の四方に鉄条網が張り巡らされていた。恐ろしくて耕作はおろか村のなかを自由に歩くこともできなくなっているというハルモニたちの日常はあまりに痛ましかった。

6月29日には、沖縄から富田由美さんを大阪外国語大学に招き、講演をお願いした。富田さんは2000年12月に日本軍性奴隷制度を裁く女性国際戦犯法廷の際に開催された「現代の武力紛争下の女性に対する犯罪」国際公聴会において、米兵による集団レイプの被害を証言した女性である。米国が主導する「対テロ戦争の正義」は喧伝されても戦争や米軍駐留が無数の女性に対する犯罪を引き起こしてきた事実はほとんど表に出ないという状況のなかで、彼女は平和を希求して機会あるごとに学校や大学、市民の集う場で自身の被害経験を語ってきた。沖縄の辺野古崎新基地建設に自身の経験をふまえて反対する富田さんに対して、外務大臣が「米軍と自衛隊があるからこそ日本の平和と安全が保たれている側面が、すっぽり抜け落ちている。バランスが取れた考えとは思えない」(沖縄タイムス、2005年7月14日）と非難したのは前年のことであった。「対テロ戦争の正義」が称揚される裏面で「女性の正義」は蹂躙されている。

日本の米軍基地は75%が沖縄に集中しているが、日本「本土」もまた米軍再編計画のなかで基地の拡張・強化が各地で推進されている。CAWAは2006年度の秋を通して岩国基地問題に取り組んだ。9月には、資料集『岩国基地と米軍犯罪－1966～1998　新聞資料集成』を発行した（「資料紹介」本号146-147頁）。10月には西山正啓監督のドキュメンタリー最新作『岩国の選択』の上映会を催した。11月には岩国市で国際集会が開催された。山口県立大学の三宅義子さんを座長に開かれたワークショップ「基地と女性」では、浦部頼子さん（少数者の人権を守る会）、アガリン・サラ長瀬さん（KAFINセンター）とともに藤目も米軍と女性をめぐる報告を行い、今岡良子さんが10月にツーズー病院で撮影したベトナム枯れ葉剤被害児たちの映像を上映した。あわせて基地周辺のフィールドワークを行い、拡張工事の現場やフィリピンパブなどを見学した。

3．『アジア現代女性史』シリーズの発刊など

「ベトナム女性史」と「米軍再編」という研究テーマの追求と同時に、2006年度にCAWAが力を注いだのは『アジア現代女性史』シリーズ全10巻（明石書店）の企画及び発刊であった。2006年11月にシリーズの第1巻として『現代の奴隷制－タイの売春宿に人身売買されるビルマの女性たち』が上梓され、続いて第2巻である『中国の買売春根絶政策－1950年代の福州市の実施過程を中心に』が12月に刊行の運びとなった。今後、来年度の終わりまでにタイ、ビルマ、インドネシア、韓国、モンゴル、ベトナム、台湾、フィリピンの八カ国・地域の図書を刊行する予定（順番は変更の可能性がある）である。

もともとこのシリーズは、CAWAが「会員それぞれの専門言語を活かしてアジア女性史に関する海外の文献を調査し、重要な文献を系統的に邦訳して、それらを共同研究の基礎にしたい」という研究本意の考えから出発したものであった。それだけに、いざ全10巻の市販図書として出版するということになると、研究会の意気は大いに揚がった一方、内輪の資料印刷と違い、各巻の選定や原著者との交渉も必要となり、当初の予想を超えた大きな仕事となった。シリーズ発行が決まったことで研究活動にはずみがつき、発行準備のために会員だけでは力不足のため会の外にも広く協力をお願いし、新たな出会いにも恵まれ、新たに学ぶところの多い一年となった。このシリーズの準備を通して各国・地域の女性史研究を深めることができたのは幸いであった。

特に、この企画はCAWAが中国現代女性史の調査に本格的に踏み出す好機になった。CAWAは中国女性史に関して前号にも述べたように、特に現在の国際女性売買と1950年代の娼妓解放政策の両面から強い関心を抱いてきた（「グローバリゼーション・戦争・移民女性－2005年度の研究をふりかえって」『アジア現代女性史』第二号、63-64頁）。後者に関する調査は2004年に『上海娼妓改造史話』を読み進めることから始まっており、同書を全10巻の一冊に加える可能性もあったため、2006年3月と6月の二度、上海を訪ねた。3月には上海師範大学の蘇智良さんに助言を頂き、四川北路の旧日本軍慰安所跡や50年代の元娼妓の保護施設「上海婦女労働教養所」の跡地を訪問した。6月には林紅さんに同行して頂き、『上海娼妓改造史話』の著者である楊潔曾さんと賀宛男さん、50年代に上海婦女労働教養所の職員であった徐惠清さんと楊秀琴さんへのインタビューも行った。

林紅さんのお名前はつとに「毛沢東時代の廃娼運動－その『成功』と限界」（『愛知大学国際問題研究所紀要』1997.9）の著者として存じ上げていたが、上海渡航の準備過程で初めてお目にかかることができた。折しも林紅さんは1950年代の福建省における廃娼政策に関する博士論文をお茶の水女子大学に提出されたところであった。台湾海峡をはさんで台湾と対峙する位置にあり冷戦の最前線となった福建省では、その地政学的条件が同地の廃娼政策にも影響を与えたという。この論文は、林紅さんの1950年代廃娼政策に関する深い識見はもとより、冷戦の女性に対するインパクト・両岸の緊張が大陸と台湾の中国女性に与えた影響を知りたいというCAWAの念願をかなえるものであった。他方『上海娼妓改造史話』は、翻訳書として出版するための推敲にかなりの時間を要することが懸念された。そこで『上海娼妓改造史話』に関しては研究会の継続研究課題とし、シリーズには林紅さんの著書を含めさせて頂くことに決めたのである。

2006年度の研究会の取組を通して、中国（大陸）以外の諸地域に関しても多くの幸福な出会いや研究の進展があった。これらの報告や成果発表については、2007年度に刊行予定の各巻及び2008年1月に刊行予定の本誌第4号を楽しみにして頂きたい。

2007年2月1日

著者プロフィール（50音順）

Arlene Eisen（アーリン・アイゼン）

【所属大学・組織】歴史家、人権活動家

【専攻】女性学・現代史

【主な著書・訳書・論文】*WOMEN AND REVOLUTION IN VIETNAM(ベトナム革命と女性)*, Zed Books Limited, London, 1984. *WOMEN Of VIETNAM（ベトナムの女たち）*, Peoples Press, SF, 1974. "People of New Orleans Bring the Streets to Life On the Anniversary of the Great Flood（町に活気を取り戻すニューオリンズの人々：大洪水から一年）", *Katrina One Year Later: Initial Report from International Commission of Inquiry and Accompanying Texts.* International Liaison Committee of Workers & Peoples, 2006

安眞（アン・ジン）

【所属大学・組織】光神大学（韓国）

【専攻】韓国現代女性史

【主な著書・訳書・論文】"U. S. Army Military Government and Democracy in Korea（韓国における米軍政と民主主義）", 2005. "Present and Future of Regional Women（女性たちの現在と未来）", 2004.

今岡良子（いまおかりょうこ）

【所属大学・組織】大阪外国語大学助教授

【専攻】モンゴル遊牧地域論、移住者の人権問題

【主な著書・訳書・論文】「くる病と貧血の子ども達は、伝統的な遊牧文化の再評価を求めている」第9回国際モンゴル学者会議、2006年8月。「2005年のツェルゲル　ージャガイモを植え、立ち直る遊牧民たちー」『モンゴル研究』23号、モンゴル研究会、2006年12月。「移住家族の生活困難」『モンゴルのストリートチルドレンー家族とコミュニティーを視軸にするー』、朱鷺書房、2007年3月。

【一言コメント】2007年度には、この研究会でいよいよ東北・北アジアに向かいます。今年、移住者の人権問題に取り組むフィリピンの人々に沢山いただいたエネルギーで駆け巡ってきます。

大越愛子（おおごしあいこ）

【所属大学・組織】近畿大学文芸学部教授

【専攻】女性学

【主な著書・訳書・論文】『フェミニズム入門』（筑摩書房、1996）、『フェミニズムと国家暴力』（世界書院、2004）、編著『戦後思想のポリティクス』（青弓社、2005）、『ジェンダーの視点から見る日韓近現代史』（梨の木舎、2005）他。

【一言コメント】「女性・戦争・人権」学会での活動を通して、歴史を貫通している家父長制・軍事資本主義・植民地主義などの構造的暴力の問題を追及し、Her-storyを浮上させたいと思っています。

片山須美子（かたやますみこ）

【所属大学・組織】大阪外国語大学・立命館大学非常勤講師

【専攻】ベトナム女性史

【主な著書・訳書・論文】訳書『椰子の森の女戦士』（ビック・トゥアン著、穂高書店、1992年）、訳書『花を担いで』（ニャット・リン、カイ・フン著、穂高書店、1995年）、「アジア各国女性史研究の現状と課題・ベトナム」（『アジア女性史』明石書店、1997年）、"Hinh anh nguoi phu nu Viet Nam trong cuoc khang chien chong My", Tap chi khoa hoc xa hoi, no.83（「抗米戦争におけるベトナム女性のイメージ」『社会科学雑誌』83号、2005年）（ベトナム語）

【一言コメント】ベトナムのフェミニズムの歴史を、ベトナム戦争を中心に研究しています。

加納実紀代（かのうみきよ）

【所属大学・組織】敬和学園大学特任教授

【専攻】日本近現代女性史

【主な著書・訳書・論文】『女たちの＜銃後＞』（筑摩書房、1987年　増補新版インパクト出版会、1995）、『越えられなかった海峡』（時事通信社、1994年）、『天皇制とジェンダー』（インパクト出版会、2002年）、『戦後史とジェンダー』（インパクト出版会、2005年）

【一言コメント】大学が新潟なので、環「日本海」視点による近現代女性史を、と考えています。とりわけいま緊張関係にある「北朝鮮」女性たちとの交流を、と願っていますが、まだ手がかりがつかめないでいます。

河合大輔（かわいだいすけ）

【所属大学・組織】大阪外国語大学大学院博士前期課程
【専攻】フィリピン現代史

Joi Barrios（ジョイ・バリオス）

【所属大学・組織】フィリピン大学　文芸学部副学務部長・フィリピン語学部助教授
【専攻】フィリピン文学
【主な著書・訳書・論文】博士論文"Mula sa mga Pakpak ng Entablado: Pagyapak at Paglipad ng Kababaihang Mandudula（舞台の両袖から：女性劇作家たちの基礎と飛躍）"（1998年フィリピン国立大学女性学センターにて博士号取得）。脚本"Damas de Noche"と"Las Viajeras"によりパランカ文学賞受賞。著書に脚本*Bailaya*, University of the Philippines Press, 1997. 詩集*Ang Pagiging Babae ay Pamumuhay sa Panahon ng Digma（女として生きることは、戦争下に生きること）*. *Minatamis at Iba Pang Tula ng Pag-ibig（甘い果実と愛の詩）*. 恋愛小説とエッセイを収録した*Ang Aking Prince Charming at Iba Pang Nobela ng Pag-ibig（私のかわいい王子様、ほか）*. など。

平井和子（ひらいかずこ）

【所属大学・組織】オーラルヒストリー総合研究会世話人
【専攻】近現代女性史
【主な著書・訳書・論文】「日本占領を『性』で見直す」『日本史研究』500号2004年4月。「軍事基地買売春と反『売春』運動—御殿場の場合—」『女性史学』第11号2001年。
【一言コメント】現在、恵泉女学園大学平和文化研究所のプロジェクトとして、「占領と性」をテーマに共同研究をまとめているところです。「日本占領」の実態を少しでも明らかにできるように頑張っています。それにしても藤目さんと加納さんとの対談、楽しかった！

黄點順（ファン・ジョムスン）

【所属大学・組織】梨花女子大大学院卒、同大学前大学講師、韓国ベトナム市民連帯代表
【専攻】英文学
【主な著書・訳書・論文】論文"Study of the Life and Death in James Joyce's Dubliners"（James Joyce の Dubliners に示された死と生の問題）
【コメント】韓国 - ベトナム市民連帯は韓国軍が参戦したベトナム戦争で韓国軍による被害者たち、特に性暴行を受けた女性たちと韓国軍2世たちを後援し、韓国が建ててあげた学校を支援し、ひいては戦争被害地域の住民福祉を支援する団体である。われわれが犯した過ちを真心をもって補償することは、ある面ではわれわれが受けた被害を補償せよと要求することより、いっそう重要なことであろう。

Bui Thi Loan（ブイ・ティ・ロアン）

【所属大学・組織】大阪外国語大学ベトナム語非常勤講師
【主な著書・訳書・論文】翻訳"Cậu Ấm ngây thơ", Nhà xuất bản Hội nhà văn Việt Nam, 2006.（夏目漱石著『坊ちゃん』のベトナム語訳、ベトナム作家協会出版社、2006）
【一言コメント】特に専門も学識もありませんが、自分自身が戦争の中で生まれ育った女性ですので、戦争の証人としての資格があると思います。それで、「現代アジア女性研究会」の研究、仕事に興味をもっているので、お役に立つ資料の提供などで協力したいと思います。

藤目ゆき（ふじめゆき）

【所属大学・組織】大阪外国語大学助教授
【専攻】日本近現代史、女性史
【主な著書・訳書・論文】『性の歴史学—公娼制度，堕胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ—』（不二出版）、1997年。『ある日本軍『慰安婦』の回想—フィリピンの現代史を生きて』（岩波書店）、編訳、1995年。「冷戦体制形成期の女性運動—占領下の日本民主婦人協議会と朝鮮戦争」、三宅義子編『日本社会とジェンダー』（明石書店）、159-186頁、2002年）。「タイとフィリピンにおける売春禁止主義とフェミニズム」『アジア現代女性史』創刊号（アジア現代女性史研究会）、14-36頁、2005年。「日米軍事同盟と売春取締地方条例」『アジア現代女性史』第二号（アジア現代女性史研究会）、132-150頁、2006

年。"Japanese Feminism and Commercialized Sex: The Union of Militarism and Prohibitionism", *Social Science Japan Journal* (Institute of Social Science, Tokyo University, Tokyo), Vol.9, No.1, April 2006, pp. 33-50.

翻訳者

永谷ゆき子（ながやゆきこ）
【所属大学・組織】翻訳業

牧野幸子（まきのさちこ）
【所属大学・組織】大阪外国語大学国際文化学科四回生

「アジア現代女性史」第三号
2007年2月28日発行
ISSN 1880-1102

編集者ー「アジア現代女性史」編集委員会
発行者ーアジア現代女性史研究会（代表：藤目ゆき）
カバーデザインー岩見利子　　本文組版ー河合大輔

〒562-8558　大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1
大阪外国語大学　比較文化講座　藤目研究室気付
072-730-5205（tel/fax）　fujime@osaka-gaidai.ac.jp